

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第30集

あさ ひ
朝 日 遺 跡 I

1991

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

古代史に興味がある人で、朝日遺跡を知らない人はまずいないのではないでしょう。そう言えるほど朝日遺跡が著名となった今、その資料は速やかに公表されなければならないと考え、そのために平成2年度から4年間で本書を含めた全5巻の報告書を作成・刊行できるよう計画し、現在努力しておるところであります。そして、その最初としてここに本書を刊行いたしました。

名古屋環状2号(一般国道302号)線建設に伴う事前調査としての朝日遺跡の発掘調査は、昭和47年以来愛知県教育委員会によって実施され、その成果もすでに昭和57年3月に報告書として刊行されております。したがって、本書は昭和56年以来調査を引き継いだ(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、その後身である当センターの実施した部分についての報告であり、内容は新しいものとなっております。

長期にわたって継続調査を実施した朝日遺跡の成果はまことに膨大であり、前回と同様、その成果を一望の元に理解することは至難であります。また、速やかな公表を優先したために不十分な面も多々あるとは存じます。そうした反省は今後の整理・研究に生かしていくことを期し、まず本書が朝日遺跡の理解と埋蔵文化財研究の一助となることを願う次第であります。

最後に、調査を遂行するにあたりご理解いただいた建設省中部地方建設局愛知国道工事事務所・道路公団名古屋建設局の方々、愛知県教育委員会、地元教育委員会および住民の方々、そのほかご協力を賜った皆様方に対し心より謝意を申し上げます。

平成3年3月

(財)愛知県埋蔵文化財センター
理事長 松川 誠次

総目次

朝日遺跡 I (本書)

序説 1

序説 2

第 I 部 調査の概要

第 II 部 遺構

朝日遺跡 II

第 III 部 自然科学的研究

朝日遺跡 III

第 IV 部 木製品

第 V 部 骨角製品

第 VI 部 金属製品

朝日遺跡 IV

第 VII 部 石製品

朝日遺跡 V

第 VIII 部 土器(土製品)

第 IX 部 総論(研究総括)

序 説 1

18年の調査史を背負う

朝日遺跡の発掘調査には、本県の調査研究及び調査技術の水準の問題、行政体における調査体制と組織整備のプロセスとが凝縮している。湧水を食い止めることができず、遺構の精査が十分でなかった初期の段階から、水抜排水設備による遺構検出方法の時代へ、あるいは愛知県教育委員会文化財課内の時限的調査組織から(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、(財)愛知県埋蔵文化財センター設立へと変化していった姿は、まさしく愛知県の調査水準そのものである。1972年に始まり、1989年に事実上終了した18年間にも及ぶ本遺跡の発掘調査の歴史は余りにも長いものであったと総括できようが、この調査史は同時にまた、かかる「凝縮体」を相対化し、融解し、さらには模索の中から発展の姿を見い出してきた過程を表してもいたわけである。

朝日遺跡の調査研究史については、すでに1982年愛知県教育委員会刊「朝日遺跡」にて詳述したので、ここで改めてふれることはない。今回の報告書は、その後(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部と本センターとが進めてきた1981年度以降の調査結果を中心にまとめたものであり、その意味では18年間に及んだ調査史のうちの後半9年間の成果を公表するものである。

そこでまず、この「遺構編」の叙述を進めていくに当たって、1980年度までに明らかにされた遺構総体について概括整理をしておこう。

弥生前期に貝塚山貝塚地点付近に限定されていた朝日遺跡の居住域は、中・後期になると次第にその規模を拡大し、旧河道とみられる埋積浅谷を挟んだ地点に南北二つの環濠をめぐらした集落を発達させていき、それぞれに対応する方形周溝墓群を築いていくようになる。二つの環濠集落はどちらも概ね楕円形を呈するとみられ、その規模は、未調査部分の多い北集落では不明確であるものの、南集落では長径220m、短径170mと推定されるまでに至った。方形周溝墓はⅠ期に出現し、Ⅵ期まで築造され続けたが、総計で198基検出された全体の分布状況は東西南北の四群に区分され、このうち密集度の高い「東Ⅰ群」と「西Ⅰ群」とがそれぞれ南北集落に対応する墓域ではないかと推定されている。個々の方形周溝墓の規模は、一辺8～10m前後のものが多く、一辺28m×23mを測る大形の周溝墓も築造されている。また、その形態については、周溝の四隅が切れて陸橋となっているタイプと隅の二ヶ所ないし三ヶ所が切れているタイプとが主流を占め、時期が下がるにつれて前者から後者へ、さらには溝が四周を巡るタイプへと移っていく様相も明らかとなった。この推移の中に東日本的な特色がよく表れている。黒色を呈した均質な土層から成る本遺跡の遺物包含層の中から住居跡を検出していくことは技術的に困難を極めたが、それでも1980年度調査までに竪穴住居跡141棟、掘立柱建物9棟が発見されている。竪穴住居跡の平面形は、Ⅱ期からⅢ期にかけては円形を主流とし、Ⅳ期以降は方形プランが中心となっていく傾向を示している。またその分布状況も、Ⅱ期からⅢ期までは広く拡散した形態をとるのに対し、Ⅳ期には範囲を縮小化し、やがてⅤ期に至ると環濠内部へと集中していくという動態をみせる。

このように、1980年度までに検出された本遺跡の遺構のみから見ても、本遺跡が東海地方で最大規模を誇る弥生時代集落であることが窺われ、東海地方における弥生文化成立の問題のみならず、集落の立地、濠をめぐらす居住域と墓域との関係、方形周溝墓にみられる東日本の性格と社会構成の在り方などの諸問題は、弥生社会全般を通じたムラの生態を理解するのに好個の資料となっている。今回報告する調査内容は、以上の成果に対してさらに詳細な肉付けをするものであり、かつ、その後発見された銅鐸埋納遺構、ヤナ遺構、玉作遺構、大形方形周溝墓群などの特異な遺構は、本遺跡のもつ価値と位置をいっそう深化させるものといえよう。

18年間の調査により膨大な出土資料と記録図面類とを残したこれらの遺構群の大半は、こんにち、道路敷となって消滅あるいは埋もれている。このことに対して、われわれは幾分かの疲労を覚えるだけだ。

序 説 2

報告書を作成するにあたって

A

朝日遺跡の発掘調査はこれまで各団体によって幾度も行われてきた。そのうち、愛知県教育委員会と財団法人愛知埋蔵文化財センター（昭和56年度は財団法人愛知教育サービスセンター）による調査が大規模かつ継続的なものであった。

愛知県教育委員会担当分についてはすでに報告書が刊行されている。1975年刊行の中間報告書では、調査地区が全体に東に片寄っているために方形周溝墓群の調査報告が主となり、記載上の制約もそれほど表面化していない。しかし、1982年刊行の報告書では、中間報告分を含み、かつ居住域をも調査範囲としているために内容はより複雑となり、記載上の条件はかなり難しくなっている。そこでは朝日遺跡を全体として把握することに主眼が置かれ（中間報告書では「朝日遺跡群」と呼称されていたがそこでは「朝日遺跡」と改称されていることに示されている）であり、それにしがたい遺構に関しては中間報告分を含めて新たに通番を与えることによって再整理されている。そして、それらの資料は愛知県清洲貝殻山貝塚資料館で保管されている。

さて、今回の報告は基本的には過去の報告総てを包括するものでなければならない。少なくとも、現在の朝日遺跡像を規定した愛知県教育委員会資料は含めなければならない。とはいえ、保管され検討に耐える遺物は容易に含めることはできるが、遺構に関しては報告書の記載（あるいは遑って一次的調査資料）に頼らざるを得ないのであり、その意味で全体像としての再構成には慎重にならざるを得ない。また、1982年報告では通番による整理が行われている以上、ここでもそれを踏襲することがある意味で必要とも言える。

だが、われわれは〈朝日遺跡〉という固有の実全体に関わる問題と、発掘調査において諸種の条件によって機械的に分割された〈単位〉の報告とは問題が異なるとあえてここで強調しておきたい。

したがって、朝日遺跡の整理・報告については、上述したような立場から、今後に予定されている

整理の継続重視を第一義としてすでに報告された部分との関連を一応は脇へ置くことにする。膨大な範囲にわたる調査資料（遺物だけでもコンテナバット1万8000箱に近い量がある）の整理を混乱なく進めるためには、遺構・遺物の収納において完結する調査段階の地区区分を整理単位とすることが最も現実的な対処であると考えられるからである。この点で朝日遺跡に関する情報は、調査上の単位に分割されたモザイク的な情報と朝日遺跡全体としての統合された情報という二つの水準に分かれることになる。そして、おそらくそのために後者の把握はきわめて難しいものとなるだろう。その結果生じる繁雑さはわれわれ報告者の責任であり、またそれは整理の過程において報告書を刊行しようとする計画そのものに含まれる不安定さでもある。

B

今後の整理計画を規定する報告書の刊行予定は次のとおりである。

- 1992年3月 「朝日遺跡Ⅱ」（自然科学編）・「朝日遺跡Ⅲ」（木器・骨角器・金属器編）
- 1993年3月 「朝日遺跡Ⅳ」（石器編）
- 1994年3月 「朝日遺跡Ⅴ」（土器編・総括編）

「朝日遺跡Ⅱ」は、自然科学的分析を中心として構成される。事実報告というよりは研究報告としての性格を強く示すものであり、当センター外部の研究者による報告が多数予定されている。

「朝日遺跡Ⅲ」は木器・骨角器・金属器についての整理および研究報告である。それぞれの整理は来年（平成3年）度実施して報告となる。

「朝日遺跡Ⅳ」は石器についての整理および研究報告である。コンテナバットにして千箱単位の量が出土しており、来年（平成3年）度から整理を実施する予定である。

「朝日遺跡Ⅴ」は土器についての整理および研究報告、そしてそれまでの調査研究の総括をいちおうの区切りとして行う。総括の主となるものは朝日遺跡の全体である「朝日遺跡Ⅰ」「第1部 遺構」では整理の過程にあることもあって十分な検討ができていないので、当然遺構の全体的な検討についての比重も高いものとなろう。そこでは、朝日遺跡全体としての問題を改めて指定し、その一定の解決を目指すことになる。当然、遺構番号などに関して改訂することも有り得るものと考えている。

朝日遺跡の整理・研究報告は以上のような内容で進めるつもりであるが、もちろん研究は報告書の完結をもって終了するものではない。報告できなかった資料、あるいは新たな問題と解決など絶えざる整理・研究はわれわれに与えられた責務である。そうした研究はわれわれにとどまらず、関心のある人々全てによって行われるのが本来的な姿であろう。そのためにも、資料は担当者・機関をはじめとする一部に個人的に独占されてはならない。迅速となる可能性は高いが、資料は正しい手続きで、速やかに公表されて初めて事実となる。単なる伝聞の類では資料ではあっても事実ではない。事実共有されねばならない。われわれには、そのための基礎資料の整備が求められているのである。そして、その伝達はあらゆる機会を捉えてあらゆる手段で継続的に行われる必要があると考えている。遅延より迅速をあえて選択するものである。

例 言

1. 朝日遺跡は、愛知県春日井郡清洲町・春日町・新川町、名古屋市西区の1市3町にまたがって、東西約1.4km、南北約0.8kmの範囲を有する大遺跡である。
2. 本書は、昭和56年、昭和60年～平成1年にわたって実施された名古屋環状2号線建設に伴う事前調査（調査面積49624㎡）にかかる発掘調査報告書5分冊のうちの第1巻「朝日遺跡1」（「第1部 調査の概要」・「第2部 遺構」を収載）である。
3. 調査経過、調査担当者および組織は別に記載したとおりである。
4. 調査にあたっては、本センター各専門委員、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得たほか、清洲町教育委員会、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局ほか関係諸機関のご協力を得た。
5. 本書の様式

■本文

○「第1部 調査の概要」では、発掘調査事業の概要を提示している。「第2部 遺構」では「第1章」で全体的な層序の概説、「第2章」以下で時代別の遺構概要の提示を調査年度順・調査区単位アルファベット順で行い、最後に若干のまとめを行い今後の指針としている。遺構概要を調査年度・調査区アルファベット順で行っているのは、これまで散発的に発表されてきた事実を調査経過に合わせてたどるためである。

なお、調査区名は、「第1部」と「第2部」で異なる場合があるが、これは、調査計画時の調査区割が実際の調査において変更のあったことを示している。「第2部」本文では、必要があれば旧調査区名を表記するが、基本的に新調査区名で記載している。

○遺構番号と帰属時期はあくまで現状における認識である。帰属時期は将来土器編年の細分による変更の余地を残すものである。なお、本書で使用する時期区分は次のようにする。

I期：遠賀川系土器期、II期：朝日期、III期：貝田町期 aを前半期、bを後半期とする、IV期：凹線紋系土器期（従来の外土居期・高藏期・獅子懸期・下長山期）、V期：山中期（見晴台期を含む）、VI期：欠山期、VII期：元屋敷期、そして古墳時代と記載する場合はVII期以降についてである。

○遺構の分類呼称と記号は次のようである。

S B…竪穴住居、S A…掘立柱建物、S H…小穴例（槽・垣）、S K…土坑、S D…溝、S E…井戸状遺構、S Z…方形（円形）周溝墓、S X…そのほかで特に注意を必要とするもの

◎本文および図版中での表記について

各調査区で完結するあるいは他の調査区との連続が不確定である遺構は、各調査区ごとでアラビア数字で通番をふり、半角文字で表示している。

各調査区を横断する遺構は、溝と杭群についてはローマ数字で、方形周溝墓はアラビア数字で通番をふり、それぞれゴチック表示している。とくに、方形周溝墓は県教育委員会資料を含めている。

○プラン・土層セクション（図版も同様）などに使用されているスクリーン表示は、全体

を統一していないので、個別の記載および凡例への注意が必要である。

○挿図に使用されている遺物実測図は、あくまで例示にすぎず正式の報告ではないので、特に説明を加えることはしていない。

■図版

○遺構プランは縮尺1:200を基本としている。

○遺構プランは、今後刊行する続巻の記載上の便宜を考慮して、大きく東西南北の各地区に区分してあり、本文記載の順番とは一致していない。また、以前の調査区も含めて図化してあるので調査区位置図および県教育委員会「報告書」との対応が必要である。

○遺構プランは、本センター調査区にはケバ表示がしてある。ケバ表示の無い遺構は以前の調査区である。しかし、調査の都合上重複した地区についてはケバ表示したものもある。

○土層セクションの位置はアルファベット表示しており、基本的には各図版で完結させている。ただし、調査区壁面の場合には他の図版に続く場合があり注意が必要である。その場合は当該調査区図版では重複しないアルファベットを使用している。土層セクションの観察方向は、アルファベットの向きと観察方向が一致している場合があるがそうでない場合もあるので、注記を確認する必要がある。

6. 執筆分担は下記のとおりである。ただし、石黒の原稿は宮腰健司・加藤調査課長が校閲した。

加藤安信 序説1

森勇一 第I部第2章1、第II部第1章1

石黒立人 序説2、第I部第1章・第2章2、第II部第1章1を除くすべて

7. 本書の編集は石黒が行った。

8. 本書に関する図面・写真資料は本センターで保管している。

9. 本書を作成するにあたり、次の方々の御協力があった。(順不同)

赤羽一郎、梅本博志、伊藤稔、中川真文、柴垣勇夫、高橋信明、野口哲也、

都出比呂志、原口正三、伊藤久嗣、新田洋、鈴木敏則、車崎正彦、松本完、

福島正美、笹沢浩、青木一男、岩崎直也、佐原眞、田中琢



目次

第I部 調査の概要

第1章 調査の経緯と経過

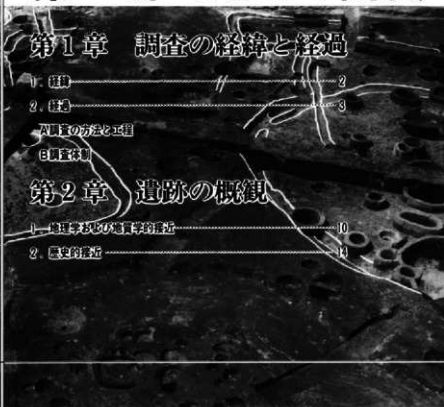
- | | |
|-------|---|
| 1. 経緯 | 2 |
| 2. 経過 | 3 |

A調査の方法と工程

B調査名目

第2章 遺跡の概観

- | | |
|-----------------|----|
| 1. 地理学および地質学的概観 | 10 |
| 2. 歴史的概観 | 14 |



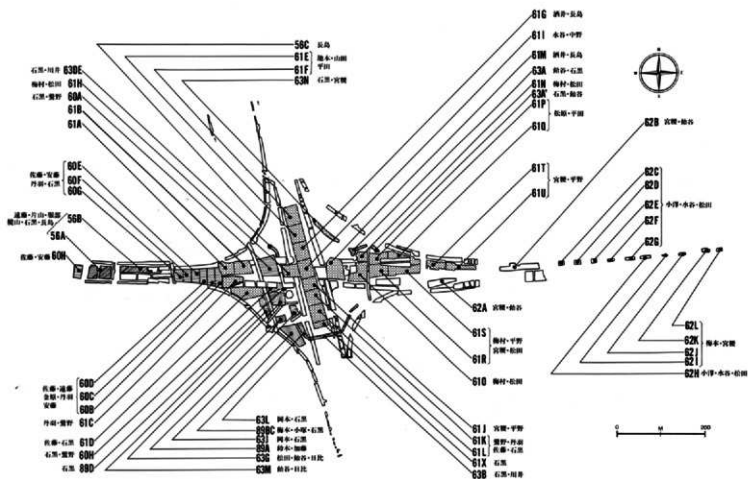
第1章 調査の経緯と経過

1. 経緯

名古屋環状2号線建設の事前調査として開始された朝日遺跡の発掘調査は、第1期として昭和47年から昭和54年にかけて愛知県教育委員会、第2期として昭和56年(財)愛知県教育サービスセンター(埋蔵文化財調査部が担当)、昭和60年から平成1年にかけて(財)愛知県教育サービスセンターの業務を引き継ぎ発足した(財)愛知県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施した。

第1期は昭和55年に現地調査が終了した後2年間の整理期間をもって昭和57年には報告書が刊行されている。記録類・出土遺物などは愛知県清洲貝殻山貝塚資料館で保管され、一般に公開されている。

第2期は、昭和56年の成果は業務を引き継いだ(財)愛知県埋蔵文化財センターが記録類・出土遺物などを保管している。昭和60年からは第1期とは異なって広範囲に面的調査となり、後述のように第1期には調査できなかった谷部分も調査するに至った。



第1図 調査区全体図(及び担当者)

2. 経過

A. 調査の方法と工程

朝日遺跡は沖積地に位置し、地下水位も高い。そのため第1期の調査では湧水に悩まされ、谷の調査も自力ではほとんど不可能であった。第2期ではそうした経験を生かし、地下水の強制排水（ウェル・ポイント）による工法を採用し、その結果縄文時代の堆積層を確認するという成果も得ることができた。

調査区は第1図のように多くの地区に分かれる。したがって同じ遺跡ではあっても条件は異なる場合がある。特に谷の場合は、砂層の厚く堆積する河道部分があり、その掘削が問題となる。

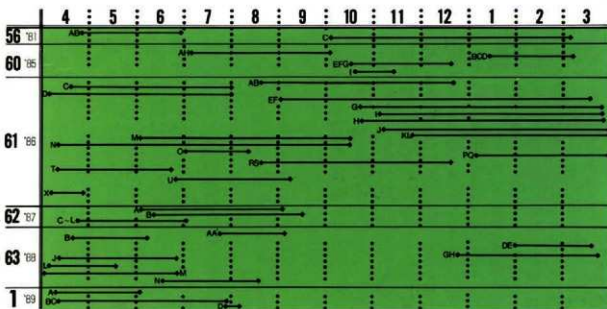
掘削は包含層直上までバックホーなどの機械力によって行いそれ以下を人力で行うことを基本とした。しかし、河道については、61A区のように堆積層の状態を注意深く観察しながら機械力を使用した場合や、その反対に60E区のように勾玉などの装飾品が出土したために移植ゴテで掘り下げを行ったというように、適宜方法を変えた。

包含層の掘削はベルトコンベヤーを使用して人力で行った。包含層中での遺構検出は極めて困難であり、そのため遺物集中地点の確認を中心に行った。実際の遺構検出は、ベース面において行うのが通例であった。

遺構の詳細に関わるプラン・セクション、遺物の出土状態などは調査に並行して作成したが、土層観察に土色帳は使用していない。遺構平面図の作成は写真測量によって行った。

各調査区の工程は第1表に示したとおりである。

第1表 調査工程表(アルファベットは調査区名を示す)



B. 調査体制

調査体制 昭和56年度

調査主体 財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査期間	昭和56年4月～昭和57年3月		
調査指導委員	井岡 弘太郎	名古屋大学教授	地理学
	伊藤 秋男	南山大学教授	考古学
	大参 義一	信州大学教授	考古学
	遺田 正一	愛知学院大学教授	考古学
特別調査指導委員	立松 彰	東海市平洲記念館学芸員	考古学
組織			
調査担当	発掘調査所長	高澤 茂樹	
	主事	石黒 立人	
	主事	巖山 昌宏	
	主事	片山 正巳	
	主事	藤原 芳久	
	主事	服部 良夫	
事務局	調査部長	丹羽 功	
	庶務補佐	水谷 良夫	
	主査	松原 広治	
	主事	松田 定次	
	主事	菅沼 真四郎	

調査体制 昭和60年～平成元年度

調査主体 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

調査期間	昭和60年7月～昭和61年3月	
理事長	奥田 信之	県教育長
常務理事	小林 茂	(兼 事務局長)
理事	井岡 弘太郎	名古屋大学教授
	伊藤 秋男	南山大学教授
	大参 義一	信州大学教授
	坪井 清足	奈良国立文化財研究所長
	橋崎 彰一	名古屋大学教授
	三浦 小春	光陵女子短期大学教授
	花本 萬雄	都市教育長会会長・一宮教育長
	伊藤 芳	町村教育長会会長・蟹江町教育長
	大橋 雄大	県土木部長
	小島 俊夫	県教育委員会社会教育部長
	林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長 清洲町長

監事	鈴木 雅美	照陶磁資料館副館長	
	本田 辰郎	照出納事務局長次長	
	田中 隆三	県教育委員会総務課長	
専門委員	槽崎 彰一	名古屋大学教授 考古学	
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学	
	井関 弘太郎	名古屋大学教授 地理学	
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学	
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学	
	池田 次郎	京都大学教授 形質人類学	
	江本 義理	東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学	
調査組織	調査課長	橋本 雅司	
	課長補佐兼主査	清水 雷太郎	
	課長補佐兼主査	遠藤 才文	
	主査	金原 宏	
	主事	石黒 立人	
	主事	佐藤 公保	
	主事	鷺野 勉	
	嘱託	安藤 義弘	
	嘱託	丹羽 博	
	事務局	管理課長	斎藤 樹三
		主査	細垣 隆一
主事		伊藤 義幸	
主事		森 信孔	
主事		小倉 晴美	

調査期間	昭和61年4月～昭和62年3月	
理事長	小金 潔	県教育長
常務理事	中林 茂	(兼 事務局長)
理事	井関 弘太郎	名古屋大学教授
	伊藤 秋男	南山大学教授 考古学
	大参 義一	信州大学教授 考古学
	坪井 清足	(財)大阪文化財センター理事長
	槽崎 彰一	名古屋大学教授
	三浦 小春	中日新聞嘱託
	花木 篤雄	都市教育長協議会会長・一宮教育長
	伊藤 芳	町村教育長協議会会長・蟹江町教育長 (6月30日就任)
	栗本 茂一	町村教育長協議会会長・小坂井町教育長 (7月1日就任、11月30日辞任)
	大浜 紀雄	町村教育長協議会会長・吉良町教育長 (12月1日就任)
	大橋 雄六	県土木部長
	中神 秀雄	県教育委員会社会教育部長
	林 正治	清洲貝塚山貝塚資料館長・清洲町長
	日下 英之	照陶磁資料館長
	監事	石原 坂男

	田中 隆三	県教育委員会総務課長
専門委員	橋崎 彰一	名古屋大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井岡 弘太郎	名古屋大学教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諏訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学 (7月1日就任)
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学 (7月1日就任)
	調査組織	調査課長
課長補佐兼主査		清水 雷太郎
課長補佐兼主査		竹内 尚武
主査		梅村 清春
主査		山田 耕治
主査		鷺野 勉
主事		池本 正明
主事		石黒 立人
主事		酒井 俊彦
主事		佐藤 公保
主事		土屋 利男
主事		平田 睦美
主事		平野 清
主事		水谷 明和
主事		宮腰 健司
嘱託		中野 良法
嘱託		長島 広
嘱託		丹羽 博
嘱託		松田 訓
嘱託		松原 隆治
事務局	管理課長	斎藤 樹三
	主査	青山 光一
	主事	森 信孔
	主事	田上 繁三
	主事	小倉 晴美

調査期間	昭和62年4月～9月	
理事長	中根 昭二	
常務理事	中林 茂	
理事	小金 潔	県教育長
	井岡 弘太郎	名古屋大学教授
	伊藤 秋男	南山大学教授
	大夢 義一	信州大学教授

	坪井 清足	（財）大阪文化財センター理事長
	橋崎 彰一	名古屋大学教授
	花本 萬雄	都市教育長協議会会長・一宮市教育長
	大浜 紀雄	町村教育長協議会会長・吉良町教育長
	下田 修司	県土本部長
	中神 秀雄	県教育委員会社会教育部長
	林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長・清洲町長
	日下 英之	県陶磁資料館長
監事	石原 坂男	県出納事務局次長
	龍野 等	県教育委員会総務課長
専門委員	橋崎 彰一	名古屋大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井関 弘太郎	名古屋大学教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諏訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学
調査担当	調査課長	明壁 正毅
	調査補佐兼主査	鷲野 勉
	調査補佐兼主査	山田 耕治
	主査	梅本 博志
	主事	小澤 一弘
	主事	佐藤 公保
	主事	平田 睦美
	主事	水谷 明和
	主事	宮腰 健司
	嘱託	鈴谷 一
	嘱託	松田 潤
事務局	事務局長兼管理課長	太田 正男
	主査	青山 光一
	主事	鈴木 孝治
	主事	田上 整三
	主事	大野 智晴
	主事	小倉 晴美

調査期間	昭和63年4月～平成元年3月	
理事長	中根昭二	
常務理事	鈴木 正明	
監事	福地 甲子八	
理事	小金 潔	県教育長
	井関 弘太郎	名古屋大学名誉教授

	伊藤 秋男	南山大学教授
	大参 義一	信州大学教授
	坪井 清足	徳大阪文化財センター理事長
	橋崎 彰一	名古屋大学教授
	花木 高雄	都市教育長協議会会長・一宮市教育長
	金島 寛	町村教育長協議会会長・西枇杷島町教育長
	下田 修司	県土木部長
	白井 正巳	県教育委員会社会教育部長
	林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長・清洲町長
	山田 五夫	県陶磁資料館長
監事	小倉 政則	県出納事務局次長
	鈴木 毅	県教育委員会総務課長
専門委員会	橋崎 彰一	名古屋大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井岡 弘太郎	名古屋大学名誉教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諏訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学
調査担当	調査課長	明壁 正毅
	課長補佐兼主査	森 勇一
	課長補佐兼主査	土屋 利男
	主事	石黒 立人
	主事	川井 啓介
	主事	日比 幸
	主事	宮腰 健司
	嘱託	鈴谷 一
	嘱託	岡本 直久
	嘱託	松田 調
事務局	事務局長兼管理課長	太田 正男
	主査	古田 伸弘
	主事	鈴木 孝治
	主事	田上 堅三
	主事	大野 智靖
	主事	小倉 晴美

調査期間	平成元年4月～8月	
理事長	松川 誠次	
常務理事	鈴木 正明	
理事	小倉 瀬	県教育長
	井岡 弘太郎	中部大学教授

	伊藤 秋男	南山大学教授
	大参 義一	信州大学教授
	坪井 清足	(財)大阪文化財センター理事長
	橋崎 彰一	名古屋学院大学教授
	花本 萬雄	都市教育長協議会会長・一宮市教育長 (6月30日辞任)
	稲石 新	都市教育長協議会会長・蒲郡市教育長 (7月1日就任)
	金島 覚	町村教育長協議会会長・西枇杷島町教育長
	下田 修司	黒土木部長
	白井 正巳	県教育委員会社会教育部長
	武田 晋	清洲貝塚山貝塚資料館長・清洲町長
	山田 五夫	黒陶磁資料館長
監事	福地 甲子八	
	小倉 政則	県出納事務局長
専門委員	橋崎 彰一	名古屋学院大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井関 弘太郎	中部大学教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学教授 考古学 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諏訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学
調査担当	調査課長	明壁 正毅
	課長補佐兼主査	森 勇一
	課長補佐兼主査	山仲 廣司
	主査	梅本 博志
	主事	石黒 立人
	主事	小塚 俊夫
	主事	鈴木 正貴
	嘱託	加藤 とよ江
事務局	事務局局長兼管理課長	渡辺 守夫
	主査	古田 伴弘
	主事	鈴木 孝治
	主事	大野 智靖
	主事	村上 寿章
	主事	小倉 晴美

第2章 遺跡の概観

1. 地理学および地質学的接近

朝日遺跡をとりまく地理的環境や濃尾平野における朝日遺跡の占める位置および遺跡基盤層の成立過程などについて、現状における問題点をふまえて略記する。

位置と地形 朝日遺跡は半径約12kmの犬山扇状地扇端部より南方へはば7km、木曾川水系五条川の氾濫平野内に位置している。古くより朝日貝塚あるいは清洲貝殻山貝塚の名で知られ、東海地方屈指の弥生時代の集落遺跡として著名である。

朝日遺跡の東方約4kmには、庄内川をはさんで西志賀遺跡（名古屋市区）、遺跡の南西部一帯2km以内には阿弥陀寺遺跡（海部郡甚目寺町）、廻間遺跡（西春日井郡清洲町）、土田遺跡（清洲町・稲沢市）、大洞遺跡（甚目寺町）などが展開し、この付近一帯は弥生時代の一大遺跡群を構成している。

黒色土 朝日遺跡の調査現場における第一印象「何と黒い土なのだろう」という強烈な想いは、その後4年間愛知県内外の多くの遺跡の土の色を観察したのちでも、変わることはなかった。それでは朝日遺跡の土の色はどうしてあんなに黒いのだろうか。このことについて、常識的な解答のいくつかは用意することはできる。しかし、上下を淡灰褐色～緑灰色の砂層やシルト層ではさまれた朝日遺跡の遺物包含層の、異常なほどの黒さの真の原因については、依然謎のままになっている。このことは朝日遺跡の特質を語るうえにおいて、いずれ明らかにしていかなければならない課題の一つのように思われる。

貝層と弥生時代の海岸線 朝日遺跡ではもう一つ、全国の弥生遺跡としてはむしろ稀ともいえる貝層の多さについてふれておかなければならない。ハマグリ・マガキを主体とした内湾砂泥底に生息する貝類が多く、そのことから弥生時代の頃、朝日遺跡付近に海が存在していたのではないかと推定がなされていた。そして、いくつかの報告書には、実際に弥生時代の頃の海岸線の位置が朝日遺跡のすぐ近くにひかれたものも見受けられた。こうした弥生時代における朝日遺跡をめぐる海岸線の位置については、一体どこまでが正しく、どこまでが正しくないのか、朝日遺跡との関わりを待ちはじめ以来、ずっと頭を悩ませてきた最も重要で、かつ根源的な課題ともいべきものである。

埋積浅谷 1988年度に入って、朝日遺跡では約5600㎡の発掘調査が行われた。この調査によって朝日遺跡の基盤層の成立や地形発達を考えるうえで重要な発見があつた。その一つは、朝日遺跡の北集落と南集落の間を貫流する河道（埋積浅谷）の生成時期が明らかになったことであろう。河道の一部をその底部付近まで完掘することができたことによって、谷地形の規模が幅25～30m、深さ約4.3mにも達する巨大なものであり、その河道の周辺には厚さ1.5mにおよぶ未分解の泥炭層（確認できる最

下層の標高は-0.1m)が堆積していることが判明した。この泥炭層中の放射性炭素年代を測定した結果、4670±90y.B.P. (GaK-13397)をはじめ計7点の4000年代を示す年代値が得られたことから、この浅谷の形成時期はこれまで言われてきたような「弥生の小海退」に対応したものと別、少なくとも縄文時代中期にまで遡る河道であることが次第にはっきりしてきたのである。

そして、1988年9月には浅谷底のはるか上位にあたる小河川の底部に堆積した黒灰色シルト層上面より縄文時代後期の土器片と、この地層を掘りこんで構築されたドングリピット2基が発見されるに及んで、朝日遺跡における浅谷の形成は縄文時代後期より遡るものであるということがいよいよ確実なものになった。

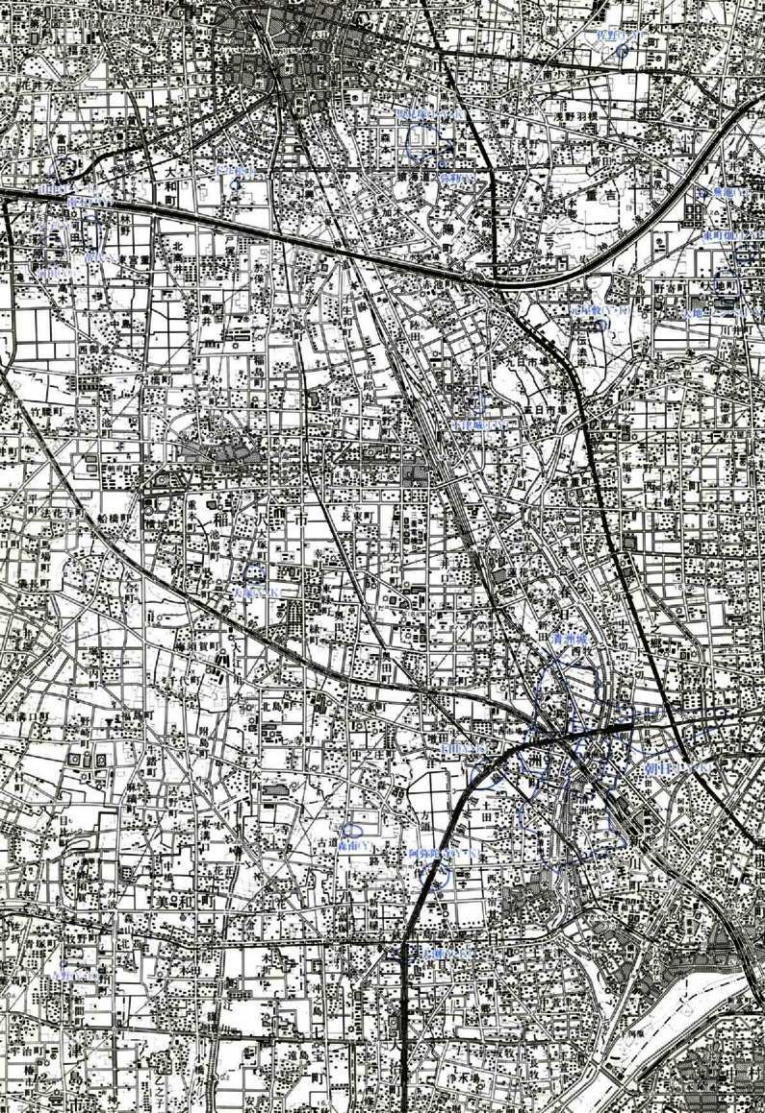
砂堆地形 一方、朝日遺跡付近では、以前より北西-南東方向に連続する基盤砂層の高まり(微高地)の存在が指摘されており(井関、1979・井関、1982)、これらはこの地域を流下する木曾川水系五条川の自然堤防の延長方向とは明らかに直交ないし斜交していることが知られていた。そして、この微高地の存在を考慮に入れるならば、朝日遺跡の立地がたんに五条川の自然堤防帯に依拠しているというだけでは説明しきれない側面をもっていることが認識されるようになってきた。

1988年末、朝日遺跡の2調査区において深度30mに達する3ヶ所のボーリング調査を実施した。その詳細な分析結果は1991年度に発刊が予定されている「朝日遺跡・自然科学編」にゆずることとして、ここではボーリング柱状図の最上部を占める沖積上部砂層のみについて述べる。本層は、その厚さが7~8mに達し、朝日遺跡付近における分布深度は+1.2m~-7.3mであることが判明した。その結果、木曾川水系によってもたらされた砂質堆積物は、三角州前置層としてこの地域の平野の前進・拡大に多大な貢献をしたことが容易に推定される。しかし、沖積上部砂層の最上部にみられる起伏、すなわち北西-南東方向に軸線を有する微高地と、それを迂回するように北東から南西方向に流下する旧河道の存在こそが、朝日遺跡における弥生集落の立地に最も寄与したことがより一層鮮明になってきたといえる。

縄文時代後期の海進 そして、もう一つの沖積上部砂層上面に記録された朝日遺跡63B区における海生珪藻の多産層(3790±90y.B.P.)と、土田遺跡89C区における海の証拠(2530±190y.B.P.)の発見は、縄文時代後-晩期の頃の海進によって、朝日遺跡付近が海の影響の強い環境下に置かれたことを示している。この海進の規模については、両者の標高がいずれも0m付近かそれよりいくぶん高いところに位置していることから、濃尾平野におけるその後の沈下量を考慮に入れば、無視できないほどのものであったことは想像に難くない。

文献

- 原 賢仁 (1978) 濃尾平野における後期完新世の地形発達と先史遺跡の立地。名古屋大学大学院文学研究科修士論文
井関弘太郎 (1979) 朝日遺跡群の立地微地形。朝日遺跡群範囲確認緊急調査報告。愛知県教育委員会、15-19。
井関弘太郎 (1982) 朝日遺跡における旧自然環境の復元と考察。『朝日遺跡』。愛知県教育委員会、217-227。
井関弘太郎 (1982) 沖積平野。東京大学出版会、142P。
森 勇一・伊藤隆彦 (1989a) 古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷。愛知県埋蔵文化財センター年報 (昭和63年度)、76-91。
森 勇一・伊藤隆彦 (1989b) 昆虫および珪藻遺骸から得られた縄文時代中期-晩期の古環境。日本第四紀学会講演要旨集、19、68-69。
森 勇一・伊藤隆彦・永草康次・橋 真美子 (1990) 濃尾平野周辺地域における遺跡基盤の粒度および鉱物組成。愛





2. 歴史的接近

朝日遺跡には、縄文時代に始まり江戸時代まで間欠的に続く人間活動の痕跡が記されている。

縄文時代は、集落という性格はきわめて希薄であるが、ドングリ・ピットなどの遺構が検出されており、近接するであろう集落の活動領域に含まれていたことがわかる。

弥生時代は朝日遺跡のほとんど全体に関わる時代であり、朝日遺跡の変遷が逆に弥生時代を区分する可能性もある。

朝日遺跡の周辺では、貝塚山貝塚の南西約1kmほどのところに遺跡が存在する可能性はあるものの実態はほとんどわかっていない。ある程度わかっている遺跡のうち最も近接するのが西約2kmにある清洲町松の木遺跡であり、II期からIII期にかけての遺跡と考えられている。その南西1.5kmにはII期からV期の遺跡である甚目寺町阿弥陀寺遺跡、南西2kmにはIII期からV期の森南遺跡があり、この付近は比較的遺跡の集中する地区といえる。

朝日遺跡を中心に半径5kmの円を描いた範囲には上述のような遺跡群が含まれているけれども、その範囲外縁の様相は北と南で大きく異なる。

南東には朝日遺跡同様I期に始まり貝塚を形成する西志賀遺跡、南西にはII期からIII期の遺跡である寺野遺跡があり、これらは低湿地帯に分布する遺跡として系譜的な関係も含めて相互に緊密な関係があったと考えられるが、北に目を転じるとそこは条痕紋系土器分布圏であり曾野遺跡や大地遺跡など系譜を異にする遺跡が営まれている。この南北の関係は、起源問題としては大きく〈縄文〉対〈弥生〉という図式で説明できるものであり、それに関してはずでに別に著しておいた。

しかしIV期を境にしてこの枠組みも変換し、時代の変化を予感させるものとなる。

弥生時代末～古墳時代にかけて遺跡の立地が移動することは、濃尾平野全体にわたってみられる現象といえ、弥生時代中期から後期にかけて続いてきた阿弥陀寺遺跡や森南遺跡のような集落の多くがVI期遺構に衰退し、かわりにV期からVII期にかけて新たに出現したり集落規模が拡大する廻間遺跡や埋田遺跡のような遺跡が顕著となる。また墳墓では、廻間遺跡においてVI期にあたる前方後方型の低墳丘墓があり、その他低地部の古墳として、二ツ寺古墳・土田遺跡があげられる。古墳時代後期～古代にかけての周辺の様相ははっきりしないが、稲沢市内に尾張国衛・国分寺・同尼寺が建立されるほか、堅穴住居が中心の清洲城下町遺跡、掘立柱建物のみの大洲遺跡がある。鎌倉～室町時代には、土田遺跡等でみられる溝で区画された居住域と方形土壇で構成される墓域という形態の集落が多くみられる。その後近世には、遺跡西方に織田の居城である清洲城を中心とした城下町が広がっていく。

第1章 層序

1. 遺跡基盤層の地形学的検討…16
2. 谷地形…22
3. 微高地…23
4. 堅穴住居…26
5. 土坑…26
6. 溝…27
7. 方形周溝墓…27

第2章 縄文時代

1. 谷地形…28
2. 貯蔵穴…30

第3章 弥生時代

1. 56A区…31
2. 56B区…34
3. 56C区…37
4. 60A区…38
5. 60B区…42
6. 60E区…49
7. 60H区…57
8. 60I区…58
9. 61A区…59
10. 61C区…74
11. 61D区…77
12. 61E区…82
13. 61H区…99
14. 61M区…103
15. 61P区…110
16. 61N区…114
17. 61T区…117
18. 62A区…120
19. 62B区…121
20. 62C～62L区…122
21. 63A区…124
22. 63B区…124
23. 63D区…127
24. 63G区…130
25. 63J区…132
26. 63L区…132
27. 63M区…134
28. 63N区…135
29. 89A区…137
30. 89B区…137
31. 89D区…142

第4章 古墳時代

1. 谷A内の遺構…143
2. 西部地区…144
3. 北部地区…144
4. 南部地区…144
5. 東部地区…148

第5章 中世

1. 土坑…151
2. 谷…151

第6章 その他

第7章 若干の分析と展開、そして課題

1. 遺跡の地表面…155
2. 住居…156
3. 集落の形式…158
4. 墓制について…163

第1章 層序

1. 遺跡基盤層の地形学的検討

1985～1989年度に行われた発掘調査、およびそれに先立つ1981～1982年度の県教育委員会の発掘調査等の成果より、朝日遺跡の基盤層を構成する砂層および青灰色シルト層についての東西・南北両断面図を作成した。ただし、各地点における柱状図はいずれも各調査区担当者によって作成された土層セクション図にもとづいており、砂層と青灰色シルト層についての共通した認定基準が確立されていないこともあって、厳密な地層対比にはいささか問題が残る資料も含まれている。

東西断面（AB断面） 第4図参照

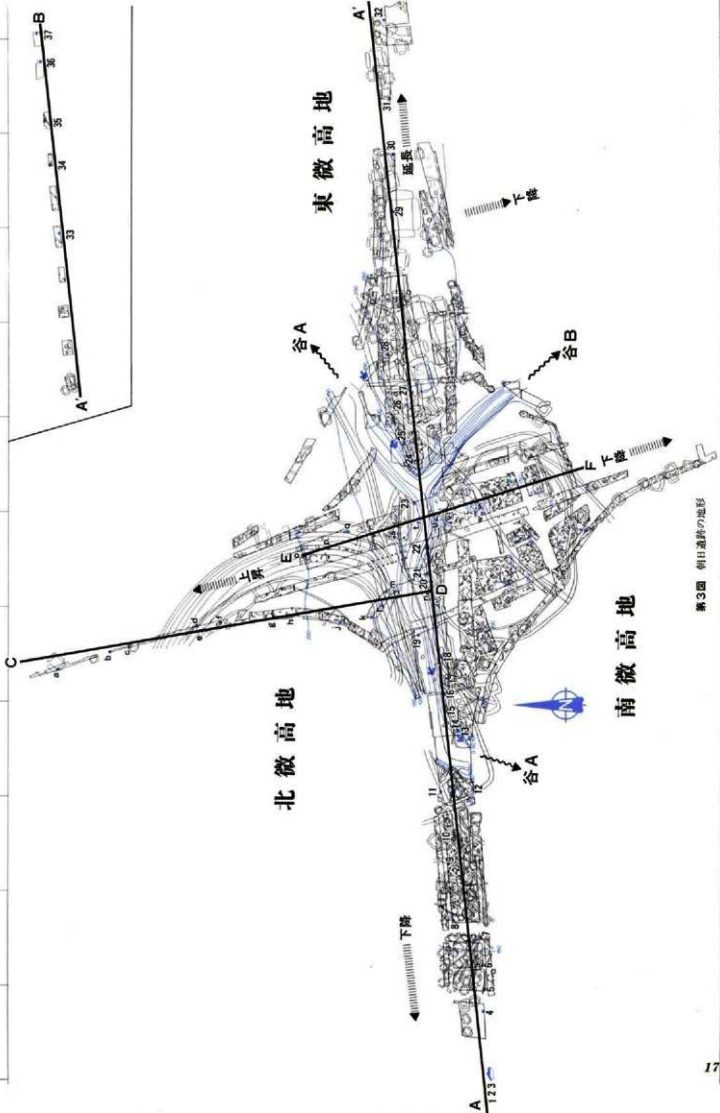
やや低いところに位置する西畠域と、南方に屈曲する谷A（本書における呼称で、かつては「旧河道C」と呼ばれた）に沿った部分、および東畠域についての約1.7kmの断面図である。柱状図数は計37本である。

西部から詳しくみると、1～3は標高+0.2～0.6m付近に青灰色シルト層が存在するのみで砂層はみられない。基盤層の標高は谷の部分を除けばもっとも低い。4～9の部分では、標高+1.2～1.8m、1～3同様砂層の存在は確認されていないが、遺跡基盤層を構成する青灰色シルト層は下位付近では細～中粒砂層に移化している可能性が高い。10、11の基盤層がやや低いのは人為的な溝が掘られている影響であろう。なお、10地点は土層セクションから砂層が確認された最西端の地点である。その最上面の標高は+1.3mである。12～13にかけて基盤砂層が低くなるのは、南流する谷Aを横切ることによる。13地点の砂層上面の標高は-0.5mである。14～25はいずれも東西に流れる谷Aの谷壁および河床付近の柱状図である。基盤層の標高は地点14でもっとも低く、-0.4mであった。ここでは砂層は確認されておらず、青灰色シルト層のみである。

26～37の柱状図は東畠域にあたる部分である。この地域の基盤砂層上面の標高は+0.5m内外で、その上部に平均1.5mに達する青灰色シルト層の堆積がみられる。全体として標高+2.0mかそれよりやや上回る位置に弥生時代中・後期の方形周溝墓が造られている。32の砂層上面の高度が+2.0mと他に比べて著しく高いのは、おそらく基盤砂層と遺物包含層の砂層とが区別されていないことによるものと思われる。

南北断面（CDおよびEF断面） 第5図参照

CD断面



第3圖 朝日通野の地形

北集落北方の環濠集落の外側（3地点）より集落東半部を経て、谷Aを横断し南集落に至る計13本の柱状図を連ねた約400mの断面図である。環濠外側のa～c地点では、標高+1.6～1.8mに上面高度をもつ青灰色シルト層がみられるものの、砂層の存在は確認されていない。d～fは北集落の環濠付近の柱状図である。上面の高度は+1.8m内外である。f地点で標高が極端に低くなるのは人為的掘削（溝）の結果と考えられる。g～kの5本はいずれも北集落内の柱状図である。標高+1.5～2.2m付近の高所に青灰色シルト層ないし砂層が分布しており、北集落が高燥な微高地上に立地していることが、断面図からも読みとることができる。l～mは北集落南端から谷Aを横断し、南集落北端に達する柱状図である。砂層の上面高度はk～lにかけて急激に低くなり、m地点ではついに標高0mに達する。

EF断面 第5図参照

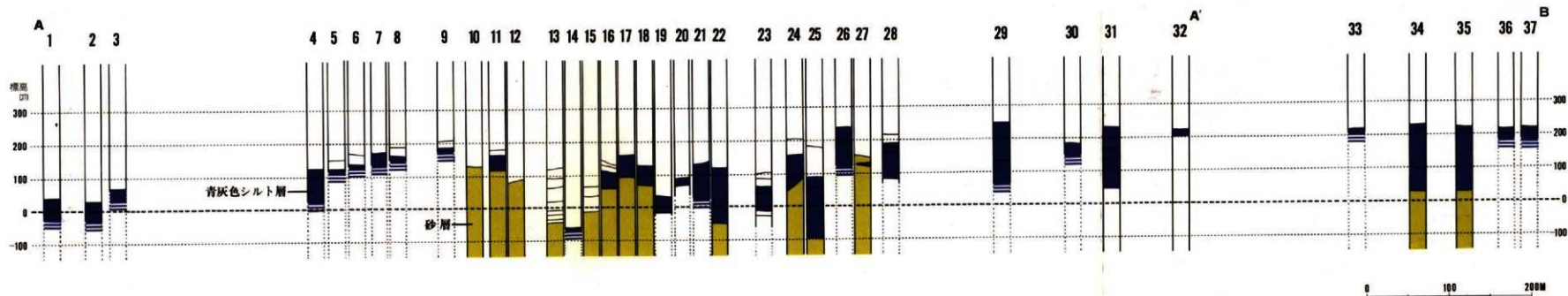
北集落東端から谷Aを横切って南集落東半部を縦断する12本約300mの断面図である。o～qの3本は北集落内に位置している。ここではCD断面同様+1.6～2.0m前後に青灰色シルト層が分布している。r～uは谷Aを横断する断面であり、+0.2～0.7mに上面高度を持つ砂層を被覆して1m未満の青灰色シルト層の堆積がみられる。v～zの5本は北集落内の柱状図である。ここでは+1.8～2.0m付近に青灰色シルト層よりなる基盤層が分布している。

砂層について

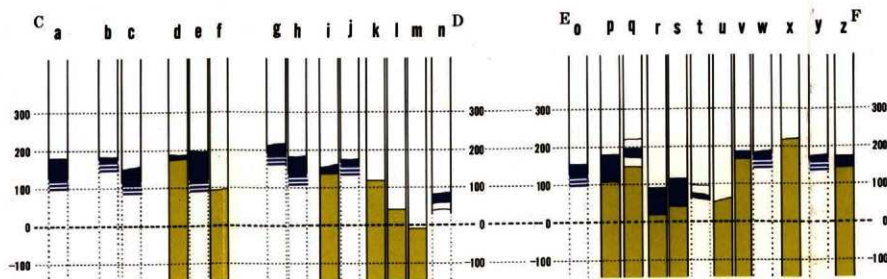
中～粗粒砂を中心に一部細粒砂をまじえる比較的淘法の良い砂層であり、いわゆる沖積上部砂層の上部相にあたる。谷Aの断面観では著しいラミナの発達する部分がみられ、この砂層が河川によって運ばれたものであることを示している。しかし、粒度分析結果では標高+1.0mおよび0m付近に分布する砂層は河川性堆積物の特徴を有するものの、標高-1.0mと-0.5mに位置する砂層では海浜砂の粒度組成を示した。また、AB断面の31地点（62I区）の標高0mの砂層中には海～汽水生の珪藻が多量に含有され、少なくとも本層の一部は海浜環境に堆積したものであることが明らかになってきた。砂層の上面は主に谷Aの下刻に伴う比高2m（本来はもっと大きいものと思われる）に及ぶ著しい起伏が生じている。

青灰色シルト層

青灰色シルト層は、通常は淡緑灰色～黄灰色を呈し、薄いところでも20～30cm、厚いところでは層厚2mに達する。下位の砂層の凹みを埋めるように堆積しており、その上面の高度はどの地域においてもおおむね+2m付近に存在する。本層の堆積環境を示す直接的な証拠は得られていないが、シルト層中には炭質物や植物遺体などの生物起源の包有物、あるいはシルトの粒径以外の砕屑物をあまり含んでいないことより、本層は比較的短期間に堆積したものであり、しかも強い水流の直接の影響下で堆積したものでないことは明らかである。また、現在までのところ、この層が海水の影響の及ぶところで堆積したという証拠は確認されていない。さらに考古遺物や放射性炭素年代など、青灰色シルト層の明確な堆積時期を考えるうえでの情報も得られていない。



第4図 朝日遺跡東西方向基盤層柱状図



第5図 朝日遺跡南北方向基盤層柱状図

砂堆と谷地形

朝日遺跡における弥生集落の立地が本来、北東—南西方向に延びる旧五条川の自然堤防上の微高地に立地したのか、あるいはそれと直交する北西—南東方向に軸線を有する砂堆（正しくは浜堤）の上に立地したのか議論が分かれるところである。しかし、北および南の集落がC D、E F断面に示されたようにやや北西—南東方向に並んだ微高地上に位置していることは、朝日遺跡の立地がここに流れていた河道両側の微高地（自然堤防）に依拠したものでなく、何らかの原因でここに生じた砂堆状の地形に立地したものであることを示唆している。

そして、この砂堆が4000年（y.B.P.）代（放射性炭素年代による）の生成年代を示す谷Aによって激しく侵食されているという事実から、砂堆の生成時期は少なくとも縄文時代中期にまで遡る可能性が考えられる。その後、谷Aの埋積が進行するとともに、この地域は早くも縄文時代後期の人々の活動の舞台となった。これまでに谷Aに沿った東墓城および南集落の縁辺部より縄文時代後期の土器片が4ヶ所にわたって出土し、同時期のドングリビットが埋積が進んだ河道内より発見されている。

やがて、北集落と南集落に挟まれた谷Aの部分が埋積されるに従って谷Aが南流するようになり、谷Bを生じさせたという可能性も想定される。そして、そのことがこの地域一帯の標高2 mに達する高所に、膨大な量の青灰色シルト層を堆積させることにつながったものとも考えることもできる。

谷Bの出現によって、北と南の集落の間の谷の部分の水流が弱められ、弥生時代中期の頃には地下水位の低下とあいまって河川水はほぼ完全に枯渇し、ここに幾重にも及ぶ環濠や柵・杭群などの防衛施設が構築されることになったのである。そして、この谷に再び水流が復活したのは、弥生時代中—後期にかけての頃であるという調査成果が発掘によって得られている。

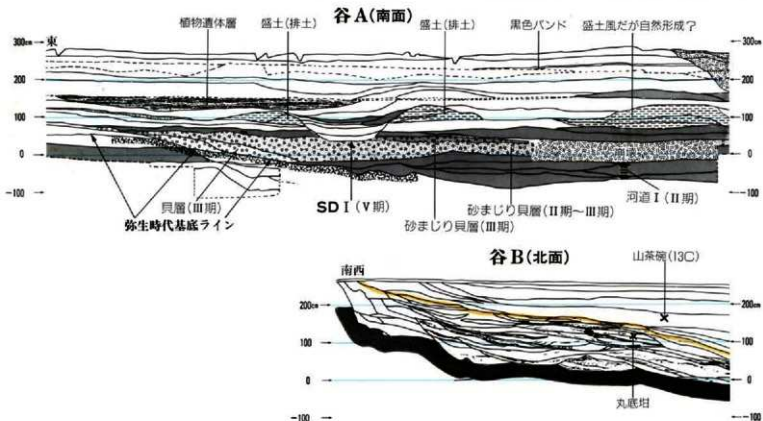
2. 谷地形

朝日遺跡の立地する微高地は、谷地形によっておおきく3地区に区分されている。ところで、1982年刊行の報告書（以下『報告書』と呼称する）では、谷に関係する遺構として「旧河道」が提示され、「旧河道A」・「旧河道B」・「旧河道C」・「旧河道D」が認定されている。しかしその遺構としての意味は、井関弘太郎氏も『報告書』で指摘されているように「埋積浅谷」、つまり〈浅い谷〉なのである。それが「旧河道」であるのは、〈谷〉の埋没あるいは下刻過程における一時的な状態であるにすぎないのである。V期以降は河道の継続性が認められるものの、それ以前は間欠的な河道形成にとどまるようである。

これら「旧河道」はその後の調査によってかつての「旧河道A」と「旧河道D」が大規模な溝であることが確認されており、「埋積浅谷」としても認定の変更を必要としている。

そこで本書では、第6図のように「旧河道B」とその延長方向にある「旧河道C」を谷Aと呼び、それに直交する「旧河道C」の一部を谷Bと呼称する。

谷Aは、朝日遺跡の地理的環境を大きく規定するもので、幅約30mを測り、底の標高は約マイナス2mまで確認している。そして、マイナス0.6m以下では縄文時代後期の泥炭層の



第6図 谷A・谷B

存在が、さらにその下部の砂層から検出された炭化物については ^{14}C 年代測定によって縄文時代中期相当の年代が与えられている。

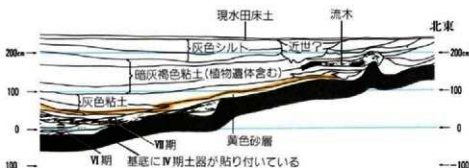
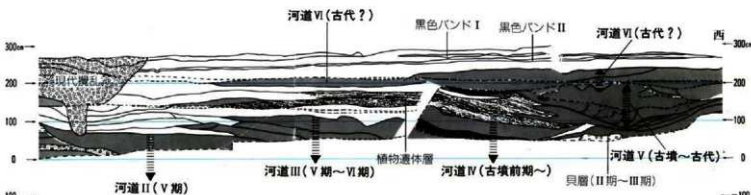
弥生時代の堆積層は縄文時代後期堆積層の上に堆積している。流水・止水による堆積環境の変化と人為的堆積層が複雑な関係を織りなしている。特に谷Aでは、弥生時代で少なくとも3回、それ以後3回の河道の形成が確認でき、河道化の時期を挟んでの季節的な変化なども含めて複雑な堆積状況を示している。完全に埋没するのはおそらく中世以降である。

朝日遺跡を特徴づける貝層は、谷Aの南北両斜面で検出されているけれども、堆積層としては南微高地北斜面の方が厚く広範囲にわたっており、北微高地南斜面では散在し層自体も薄い。

谷Bは、幅約20mで、底はマイナス0.2mを測る。谷Aとは異なり下部に縄文時代堆積層は存在せず、また谷の東西斜面には谷底へ向けて下降する堆積層の形成はなく、谷Aより新しいものであることが看取される。もともと浅い谷状地形であったものを人工的に掘削して水路とした可能性がある。Ⅳ期以前の堆積層は見られず、また古墳時代後半以降の堆積も止水的である。中世にもまた窪地状をなし、諸点で谷Aとは大きく異なる。

3. 微高地

朝日遺跡は縄文時代に形成された微高地（浜堤）上に位置している。その起伏に関しては、人工的



土層セクション (1 : 100)

な改変を受けていないと思われる包含層下部の標高をもとに等高線を描くと、第 4 図のようになる。標高2.6mが現状で確認できる最高所であり、そこでは灰色砂層の上に黄灰色シルトがのり、その上部には褐色粘土（または黒褐色シルト）が堆積している。黄灰色シルトと褐色粘土（または黒褐色シルト）両者の境界は漸移的で、不整合面の形成は見られない。

褐色粘土（または黒褐色シルト）上部には黒褐色砂質シルト（ところによっては含まれる砂が多くなる）の遺物包含層が堆積する。

上記以外の地点では人工的な改変によって包含層下部の標高は一定せず、浅ければシルト層、深ければ砂層が露出するのが一般的である。もちろん、「上部砂層」の高い所では遺構深度が浅くても砂層は露出する。

これまでのところ居住域内部の遺構外平地面において洪水等に関わる滞水を示す層位は確認していない。あくまで流水による下刻が認められるのみである。

4. 竪穴住居

竪穴住居はいずれも「跡」であり、崩壊しているのが通例である。その竪穴には埋められたものと自然埋没の両者があり、朝日遺跡の継続期間中では人間集団の活動により前者が主となる。

埋められた竪穴のうちⅢ期までの例では、ほとんど上部が以後の遺構によって削平され、床面付近しか残存していない。そのため、多くの竪穴断面ではベースの黄（青）灰色シルトと包含層他が攪乱されて斑状をなす貼床が特徴的に観察されることになる。残存状態が良好な例では、上部に黒褐色砂質シルトが堆積している。

Ⅱ期の竪穴では、そのいくつかに継続的な廃棄が観察されている。ベース土・灰・炭化物・貝等が厚さ2、3cmの薄い層をなして堆積している。63N区ではそれが最終的に埋まりきらないで窪地状をなすⅡ期としては珍しい例（63N区SB01）を検出している。

Ⅳ期以降はベース土は余り含まず黒褐色砂質シルト（包含層）が主となる。土器廃棄を伴う例では、貝層・炭化物層・灰層・ベース土などが2、3cmの薄い層として累重する例がある。Ⅳ期以降は床面の貼床も以前程の厚みがなく、床面だけを取り上げるなら継続期間は短くなる印象を受ける。

自然埋没はほとんどⅣ期以降に限定される。つまり、地表面での人間活動の停止によって形成されるからである。下部は弥生時代包含層の再堆積で黒褐色砂質シルトからなり、上部は黄灰色粘土の堆積となる。

竪穴の掘形深度の最大例はこれまでのところⅡ期で約90cmの深さを有する例を確認した。多くはそれより浅く50cm以下となるが、おそらく竪穴掘削時の排土で形成される周堤を含めて浅くても1m程度はあったものと推定する。

床面掘形に掘削時の工具痕が確認される例は少ない。

5. 土 坑

その性格上、埋められたものがほとんどであり、遺構の大多数を占める。

貝や土器などを伴う例、炭化物・焼土・灰のどれかが組み合って検出される例、竪穴住居のような攪乱された埋土や薄い層の累重する例、黒褐色砂質シルト（包含層）のみの例などがある。

そのなかで、埋没状態に何らかの意味が伴うと考えられた例は、いずれも井戸として認定した。

6. 溝

溝は、居住域外部ではほとんど自然埋没である。それに対し居住域内部や外縁部では、居住域の拡張や人間集団の諸活動に伴って人為的に埋められる例が多い。両者とも堆積状況は別にして、概してベースの黄（青）色シルトと黒褐色砂質シルト（包含層）を含む。

このベース土の流入は、特に大量である場合には溝掘削に際して排出された土がまとまって流入した可能性が高く、その移動距離が近接しているなら「土壘」との関係で問題となる。いずれにしても大きな人為的作用が推定される。反面、少ない場合は特に冬期の壁面崩落など、自然条件によるものが考えられる。

前者の多くには貝・炭化物（焼土）・人工遺物が伴い、土坑と同様の生活廃棄物の処理場と化している。現代の先進国的な衛生観念では、ゴミ溜的な好ましくないものであつたろう。

自然埋没では、砂層の堆積や植物遺体（流木）の流入があり、水流のあったことを示している。いずれにしても、自然と人為の両者によって埋没する。

7. 方形周溝墓

墳丘は、周溝の掘削とともに順に排出される黒褐色砂質シルト（包含層）とベースの黄（青）灰色シルトが、方台部の周囲から中央に向かって流し込むように盛り上げられているので、プランでは周囲の黒褐色砂質シルトから内側の黄（青）灰色シルト攪乱土への漸移的な移行が同心円的に観察される。その結果方形周溝墓築造以前の古い時代の遺物が墳丘上部にくることになる。だから、墳丘中の遺物によって時期決定することはできないのである。

Ⅲ期までは盛土中におけるベース土の割合は少なく、ほとんど黒褐色砂質シルトに限られるが、Ⅳ期以降は高さを確保するためかベース土が目だつようになる。

主体部はこの盛土中に構築される。旧地表面から掘り込まれる例はほとんど見られない。だいたいベース土ブロック中に構築されるようで、検出は極めて困難である。

周溝は、多くが自然埋没である。しかし、Ⅳ期を中心に特定の時期には再掘削が行われる。完全に再掘削されプランまで変更されることはなさそうである。

周溝再掘削に併せて墳丘の変更が行われているかどうかについては、墳丘に設けられた土器棺上部が遺存していないことに示されているように、上部の削平のために確認できない。

第2章 縄文時代

1. 谷地形

縄文時代の谷の存在がほぼ確定したのは昭和61年度の調査である。

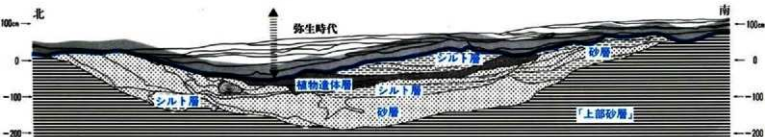
それ以前、昭和60年度の調査で60E区谷A部分で下部から流木層とともに縄文土器を検出しその存在が注目されたけれども、調査工程上の都合もあって面的に確認されるまでには至らなかった。それより遡れば、第1期の発掘調査において縄文土器の出土はあったが、一次的に包含される層の検出にまで至ることはなかった。

昭和61年度の調査では、ちょうど61A区が谷A部分に位置することがわかっていたので、調査にあたって縄文時代堆積層を確認することを課題に含めた。そこで、弥生時代遺構・包含層の調査に続いて谷Aにトレンチをいくつか設けた結果、上部の植物遺体層から少量ではあるが縄文土器の出土を確認し、しかも木製杓が出土するに及んで単に遺物の散布にとどまらず、人間の活動が想定されるに至った。後述の貯蔵穴はそうした経過の延長にある。

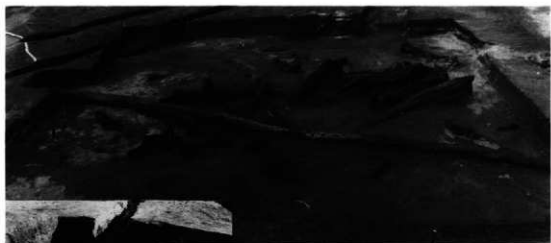
縄文時代の谷は、61A区でマイナス1.8mまで掘り下げて基底である「上部砂層」を確認している。その後、63A区では谷Aが複数の不整合面をもって堆積していることを確認した。

縄文時代の谷A上部に堆積している止水環境を示す植物遺体層以前の堆積層の時期に関しては、61A区においてマイナス1.8cmで採取した木乃について 4200 ± 190 yBPという ^{14}C 年代測定値が与えられている*。いずれにしても地形学的な分析の詳細は「朝日遺跡II」（自然科学編）において報告されることになろう。

* 海津正倫「瀧尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化」『名古屋学芸学部研究編集C1・史学34』



第9図 谷A 縄文時代堆積層セクション：61E区・61H区間(1:100)



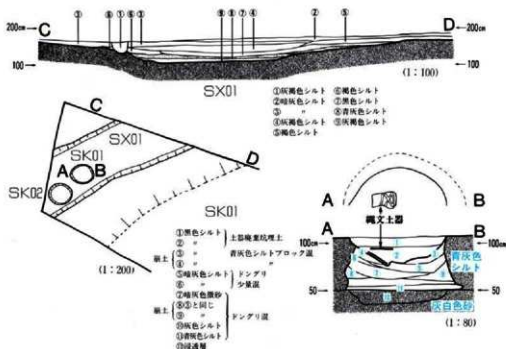
第10図 縄文時代の谷A
土器と流木の出土状態

2. 貯蔵穴

63A₂区で谷Aに並行すると考えられる溝状の落込みであるSX01下部において検出したが、調査当初それが縄文時代に属するものであるとは認識しておらず、そのためSK02はドングリを採取しないまま掘り下げてしまった。SK01は埋土の半分が観察用に残してあったので、すべてサンプルとして取り上げ、含まれている自然遺物の分析を名古屋大学教授渡辺誠氏に依頼した。

SX01は暗色系のシルト層が堆積し、⑤青灰色シルト層（ベースの再堆積である）を挟んで上下に大きく区分できる。時期は、①が弥生時代中期に属し、②以下はそれ以前である。⑦はSK01埋土上部の①・②と類似しているのので、縄文時代後期に属す可能性がある。

SK01は、径1～1.2mのほぼ円形プランで、深さ0.5mを測り、断面は下部の膨らむ袋状をなしている。埋土は、大きくA、縄文土器を含む①・②、B、ベースの青灰色シルトブロックを含む崩土③・④・⑧・⑨、C、ドングリを含む⑤～⑩となる。Cは⑤・⑥・⑦と⑧・⑨の堆積状況が異なっていること、ドングリ単純層が存在しないことなどから複数回の使用が考えられる。Aは、縄文時代後期土器（堀之内II式の深鉢：底部を欠くのみでは完全に復元できる）を含む土坑状部分の埋土で直接ドングリ貯蔵穴とは関係しないが、貯蔵穴の下限を決定するものとして重要である。



第11図 63A₂区貯蔵穴

第3章 弥生時代

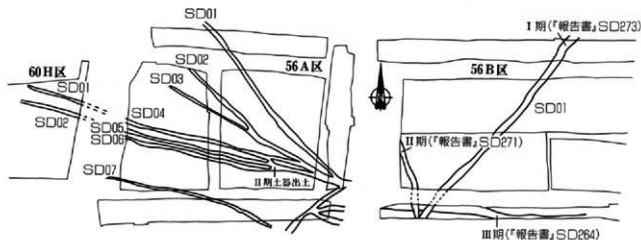
1. 56A区 図版4・5

A. 溝

方形周溝墓築造以前 56A区では調査区南東部を要として集束する複数の溝が検出されている。同様の溝は56B区・60H区でも検出されており、ほか関連する溝は『報告書』で報告されている。

56A区SD01～SD07は、07を除いて一点に集束するようである。ほぼ平行して掘削されている04・05・06を境界として以北では集束し以南で並行するという相違は、『報告書』「SD264」がⅢ期と報告されているけれども、この溝を含めた東西ラインを基準軸とする何等かの土地区画に関係するものであることが窺われる。それは、重複する方形周溝墓群のなかに溝の走向に一致した方位を採用している例があることから、溝の特長性を含めて十分考慮する必要があることを示している。

溝の掘削時期は、調査では05・06の集束部分でⅡ期の土器が出土し、これと切り合っているSZ19がⅡ期であること、Ⅱ期のSZ17東周溝がSD02・03の集束部分と切り合っていることから、方形周溝墓に先行することは確実で、Ⅱ期以前ということになる。溝相互の関係は同時であるか否かは確認されていないけれども、近接した時期において誤りないとする。また、方形周溝墓の方位が溝の走向に規定されている側面のあることは、その時期まで溝が埋没しきらないで確認できたことを示しているとする。



第12図 方形周溝墓群以前の溝(1:100)

では、その性格はいったい何であるのか。

西にきわめて緩やかに下降するベース面に溝の走向が一致していること、56A区ではⅠ期・Ⅱ期の遺構・遺物がほとんど出土していないことを考えると、居住域に関係するものとは考えられない。一番考え易いのは水田との関わりである。つまり、並行する04・05・06は幹線水路、他は枝水路ということになる。

方形周溝墓築造以後 方形周溝墓を破壊して走るSD08が検出されている。古墳時代以降である。

B. 方形周溝墓

方形周溝墓は18基検出された。包含層上面における起伏の存在によって、墳丘の残存が予想された。結果、墳丘の確認された例は13基であった。一部には墳丘構築方法に関わる特徴である、墳丘中央部へのベース土の積み上げが観察された。56A区ではSZ18が最大例であり10.6×6.3mを測る。タテ・ヨコ2辺の長短差が著しい。

方形周溝墓の分布は、SD04・05・06という平行する溝群以北において上述した溝と相関する線的な放射状配列を見せる主要な第1グループ、そのなかにあつて方向を違えるSZ19を第2グループ、SD07以南にある軸線も異なる無関係な第3グループの3つに区分される。第1グループには一辺5m以下の小規模方形周溝墓があり、SZ16はラインに沿うものの、他は光域的に分布する。

方形周溝墓の基本的な配列に関しては、2～3基で一単位を形成することを暗示する空間の存在が無視できない。しかし、同時に全体として線的な配列も認められるのであり、築造経過の問題も含めて検討が必要である。

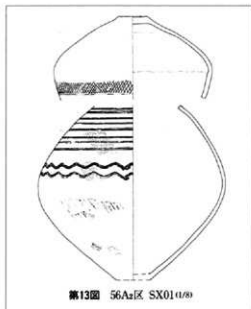
主体部に関してはほとんどの例で不明確であったが、SZ8については棺材は遺存していなかったものの、小口板が底板を扶むタイプであると推定するに足る木棺痕跡が検出されている。

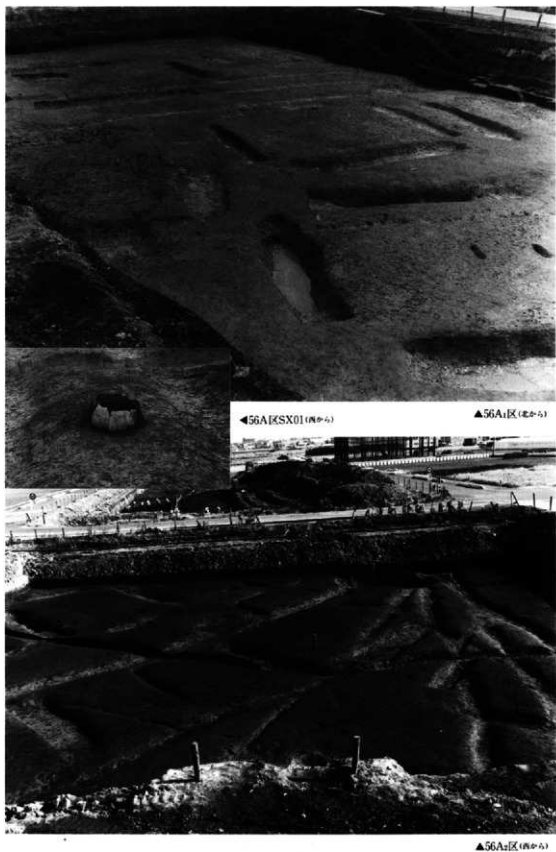
これら方形周溝墓の時期は、すべてから時期決定資料が出土したわけではないが、Ⅱ期の土器が出土したSZ19・27を含めた全体の規則的な配列、下限がⅡ期と考えられる上述した溝との規則的な重複によって、これらがⅡ期に属することがわかる。当地区においては、Ⅲ期の土器は出土していないこと、配列の完結性からみてⅢ期まで下がる可能性は少ないと考える。

C. 土器棺 SX01

SZ19墳丘を切り込んでベースに達する深さで検出された。時期はⅣ期に属しSZ19よりは明らかに新しい。Ⅳ期に散見される方形周溝墓墳丘再利用の一例かもしれない。

棺構成は、知多・三河系壺を蓋に、凹線紋系壺を身として、正立で埋置されたものである。





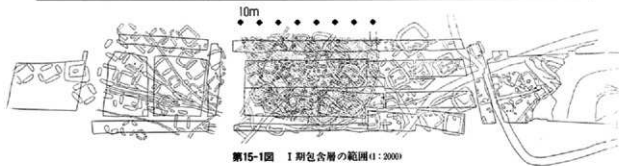
第14图 56A₂区方形周溝墓

2. 56B区 図版6～8

A. I期の遺構と包含層

56B区では東西70mの範囲でI期の遺物がまとも出土している。とくに方形周溝墓墳丘中からの出土が顕著である。これは、墳丘がI期包含層を積み上げていること、墳丘調査が他の部分の調査に比べてより精密であったためで、おそらくI期の遺物は一定範囲に拡散して分布していたのであろう。

ここで遺物については詳しく触れえないが概略示せば、土器には第15-2図に示したようにく違賀川系土器><とく条痕紋系土器>があり、石器には石鏃・磨製石斧のほかにも円礫を打ち欠いて製作した粗製剥片石器（横刃形石器）などがある。しかし、出土土器はすべてがI期というわけではなく若干II期の土器も出土している。方形周溝墓に伴うものが混入したのかもしれない。



第15-1図 I期包含層の範囲(1:2000)

I期の土器(Ⅰ)



第15-2図 56B区 I期の包含層と遺物

遺構は、SD01が「報告書」SD273と同じであり、「西志賀期」（ここでいうI期）として報告されている。ほかに56B区では方形周溝墓とは関係しない小穴や土坑がいくつか検出されている。時期のわかる例はないが、なかにはI期に属するものもあるかもしれない。また、遺物の詳細な分布状況などは不明でありそうした遺構との関係は明かでないが、内容を見れば居住域が存在したと考える方が現状に即していると考えている。

B. 方形周溝墓

方形周溝墓は、II期～V期に属す例が検出されている。このうち墳丘の残存したものは4基であり、墳丘に関してはIV期・V期の例が相対的に高い傾向がある。

人骨の遺存した例としてSZ58がある。主体部の構造は明らかにならなかったが、1号・2号の2体が検出されている。遺存状態が良好であった1号人骨は頭を南東に向け、四肢を強く曲げた仰臥屈膝状態を呈している。レベルは、頭部下で標高185cm、足の方に向かって低くなり足下で170cmを測る。2号人骨は遺存状態が悪く、わずかに頭蓋骨の一部であることが確認できたにすぎない。おそらく構造は木棺であろう。2号人骨に近接してI期土器（壺）が出土しているが、人骨に比べて検出レベルは200cmと高い。これは墳丘構築に際して混入したもので、人骨とは無関係であろう。

方形周溝墓の時間的な配置では、II期が56B区の東部と西部、III期が中央部、それらに重複してIV期・V期が散在している。

II期方形周溝墓は、西の一群が56A区東部を含めて非A4形の集中する傾向を見せ、しかも県教育委員会調査区で検出された例に見るように一部に「連結形」も含んでいる。これは、朝日遺跡全体の墓域形成からいっても特異な地区を形成しているといえる。

空白地（III期の方形周溝墓の集中する地区）を挟んで東にある一群も西と同様非A4形を含むだけでなく、長軸と短軸の差が大きいSZ62のような拡張例が存在する。SZ41も拡張ではないが長短比が大きい。また、SZ74に隣接する2基の方形周溝墓は方形周溝墓間の狭い空間を連結形で分割している。「連結形」は空間に余裕が無い場合の構成方法であろうか。

III期方形周溝墓はII期には空白であった中央部に凝集して分布する。SZ56は墳丘が完全に重複するか軸線がややずれている。拡張例とはいえないかもしれない。このようなIII期方形周溝墓の凝集は、他に空間がなかったことを示すのであろうか。

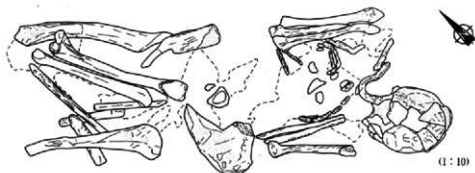
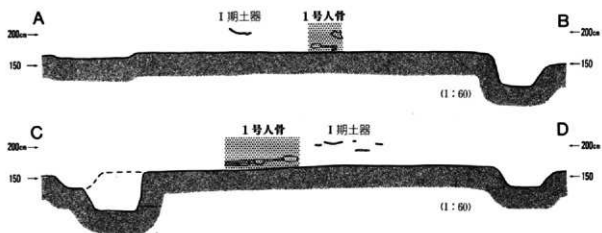
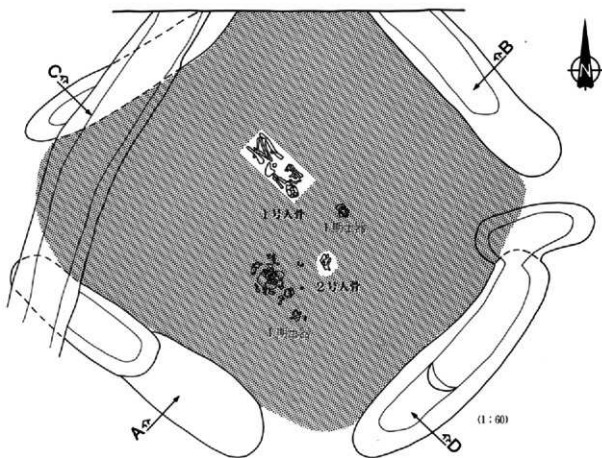
IV期は、県教育委員会調査区から続くSZ76がある。西に陸橋部を有するA1形である。同じく県教育委員会調査区からの続きで、III期とされたSZ59もIV期であるかもしれない。50×30cmの針葉樹と思われる大形の板材が周溝から出土している。何かを置くための台であろうか。

V期はSZ76に隣接して1基検出されている。

C. 方形周溝墓以後

V期以降の溝が2条ある。性格は不明である。

56A区とは異なり包含層上部からVI期以降の新しい時期の遺物が多く出土している。破片での出土であっても完全に復元できるものも含まれている。周溝の埋没がある程度進行してからの堆積であり、



第16图 56BK SZ47之入骨



第17図 56B区 方形周溝墓(東から)

方形周溝墓の築造時期よりは新しいので直接関係するとはいえない。墳丘上からの転落では説明できない時期差がある。

これらの現象に関しては、方形周溝墓の再利用、儀礼の継続、あるいは墓域であることが忘れ去られて別の性格の区域になったか？、などいくつかの解釈が可能である。

3. 56C区

幅3mの狭長な調査区である。県教育委員会調査区に西接している。県教育委員会と同じく北居住域の密集した遺構群を検出した。遺物はII期からVII期まであり、継続した居住域であったことが窺える。



第18図 56C区(北から)

4. 60A区 図34~37・49

南微高地の北端から谷Aにかけての地区で、北微高地も一部検出している。調査時にはウェルポイントの設計が不適切であったために地下水位を十分に下げることができず、谷A内の調査は基底を確認しないままに終了した。また60A区は河道がかかっているという予想で機械力による大幅な掘り下げを計画したけれども、調査区の半分以上を占める谷部分の掘り下げに際しては最初かなり上の方に掘削面を設定したため再度の掘削を必要とするに至った。そしてかえってそのために、SDIは溝下部を残して削ってしまうという事態を招いた。谷Aの埋没過程に対する認識が不十分であった。谷Aで検出した河道からはあたかも河原の砂利のごとく摩滅した土器破片が多量に出土し注目された。また、河道以南の谷Aには暗褐色砂質シルトが堆積し、腐食した貝とともにほぼIV期に限定できるクガなどの木製品が多量に出土した。その上部には明灰色細砂と暗褐色砂質シルトが交互に堆積、谷A内が徐々に埋没していった状況が窺える。

A. 竪穴住居

SB01は南西壁のみ検出した。SDIIIを埋めているベース土を床面としているが、住居構築のために特に埋め立てたものではないだろう。周壁溝・炉・支柱穴は不明確。隅円長方形プランを呈すると考える。遺物はほとんど出土していない。II期からIIIa期のSDIIIより新しくIIIa期のSX01に切られるので、IIIa期と推測する。

SB02は一部を検出したのみで不明。

平面的には検出できなかったが、多数の柱穴の存在や土層セクションから他にも竪穴住居が存在することを確認している。

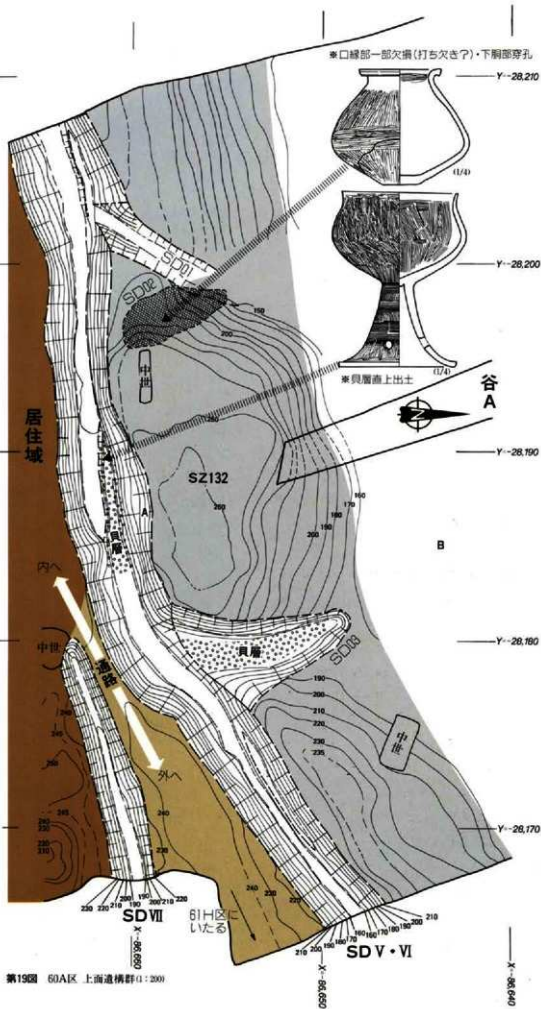
B. 溝

SDIはすでに述べたように検出は不十分であった。断面観察によれば、幅4.5m、深さ1.3mを測る。

SDIIIはSDVと重複したII期に掘削された溝であり、IIIa期には埋没する。SDVと分かれて北に折れる部分では上部に貝層が形成されていた。この貝層はSDIV上部にも続いており、埋土も下部とは明確に異なるものであったので、IIIa期にSDIIIからSDIV上部にわたって浅い溝が掘削されたかもしれない。下部はベース土の再堆積が顕著で、渦巻くような模様を観察できる。一部に貝殻が含まれる。幅4m以上、深さ1.6m以上。

SDIVは、杭が2本遺存した掘り残し部分で西のaと東のbに分かれる。幅2.2m、深さが南側で0.7mを測る。埋土上部にはカキを主とする貝や土器が多く堆積している。そして上部はIIIa期の砂混じり破砕貝層が覆っている。多葉沈線紋壺が出土しているのでSDIIIよりは古いと考える。SDIIIとSDIVbの交差部分が掘り残されて幅0.2~0.4mの陸橋部になっているのは、両者が時期的に隔絶するものではないことを示しているであろう。

SDV・VIは、V期に掘削されたVと再掘削のVIという関係である。Vは幅5m以上、深さ2m前



第19図 60A区 上面透視群 (1:200)

後、VIは幅4.5m以上、深さ1.7m以上と推測する。SDVIにはSD01が接続している。同じVI期だが、SDVIの堆積がある程度進行してから掘削されているようである。

SDVIIはVI期に掘削されている。60A区では規模が小さく、幅2.5m、深さ1.3mを測る。SDVIとは1.8mの間をおいて切れる。この部分が通路であろう。なお、土塁は検出していないが、SDV・VIN南肩は北肩よりもやや高くなっている。なお南肩には手盛り形土器が置かれたように遺存していた。

C. 杭 群

SXIは20本の杭(測柱)がやや締まった砂層に打ち込まれている。上部は河床によって削られ、地中部分の長さ15cmほどしか遺存していなかった。



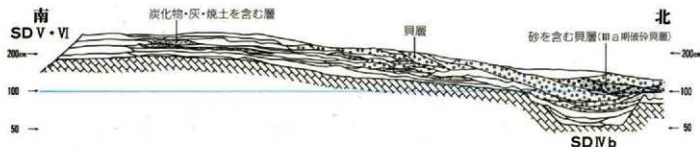
第20図 SX I (奥から)

D. 方形周溝墓 SZ131

SD02・03とSDVに削られた部分から構成されるが、調査当初は方形周溝墓の可能性すら思い付かなかった。SD02ではIV期の土器が多量に出土し、下部穿孔壺があったものの土器廃棄遺構と考えていた。SD03も他につかまらない孤立した溝として、性格を決めかねていた。しかし再度検討してみると、墳丘相当にはベース土が堆積し、SD03にはIV期の腐食貝層があり、SDV下部にもほんの一部ではあったが何故かIV期の貝層がある。そして、SD02には下部穿孔壺がある。これらを総合すると、占地の自由度が高いIV期であれば方形周溝墓の可能性が高いのではないかと考えるに至った。

E. 貝 層

時期ごとの広がりには偏りはあるものの、谷A斜面での堆積が顕著である。II期貝層はカキを主としてSZ131以東に分布するがSDIV上部でまとまっているほかは薄い。III期も同じくカキを主としては全体に分布し、とくにSZ131周辺で多い。IV期貝層はハマグリを主としてSZ131以北に集中しており、厚いところでは1m近くある。これら貝層の始まる微高地北端から谷A斜面には、炭化物・灰・焼土が薄く交互に堆積した部分があり、また貝層中にも同様の層が挟まれていたり貝層自体に炭化物・灰が含まれる場合がある。付近で集中的な煮沸処理が行われたと考える。



第21図 60A区 谷A南斜面土層セクション(1:100)



第22図 60A区の貝層
・SDW ・SZ132北斜面
・谷A内(北P-5)・谷A内(北P-6)



第23図 60A区 貝層の散布状態 (北P-5)

5. 60B区 図版26～28・31

調査区の半分ほどが谷Aである。谷Aでは貝層の出土はあったものの60A区ほどの量はない。貝層最下部は一次堆積層であるが、上部は砂混じりのⅢa期破砕貝層である。その上部は暗褐色砂質シルトと明灰色細砂の周期的な交互堆積で覆われており、おそらくⅣ期になって徐々に埋没が進行したものであろう。Ⅴ期には河道が形成され砂層の堆積も顕著となり、河道Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと形成される。河道Ⅰ・Ⅴは本調査区では確認していない。

谷A以南の微高地部分はⅡ期からⅢ期にかけて居住域となり、Ⅳ期には方形周溝墓が築かれる。

A. 竪穴住居

Ⅱ期 SB03は、中央に灰の詰まった深さ5cmの浅い土坑(SK19)がある。床の一部に貼床が認められる。掘形には竪穴構築時の掘削具の痕跡が認められた。S D II b・Ⅲ掘削排土によって埋没している。SB04は北東側で周壁溝が少なくとも4条存在する。中央には、ベース土ブロックが充填した中に灰・炭化物の薄い層をとまう土坑(SK16)があり、内部からは獣骨が出土した。貼床は少なくとも4面確認した。そのため対応する柱穴は多数となり、特定できていない。SK15・17に切られる。SB07は周壁溝をもたない。中央にあるSK10は炉穴の可能性がある。SB08はSB04と同じく周溝が4条めぐり、拡張が同調していることは注目される。中央のSK13は本住居に伴うもので、焼土が面をなして存在し、また内部にも焼土が多量に含まれていた。炉穴とは状況が異なる。SB10・SK12に切られる。

SB05・11は時期は特定できないが、軸線からみてⅡ期の可能性がある。05では床面掘形に竪穴構築時の道具痕が規則的に遺存していた。

Ⅲ期 直接的に時期のわかる住居は少ない。切り合いと軸線で推定する。SB01はS D IIIを埋めて床面としている。軸線の一致するものにはSB09・10・12がある。SB10はSB08を埋めて床面を形成している。SB06は円形プランではないが隅円方形プランといえるほど定形的でもない。

B. 掘立柱建物

時期の確定できる例は無いが、Ⅲb期以降には下がらない。軸線ではSA03・04がⅡ期であるかもしれない。SA02はS D II a・b間の陸橋部であるSX03に近接しており、通路としてのSX03に關係するかもしれない。西北端柱穴が未検出であるのはベース面が傾斜面をなしているからである。

C. 小穴列(垣)

SH01は、S D IIIに沿って1.4m内外の間隔で並ぶ10個の小穴である。ベース面でS D III北肩に接しているの、30cm強ある包含層上面まで溝斜面を延長すると斜面中に並ぶことになる。これらを垣とした場合、居住域内の区画として溝と併用される例は確認していないので、溝掘削以前(Ⅱ期)か、溝が廃棄されて埋没がある程度進行したⅢa期であろう。

D. 土坑

土坑には、a：暗褐色砂質シルトなどの包含層からなるもの、b：土器などの遺物や貝などが廃棄されているもの、c：遺物はあまり含まれないで炭化物や焼土が含まれているものがある。cの中には炭化物・焼土・灰それぞれが薄い層をなしてバムクーヘンのような累積的・規則的な堆積を示すものが観察される。その場合にはベース土（青灰色や黄灰色を呈するシルト）がケーキの生地のように間に挟まれることもある。長楕円形プランの場合には軸線が寝える。II期：SK22、III期：SK06・12はベース面の等高線方向に長軸がある。

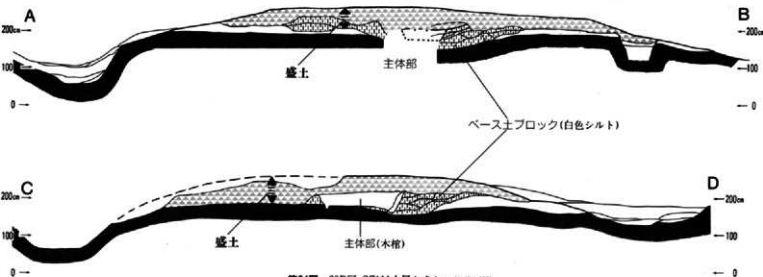
E. 方形周溝墓

主体部を検出した確実なものSZ111と調査時には性格不明の高まりとしたSZ112がある。

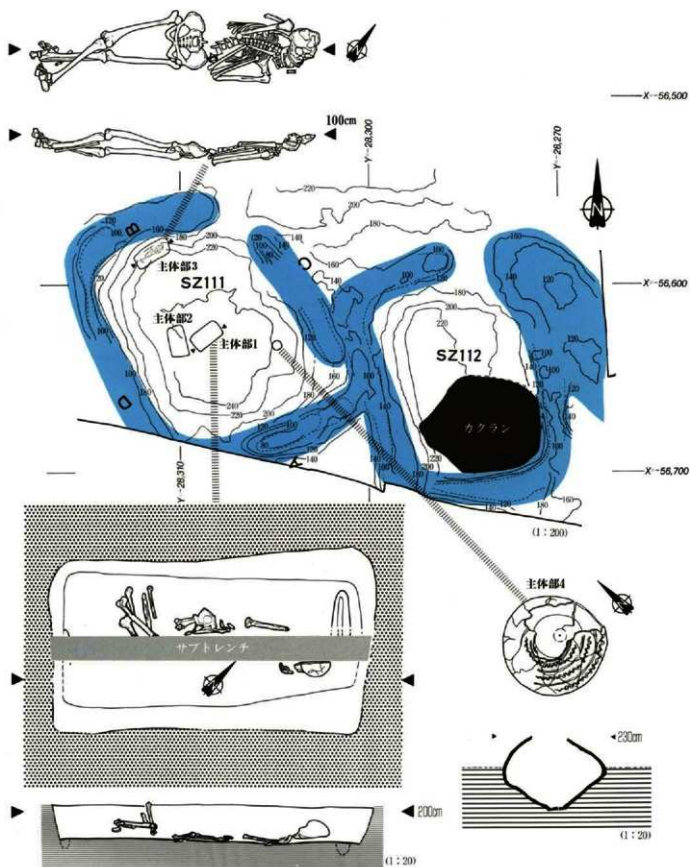
SZ111はA3形と推測される。供献土器には貝田町式甕が出土している。主体部は木棺の可能性のある1～3と壺棺の4がある。主体部1ではサブレンチによって仰臥屈葬の人骨が破損した。木棺構造は小口板が底板を挟む形式である。主体部2からは屈葬状態の人骨が2体分並んで検出された。両者の性別は不明である。主体部3は身長169cmという背の高い男性の人骨である。主体部4は正立の壺棺であるが蓋は伴っていなかった。

墳丘はIII期包含層にベース土と暗灰色砂質シルトを盛り上げたものである。ベース土は墳丘中央部に多く、主体部1はベース土に包まれていた。主体部4は墳丘近くに設けられており、ベース土は周囲に見られなかっただけでなく、恐らく墳丘上から切り込んで墓域が設けられたと推測する。主体部4の埋土は、最上部の暗灰色砂質シルトの下にはほぼ水平に堆積する暗褐色砂質シルトがあるが、これは蓋の痕跡であろう。供献土器はIV期で、在米系と外来系がある。

SZ112は、ベース土を多く含んだ盛土からなるが、主体部らしきものは検出されていない。盛土は南の溝を埋めており、拡張されたが、異なる性格のものに造り替えられているかもしれない。



第24図 60B区 SZ111土層セクション(1:100)



第25図 60B区 方形周溝墓

F. 溝

Ⅱ期・Ⅲ期の溝は、住居群に近接するSD02～05と、居住域を分断するSDⅡ・Ⅲ・Ⅳがある。前者は相互に軸線が関係しており何等かの小区画を形成するものと考えられ、後者は集落全体に関わるものである。

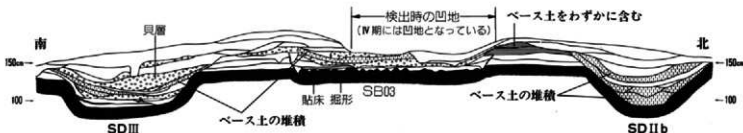
SDⅡはSX03によってa・b二つの部分に区分される。規模は、SDⅡaが幅2m～1.5m、深さ1m以下、SDⅡbは幅3.5m～4m、深さ1m～1.2m以上あり、前者の方が劣る。SX03は溝内に設けられた陸橋部で、平坦部の長さ1.2m、幅0.8mを測る。中央がやや低く南北が高い。南端中央には杭がある。溝底との比高は35cmほどである。SDⅡaには逆茂木があり、一部は60E区でも検出している。原位置にある逆茂木は少ないが、SX03北西隅のものはその位置とともに根元が斜面に埋没して斜め方向に枝を張っていることが注目される。SDⅡbには逆茂木は遺存せず、本来存在したかどうか不明である。

SDⅡbの埋土は、60B区西半部では大きく3層に分かれ、上層：Ⅲa期包含層で炭化物・焼土を含む暗灰色砂質シルト、中層：Ⅱ期とⅢa期にまたがりベース土がやや多くなる、下層：Ⅱ期でほとんどベース土のみとなる。東半部ではⅡ期貝層が中層や上層に多く含まれるようになり、Ⅱ期でかなり埋没が進行しているためにⅢ期の層がほとんど見られないという相違が生じている。また、上部でベース土の再堆積が顕著となる。こうしたベース土の再堆積は、通常の埋没では生じない層位であり、それが一旦盛り上げられた部分の崩壊または整地によるものである可能性が考えられる。第26図のようにSDⅡb南側からは一部がSB03を覆うベース土をわずかに含む層が検出されている。これなどは掘削に際して最初に排出される土層である。本来溝の両側には少なくとも再堆積した量のベース土が積み上げられていたと考える方が、SDⅡb内に堆積したベース土の由来としては理解し易いだろう。

SDⅢからは東端を除きほぼ全面にわたって貝層が検出されている。しかも下部にはベース土の堆積層が部分的にしか見られない点でSDⅡとは大きく異なる。そして上層までⅡ期の堆積層によって埋められている。貝層は大きく上中下の3層に分かれ、下層がベース土を含むのに対し、中・上層はほとんど貝殻廃棄となっている。

SDⅣaでは出土している土器がⅡ期でもやや古相を呈し、SDⅡ・SDⅢに先行する溝である。貝層とベース土の堆積があり、ベース土は南北から流入している。

SD01からは時期を決定するような土器の出土は無かったが、層位的にはⅢa期堆積層を切り込んでおり、それ以後と考えられる。Ⅴ期の早い時期でSDⅠと併行する可能性もある。

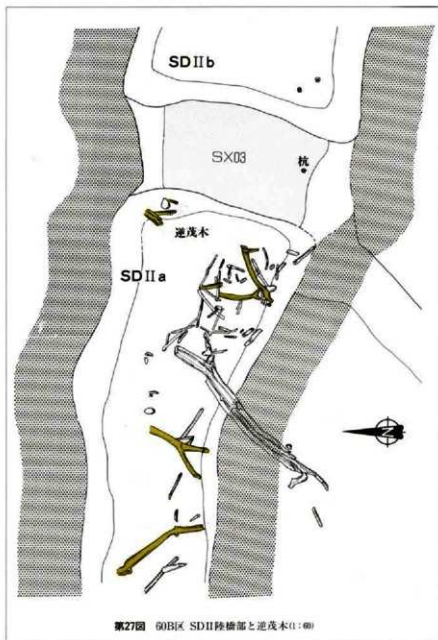


第26図 60B区 SDⅡ・Ⅲ間土層セクション(Ⅱ:80)

SD Iは、谷A南寄りを河道に沿って走る溝で、上層からV期中葉の土器などが出土している。

埋土は、中層に砂層があり、下層と上層に植物遺体を含むシルトが堆積している。

SD II b・III・IVなど溝内への貝殻廃棄は、特に顕著なのがSD IIIの西部SB08付近である。第28図のようにカキを主とする貝とともにII期の完全な壺も出土している。しかし、SB08はSD IIIと重複しているのでそれ以外の住居での生活に関係するか、あるいは調査区外となる以南地区との関係であるかもしれない。そして、それが40A区のような集中的な煮沸処理をも意味するかどうかは不明である。



第27図 60B区 SD II 陸橋部と逆茂木(1:100)



第28図 60B区 SD IIIの貝層と土器(1:4)



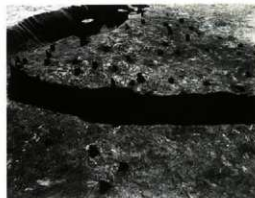
第29図 60BE SX01(1) : 409



第30図 SX01東端(西から)

G. 杭と溝

SX01は調査区北壁際で検出したために全体を検出することはできなかった。幅は不明だが長さ18 mを測る深さ約1 mの溝状の遺構で、内部に枝持ちの木が南に傾けて多数立てられていた。その東端の溝状部分の終息するところでは、枝を持つ木は終息部分の輪郭に合わせて南から東に向けて扇状に傾けて立てられていた。いずれも立っており、斜めにねかせた木が存在したかどうかは調査上の



第31図 SX I(東から)

制約もありはっきりしなかった。

埋土はⅢb期以前の土器を含む黒褐色砂質シルトであり、とくに攪乱状をなした部分の確認はできなかった。上部では一部に砂層の流入が認められているので、溝状部分は完全に埋められることなく浅い窪地状をなしていたことが窺える。

SX01で検出された杭の上部は、すでに河床によって削られていたために不明である。唯一溝の方向に倒れ込んで削平を免れて残っていた木は長さ約2mを測り注目された。

SXⅠは杭群(乱杭)である。上部は河道Ⅱに削られており、砂層中には僅か5cmほどが露出していたに過ぎない。地下の残存部長は約40cmを測る。60A区・60E区とは異なり、本調査区における杭群は密度が高いものであった。この段階ではこれが上述の遺構と関連があるとは考えていなかった*。

F. 土堤状遺構

SX02はSDⅠの排土を谷A側に盛り上げて土堤状としたもので、調査区東半部での連続は確認したが、以西は明確にしなかった。堤防的な性格は無く、溝掘削に際しての排土処理の一貫であろう。

盛られた時期はすなわちSDⅠの掘削時期であり、谷Aにおいて河道によって形成されたと推定される堆積層(自然堤防状の河道に平行して帯状をなす隆起部分)の末端に一部かかっていることから、谷Aで河道が活発な活動を開始するV期前半に位置づけられる。

G. 貝層

居住域内部での溝や住居跡への貝殻廃棄とは別に、谷A内部でも貝層が検出された。そのうち、調査区西部では砂層と互層をなす砂を含む破砕貝層の分布が顕著であり、しかもそれらは非常に薄い層の累重であって、規則的な強弱のある水流によって形成された二次堆積であることが窺われた。それらは、SDⅡa構築に前後しているので、Ⅱ期からⅢa期にかけて形成されたことがわかる。こうした堆積状態は下流部にあたる60E区でも確認されているが、上流部(61A区)では層自体もそれほど厚くなく、谷A内部での水流の状態が一定でないことが窺える。

上述のような二次堆積ではない一次堆積の貝層は、ベース面上に厚さ約20cmほど堆積していたに過ぎず、60A区に比べて薄いものであった。貝層下部はコンクリートのように固着して硬い面を形成し、掘り下げるのにはしを用いなければならぬくらいであった。

*この段階でこれらが「逆茂木」であると推定し、根資料も含めて朝日遺跡における特異な結界施設の存在を『昭和60年度 年報』で報告したが、しかしその全体像の復元は位置的・時間的につながる61A区SX02の検出を持たなければならず、結果的には時期尚早であったという反省が残った。

6. 60E区 図版10～12・26

調査区の東半分は谷Aである。河道はI～VIまでである。このうち、河道IV・Vに相当すると思われる部分からは他では見られないような大きな流木が多量に出土した。

西の微高地部分ではII期までの居住城とIII期の方形周溝墓などを検出した。居住城は一部に包含層上面で高まりを検出したので方形周溝墓を想定した部分もあったが、掘り下げた結果、図版11に表示したような旧表土残存部の高まりを確認するに至った。この高まり上部には、灰とともにしまりのないボロボロ崩れる土層が堆積していた。これは被熱の結果と考えられるもので、そうした土をこの部分に集中的に廃棄したのであろう。同様の層は60A区でも認められている。

貝層はSK36に認められた他はSD02に若干遺存していたぐらいで、決して多いものではない。

微高地東端の谷Aに接するあたりは、SZ108南周溝が削られていることに示されるように、河道の侵食によって一部遺構が削られている。したがって、それ以前の遺構の一部が欠如していることは念頭におかなければならない。

A. 玉作工房

SB03は10m×9.5mの円形竪穴で、時期はII期～III期初頭と推測する。周壁溝が部分的に2条めぐる。床面には多数の土坑や小穴があり、また方形プランを示す周溝もあるので、以前には別の建物が建っていたようである。それも玉作工房であったかどうかはわからない。

玉作工房は調査当初それであるとわからなかった。未成品が数点出土した段階では確定せず、玉作工房と確信した段階ではかなり掘り進んでいた。その時点では、すでに床面覆土のほとんどを掘り下げていたが、残っている部分の土を取り上げた。そのほか床面にある土坑や柱穴の土もすべて取り上げ水洗選別を実施した。その結果、緑色凝灰岩を素材とする管玉の製作工程が復元できる資料とともに、ヒスイ・メノウの残片も出土し、勾玉などが製作されていた可能性も考えられるに至った。

B. 竪穴住居

SD02以北では玉作工房を含む円形プラン3棟、不明確だが隅円方形プランも存在するようである。以南では周壁溝が錯綜して竪穴住居を特定するのは困難だが、円形プランは存在しないようである。SD02を境にして構成に差がある。

SB02はSB01より新しく、新たに建てられたものである。SB01はSB03と同規模の円形竪穴住居であり、並存の不可能な両者を時期差と考えれば、SB02は玉作工房と並存した可能性が高い。中央の小穴は竪穴であろう。

C. 溝

SD01は県教育委員会が調査した溝である。最初の掘削はII期と推定され、玉作工房と同様に先行してあったものがその後埋め立てられ、III期に再度掘削されたようである。しかし、SD03の掘削にともない

最終的に埋没したと考えられる。

SD02はⅡ期の溝で、幅約2.5m、深さ約0.3mと浅い。埋土にはベース土を主として炭化物などを挟んだ薄い層が累重しており、埋没過程は決して単純ではない。周辺での遺構掘削にともなう排土がそのつど流入しているようである。しかし、それでも整地されず短期に埋没していないのは、区画としての性格が存続したからであろう。単純な埋没ではない。

SD04は時期を直接決定できる資料に欠けるが、包含層上部から切り込んでおり、しかもSD06より明らかに新しい。問題は方形周溝墓SZ108との関係であるが、残念ながら明確でない。時間的に近接するなら先行する可能性はある。

SD05はSD02に位置的にも時間的にも並行する。

SD06は谷A近くでa・b・cの3条に分かれる。bの最下部はⅡ期であるので、それに切られるaはⅡ期と考えてよいが、cは近接する溝中では最も新しく、時間的には大きく離れる可能性がある。埋土の最上部では古墳時代前期末の土器が出土している。Ⅴ期以降である可能性もある。

SD07はSD06bに並行する位置にある。時間的にも並行するのであろう。

SDIは面的に完掘できなかったが、調査区南壁セクションでは両側に排土を盛り上げた高まりを確認した。

SDII aでは立った状態の逆茂木を検出した。先端部は欠損しているため不明である。

D. 土 坑

溝状に細長いものや長楕円形プランを呈する例が多く、軸線に一定の方向性が窺える。ほとんどⅢa期に属し、SK26では細頸壺、SK27では浅鉢の完形品が出土し、SK35では本来土器棺として組み合っていたと思われるⅡ期の壺と小形鉢の破片が坑底より浮いて出土した。後に述べるように、土器棺や方形周溝墓の存在から考えてⅢ期以降は墓域であった可能性が極めて高いのであり、これら土坑も人骨の出土した例はないけれども墓域であった可能性がある。しかし、木棺の痕跡を示す例はなく、墓坑であったとしてもいずれも土坑墓である。かつて西に接する県教育委員会調査区では包含層中から人骨が出土しており、墓域であることはまちがいない。

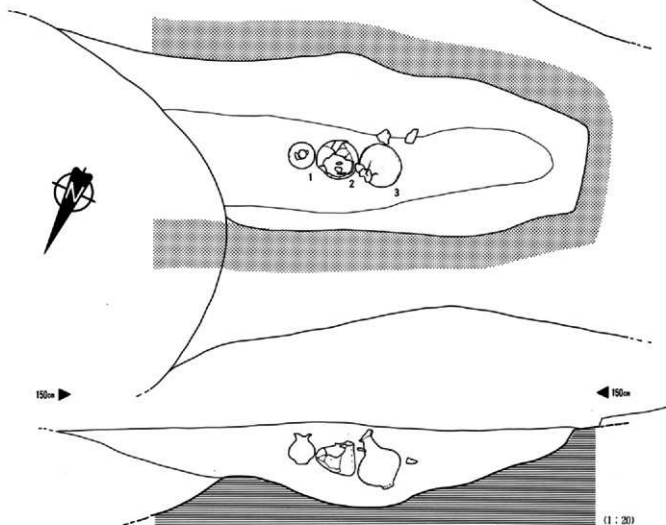
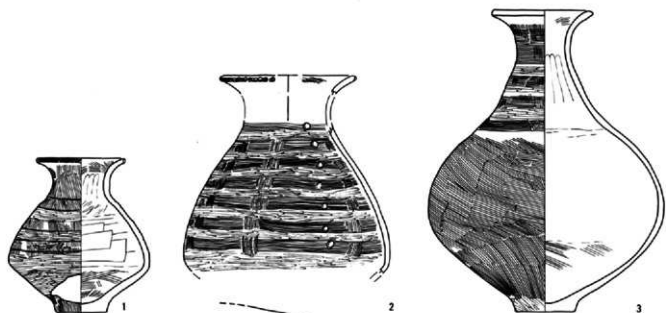
ただ、全体に墓域が展開する可能性が高い中で、SK36(Ⅲ期)上部にある土坑には貝殻が廃棄されており、その性格が問題である。

E. 方形周溝墓

SZ107は周溝が土坑の連結したような状況で、他に例の無いものである。おそらく、最初A4形であったのをその後拡張する段階で長軸方向に土坑を二つ加えたのであろう。主体部ははっきりしないが、墳丘の盛土中から壺が1点出土しており、壺棺をもつ可能性がある。

SZ108はA4形で、東期溝から下部部に穿孔の施されたⅢb期細頸壺が出土している。供献土器であろう。

ところで、SZ107・SZ108間の重複している可能性のある周溝からはⅢb(前半)期の壺が3点出土している。溝底からは浮いているけれども、並んで出土しているので置かれたものと推測する。



第32図 60E区 SZ107・108間 供献土器とその出土状態



▲SZ108と供飯工器(北から)



▲供飯土器(西から)

▼上野棺SX01(東から)

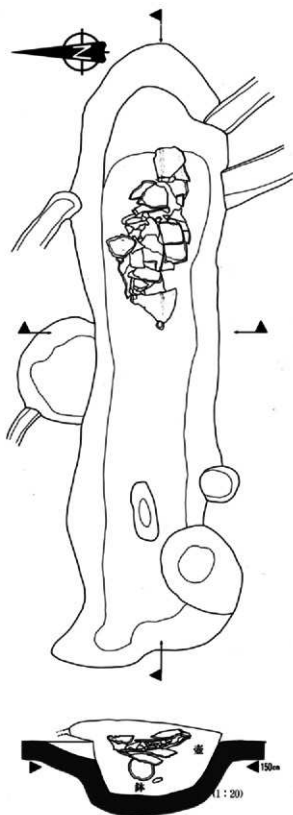


第33図 60E区 方形周溝墓ほか

1は下胴部穿孔で2は底部を欠くが、3には加工は認められない。3は、形態的には長頸で中央に微妙な隆起もあり、〈旋糸痕紋系〉細頸壺の基本形態を忠実に継承している。しかし、調整・紋様は貝田町式であり、折衷型である。

F. 土器棺

SX01はⅢa期壺を横位にしたもの、SX02はⅡ期壺を正立に据えたものである。後者の存在は、Ⅱ期にはこの区域が墓域となっていたことを示すのであろう。

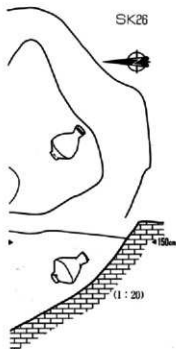


SK35

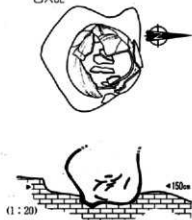
第34図 60E区 土器棺ほか



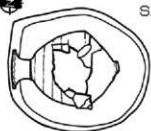
SK26



SX02



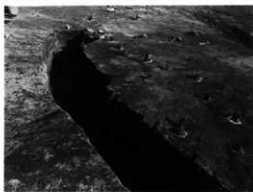
SX01



G. 杭 群

SX I は調査区北東部で砂層下から検出した。打ち込まれている杭は、カシの割材で、径5cm前後、残存部分の長さは約40cmである。横に組み合わせるような材や編物は伴っていない。

SX01はSD06bの谷Aへの流入部にある杭群であるが、ほとんど痕跡的に検出されたにすぎない。



▲SX I (東西向き)



▲SX I (東西向き)



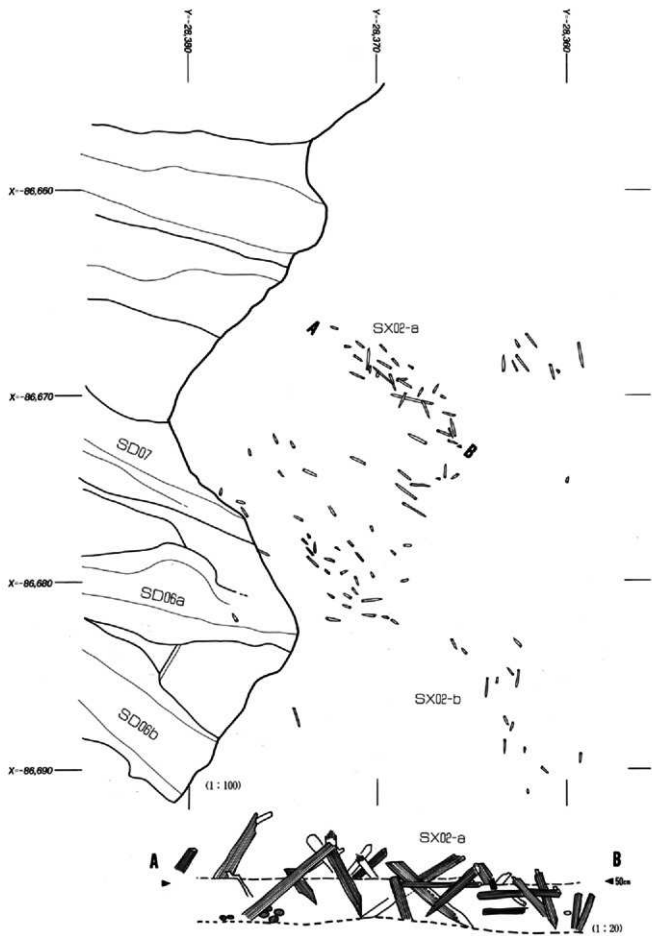
第35図 60E区
谷A内で検出
した杭群ほか



SX02は、大きな流木を含む河道Ⅳ・Ⅴの推定流路部分では粗であるのに対し、そうした流れがそれほど顕著に観察されなかった河道Ⅱ・Ⅲの部分では密である。このことは、前者の水流によって一部が流されてしまったことを示しているのであろう。SX02はa：矢板からなるグループとb：丸木杭からなるグループがある。両者それぞれが打ち込まれている傾きや全体の並びともに河道と直交しているので、河道を横断するものであったことがわかる。しかし、これらが堰であるには横木が組み合っていないし、矢板・杭の密度も低い。時期は古墳時代まで下がるかもしれない。



第36図 谷A内河道と枕群



第37图 60E区 谷A枕群

7. 60H区 図版2・3

A. 方形周溝墓以前

おそらく56A区から続く幅0.5m、深さ0.1mの平行する細い溝が検出された。そして、出土遺物はほとんど無いが、ベース（黄灰色シルト）面直上には黒褐色砂質シルトが堆積している。ベース面の標高は56A₁区で150cmであったのが、ここでは125cmと低下している。溝の走向は傾斜に対応している。

B. 方形周溝墓

SZ1はこれまで確認された西の限界に位置する。A4形である。周溝埋土には墳丘側からの流入が観察される。

SZ2は清須城の外堀掘削のために西半分が不明である。

SZ3はA2形あるいはA1形と推測される。時期はⅢ期と考える。主体部は木棺である。

SZ4は東半分が調査区外にあるため不明である。

なお、調査区の東壁土層セクションではSZ3の北に盛土のある部分が観察されたが、これは規模的にみて方形周溝墓とは考えられない。



第38図 60H区 方形周溝墓 (西から)

8. 60 I 区 図版41・42

A. 竪穴住居

SB01はⅣ期。掘形深さ25cm残存。おそらく小判形プランであろう。SB02に切られる。県教育委員会調査区との対応はない。貼床はベース土で形成される薄い層の累重。覆土にもベース土（明灰色シルト）ブロックが多量に含まれているが、これは整地土である。

SB02は一部のみ検出で時期は不明。隅円方形プラン。貼床はベース土で形成される薄い層の累重。Ⅳ期以降。

SB03は周溝のみ確認。軸線はSB02に一致している。SB04は周溝の検出にとどまる。隅円方形プラン。Ⅲb期か。SB05は掘形深さ約15cm残存。隅円方形プラン。SB06に切られる。SB06では貼床は未検出である。掘形深さ約15cm残存。SB07は円形プランであろう。Ⅱ期またはⅢ期。SB08は隅円方形プラン。Ⅳ期。SB09・SB17を切る。覆土からはⅢb期の土器破片が多く出土した。整地に伴うものであろう。SB09は隅円方形プラン。Ⅳ期。一部の検出にとどまる。

SB10はⅣ期。小判形プランであろう。調査区南壁際で炭化物・焼土を検出した。焼失家屋の可能性がある。

SB11は隅円方形プランであろう。Ⅲ期。

SB12はⅤ期前半。かなり角張った隅円方形プランである。貼床があり、床面は少なくとも2面ある。SK03は上面にともなう土坑で、貼床と同じベース土で形成された半円帯状のわずかな高まり——硬化面となっている——が囲む。入口施設の一部である可能性がある。

SB13は円形プランで、周溝は2条まで確認した。Ⅲa期。中央にある土坑SK33は本住居跡に伴う。上面に炭化物・焼土が見られ、埋土は炭化物と黒色砂質シルトの互層である。炉はこの部分と北に分布する焼土面の2ヶ所が考えられる。SB14以後は周溝の検出にとどまるが、時期はⅢ期のうちに収まる。

B. 柱 根

P1は残りが悪く、形状ははっきりしない。SB10より新しい。P2は径50cmの柱である。63G区で検出した柱根や礎板の存在は、この区域に大形の掘立柱建物が存在したことを強く示唆する。あるいは木柱群であろうか。

C. 井 戸?

SK31はⅣ期で、ロート状の断面を呈し、また埋土がベース土のブロックを多く含む。

D. 溝

SD01は土坑の連結したような形状を呈する。多条沈線紋を有するⅡ期前半の壺が出土している。居住域内部の区画溝であろう。

9. 61A区 図版27・29・30・32・33・34

上面遺構群

A. 溝

SDⅠはⅤ期前半に掘削された、平均幅約4m、深さ約1.5mの溝である。調査区西半部ではSZⅠ14墳丘を避けてその際に掘削されているので南側肩がやや高くなり、溝底との比高1.75mを測る。そのため北側の盛土頂部とは25cmほどの差を生じている。盛土は平坦部に75cmほどの厚さで築かれている。そしてその北側は河道が侵食する状況になっている。調査区東半部ではやや低い平坦部に溝が掘削されていることもあって、排土は両側に盛られている。調査区東壁土層セクションでは、北側盛土のさらに北に溝状の落ちを確認したが面的に検出するには至らなかった。南には微高地との間に「落ち込み」が形成され、滞水環境を形成したようだ。これは水田跡の可能性がある。

埋土は、中層として標高80～100cmあたりに植物遺体を含む砂層があり、流水のあったことが知られる。その下層はややシルト質とはなるが植物遺体を含み多少の流水が窺われる。上層は砂質シルトからシルトの堆積となり、標高150cmあたりでは植物遺体を含むシルト層が堆積する。中層の水流は溝が閉じていないことを示すが、その時期は河道に接続しており、後述のSDⅦに塞がれたりして止水状態となっていたのであろう。

出土遺物としては、上層から一本スキの未成品、下層からクワが出上している。

SDⅦ(Ⅴ期)はSDⅠと斜めに交差する溝で、下層は褐色砂質シルトの堆積だが、上層には河道からの分流と考えられる明灰色粗砂の堆積が見られる。上層の砂層はⅦ期後葉ごろに相当するもので、河道Ⅴに関係すると考えられる。この砂層は61C区を通り、県教育委員会調査区で検出された方形周溝墓の周溝上部をたどって調査区外へ抜ける。

B. 方形周溝墓

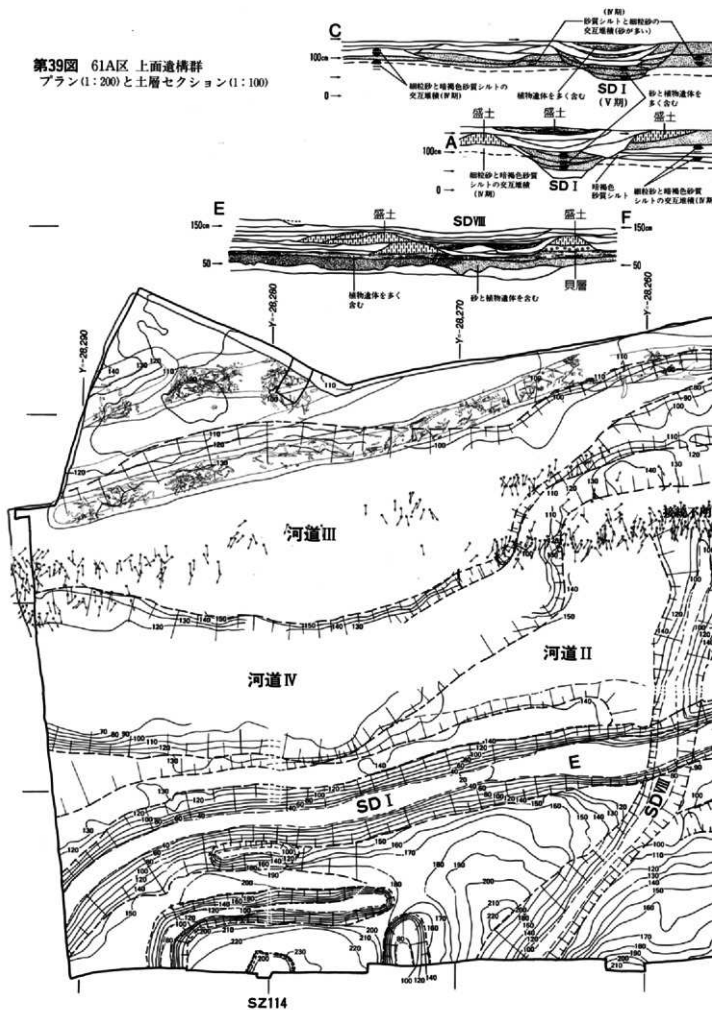
SZⅠ14は半分弱の検出で、SZⅠ17は東周溝を調査区南壁土層セクションで確認した。ほんの一部を下面で検出したにとどまっている。SZⅠ14のプランは、おそらくAⅠ形だろう。供献土器は出土しなかったので時期は確実ではないが、隣接の方形周溝墓群との関係からみてⅣ期と考えてはばまちがいない。主体部は検出できなかった。

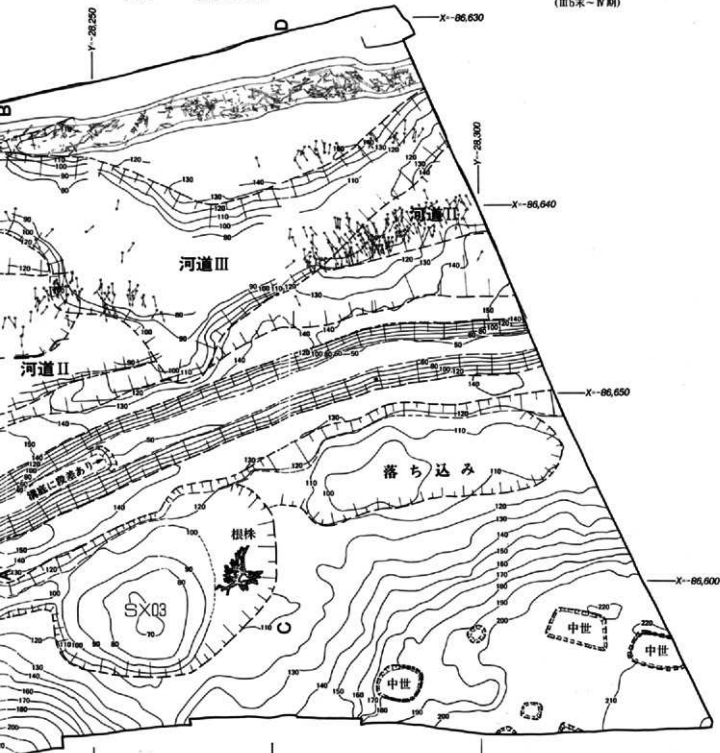
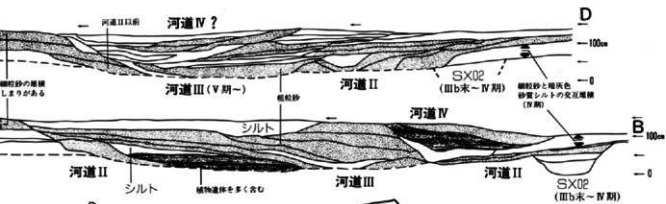
C. 河道

河道はⅡ・Ⅲ・Ⅳを面的に検出することを心がけてある程度検出できたが、やや上層セクションとのずれを生じている。河道Ⅰは上層セクションで存在をチェックできるのみで、面的には谷Aのほぼ中央部を流れていたものと推測する。

河道Ⅱは、Ⅳ期に堆積したa：暗褐色あるいは暗灰色砂質シルトと細粒砂との交互堆積層およびそ

第39図 61A区上面遺構群
 プラン(1:200)と土層セクション(1:100)





れに連続して堆積しているb：しまりのある細粒砂層、と不整合面を形成している。aの成因については、①谷A全体で同様に堆積していたのではなくたとえ規模は小さくとも中心的な流路が谷A内の最も低い部分にあり、その周辺の堆積として交互堆積を形成した、②中心的な流路は常時存在したのではなく季節的变化で規則的な堆積層を形成した、という二つの見方ができる。第39回土層セクションC-Dには交互堆積層を切り込むが河道IIよりは古い砂層が確認されている。これは交互堆積に連続する層であるから、最終的には不整合面を形成しているが、交互堆積層の形成に関わるものであったかもしれない。bは、その上面高度がSDI北側盛土基底より30cmほど高く、調査時には盛土の可能性はないものかと考えたが、盛るならばどこからか運ばねばならないこと、実際土層セクションをよく観察すると薄い縞状模様を観察でき通常見られる盛土のごとく擾乱されたような部分が認められなかったことから、自然堆積ではないかと考えた(第6回土層セクションへの注記では「盛土風だが自然形成?」とした層位に相当する)。層位の連続で考えた場合、直下は厚い砂層と薄い砂質シルト層との交互堆積、その下はその逆の交互堆積であり、上層になるにしたがって順次砂の量が増加して砂層自体にラミナが生じるようになる。このことは、aの段階では決して活発ではなかった河道の活発化、つまり砂の運搬量の増加と継続的なオーバーフローによってこうした高まりが形成されたこと(自然堤防の縮小版)を示しているのではないだろうか。

下面遺構群

A. 竪穴住居

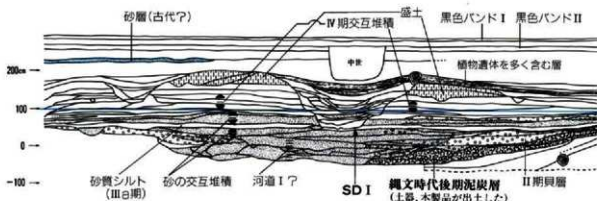
SB02はII期で、隅円方形プランを呈する。他はII期またはIIIa期に属す。

B. 掘立柱建物

SA01はII期またはIIIa期である。

C. 土坑

谷Aのやや北よりにSK01がある。土器はほとんど出土していないが層位的にみてII期であろう。谷Aには流水の痕跡が認められるけれども、おそらく河道Iの活動停止による一時渇水時に掘削されたと考える。土坑の基底はマイナス180cmにまで達しており、当時の地下水位がかなり低かったことが窺



第40図 61A区 東壁土層セクション(I: 100)

える。埋土は壁の崩落を示すのか、弥生時代基底層である縄文時代層のブロックが多量にあって、それに粗砂がかむ状況で、一部人為的に埋められているのかもしれない。恐らく、SK01は本来袋状土坑で上部がせりだしていたのであろう。内部からは、樹皮のついた丸木と禾本科?植物の茎を大雑把に縦じた編物様のものが中位で面的に出土した。敷いてあったというよりは、覆っていたのが落ちたのかもしれない。



▲北から

D. 大形土坑

SX03はⅣ期である。粘土層によって覆われている上部は長径約12m、短径約8.5m、流木・木製品を含む。また砂の流入の顕著に見られる下部は長径約8m、短径約5mを測る。

下部は深さ約0.5mを測り、Ⅳ期土器の他に木製品や流木の多量出土をみた。流木には摩滅したものもあり、河道からの流入が推測される。したがって、Ⅳ期にも谷Aには活発な水流の形成された時期(突発的なものかもしれない)のあることに注意する必要がある。

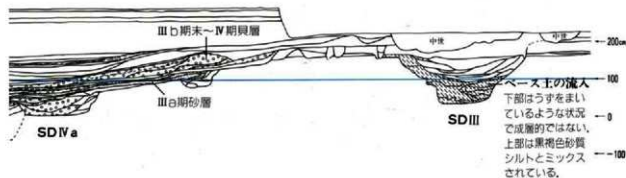


▲拡大

E. 杭と溝

調査区北半部では、河道の砂層下から杭群SXIを検出した。杭は数百本が帯状に分布する。検出した段階では杭の頭部は砂層中に5-10cmほど出ているに過ぎず、地中部分も10-30cmとばらつきがある。したがって割材か丸木か特定するのは難しいけれども、すくなくとも両者の存在は確認している。築堤に見られるような横木や編物の類は遺存していなかった。これらの状況は60B・60E区と同様である。第42図の一は杭の延びている方向(打ち込まれている方向の逆)を示したものである。平面的には東西の偏差を含んでいるが基本的に南向きの傾斜を有している。打ち込み角度は、垂直に対して15度内外で垂直なものはない。杭の打ち込まれた時期は、直接決定する資料に欠ける。

第41図 61A区 SK01出土編物



杭はⅡ期貝層上から打ち込まれ、その上部をⅤ期以降の河道堆積の砂層が被覆していたので、すくなくともその期間内の構築物である。そして本来の状況として、①杭が乱立していた、②護岸あるいは築堤の基礎として横木や編物とともに盛土に封じ込まれていたのが河道の侵食によって杭だけが遺存した、という二つの可能性が考えられる。

②に関しては河道の活発化するⅤ期以降ならば可能性があるものの、河道との関係は検出状況では窺えず、もし河道の制御のためであったなら無力であったことになる。後述する61H区では河道北岸の護岸と考えられる杭と横板を組み合わせた構築物(SX03)が貧弱であるにも関わらず遺存しており、しかもその付近に杭の密集する部分は検出されていないとは対照的である。

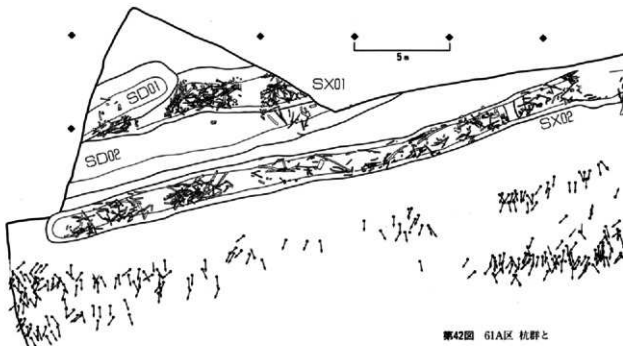
谷底部と微高地上面との比高は2.5m以上あり、谷Aからあふれたような状況はⅢa期に可能性があるのみである。Ⅴ期に限って築堤されたとしても、SDⅠのような溝の掘削が行われていることは、果してそうした築堤をするだけの必要がどこにあったのか考えさせる。

以上のことから、SXⅠとした杭群については河道化以前に打ち込まれた、つまり遅くともⅣ期には存在した——より限定するなら後述するSX01・02のような構築物と共に機能した——防御施設の一部であるという可能性を想定する。

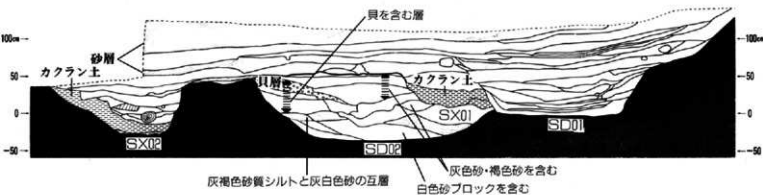
SX01・02は内部から枝持ちの木、打ち込まれた杭、抜かれた?杭、木製品、牙製品などが出土した、掘形が溝状を呈する遺構である。枝持ちの木・打ち込まれた杭は構築物の存在を強く示唆する。

溝状部分の埋土は、上部は自然堆積であり分層もできるが、下部は第43図に攪乱土として示したようにブロック状の土で充填されている。

枝持ちの木は、溝の延長方向に倒れている径5~10cm、長さ2.5m以上のそれほど枝が張らず屈曲もなく延びるもの-a、径はaより細く多くは断片化して検出されたが、遺存状態のよいものでは長さ約3mを測る-b、溝の延長方向には一致せず南向きにあつて大きく枝を張り、よじれているような



第42図 61A区 杭群と



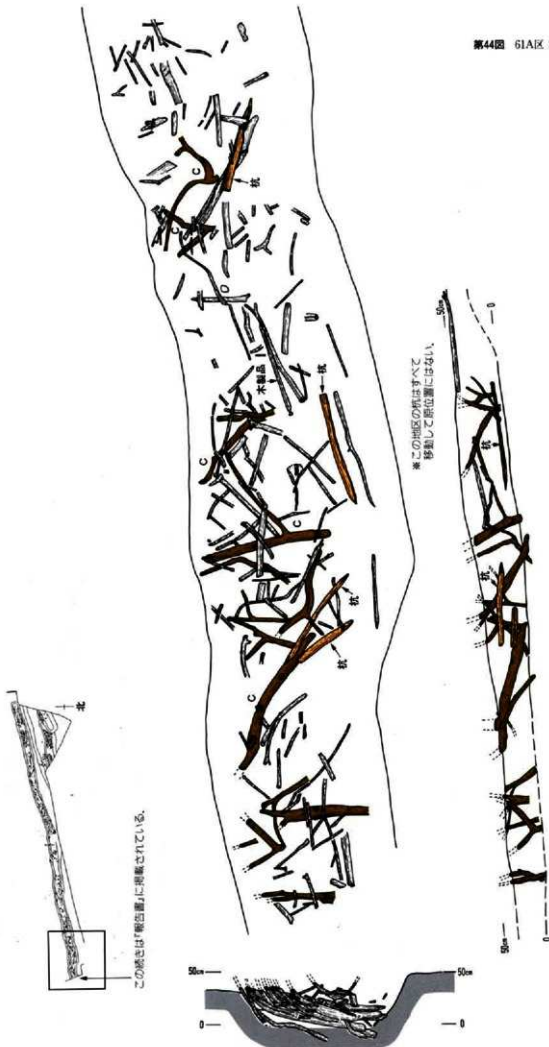
第43図 61A区 西壁土層セクション(1:50)

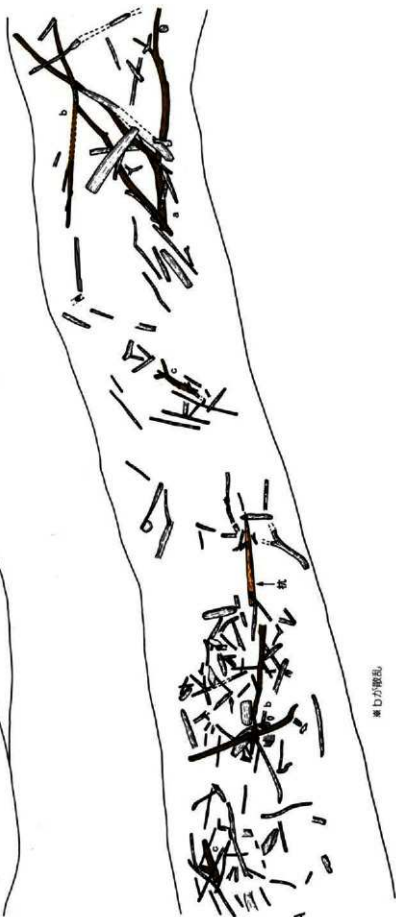
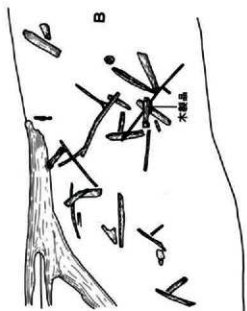
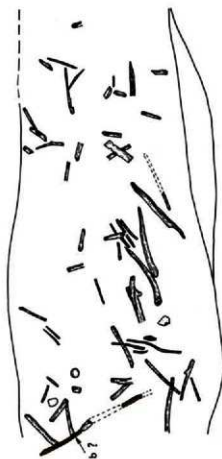
ものままである径の一定しないもの-c、の3種に区分できる。特にcは原位置にあるものが多く、地中に埋められている下端部は鈍い角度で一方から断ち落としてあっていわゆる枕先とは異なる。つまり、大きく枝を張っている材が使われていることも絡んで当初から打ち込むことは考えられていないのであり、それが地中に固定する方法という点でこの溝状をなす掘形および上述の埋土の特徴とも関わってくることになる。全ての樹種同定は実施していないが、同様の材が出土した県教育委員会調査区例では主要なものはカシであり、外観の一致しているこれらも多くがカシであろう。これらの材は、a・bが幹または幹に近い枝、cが枝が分かれる先端に近い部分であろうと推測する。おそらく、切り出してきた材をそれぞれの太さ、形状に合わせて使い分けているのであろう。

その他 SD II b (II期)はSD V aと重複して途切れる。その重複部分すぐ西のSD V a溝底からは穿孔のあるイノシシ下顎骨が出土した。SD V a (II期)は幅2~2.5m、深さ0.5mと小規模で、全体に貝層をともない、櫛、ガラス質石英英安山岩の剥片群、動物遺体などが出土している。SD IIIはかす



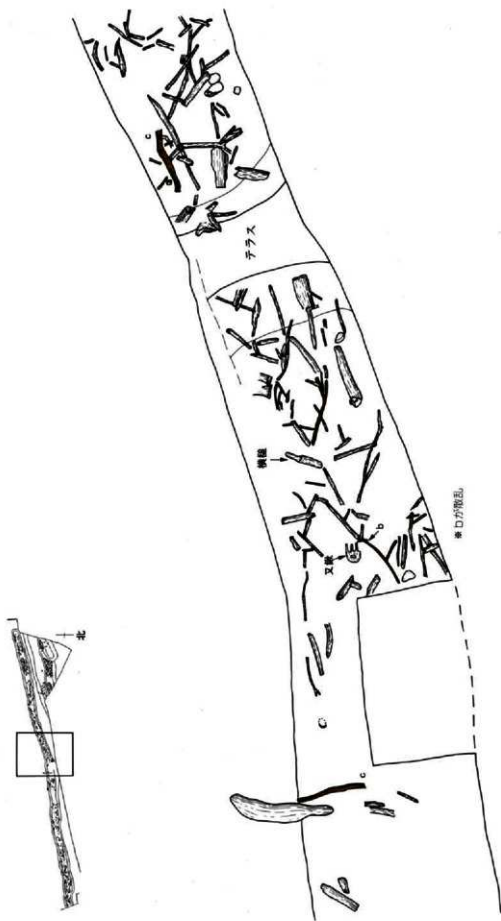
特殊遺構(1:200)





※ Bが部乱

(1:40)



(1:40)



(1:40)



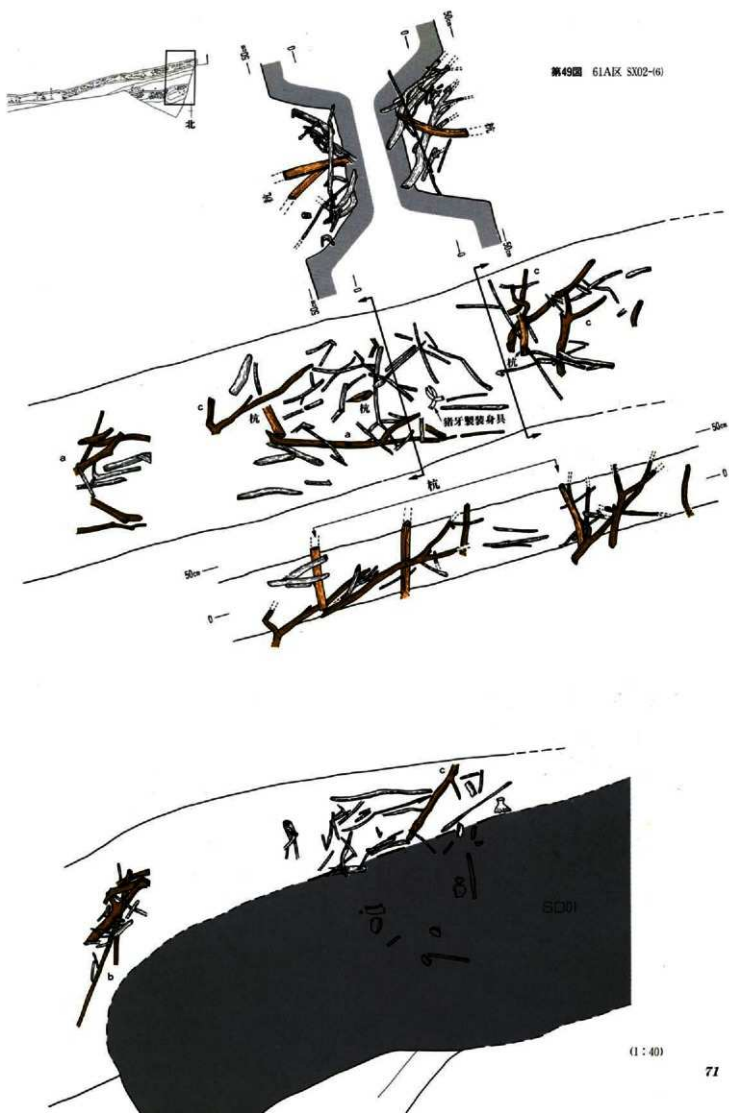
※日が倒れ込んでいる



縦芽直納

※日・ロが散乱

(1:40)



めている程度である。

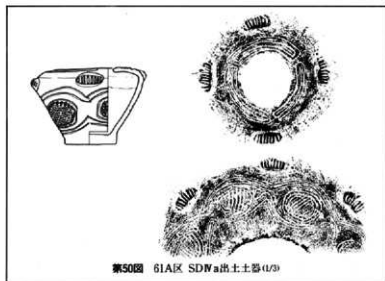
SX01に切られているSD02は、埋土に筒状をなす砂の堆積があり水流のあったことが窺える。可能性としては谷A北縁を東に延びて63D区のSD05と連続するものと考えるが、確証はない。

F. 貝 層

貝層は河道によって削られ

た部分をのぞいた谷A内に広く分布する。II期貝層はS D IV a内の他、調査区西部で検出した集石の周辺で約20平方メートル、調査区東部S D W aの北で河道を挟んで分布し本来さらに広がっていたことが推定される。厚さは最大40cm程度はあったであろう。IIIa期貝層は砂混じりの破砕貝層が河道両端にそって分布する。一次堆積層は不明である。IIIb期貝層（一部IV期を含む）は調査区南東コーナーの微高地斜面上で最大層厚40cmで45平方メートルの範囲に分布する。

IIIb期貝層の下部にある弥生時代基底面やSX03周辺の標高120cm等高線からS D IIIの間では、南北方向に走る細長い溝を含んだアバタ状部分の集中がみられた。IIIa期砂層の分布ともほぼ一致することか



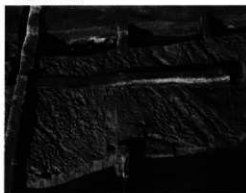
◀ 61A区南東部上面

▶ 同左全景



◀ 同上区掘削り下げ後

▼ 侵食面の状態

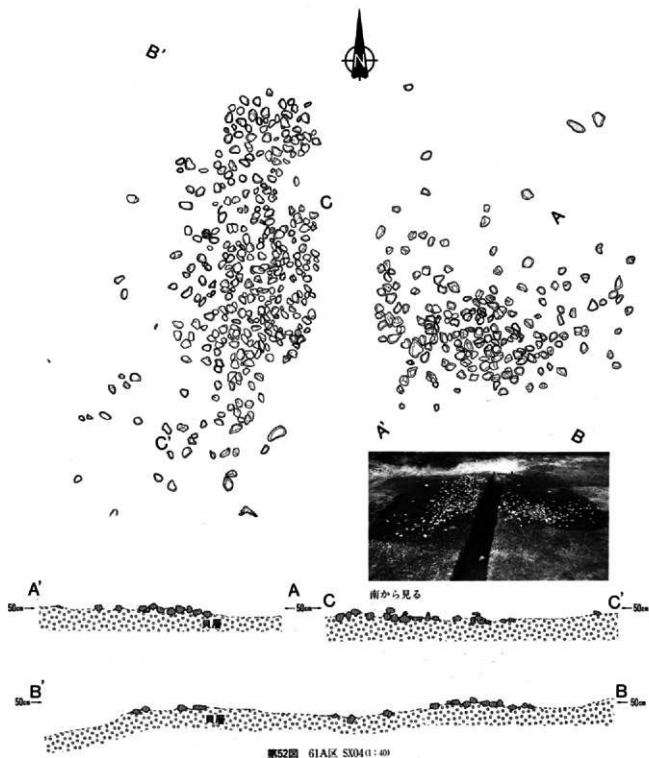


第51図 61A区 貝層セクションとベース面

らおそらく流水によるものであり、谷A内の水位上昇による侵食によって形成されたものと考えられる。

G. 集石

II期貝層の上部で径5-10cmの河原石の集石があった。

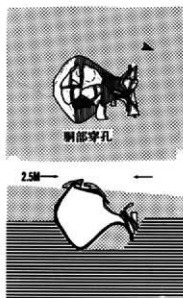


第52図 61A区 SX04(1:40)

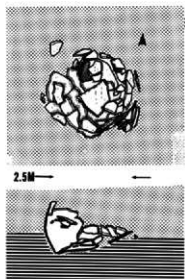
10. 61C区 図版28・30・31・33

上面遺構群

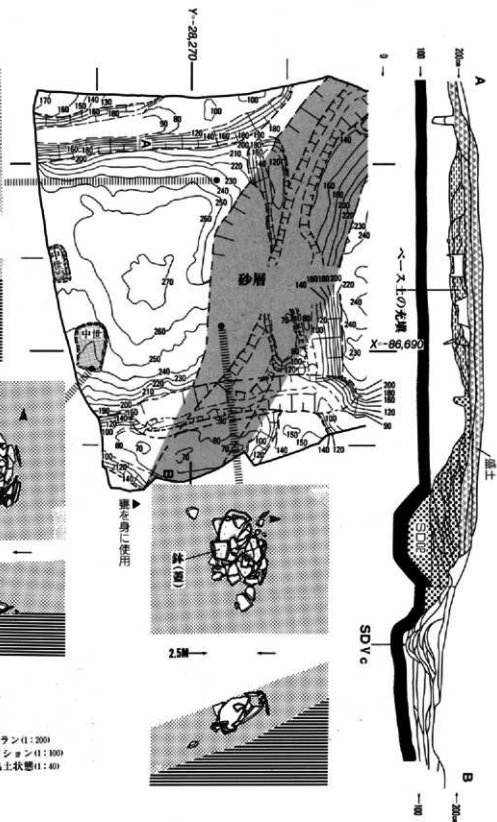
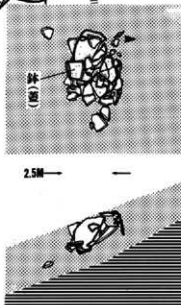
A. 方形周溝墓



▶知多・三河系物を使用

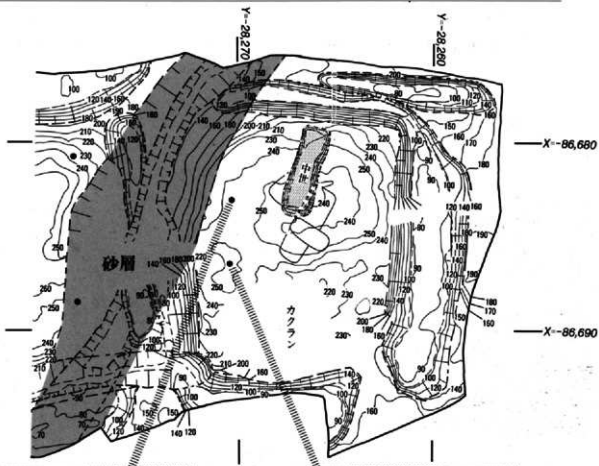


▼壁を身に使用



第53図 61C区 SZ115プラン(1:200)
土層セクション(1:100)
土器出土状態(1:40)

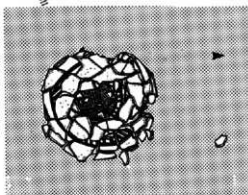
SZ115は西周溝が60B区にかかりはつきりしないけれども、少なくとも2ヶ所の陸橋部を有する。
 墳丘下で検出したSD02はⅣ期で、時期・位置・土層セクション（ベース土の流入がある）から判断して、



▶身は凹線紋系受口状口縁部(網
 部穿孔)を使用
 □蓋は知多・三河系蓋を使用



▶身は凹線紋系蓋を使用
 蓋は知多・三河系蓋を使用



第54図 61CX SZ118プラン(1:200)・土層セクション(1:100)
 土器出土状態(1:40)

SZ115構築以前の方形周溝墓の存在を示唆する。つまり拡張(改修)を示すものと考えられる。SZ115東周溝では下部から貝田町式式の供献壺を検出しており、60B区方形周溝墓と近接した時期であることが窺える。墳丘はSDⅧ上部の砂層で大きく削られている。土器棺3基を検出、壺棺2基(身を横位にして胴部穿孔、口・胴部とも蓋をしたもの1、知多・三河系壺を正立にしたもの1)、甕棺1基(四線紋系甕でおそらく鉢を蓋としている)である。土器棺以外の主体部は墳丘内に認められるベース土の集中する部分に存在すると推測され、プランおよび土層セクションでも複数存在することが窺われた。検出時で溝底と墳丘頂部との比高約2.1mを測るが、土器棺の出土状態からみて本来はそれ以上あったものと推測する。

SZ118西周溝とSZ115東周溝は切り合い関係にあり、SZ118が新しい。南東・北西2ヵ所に陸橋部を有するA2a形である。南西陸橋部付近はすでに調査され、『報告書』には南周溝東端から出土した供献土器が掲載されている。それに対し東周溝では上部から多量の土器と炭化物が出土し、通常の生活廃棄と考えられる。供献土器はすべて四線紋系である。墳丘は上部がやや削られているもの、溝底との比高約1.8mを測る。土器棺は2基検出され、2基とも壺(身を四線紋系壺を横位にして胴部穿孔、口・胴部とも蓋をし口蓋は知多・三河系壺片を使用しているもの1、正立で身を四線紋系壺、蓋は知多・三河系壺片を使用しているもの1)である。土器棺以外の主体部としては、ベース土の集中する墳丘中央の辺りで検出された切り合う複数の土坑があり、一部は人骨片?を伴っていた。

SZ117は南周溝を検出した。口縁部に打ち欠きのある四線紋系細頸壺が出土した。

下道遺構群

方形周溝墓下には居住域に関わる遺構群が展開する。包含層は下部では黒色を呈し、かなり有機分が多い。そして注意されたのは60A区・60E区で検出されたボロボロと粒状になってしまりのない茶褐色の層位である。これには炭化物・灰が含まれ被熱が窺われた。

A. 竪穴住居

SB01は円形プランで周溝は2条ある。II期。他はいずれも部分的で不明確である。

B. 掘立柱建物

SA01はおそらくII期。

C. 小穴列(垣)

SH01は、切り合ったり接近する2つの小穴が単独の小穴をまじえて線状に並んでいる。埋土はベース土ブロックである。切り合ったり接近することは造り替えを示すのであろう。SDⅣaと平行するが同時存在かどうかは不明である。II期。

D. 溝

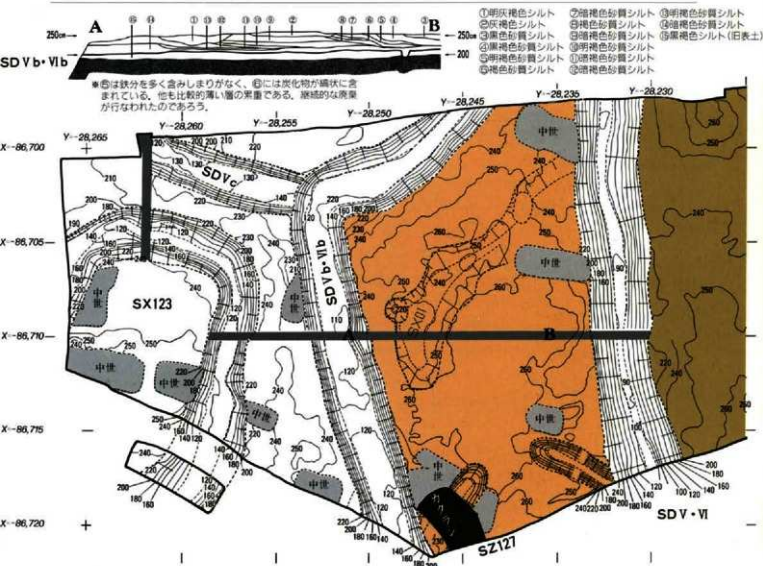
SD01はII期に属す。

11. 61D区 図版31・38・39・40

A. 溝と区画

61D区ではV期に掘削された溝SDV・Vb・Vc、それを改修したSDVI・VIb、やや時的に下がって新たに掘削された区を検出した。SDIXからはVI期の土器群が埋土中位からまとも出土したので、VI期に埋没を始めていることは明かである。そしてSDIXがV期のSZ126の墳丘を避けている事実、その下層で検出したSB12もV期であることから判断すると、時的に下がるものであることはまちがいない。いちおうSDIX最下層からはV期でも最も新しい段階の高杯が出土している。つまり、その掘削時期はV期からVI期へ移行する時期に限定できよう。おそらく、他のSDVI・VIbも同様の時期を想定できるだろう。

SDVcは最初SDVと接続していたが、V期末の改修に際し接続部に排土が盛られて分離される。



第55図 61D区 溝と区画(1:200・土層セクション(1:100)

61C区でSZ115南の墳丘部を一部削って終息するが、SDVⅧとの交差部分は明確ではない。SZ115南の墳丘部再掘削部分自体も確実にSDVcからの延長とは言えず独立した溝である可能性もある一方、時期的にSDVcとSDVⅧに近いこともあって接続していた可能性も否定できない。

これらの溝は断面形が逆台形、U字形、V字形など地点で異なり一定ではない。調査区中央東西ラインでの計測によれば、SDVbは逆台形で、幅約3.7m、深さ約1.4m、SDVは断面U字形、幅約3m、深さ約1.3mと規模はそれほどでもない。SDIXも同様の規模である。しかし、この点は遺構面の削平という問題もあり、本来の規模よりは幾分低い数値であることに注意しなければならない。

SDV・VI、SDVb・VIbで囲まれた部分は調査区内において区画を形成するが、これが閉じるかあるいは帯状に伸びて行くかどうかはなお確定する資料に欠ける。この区画は、内部から明確な遺構は検出されなかった。SX01は溝と言うよりは不定形な落込みであり、この部分のみ灰色粘土が堆積していた。この区画は頂部で標高260cmを測るけれども、層位は弥生時代中期包含層で、弥生時代後期包含層や溝掘削に際しての盛土は確認されなかった。ベース土を含む盛土が確認されたのはSZ127の墳丘に関係する部分に限定されていた。おそらく本来はかなり高度を有する区画ではなかったかと推測する。

B. 方形周溝墓

調査区西辺で検出した方形周溝墓は2基が重複していた。SZ122は一辺7mでわずかにゆがんだ方形を呈し、少なくとも2ヶ所の陸橋部を有している。南周溝上部にはベース土が流入しており、SZ123築造時に埋め立てられたものと推測する。供献土器の出土はない。

SZ123は南北約15mで、SZ122を南北に2倍した規模となっている。南東に陸橋部を有する。供献土器はV期でも初期の特徴を有する。したがって、SZ122はIV期末からV期初頭ということになる。

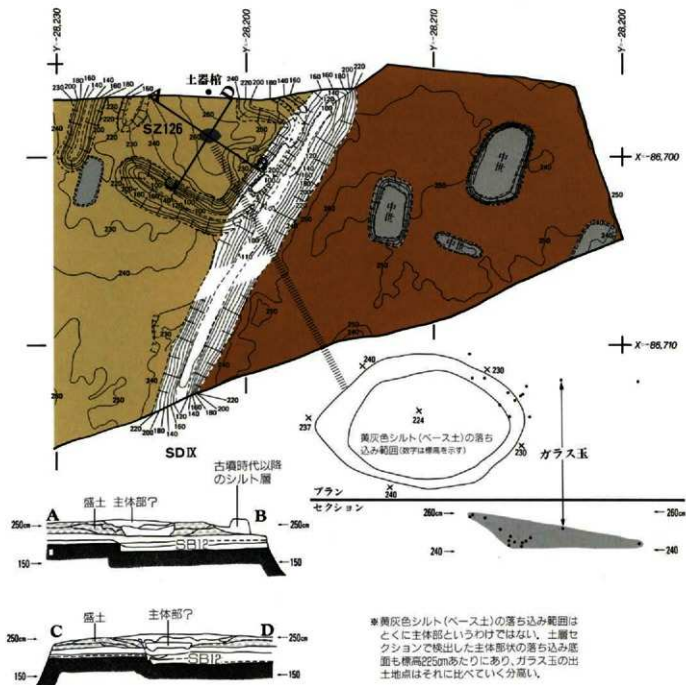
SZ126は県教育委員会調査区とまたがっており、当初から存在はわかっていて、ただ、包含層上面の精査段階ではSDV寄りにも包含層の高まりが1ヶ所あり、方形周溝墓が2基並んでいるのではないかと推測した。それで試掘溝を調査区北壁沿いに設定したけれども、西側の高まりには囲む溝が検出されず、方形周溝墓とは認定しなかった。

SZ126は西に陸橋部を有するA1形である。主体部はベース土中に落込みが検出されたものの構造ははっきりしない。しかし、この落ち込みより東では、ガラス玉が東西2.2m、南北45cm、高低差17cmの範囲（主体部？）で13点出土し、水洗選別で検出したものを含めて総数80点を数えた。また東周溝最下部からは、1.7m×0.7m、深さ約30cmを測るベース土の詰まった土坑SK59が検出された。埋葬施設であるかどうかは不明である。

SZ127は当初土塁状部分の基底ではないかと考えていた。しかし、周溝および供献土器を検出したので方形周溝墓と認定した。

C. 竪穴住居と包含層

IV期以前の包含層 II期包含層は以後の遺構が存在する部分を除きほぼ全体で検出された。特にSD



第56図 61D区 SZ126プラン(口:200・上層セクション 口:100)・ガラス玉出土分布(口:20)

V・VI、SDVb・VIbで囲まれた区画では、弥生時代包含層の確認面からII期の土器が多量に出た。それらについては溝との関係で盛土かとも考えたが、当然存在すべきベース上ブロックからなる層位が認められないこと、炭化物が帯状をなして多量に含まれている褐色砂質シルトや鉄分を多量に含む粘着質の褐色シルトがブロック状をなさないで成層的に堆積していること、下部はこれも粘着質で有機分の多い暗褐色シルト（遺跡形成前の表土）、そして漸移層、通常のベースである黄灰色シルトへと層位変化していることからみて、遺構構築にともなう擾乱をそれほど受けていない安定した包含層が形成されていることが窺われた。

自然状態での弥生時代ベース面(III表土)である暗褐色シルト層は、61D区において上面標高220cmを測るが、散在する遺構や上部に堆積している炭化物や遺物を含む暗褐色砂質シルトの存在からすでに

幾分か削られていることが推測できる。

いずれにしても、この区画内での遺構形成頻度が低いことは遺構の配置でも明かであり、上部の堆積層は付近の堅土住居構築に際しての排土や廃棄物の累積した結果であるとしてもⅢa期を下るものではない。そして、注目しておきたいのは、ここで検出されたような粘着質の層位が貝層を伴うⅡ期の居住域では普通と見てよい頻度で観察されることである。県教育委員会の調査でもそうであったし、すでに述べた60B区、60E区、61C区、後述する61P区・63N区でもそうである。なにか、Ⅲ期以降とは異なる共通した活動が行われているのではなからうか。その結果としての堆積層の形成と考える。

Ⅲ期包含層やⅣ期包含層は遺構埋土としての検出にとどまる。SB04周辺では黒色砂質シルトとともに土器が多量に出土した。部分的に限定された包含層である。

Ⅱ期堅穴住居 SB06はやや台形気味の隅円方形プランを呈し、拡張の形跡がある。対面するSB08との直接的な前後関係は確認できていないが、規模から切り合い関係を復元するとSB06の方が新しい可能性がある。

SB05は不整円形プラン、SB08は円形プランで拡張が行われている。

SB22は2.7m×2.2mという小規模な堅穴で床面から炉は検出されていない。

Ⅲa期堅穴住居 SB03は周溝がやや錯綜する観がある。溝を挟んで対面する住居は、南半部東西は弧状をなして円形プランを窺わしめる周溝を含むものの、北半部はすべて隅円方形プランをなしているの、明確には確認できなかったが、円形プランと隅円方形プランの住居が重複しているであろう。

SB07はSB03に切られており、Ⅲa期でも古い。

SB15はSB14を切る。隅円方形プランである。

Ⅳ期 SB11は床面直上に土器が遺存していた。

SB04周辺は周溝の錯綜が激しいので、プランの特定は難しい。少なくとも2棟は存在する。

Ⅴ期以降の包含層 S D V・VI以降にはほぼ限定される。S D V・VIのすぐ東側では包含層中からⅤ期の土器がまとまって出土した。特に遺構があるわけでもなく、S D VI掘削に際して埋没土とともにあった土器群が盛り上げられたものと考えられる。Ⅵ期以降の土器は溝内で検出されたものがほとんどであり、包含層上面にはS字状口縁罫やⅦ期の土器が散見される程度で、全体にⅥ期以降の包含層が希薄であるとの印象は免れない。遺構の密度に大きく関わるのであろう。



■57図 SK17(西4)

Ⅴ期 SB19は拡張があり、a・b・c 3条の周溝がめぐる。

SB12はS Z 1 2 6 墳丘下で検出した。長軸約8m、短軸6mを測る。床面直上には土器が遺存していた。

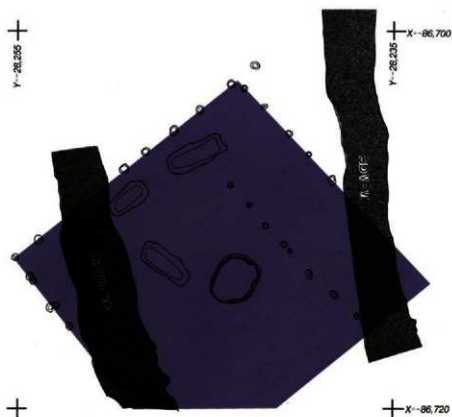
D. 掘立柱建物

SA01は1×2間としたが、周辺の柱穴群の存在からみても少し大きな建物である可能性がある。あるいは周辺に複数棟存在するかも知れない。SA02についても同様である。Ⅱ期かⅢ期。

E. 小穴列 (垣)

SH01はベース土ブロックを埋土とする小穴が直線的に並び、時期もII期に限定できる。それに対し、SH02以下はこれら小穴が方形区画をなすという想定のもとに直交する小穴列を抽出したものである。SH01はすでに『昭和61年度 年報』でも報告したように「垣」である可能性が高い。

この小穴列の軸線を念頭において土坑の軸線との関係を検討すると、SK16・17が同様の軸線を有していることに気が付く。そして、同時期で重複しない住居はSB22のみである。先の土坑はII期でも前半期の特徴を示す土器(多※沈線紋)が出土しており、この区域の遺構群のうち重複しないものに相互関係を認めるならば、この区域の特殊性が浮かび上がってくる*。



■58回 61D区 垣プラン(1:200)

*小穴列が区画を形成するかどうかは、そもそも柱穴の時期決定が困難な状況では「言及すること自体問題外」とも言えるためにむづかしい。しかし、幸い61D区では当該区域において前期以降の遺構分布が希薄であり、包含層の堆積状況等からみて少なくともSH01・SH02という直交する小穴列の存在は確実である。そして、L字形を構成するのであれば、それが方形の区画を形成する可能性も一段と高いものになると考えたのだが、厳密にはあと一歩及ばないと言わざるを得ない。

12. 61E区 図版17~22

旧調査区では61E区・61G区・61I区北半部に相当する。地形的には北微高地(居住域縁道:標高250cm)から谷A北斜面(河道:底面標高マイナス60cm)にまたがる。この地区で注目されるのは谷Aに面して標高100cm付近でⅢb期の住居床面が検出されたことである。掘形を想定しても堆積状況から地表面標高がそれほど高いとは思えないが、Ⅲb期には十分居住可能であったのであろう。

A. 溝

Ⅲb期以前 SD01はⅡ期掘削で、幅約6m、深さ1.5mを測る。埋土は大別して、貝を含む上層と含まない下層(灰褐色砂質シルト)とに分かれる。貝層は、下部はⅡ期からⅢa期初頭、上部はⅢb期からⅣ期までの幅がある。

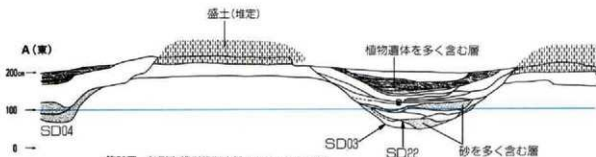
SD02~04はⅢb期。調査区北半部では平行し、それぞれⅤ期以降のSD21~23と重複する。幅約5m、深さ約1.5mを計測するが、溝間の盛土を考慮するなら、実際は深さ2m以上あるものと推測する。埋土は最下部にベース土を主とした薄い層(砂質シルト層との交互堆積をなす場合が多いが所によっては細粒砂が15cmほど堆積する)があり、中位は植物遺体を含む黒褐色砂質シルト、上位は色調の明度を増しながら黄灰色砂質シルトが堆積する。

SD04は、a:SD06接続部以北、b:SD08接続部以南、c:その間、の3ヶ所で様相が異なる。

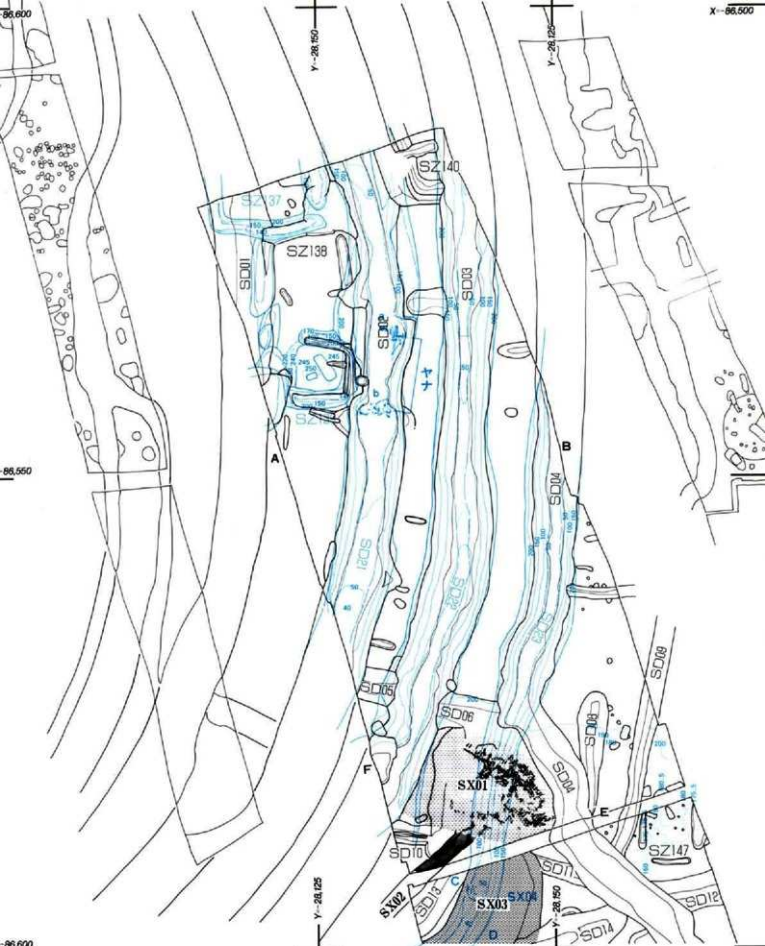
aはSD23が重複し埋土は完全に残っていない。SD06との接続部は溝底が立ち上がり終息するような状況を示し、SD06底面とは段差を形成している。cはSX01の堀に沿うように走る。SX01盛土部分の堀ははっきりしないが、基礎の杭群・横木の並びと平行しているの特に変形しているとも言えない。cはSD08付近で折れて南北方向の溝となる。cの北半部と南半部は異なる性格か、あるいは掘削時期の異なる部分が合成しているように見える。bはcとの境がちょうどSD08との接続部でaの南端と同様に不自然である。bは新旧2条が重複している可能性がある。SD04-2はⅣ期で、植物遺体を含む黒褐色砂質シルトが下部に、上部には灰黄色細粒砂が厚く(70cm)堆積していた。SD04-1は埋土がベース土ブロックからなる。

SD05・06はSD03に分割された同一の溝である可能性が高い。SD07・08・09は出土土器の時期がⅡ期からⅢa期と古いが、SD09埋土上部にはSD04と同じ灰黄色細粒砂が堆積しそれほど両者に時期差があるとは思えない。SD10・11も時期を確定できないとはいえ、全体の配置からいって全く異なる時期の遺構とは考えられない。多少の時間的な変化を含みながらも、一連の遺構群と考えられる。

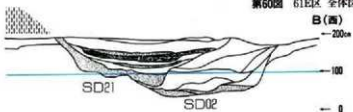
SD12はⅡ期。SD13はⅡ期の土器が出土しているけれども風化しており、位置的にも他との接続がく浮いてしまう。SX02との関係で言えば、61A区におけるSX02と下層にある溝との関係に近い。



第59図 61E区 溝群横断土層セクション(1:100)



第60图 61E区 全体图(1:400)



B(西)
200
100
0



C
100
130
D
130

第61图 SD23 枕列側面图(1:40)

SD14はII期～IIIa期(盛古)。SD05の東西には深い土坑状の落ち込みがある。底面レベルは調査区西壁際では標高0 m、東はマイナス50cmまで達する。

SD16はIIIb期。三叉状に分かれている。南西に延びる部分は地表の傾斜方向に一致しており、底面標高では北西から南西という傾斜になる。SD15への接続があるのかもしれない。

SD17はIIIb期には埋没しており、II期まで遡る可能性もある。SD15付近で底面標高93cm、南端で60cmを測り、比高約30cm。おそらくSD20-1につながるのであろう。

SD18はIIIb期の住居床面が上に形成されており、それ以前には埋没している。II期まで遡る可能性あり。北西端で標高約100cm、南端で標高38cmを測り、比高約40cm。末端は不明だがSD20-1につながるのであろう。

SD20は上層(SD20-2)と下層(SD20-1)に分かれ、1はII期で幅約3.5m、深さ約1.3m、2は幅約4 m、深さ約0.7mを測り、IIIa期～IV期の土器が出土している。西端は河道で切られて不明である。終息する可能性が高い。

IV期以降 SD19はSD20-2と位置的にも時期的にも併行している。

SD21はV期掘削で下部には流木を含む砂層が堆積し、上層は、植物遺体を多く含むシルト層(VI期以降)が堆積している。ヤナは下部の砂層が示す水流の存在した時期に対応すると考える。

SD22はV期掘削で、下部に砂層が堆積し、上部は植物遺体を含むシルトの堆積である。

SD23は他とは異なり一部の区域でV期以降再度の掘削が行われている。SD23-2はSD23-1が完全に埋没しない段階で中央の窪地部分を幅1.5m、深さ数10cmの断面逆台形に掘り下げている。埋土は暗褐色砂質シルトで砂層は含まない。南部の調査区西壁付近では直交して枕列(SX04)が検出された。北約1 mにも枕が2本60cmの間隔で溝方向に打ち込まれていた。性格は不明である。

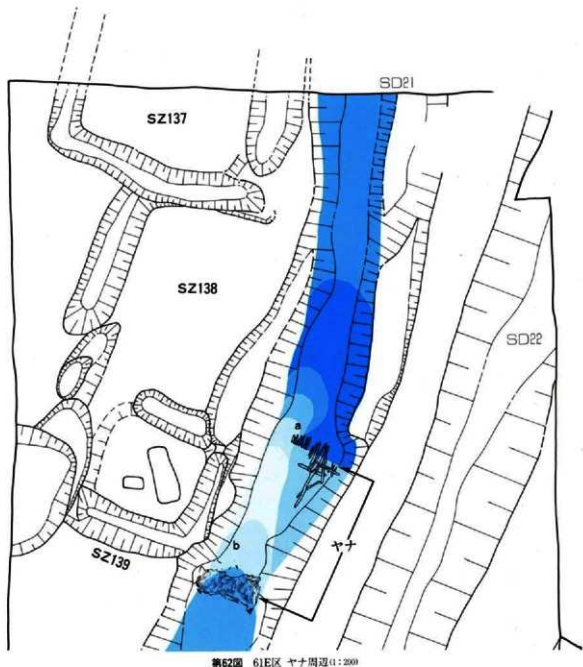
SD21・22下部に水流が認められることは両溝とも末端が開放していることを示している。つまり、谷Aの河道に接続していると考えられるわけであり、その点はSD23-1も同様である。しかし、それがSD23-2になって水流が観察されなくなるということは、再掘削された溝の末端が閉じられた可能性がある。

B. ヤナ

SD21で検出した。北にある竇：aと南の竇：bからなり、この間の清西斜面には標高110～120cm程度の高さにテラスがある。本来枕列の倒壊を防ぐ役割をもつ横木を支える又木もすでに根元が浮いており本来の状態になく、枕列も南に傾いていた。

aは枕列・横木・又木・網代からなる。枕列は溝に直交して打ち込まれた枕16本からなり、西は岸まで達せず1 mほど開いているのに対し、東は溝壁がL字に折れて広がる部分にまで達している。全体に東へ寄っている感じである。それを下流側から横木と又木が支えている。枕は直径8 cmのものが多く、それぞれ10～15cmの間隔で打ち込まれている。16本ある枕は西側部分が短くなっており横木もその部分にはない。

網代は枕列の北側に枕に貼りついて検出された。幅5 mmほどの薄く割いた材を6条一単位として、2本超え、2本潜り、1本返りで編んでいる。南からも出土したが破損して流れたものであろう。これら網代はいくつかの断片に分かれていたが、本来は枕列の北側全体に貼りつけられていたのであ



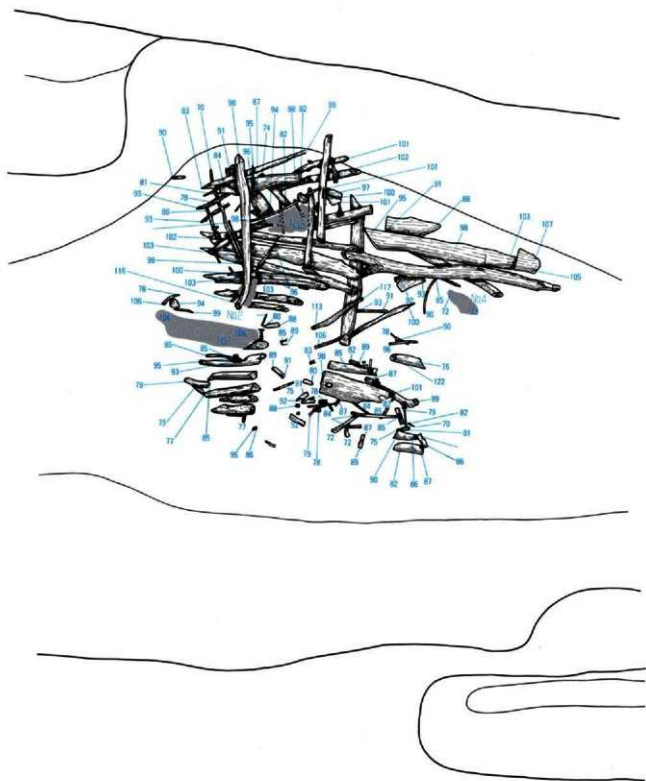
第62図 61E区 ヤナ周辺(1:200)

う。

bは上面がほぼ平坦になっており、これも本来の状態にはない。上面からみると植物の葉が集まっているだけという感じであるが、これをウレタンで固めて取り上げたので下面を観察することができた。次のようになる**。

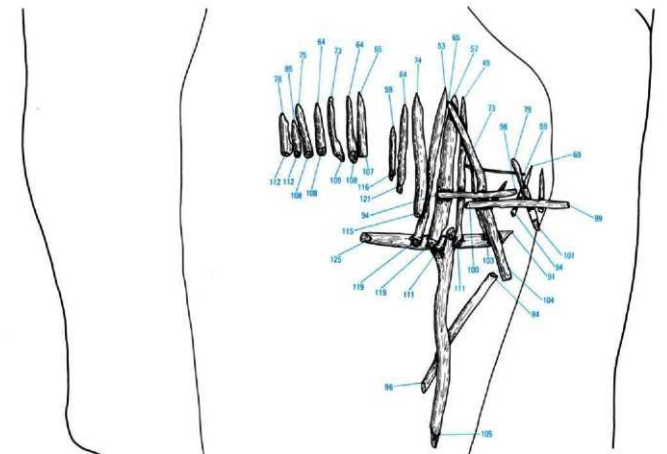
水流と直角に幅2mの間隔で2列の杭列が作られ、その両脇に転用材の横枠が取り付けられる。上に載せる簀は予め作ったものを木枠に固定した可能性がある。簀は溝の方向に対して直角、平行、直角の三重にヨシが重ねられて作られている。北側の下部は一重になっている。

三重の重い簀全体を支えているのが6組の割材の束である。これが簀の裏側に溝の方向とは直交して東西に6ヶ所渡されている。それぞれの束は欠損しているものもあるが、4本から6本の材をねじりあわせて束ねている。一組を構成する割材は幅が約1.5cmで、各所に竹、笹類独特の節が見られる。節は二環状になっている。この束は10-16cmの間隔で渡され、いくつかまん中で交差しているようであるが詳細はわからない。割材の束は、簀に直径2mmほどの蔓によって編み込まれて固定されている。

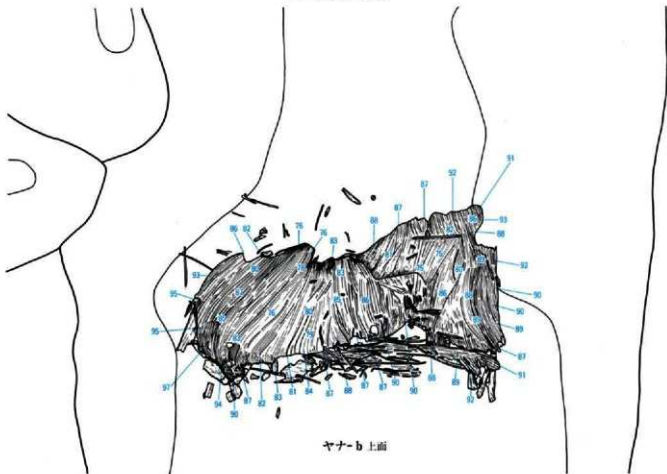


第63図 ヤナーaプラン(1:40)
 *数字は樁高を示す。スクリーン・トーン部分は織物。

時期は、SD21の掘削時期がほぼV期後半であること、杭の上端はVI期堆積層まで達していないようなので、V期後半からVI期までの間におかれる。

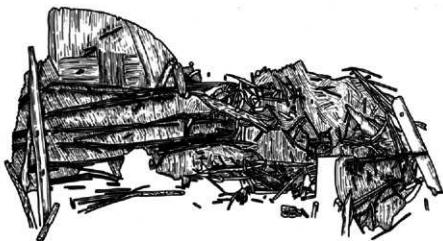


ヤナ-a 木組み本体



ヤナ-b 上面

第64図 ヤナープラン(1:40)



第65図 ヤナb下面(1:80)

C. 特殊遺構

台状遺構の基礎構造*** SD04がSD05・06と合流する部分の南に、杭・横木・植物（編物を含む）を組み合わせた構築物SX01が存在する。

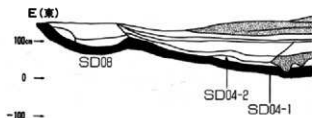
杭は径5～10cmの丸木で、径16～20cmのこれも丸木を横において杭とかませるようにして内側に向かって傾斜して打ち込まれている。杭の上端標高は70～100cmの範囲にある。横木は低いものは標高40～50cm、高いものは標高60cmあたりにある。

編物は2ヶ所で検出された。植物の茎を並べた「経」条「緯」条が1本潜り、1本超え、1本返りで編んでいる。編物以外の部分は植物茎を並べただけのようである。いずれも杭が打ち込まれており、杭よりさきに敷かれたものであることがわかる。この他に編まれていない植物の茎が面的にいくつかの箇所で見出された。標高も40～60cmの範囲でまちまちであり、おそらく杭・横木ともども複数の面（整地面）に分かれることを示すのであろう。

SX01は下部に底面標高マイナス65cmを測るスリバチ状の落ち込みがある。打ち込まれた杭先はそこまで達していない。これは全体がベース土を主とした層に埋められているが、それにとどまらずさらに盛り上げられている。上部では編物を敷き、横木を置き、土をかぶせて杭を打ち込むことによって高まりが形成されている。こうした組み合わせは築堤に見られる工法と共通する。



第66図 SX03(南から)





第67図 61EIX SX01(台状遺構基礎部分)プラン(1:80)

※スクリーン・トーン部分は編物



第68図 61EIX SX01(台状遺構基礎部分)土層セクション(1:100)

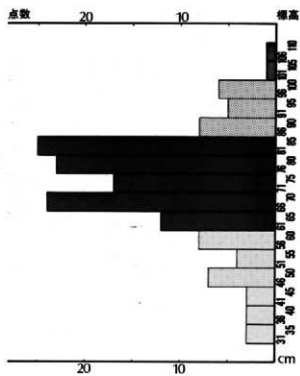
SD03?

Y=20.025

第69図 61E区 SX01(台状遺構基礎部分)(1:40)

※スクリーン・トーン部分は編物

第2表 杭頭部標高度数分布



SX02

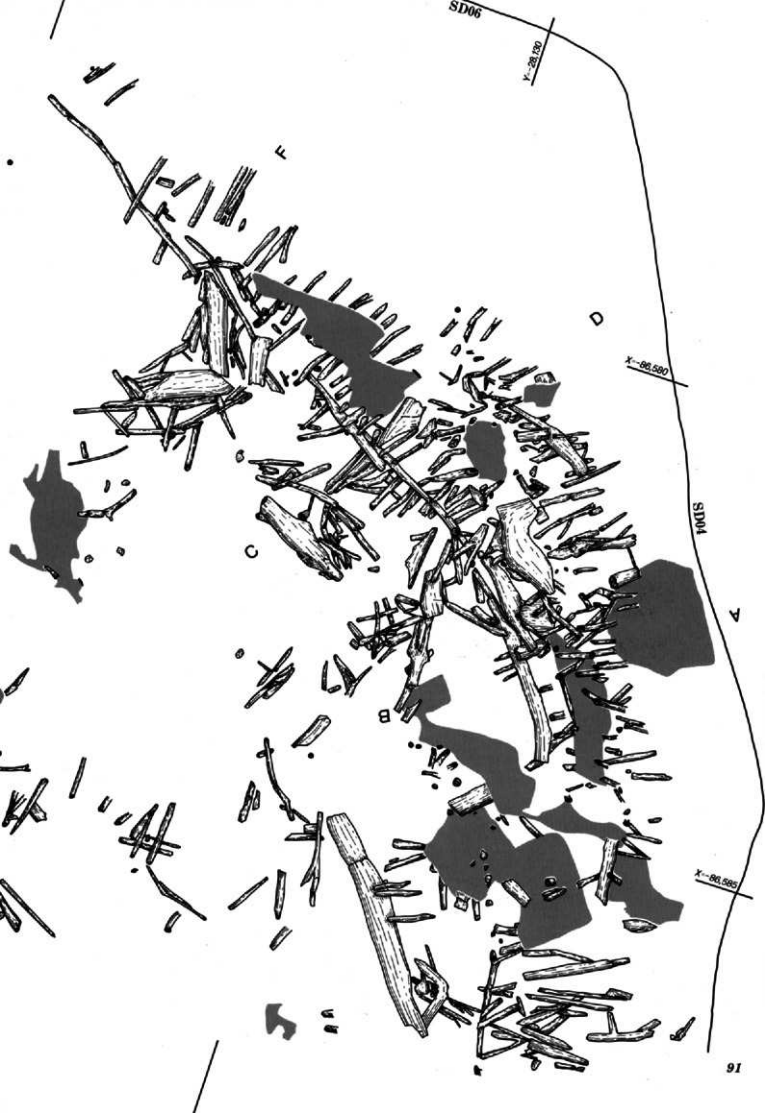
SD06

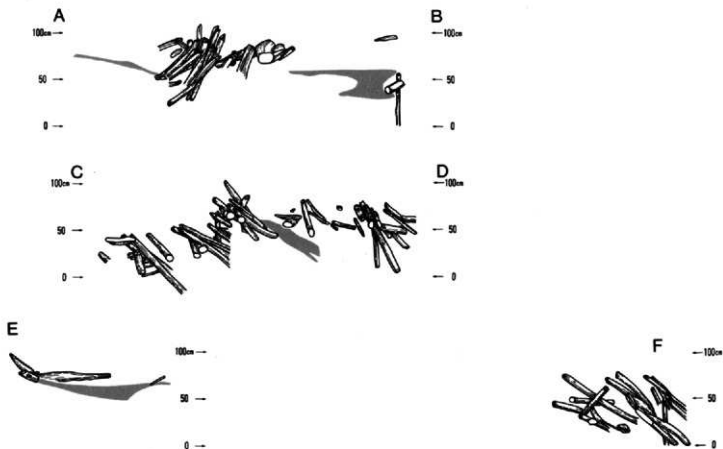
X-28,130

X-66,580

SD04

X-66,580





第70図 61E区 SX01(台状遺構基礎部分)側面図(1:40)

SX01の時期は、SD04・2より先行すること、SD04・05・06相互の位置関係からⅢb期と推測する。

その他 SX02は溝状をなすが、内部からは61A区で検出したSX02と同様の枝を張った木が出土した。分類ではcに相当する。SX01との接続部は明確ではなかったが、木組の辺りで終息していることはまちがいない。同時期で一連の遺構である可能性が高い。

SX03は不定形の窪地をなしている。南部ではSD14を切る。底面標高は一定でなく標高30～100cmまで起伏がある。埋土は大きく3層にわかれる。

上層はベース土の堆積でⅣ期～Ⅴ期の土器が含まれており、おそらくSD23掘削に際しての排土が盛られているのであろう。

中層以下はⅢb期～Ⅳ期の土器が出土している。中層は植物遺体を含む黒褐色砂質シルトである。

下層は下部にはベース土(青灰色シルト)を多く含む層が、上部は貝を含む黒褐色砂質シルトが堆積している。SD01南部のSD14に近接した位置で、下層に対応する層位から長軸約1.7m、短軸約1mの大きさの植物茎を束ねたものが標高50～70cmの高低差で出土した。また北部では流木や木製品が出土している。

D. 竪穴住居

竪穴住居は北部の溝が平行する区域では全く検出されなかった。この区域では旧表土がそのまま残存しており、全体的に遺構構築傾度の低いことが注目された。

SD18と重複するものはⅢb期以降である。SD18埋土を床面としている。SB12・13は軸線を共有してい

ないので建て替えてあろう。

SB03はおそらくⅢb期で、床面には炭化した植物（動物か？）が遺存していた。SB07・08は重複関係にある。Ⅱ期からⅢa期（初頭）であろう。

E. 掘立柱建物

SD17・18・20に開まれた区域には柱穴状の小穴が多数存在する。いちおう4棟復元したけれども、小穴が総て建物に関係するのならさらに多く存在することになる。また、SA01周辺のように小穴の配列が円形をなすものもあり、掘立柱建物ではなく「囲い」が存在した可能性もある。

これら小穴群の時期はⅡ期かⅢb期のどちらかである。

F. 方形周溝墓

SZ137はⅤ期。南周溝はSZ138を切る。SZ138はⅣ期。SZ139はⅤ期。墳丘からは木棺の可能性は明かでないものの、主体部の可能性が高い土坑2基が検出されている。

*図版21で見るようにSD02～SD13の配置はランダムではない。SX01も含めて相互に規制しあっているような位置関係にある。しかし、溝については掘削時期、そして「…が同時並行である」というようなことを指摘することは難しいのだけれども、いくつかの可能性をここであえて指摘しておくたい。

① SD02・03はほぼ並行して掘削されており、同時期と考えてよい。おそらくⅢb期である。SD03埋土はSD21の再掘削によって上部は遺存していないが、下部にはベース上の再堆積が観察されており、一部重複する同じくベース上の擾乱土を埋土とするSZ27の存在も合わせて、ある時期に埋め立てられた可能性が指摘できる。SD02・03についてはこの区域でⅢb期最初期の結核施設である可能性がある。

② SD04aとSD13はSX01を挟んで南北にある。SD4aの底面がSX01北でSD06と段差を形成することは、SX01に先行してSD04aとSD13が一連の溝として掘削されていたことを否定するので、これら三者は同時期であると考えられる。並行するSD02・03も同時期の溝と考えられる。SD05・06は溝底面標高がSD02～04に比べて浅いが、これにSD10・11が並行すること、これらと直角の位置にあるSD09とSD04aが形成するクランクは幅が同じであることから、SD02・03のSD05・06安差部分以南がある時期終息していた。つまりクランクが形成されていた時点で内部は平坦であった可能性が高いのである。そして、SD07はこのクランクを閉じる位置にある。

このクランクを前提すると、SX01は台状遺構の存在を示唆するので、クランクの内部空間がSX01によって分割されることになる。つまり、このクランクは〈岡部集落〉内部と外部とをつなぐ外部に設けられた「回廊」ということになり、SX01はこの「回廊」の閉閉に関わる「ゲート」のようなものであった可能性が考えられるのである。

③ SX02はSD13と切り合いがあり同時期ではない。SD04cはSD09・11と切り合いがあり、これも同時期ではない。そしてSD04cは2重が重複してるとはいえ、SD04-1のSD11以北での存在は不明瞭である。問題はSD4bが最初から掘削されていたかどうかである。SD08付近と以北では折れて方向が異なるので、もともとこの部分は切れて閉口しており、それがある時期に接続された可能性がある。すなわち、まず継続するSX01に接続していたSD13の後継としてSX02がある。そして、SD04b南部分がSD04-1として存在したとすればSX01の外部への前面を両すとともに、北東はSD04aとの間が切れて閉口部をなし、また南東のSX03とSD04cの間も閉口部として存在した可能性がある。この状況では、この部分でSD03が南北に貫通していたとしても特に問題はない。閉口部が他の区域にずれて設けられればよい。

***「ヤナ」の記載に関しては、特に田中楨子氏の観察結果を引用した。

***本遺構については、調査当時全くその性格を把握するには至らなかった。岡山県津野寺跡の築堤工法との対比で、これが土木工法に関わるものであることは最近了解できるにいたったが、なおその構築物としての性格は十分検討できていない。

ところで、SX01は密集した枕群を伴っており、この点に関わって61A区、60B区などで検出したSX1との位置関係の類似性をどのように判断するのかという問題が当然生じる。けれども、SX1はすべて南側に傾いて打ち込まれており、それをこの区域まで延長するならば東向きに打ち込まれていなければならないことになるが、上述のSX01では横木を絡めながら西側に傾いて打ち込まれており、連続性は窺えない。

13. 61H区 図版49～58

旧調査区では61H・61I(谷A)・61J・61K・61L・61Xの各区を包括する。ただし、説明の都合上SDX・XI以北を北区、以南を南区とし、さらに南区は1と2に区分する。

上面遺構群

A. 溝・突出部・包含層

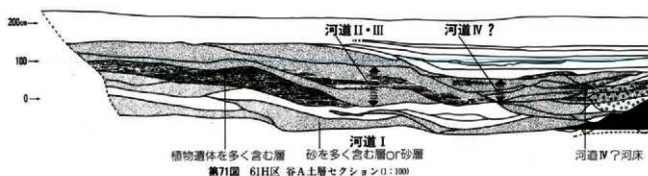
北地区 谷A南岸の状況は、SDV・VI以北は溝に隣接する狭い平坦部を除いて基本的に斜面であり、そこにSK13・SX01・SX02のような落ち込みが存在する。このうち、SX01は2ヵ所の湾入部(SX01a, SX01b)があり、SX01b南では比高1m以上の急傾斜の崖面を形成している。SDV・VI外縁の平坦面からの比高約160cmである。

SK13はSDV・VI東端から北東方向に約1.3m離れて位置している土坑である。そしてこれに重複してSX01が存在する。

SX02は略方形の落ち込みである。下部のベース面では一部に掘削による面が形成されており、完全な自然地形ではなく人工的に整えられているようである。そしてここに堆積した層位の状況が上層にまで影響を及ぼして窪地状をなしたとも考えられるが、土層セクションによれば上層堆積層と下部堆積層界面も不整合なのでさらにまた人為的に掘削された可能性がある。最初の掘削はIII期以前、上部はIV期かV期でも早い時期であろう。

SDVIIは谷A南岸(南嶺高地北縁)を円弧をなして走る。検出時の規模は幅約2m、深さ約1.5mでたいした大きさではない。注目されるのはSX01bの南に位置するあたりで、推定される溝の円弧から約4mほど北に突出した部分SX03が存在する。しかし、突出部からは特に注目すべき遺構の検出はなかった。

この突出部の上面は検出時での標高最高点は約250cmであった。ところが、突出部を含めてそれ以外の溝両(H)側には、ベース面まで達している遺構であれば当然認められるはず(方形溝壙では周溝はほとんどがベース面まで達しており、普通それに対応すると考えられるベース土の盛土が観察される。また県教育委員会調査や本センター63D区では調査によってベース土の積み上げが明確に確認されている)のベース土を含む盛土は検出されていない。外縁の平坦面が幅狭いことから排土のかなりの部分は内側に盛られたと推測するが検出されていない。したがって、上部はかなり削られていると考えたほうがよい。おそらくこうした点



を原因として溝の規模も小さかったのであろう。だから残念ではあるが構築物の未検出という状況も仕方のないことかもしれない。

S D VII 期以降では上面遺構は古墳時代のものが主であり、V 期・VI 期の遺構は一部土坑が検出できた以外、存在するはずの住居はベース面での検出となった。

この地区の包含層は遺構の深度差を無視すれば概略50～60cmの厚さがある。沖積作用で堆積した部分は谷Aに面する区域以外では存在せず、すべてベースを掘り込んだ遺構の累積、すなわち弥生時代の地層攪乱であり、時期ごとの堆積層が成層するわけではない。したがって、土層セクションでは実線で分層している部分についても、実際はそうしたラインが入るのは稀で、ましてや地表面の検出など不可能である。

ところで、V 期以降の遺物を多く含む層位は平均すればS D VII 期の周辺を除いて以南の上部10cm程度である。最上部では古墳時代土器が散見される部分もあり、古墳時代遺構分布の散漫な点からみて、地表に近い部分も存在することが窺われた。後述するS D X・XI 期は検出時に浅い落ち込みのつながらりとなっており、一部後世の土圧による沈下を除いて自然の窪地と化していたようである。包含層掘り下げに際してV 期以降の土器が集中する部分の検出に努めた結果、いくつかのブロックが標高210～230cmの範囲で検出された。問題はこの集中地点の性格であるが、住居廃絶後の土器廃棄と認定した部分が多い。特に古墳時代では多くが竪穴住居となった。

いずれにしても、V 期・VI 期の遺構は北地区では希薄であるという印象は免れない。

B. 住居・方形周溝墓

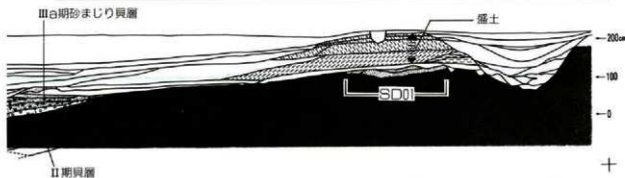
南地区 北地区よりもV 期以降の住居を多く検出した。多いと言っても10棟ほどに過ぎないが、土層セクションで観察したものを含めれば明らかに北地区よりは密度が高い。とくに、ベース面に達しない例の多いことが想定されることは、以前の竪穴住居より床面標高が高くなっていることを考慮すべきことを強調するものである。

他に方形周溝墓2基を検出した。S Z 1 5 5 はV 期で、一部のみ検出した。S Z 1 5 6 はVI 期で、東辺中央に陸橋部がある。周溝から多量の土器が出土した。

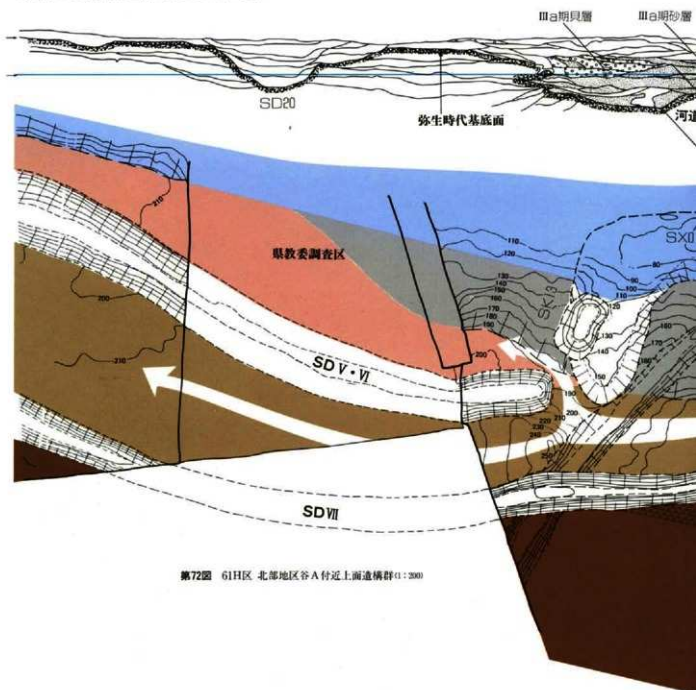
どちらも、主体部は不明である。

下面遺構群

谷Aに面する斜面は、南北とも標高50～70cmで段差が形成されている。侵食時期は堆積順序からいってIV 期以前であろう。60A区以西の谷A斜面で検出されたIII a 期砂層がこの地区では明確に検出され



●谷A 南北横断土層セクション(1:100)



第72図 61H区 北部地区谷A付近上面透視群(1:200)

ていなくても、それは標高120cm辺りまで存在するからそれより下部にある部分の侵食は当然有り得るであろう*。

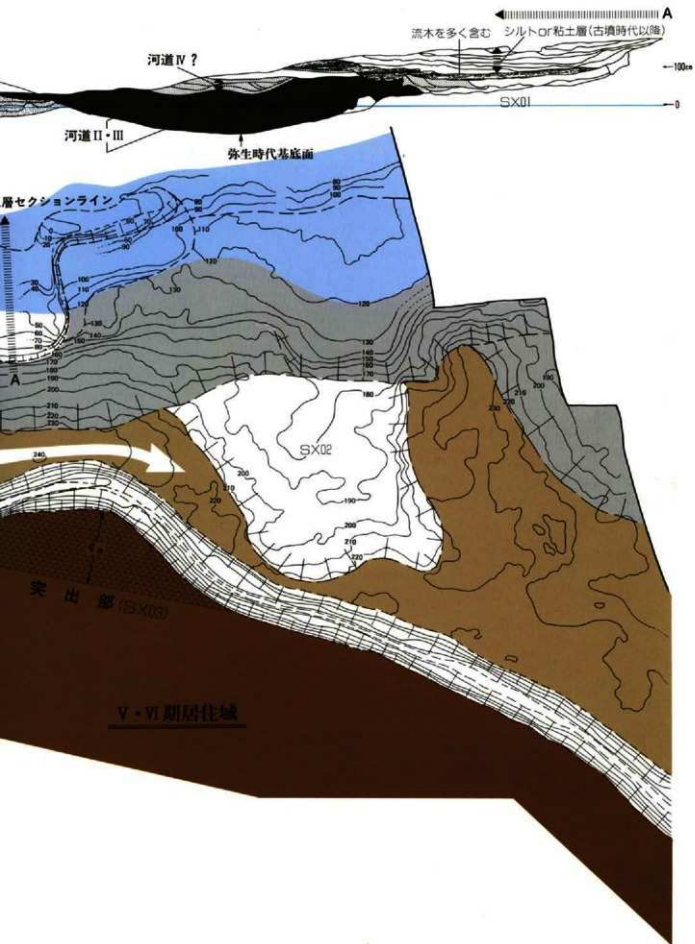
A. 溝

次に北地区と南地区を分けるSDX・XIについて説明する。

SDXは2時期に分かれる。どちらもSDXIに切られているために規模ははっきりしない。

SDX-1はII期で、埋土に貝層の含まれる量は少ない。水流もそれほど顕著ではない。

SDX-2は埋土下部に発達した砂層と砂質シルトのラミナがあり、調査区東半部ではその上に貝



層が堆積している。注目されるのは、埋土の砂層上面標高が一部の区域で165cmまで達していることである。そして、SDX-2には砂層が貝層を挟んで2層に分かれるところもあるので、溝がそれほど埋設していない段階での水流と埋没が進行した段階での水流という、それほど時間差をおかない二つの水流が考えられる。この点で、SDX-2南岸の侵食は後者によるものとなる**。

この侵食面は南岸で顕著であるのに対し、北岸にほとんど影響を与えていない。地表面の流水による侵食も南岸では認められるも北岸ははっきりしない。このことは、SDX-2北岸に接して盛土が存在したことを示している可能性が高い。

SDXIは幅3.5~4m、深さ約160cmを測る。掘削時期はⅣ期で、調査区東半部では埋土には多量の貝が含まれている。埋土下部には若干の水流が存在したことを示す砂層堆積がある。底面標高は調査区東端で80cm、西端で75cm、ほぼ中央で90cmと中央から東西に傾斜している。したがって水流は一方方向というわけにはいかない。実際調査区東端では砂層の堆積があり、これは谷Bへ流入するに当たり谷Bの水位の影響で急速に堆積したものであろう。

B. 井戸

北地区 谷A南岸(南微高地北斜面)では井戸枠を有するⅣ期の井戸が4基検出された。

SE01は掘形の径約3cm。井戸枠は白再利用で、底面標高約70cmを測る。

SE02は白再利用で外観は3段、内部は4段?で高さ75cmを測る。掘形は長径1.9m、短径1.3m、底面標高100cm。

SE03は径3.2m、深さ約1.1mの円形掘形の北東寄りに径42cm、高さ約30cmの丸太くり抜きの井戸枠が埋設されていた。底面標高は約39cmである。

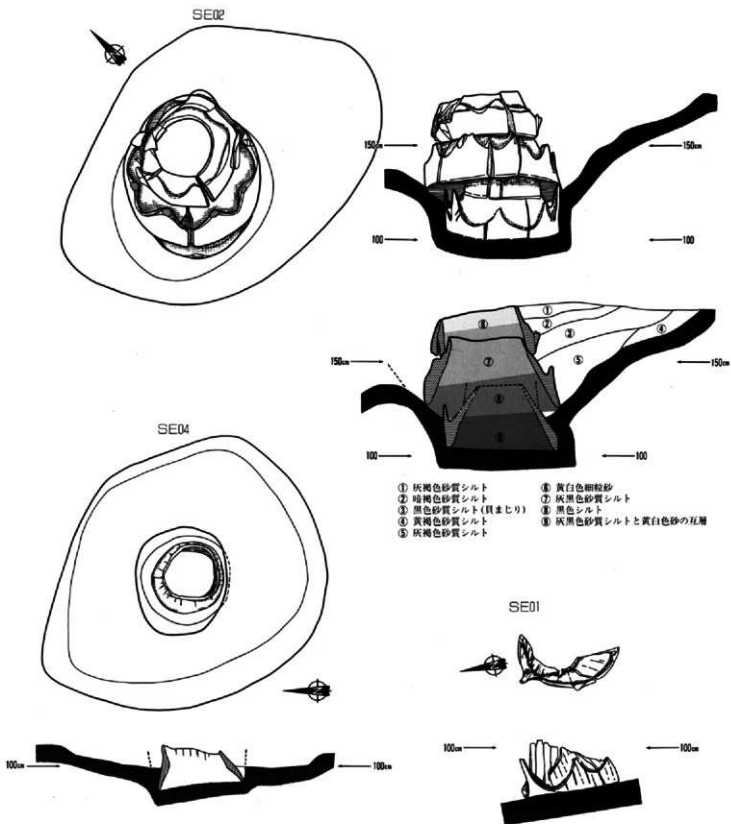
SE04は長径3.2m、短径2.6m、井戸枠はおそらく白再利用であろう。底面標高90cm。

これら井戸の底面はいずれも砂層に達している。掘形は河道によって削平され本来の井戸の状態はわからない。斜面地に設けられていることから河道が仮に活動していたとしても、その埋設時には河道の活動も低調であったことはまちがいないであろう。その時期がⅣ期であることは他の調査区で得られた成果と大きく隔たるものではない。

井戸の出現は朝日遺跡においては一つの画期をなす事実である。それ以前には縦に深く掘り込まれた円筒状の土坑も検出されていないから、飲料水獲得の新しい「様式」として導入されたものであろう。



第73図 SE03



第74図 61H区(北地区)井戸(1:20)

C. 住居

北地区 相互の重複が激しく、全形の把握できた例は極めて限られる。

北地区西端で錯綜する周溝群が検出されている。同一場所に継続的に拡張と建て替えを繰り返した結果であるが、時期はⅣ期が主のようである。

北地区で全形の把握できた住居はSB38・45・49・50の4棟だけである。SB38はⅣ期の住居で、拡張が行われている。側縁がやや膨らむ、この時期には普通に見られる形態である。SB43はSB42に切られているため半分が不明である。Ⅳ期。同じくⅣ期のSB34も側縁は張り出している。

SB45はⅡ期からⅢa期初頭の円形プランを呈する住居である。中央にはSK197とその東西に小穴、床面には周溝は1条だが、SK197を中心とした6本柱2単位の同心円的な配置(それぞれの柱穴にとっては求心的な対になった配置)があり、拡張の行われたことが窺える。そのほかにも柱穴が存在することと出土土器がⅢa期まで含まれていることから、さらに重複していた可能性はある。

床面からがは検出されなかった。SK197内部からも炭化物などの出土はなかった。

SB45から西に約8m離れて位置するSB49・50はどちらもⅡ期の住居で、前者は台形気味の方形プラン、後者は隅円方形プランを呈している。SB51はSB50に切られている。このSB45・SB50の間はベースである黄灰色シルトの上に褐色シルトが堆積し、旧表土が遺存していた。この点で注目されるのはSDXとの関係である。旧表土が遺存していたということは、遺構の配置からもわかるように地表の擾乱が少なかったということである。そして、この部分にⅢ期以降の遺構が希薄であるという以南の状況と比べての著しい相違は、SDXに沿って排土が盛り上げられたことを強く示唆すると考える。

南地区一 南地区でも同様に全形の把握できた住居は少ない。

SB56は円形プランで、拡張はない。中央のSK249は枳穴のようであるがはっきりしない。重複しているSB58はⅢb期である。SB65も円形プランだが東半部が不明である。Ⅱ期かⅢ期であろう。

SB60は周溝のみで台形気味の長方形プランを呈し、Ⅲ期であることはまちがいない。周溝が南で切れているのは、出入口の関係であろうか。

SB62は正方形に近い隅円方形プランで、Ⅴ期である。西隣のSB53はⅢb期で、東辺側に拡張している。プランはやや台形気味の隅円方形プランである。

SB68・69・78は全形は不明だがⅤ期である。SB62も含めてこの区域はⅤ期が集中するようである。

SB75・76・86はⅢb期からⅣ期で、同じⅣ期は調査区東部のSB74、SB73はⅣ期からⅤ期の幅が与えられているが、側縁が張り出していることからみてⅣ期でよいだろう。重複するSA01の柱穴埋土からはⅣ期土器が出土している。Ⅳ期以降である。

SB82はⅢa期初頭でSB81埋土を床面としている。軸線の一致しているSB79もⅢ期である。それに対し軸線の異なるSB85はⅡ期である。検出面で掘形が深さ約90cm残存していた。これまでの検出例で最も深い。しかも、周辺にはベース土の盛土があり、周堤を考えればさらに深かったと推測する。その代わり柱穴は不明確である。

SB85の東側には旧表土が残存していた。上部には暗褐色砂質シルト(弥生時代包層)がありおそらく削平されていると思うが、それでも標高230cmを測り高い。通常ベースと呼んでいる黄灰色シルト上面は標高210cm、「上部砂層」上面は標高194cmである。この区域は黄灰色シルト上面レベルがほかに比べて高い。SB85の掘形が深かったのは、遺構の重複のなかったことにもよるが、土層セクションによっても多くは深さ50cm未満であるから、構造上の特徴に関わるのかもしれない。

南地区-2 IV期の住居はSB99のみ。他はII期・III期である。隅円方形プランの場合は、平行する短辺の一方が短く台形気味である。

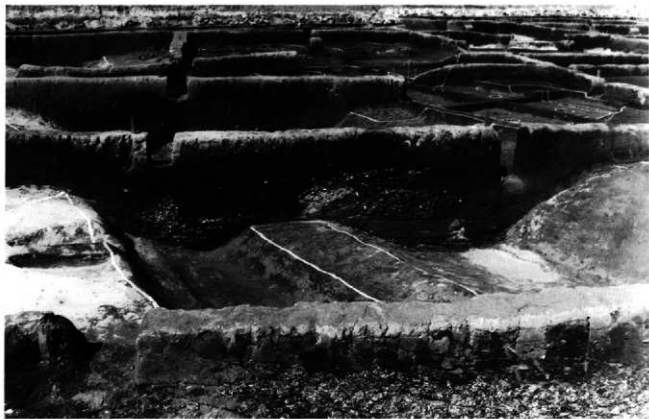
SB100は、東に拡張が認められるII期からIIIa期初頭にかけての竪穴住居である。周溝は南辺で北に折れ中央で途切れ、その南には浅い穴がある。入口に関わる施設と推測するが、朝日遺跡では初例である。SB99は下層と上層に分かれ(建て替え)、どちらも拡張がある。



第75図 61H区 北地区(●から)

●結果的に遺存した砂層の存在から河道の存在を推測するしかないのだが、河道の水位は堆積層よりもかなり高いはずである。63D区では標高150cmまで侵食面が及んでいる。この点で、61E区微高地南端で上述の段差以上に侵食が及んでいないのは、河道に平行して掘削されている溝とその排土からなる盛土(土堤?)とにそれを防止する役割があったからかもしれない。

●●このような侵食は、侵食を生じるだけの水流が谷内部での水位の上昇にともなって発生したことを示唆する。降雨量は短期的には季節的な変化、長期的には気候の変化から変動することになるが、V期以降の明確な河道形成より遡る谷A内の水流の存在は、土層セクションからII期に小規模ながら存在したことが観察される中で、IIIa期に形成された侵食面や砂層はそれに比べて大きな水流の存在を示唆しており注目される。おそらくIIIa期にはかなり水位が上昇したのであり、それは朝日遺跡の居住域全域を冠水させるほどのものではなかったにしても、尾張平野低地部にとってかなり重大なものであったことは阿弥陀寺遺跡における洪水痕跡から窺うことができる。SDXに関係する侵食は谷A内の水位上昇に対応したものであると考える。



▲SDX・Ⅱ 白いのは貝層(中から)

▼南地区2(中から)



第76図 61HK(中から)

14. 61M区 図版63・64

A. 谷Bと特殊遺構

SX02は61M区のちょうど谷BとSDXⅢの合流する位置にあって、谷Bを横断するように、SDXⅢに沿うようにある。aは平行する杭列で列間は約1mある。杭は頭部レベルがほぼ水平であるのに対し杭先のレベルが一定でないことからみて、上部は削平されていると考えられる。そして杭先の傾斜が谷B斜面の傾斜に一致していることは、この杭列が斜面に合わせて打ち込まれたものであることを示している。ここで仮に杭の長さを1mとすれば、北端の杭頭標高は約200cmとなる。

bは、横木と杭が組み合わさった構造物が北西側に倒れている状況で検出された部分を典型として、雑然とした部分を含めてaに対して直交して突出部的に存在する。上端の標高は約30cm、下端はマイナス5cm程度であるから、推定される谷Bの基底マイナス15cmより僅かに高いだけである。ほとんど底面に近いことが窺え、おそらく埋没がそれほど進行していない段階で倒壊したのであろう。

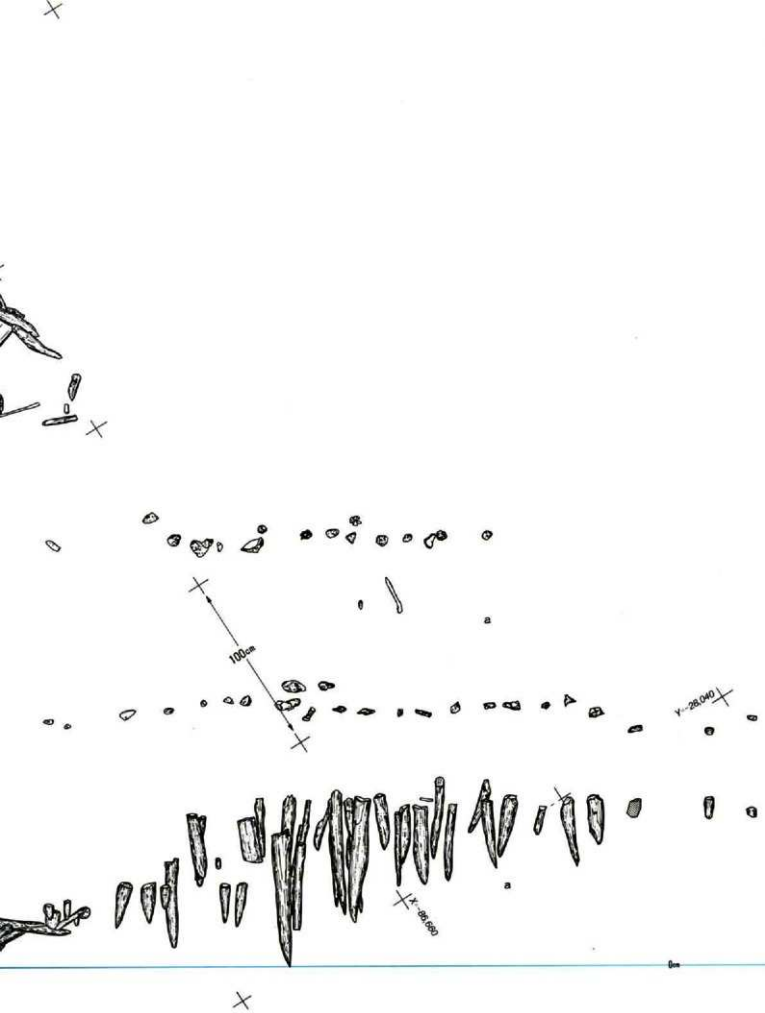
SX02 a・bは時期の特定が難しいが、谷Bの埋積過程を重視し杭上部の削平が河道によるものとするなら弥生時代後期後半から5世紀代までの間に構築されたことになる。東叡高地はⅥ期以降居住域



第77図 61M区 SX02(a: 杭列 b: 木組み)(1:40)



第78図 61Mz区 SX02(a: 枕列 b: 木組み) (1:20)



になっており、こうしたことにかかわるものである可能性はある。つまり、谷Bを横断する通路ということである。ただ、その場合このような構築物が谷Bを横断するとすれば谷Bの水流を止めることになる。あるいはもともと堰である可能性もあるけれども、垂直に打ち込まれた杭列が平行するという例は寡聞にして知らない。矢板で構築される畦畔との類似性もある。いずれにしても全体が調査されたわけではないので、その性格ははっきりしない。

B. 方形周溝墓

61M₂区S DXⅢの南岸でⅢa期、61M₁・M₂区S DXⅢ北岸、谷Aとの間の狭い微高地上でⅢb期とⅣ期方形周溝墓の重複例を検出した。

谷A・S DXⅢ間で検出された2列の方形周溝墓群は谷A側の一列について土層セクションおよび供献土器の出土によって再利用例であることが確認された。ただし、同じ並びのS Z 176については確認できていない。可能性は全くないわけではない。

S DXⅢ側の列はS Z 179・178で切り合いが確認できているので、東から西という築造方向が推定できる。

両列間にある土坑SK01からSK04はⅣ期に属し重複例と同時期である。SK05からはⅤ期土器が出土しているが、混入であろう。これら土坑については墓である可能性があるものの、断面などからは木棺墓である可能性は低い。土塚墓であろうか。

方形周溝墓や土坑は列を構成し、そのため中央に1条の空間が形成されている。あるいはS DXⅢがすでにⅡ期に掘削されており、それに規制されて空間が先にあり方形周溝墓や土坑が列をなすことになった可能性も否定できない。

S Z 175主体部からは石鏝が14点出土し、位置の確認できたものは図示してある。チップなどは混入していないようであり、当初から墓壇内にあったものと考えられる。ただ、被葬者の状況がわからないのでそれらが射込まれたものであるかどうか直接判断できないが、幅90cmの散布範囲ではやや不確かである。

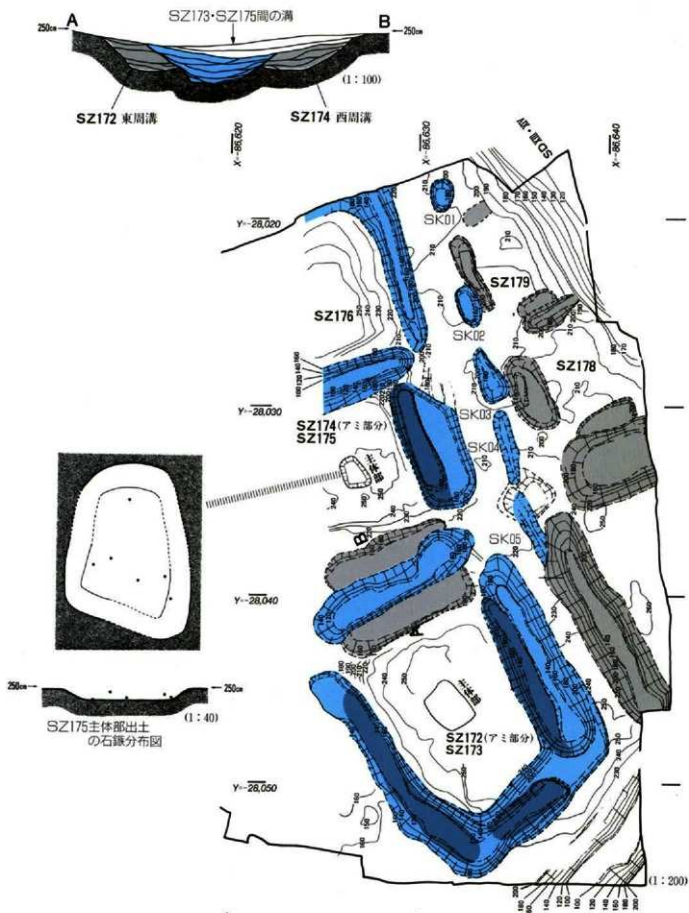
S Z 177は調査区の間壁によって二分されてしまっているが、A4形プランであろう。南東コーナーでは内部に円礫をもったⅢb期瓜瓞式壺の体部が正立で出土した。土器棺であろう。

C. 竪穴住居

ベース面でⅡ期の住居を検出した。プランは台形気味の隅円方形が主で、円形プランは検出されていない。ほとんどが周溝のみの検出にとどまり、柱穴は明確ではない。長軸4m内外の小規模な例が多いことに関わる構造的特徴でもあるのであろうか。

D. 溝

S DXⅢは「報告書」では「D河」とされており、61M₂区でも下部に植物遺体を含む砂のラミナが発達し活発な水流のあったことが知れる。その活発な水流のためこの区域では下刻が進み、Ⅱ期の溝は明確ではない。砂層の上には古墳時代前期でも終わりの植物遺体を多く含む層位があり、この段



第79図 61M1区 方形周溝墓の重複
 ●スクリーン：スミは紺むね、青色はW期。

階には滞流したことが窺える。そしてその上部はシルトから粘土層に移行する。後述するように谷Bも同様である。

SD01は調査区の端にかかったのみで全容は不明である。SZ177の西溝と接続する可能性もあるが不明である。

E. 谷

61M区の谷Aでは弥生時代基底層（黒褐色シルト層）から縄文時代後期土器がいくつか出土している。調査区北端で弥生時代後期と考えられる河道が検出された。



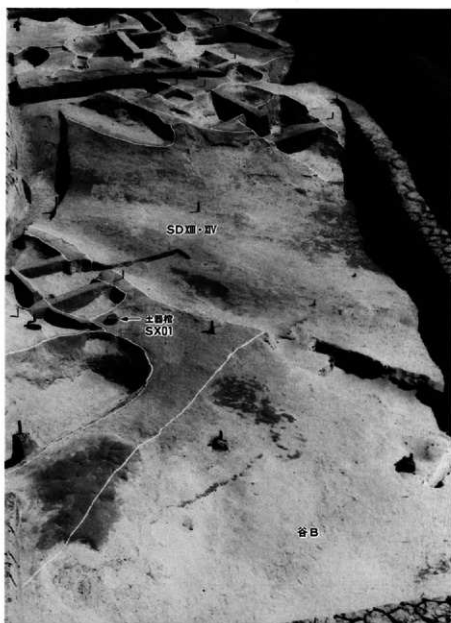
第80図 61M区(西側)

● 谷Bの形成が果たしてどこまで遡るかについて、現状で明快に答えるだけの材料はない。63B区での調査所見によれば、最下層埋植物（砂層）にはⅣ期土器が含まれており、Ⅳ期以降であることは確実である。しかし、谷Aの埋積過程を含めて考えるなら、森も述べているように谷A内（61H区川西：下流部）での水流の枯渇時期に谷B内へ流路変更していた可能性もあり、そうするとⅤ期以前にもⅡ期とⅢb期からⅣ期にかけてのある期間の2度谷Bが河道下することになる。あくまで推測にすぎないが、後者とすれば谷B最下部出土土器の時期にも近く、それによる倒壊であればそれ以前にはSX02は構築されていたことになる。

谷AはⅡ期、Ⅲa期、Ⅳ期？以降に河道化する。この河道化と谷Bの非流路化とが対応するなら、それぞれがSX02構築可能時期となる。もともとSX02が谷Bを完全に横断していればであるが。

SX02の性格には遡断と結合の2つの側面が考えられる。おそらくそうした回路の設定は複合した要因のもとづくものであろうから、やはり今ここで特定するのは困難であると言わざるを得ない。

▶SDIII・IVと谷B面やC



▼SDIV
土層セクション
(北から)



第81図 61Ma区 SDIII・IV土層セクション

15. 61P区 図版66・69～72

A. 方形周溝墓

Ⅲa期に属する9基の方形周溝墓が検出され、うち1基はⅣ期に溝の再掘削が行われていることを確認した。

SZ206は長軸22m、短軸16mの長方形プランのA4形である。溝埋土下部からはⅢa期の土器とⅣ期の土器が出土した。溝底面の二段掘りの状況や土層セクションからみて2時期の溝が重複していることを確認した。同様の事実は後述する61N区でも確認した。県教育委員会の調査ではⅣ期の重複関係は明確ではなく、ここに訂正する。

溝埋土は上述のように大きく2時期に分かれる。しかし、Ⅳ期掘削後の埋土はそれほど堆積せず、弥生時代末から古墳時代前半期の堆積層が厚く覆っている。つまり、200年以上経過しているにも関わらず埋まりきっていないと言うことになる。この点に関しては、東徹高地がⅥ期以降居住域と化したことと少なからず関係すると思う。後述するように、各調査区で規模の大きい方形周溝墓の場合に特に顕著にこうした事例が観察されるのである。

本調査区では2列の方形周溝墓群があり、主列はSZ206を起点として東に連続する。そして、SZ212東周溝とSZ226西周溝は軸線をややずらして重複し、SZ227東周溝とSZ228西周溝は完全に重複している。こういった溝の重複例は他ではあまり見られない。

副列のSZ209からSZ211は北周溝をSZ207の北周溝北縁を延長させたラインに一致させて築造されている。非常に限られた空間に無理やり押し込んでいると言った感じである。

主体部とおぼしき土坑は2基から検出されたにとどまる。SZ229は長方形で木棺の可能性があり、現状では一墳一主体部であると考える。



第82図 SZ206・207東周溝南壁土層セクション

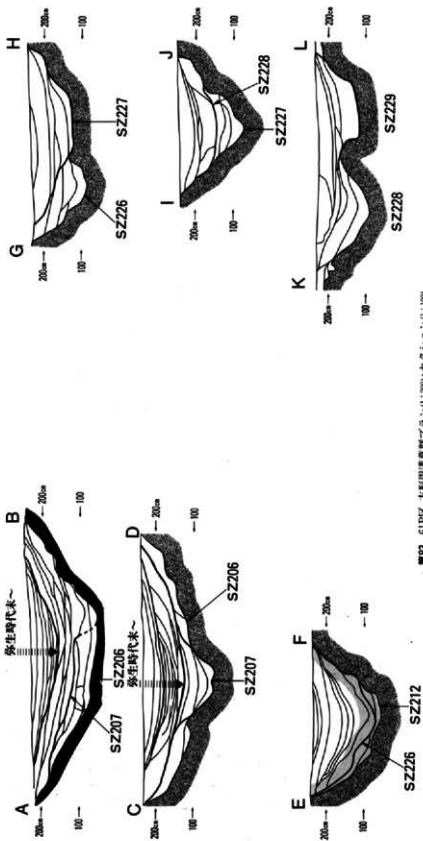
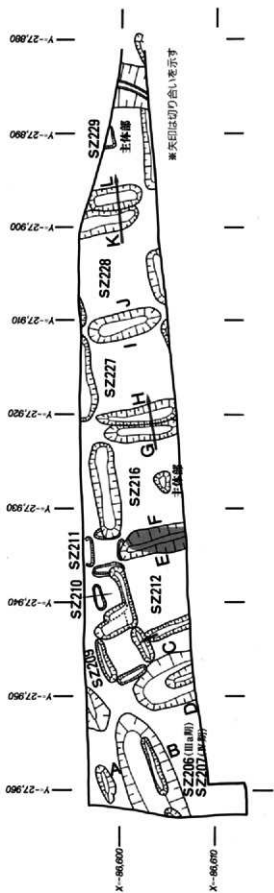
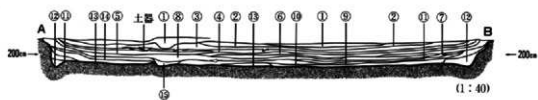
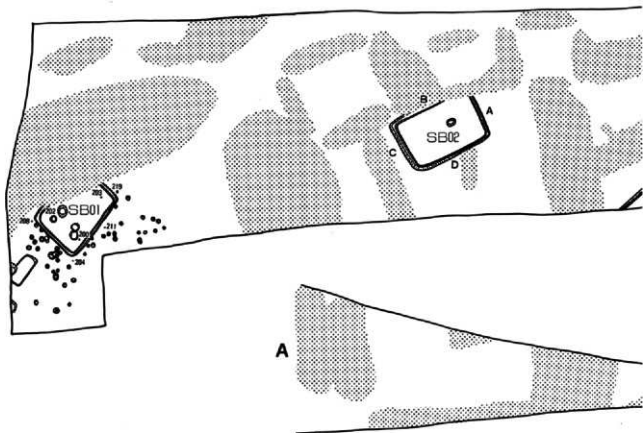
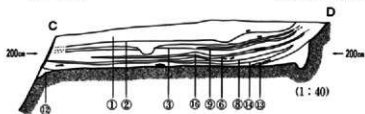


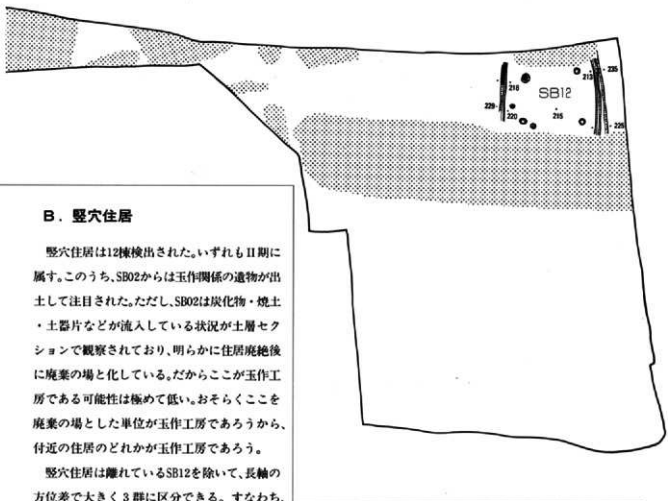
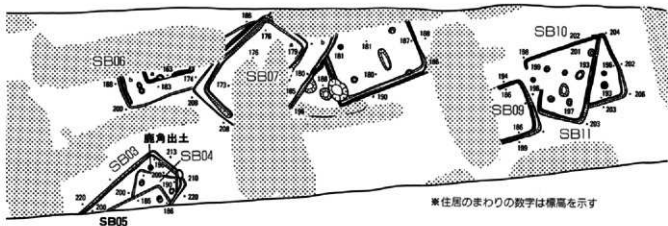
図83 61P区 方野原遺跡群プラン0:300・セクション0:1000



- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| ①暗灰黄色砂質シルト | ⑤黒褐色シルトと焼土層 |
| ②黒褐色砂質シルト (炭化物・ベース土アロックス) | ⑥黒褐色シルト (焼土層) |
| ③灰黄褐色砂質シルト (灰白色砂質シルト付着) | ⑦黒褐色シルト |
| ④暗灰黄色砂質シルト (炭化物付着) | ⑧黒褐色シルトとベース土 |
| ⑤暗灰黄色シルト | ⑨黒褐色シルト (焼土・炭化物粒・ベース土アロックス) |
| ⑥灰白色砂と灰黄褐色砂質シルトのまじり (炭化物・焼土層) | ⑩焼土 |
| ⑦焼土・灰白色砂質シルト | ⑪暗灰黄色シルト (焼土アロックス・炭化物) |
| ⑧焼土・炭化物層 | ⑫黒褐色シルトと炭化物層 |



第84図 61P区 竪穴住居群(1:200)



B. 竪穴住居

竪穴住居は12棟検出された。いずれもII期に属す。このうち、SB02からは玉作関係の遺物が出土して注目された。ただし、SB02は炭化物・焼土・土器片などが流入している状況が土層セクションで観察されており、明らかに住居廃絶後に廃棄の場と化している。だからここが玉作工房である可能性は極めて低い。おそらくここを廃棄の場とした単位が玉作工房であろうから、付近の住居のどれかが玉作工房であろう。

竪穴住居は離れているSB12を除いて、長軸の方位差で大きく3群に区分できる。すなわち、a : SB01・03・07、b : SB02・05・06・08・09・10、そしてc : SB04・11である。このうち切り合いの確認できたSB10とSB11の関係を重視するならb→cという時間差が推測できる。

16. 61N区 図版65・67～72

A. 方形周溝墓

県教育委員会調査で検出された方形周溝墓の連続部分の調査にとどまる中で、SZ190では主体部の検出があった。長軸224cm、短軸184cmの掘形のなかに、長軸196cm、短軸80cmの墓壇が設けられている。棺材の遺存は認められなかったが、おそらく木棺であったと考えられる。ここでは小口板が底板上にあって、他でみるようにベース面に痕跡を残してはいない。出土遺物はない。

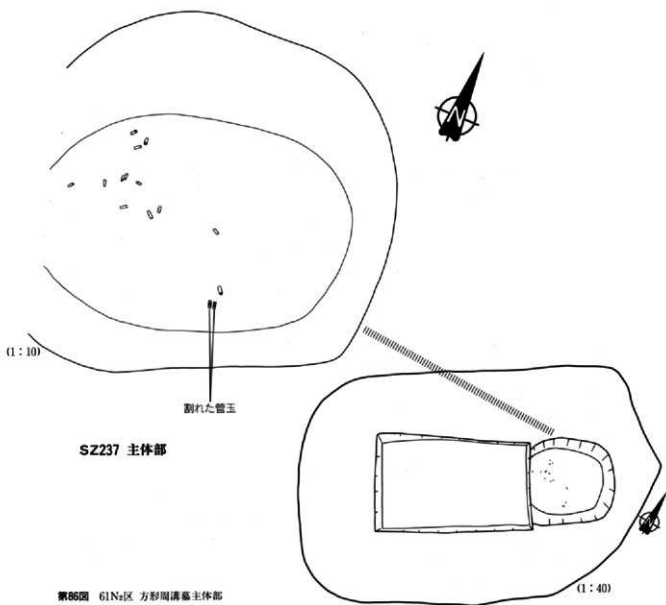
SZ194は北東半分弱の検出である。SZ192との間にある溝SD01はSZ192南周溝に切られている。対応する溝は県教育委員会調査区に存在するが方形周溝墓になるかどうかは不明である。SZ208は県教育委員会調査の段階では南周溝が検出されていたにとどまっていたもので、昭和61年度調査ではじめてそれが方形周溝墓であることが確認された。東西周溝墳丘側下端間で33.5m、南北同22mを計測する長方形である。墳丘については盛土の遺存が明確ではない。主体部は不明である。

東西の周溝は再掘削されているようで、東溝埋土下位からはⅥ期土器（赤彩広口壺）が出土している。周溝規模は確認面で、西：幅7.5m、深さ1.8m、東：幅6m、深さ1.7m、を測る。北周溝には現代の攪乱があり、完全に検出できていない。溝底は他に比べてやや浅い。西周溝底面からは柄のついたクワが2本出土した。県教育委員会調査区で検出された南周溝相当部分底面からも木製品？が出土しており、方形周溝墓築造後に方台部中央でなんらかの儀礼のおこなわれたことが窺える。

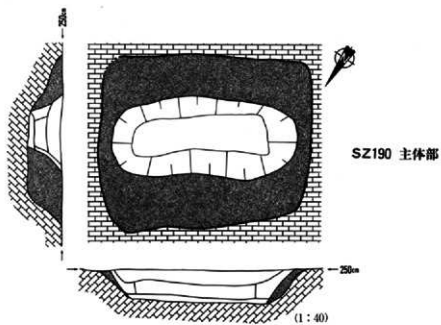
SZ237は検出された主体部から管玉が出土した。東墓域では初めての副葬品である。ただ、主体部の形状は主壇と副壇という組み合わせで、副壇から管玉が出土し、内2点は半分に切断されていた。主壇の構造は明かでないが、木棺としても非常に小規模である。

SZ240とSZ241は重複している。前者はⅡ期、後者はⅣ期である。通有の重複関係である。





第86図 61N区 方形周溝墓主体部



B. 竪穴住居と掘立柱建物

竪穴住居はSDXⅢ以北で円形プラン1棟、隅四方形プラン1棟が検出されている。どちらもⅡ期である。

掘立柱建物はSZ208下層で1棟検出された。県教育委員会調査区ですでに1棟検出されており、対になることがほぼ確定できる。このほか、SZ218下層や以東で小穴が多数検出されており、この区域に掘立柱建物が集中することが考えられる。

C. 溝

SDXⅢはⅡ期の溝が掘削された後、Ⅴ期からⅥ期にかけての溝があり、顕著な砂層堆積が観察される。上部には植物遺体を含むシルト層が堆積するが、それはⅣ期以降である。



第87図 61N₁区

4SZ199
(北西から)



4SZ01
(北から)

17. 61T区 図版75~77

A. 竪穴住居

SB01はⅥ期の竪穴住居である。掘形約5cm残存。周溝はもたない。すでに墓域としての伝承もなく、居住域と化したのであろう。

B. 溝・小穴列(垣)

SD01はⅢb期方形周溝墓SZ306に切られているので、それ以前ということになる。性格は不明である。

小穴列は3列検出された。このうちSH02はSD01と軸線が一致し、なんらかの関係が窺える。柱穴は打設された杭を想定させる小規模なものであり、垣というよりは擁壁用の構築物である可能性もある。SH01はⅥ期である可能性が高い。

C. 方形周溝墓

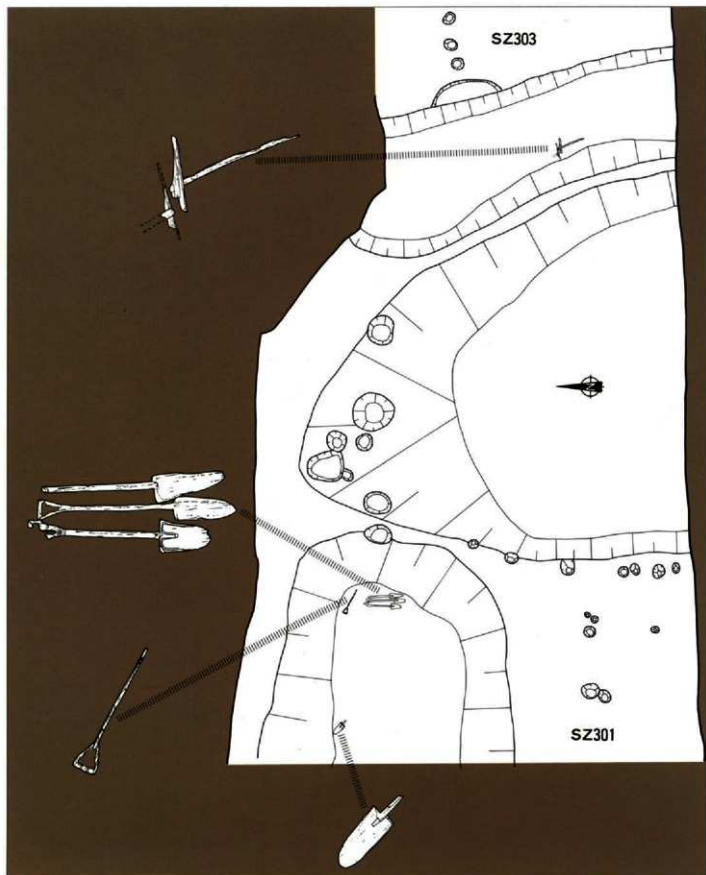
SZ301は東西35mを計測し、南北は残念ながら確認できない。周溝は検出面で幅11m、深さ1.7mを測る巨大なものである。埋土は大きく2層に分かれ、下層はベース土の再堆積でⅢb期からⅣ期、上層は黒褐色砂質シルトでⅥ期末からⅦ期の土器群が出土している。下層のベース土はおそらく墳丘を構築した際に積み上げられたもので、それが崩れて流れ込んだのであろう。ところで、下層上部からⅣ期の土器が出土している点は、SZ301の周溝がⅣ期に再掘削されて墳丘の再利用が行われた可能性を示唆する。

下層は、北溝西部で広クワ未成品2点が上部から、東部では東端底部から一木スキが3本まとまって出土したほか、おそらく同一個体と考えられる一木スキの身と柄が離れて底部から出土した。東周溝下層上部からも「田下駄」状木製品が出土している。

上層は、Ⅵ期に一度埋土を再掘削してそのあと大量の土器を継続的に墳丘側から廃棄したもので、甕が多く炭化物も同時に廃棄している。これは「第3章古墳時代」のところで触れる。

SZ303でも底面から柄のついた広クワが出土した。これはⅡ期のSZ208と異なって、横に離すのではなく、南北に身を接するように置いてあった。

その他の方形周溝墓は規模が小さいだけでなくプランも非A4形が含まれている。調査区東部では周溝の切り合い所見によってSZ301から東方への築造経路が確認されている。西部ではSZ303がSZ301東周溝外縁ラインに規制されて周溝の掘削を行っており、やはりSZ301を起点とする築造経路が窺える。



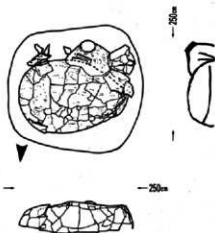
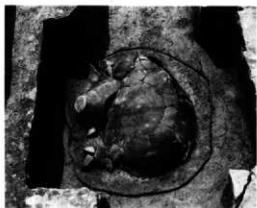
第86図 61T1区 SZ301・SZ303周溝出土の木製品(1:100±1:30)



第89図 61T区(東から)

D. 土器棺

SX01はⅢa期?の甕が横位につぶれて出土したものである。おそらく甕棺であろう。東墓域での土器棺検出は初めてである。人骨や副葬品の遺存はなかった。



第90図 61T区 出土棺①:20

18. 62A区 図版78・79

A. 竪穴住居と掘立柱建物

SB01は側縁の彫らむⅣ期竪穴住居である。拡張が行われている。ほとんど平坦で同一面での検出にとどまり、掘形は残存せず。

掘立柱建物はSA01があるが、柱通りは悪い。他に小穴が多数ある。南にある県教育委員会調査区では掘立柱建物群からなる区域が検出されている。この区域では南北に廊をもつ掘立柱建物も検出されており、掘立柱建物の卓越する区域であるかもしれない。

B. 方形周溝墓

SZ311がⅣ期である以外はすべてⅢ期である。細分時期は確定できない。この区域は方形周溝墓の展開が散漫で小規模な例が目だつとともに、軸線の統一も窺えない。微高地としても標高がやや低く、おそらく墓城の南縁に位置していることによるのであろう。

SZ311はⅣ期の方形周溝墓で、プランはA1形である。他のⅣ期の遺構(SB01・SA01)と軸線の一致していることに注意が引かれる。

C. 溝

SD01は上層からⅣ期とⅥ期の土器が出土している。SD02は切られているので、それ以前である。



第91図 62A区(西から)

19. 62B区 図版80・81

A. 方形周溝墓

62B区は近世以降の遺構との重複が激しく、弥生時代の遺構は寸断されている。そのなかで、検出されたのはすべて方形周溝墓である。

東西長約20mを測る大形の方形周溝墓SZ325からはⅣ期の土器が出土している。周溝埋土は大きく3層に分かれ、下層：ベース土の再堆積、中層：黒褐色砂質シルト、上層：おそらく溝を再掘削した後に流れ込んだもの、となる。Ⅳ期土器は上層に対応する。大形方形周溝墓はⅣ期の再掘削が普通に行われているようである。

直接時期決定する資料は出土していないけれども、近接のSZ326はⅢa期であるし、SZ324もⅢa期である。SZ321はSZ324に切られているので、それ以前。

このように、Ⅲa期の方形周溝墓群は東微高地で西部と東部に大きく分化したことがわかる。



第92図 62B区

20. 62C～L区 図版82～84

62C区以下は、各調査区とも面積が狭いので、調査区ごとではなく各項目ごと全体的に説明する。
 62D区まで方形周溝墓群の範囲が及び、62E区は土坑墓群?となる。いわゆる弥生時代中期の遺構はここのまで、62C区からⅦ期以降の遺構がほとんどとなり井戸や掘立柱建物が存在する。この居住域の終末はⅦ期である。そして62K区以東ではほとんど無遺構・無遺物となり、標高も低くなる。この区域

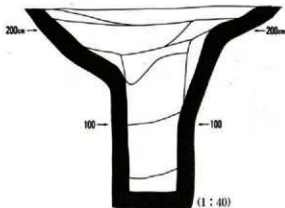
62H区 SE01



62I区 SE01



62J区 SE01

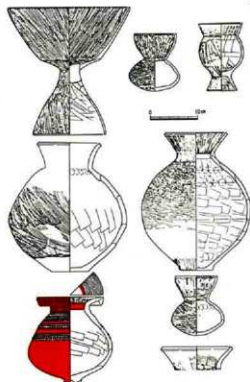


第93図 井戸土層セクション

上層



下層



第94図 62I区 SE01出土土器(1:3)

から水田は検出されていない。朝日遺跡を全体として見た場合には東限にあたる。

A. 井戸

62H・I・J各区で1基ずつ検出した。後2者は断面ルート状で、上部には土坑が重複している。62I区SE01では、下層からⅥ期の土器群が、上層からⅤ期末の土器群が出土した。このような土器廃棄は井戸が生活施設としてだけでなく付随する儀礼も含めて導入されたことを示す。

B. 掘立柱建物・小穴列・溝

掘立柱建物は62E区で1棟検出された。62E区ではⅥ期土器以外出土していないのでⅥ期でよからう。小穴列は62H区で平行する2列(SH01・02)とそれに直角に交わるSH03を検出した。いずれもⅥ期であるが、SH03を垣としてよいかどうか迷うところがある。

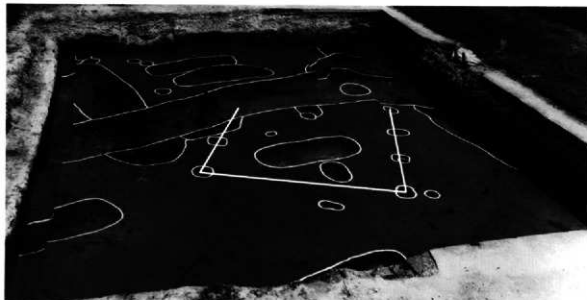
62H区SD01と62J区SD01はほぼ平行しており、後者ではⅥ期の土器が出土している。

C. 方形周溝墓・土坑

方形周溝墓は62D区まで検出されている。方形周溝墓かどうか確定できないが、62D区SD01からはⅢa期の土器が出土している。SZ3337は土器が出土していないけれども、SD01との位置的な平行関係から時期が近いと考える。

SZ3338はそれより新しいであろうが、時期は確定できない。

土坑は62E区で検出したいくつかが土塚墓である可能性を有する。62D区まで方形周溝墓群があり、それ以来が土塚墓群からなる墓域であると予想できる。



第95図 62E区(西から)

21. 63A区 図版65・66

A₁区・A₂区に分かれる。A₁区では居住域の縁辺と谷Aが検出された。谷Aでは深掘りによって縄文時代後期に相当すると考えられる泥炭層を検出するとともに、流路が複数存在することを確認した。遺物の出土はなかった。

河道は調査区東部で大きく蛇行する縁辺を検出した。

A₂区ではすでに説明した縄文時代のドングリ貯蔵穴を検出した。弥生時代では、掘立柱建物1棟SA01とS DXⅢ・Ⅳを検出した。

SA01は柱穴が1×2間と1×3間の2棟が復元できる。建て替えによるのであろう。時期はⅡ期。

S DXⅢはⅡ期の溝で、有機分の強い埋土が観察された。

S DXⅣはⅤ期以降で、砂層と植物遺体層がラミナを形成している。上層はⅦ期の植物遺体層である。61N区で観察した状況とは大きく異なる。

22. 63B区 図版60・61

A. 竪穴住居

SB01は隅円方形プランで、床面には薄い貼床を確認した。

SB03(隅円方形プラン)・04(円形プラン)は重複している。土層セクションでは前者から後者への変化を示している。Ⅱ期からⅢa期である。両者とも拡張している。

B. 溝

SD01はⅡ期からⅢa期にかけての溝である。断面逆台形を呈する。住居群に先行するようである。

SD02は出土遺物は無いが、ベース直上に掘り込まれており古い。底面は小穴の連続で何等かの構造物(Ⅷ)である可能性がある。SD01に平行するような印象を受ける。

SD03には鍵の手状に屈曲する部分があり、方形周溝墓の可能性も考えたが、調査範囲が狭く確定できなかった。Ⅳ期の土器が多量に出土した。

SD04はⅣ期の溝で、埋土上部には土器が密に含まれていた。上層の砂層は、溝が完全に埋まりきっていないために窪地状をなしていた部分が小流路と化したのであろう。

SX01は方形周溝墓でもない、住居の間溝でもない。性格不明である。

C. 方形周溝墓

谷Bを挟んで、南西(63B₁区)で後期の、北東(63B₂区)で中期の方形周溝墓を検出した。

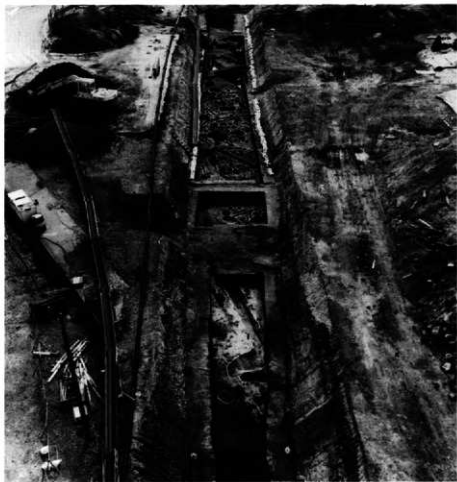
S Z 1 6 0はⅤ期の方形周溝墓で、北周溝から華麗な装飾を施した高杯・器台が出土した。また、北周溝上層からはⅦ期の土器がまとめて出土し、北にある同時期のSB05との関係が問題となる。

SZ206は西側溝が谷B河道に削られている。ほかの側溝も部分的な検出にとどまった。方台部の中央には土坑があり、主体部と推定した。SZ205とSZ204は側溝が重複している。前後関係は確認できなかった。中央に土坑があり主体部と推定した。木棺の痕跡はどちらも確認できなかった。

D. 谷 B

谷Bは面的な追求は不十分であったが、土層セクションの観察によって従来の説明では理解できない事実がでてきた。すなわち、谷Bでは谷Aと異なり弥生時代包含層の下部に縄文時代の谷は存在せず、谷Aに存在した谷中央に向かって下降する谷斜面傾斜に沿う堆積層の存在もなかった。つまり、谷の形成がそれほど古く遡らないことが把握できたのである。そして、谷基底の堆積層が弥生時代後期を大きく遡らないことから、さらにこの谷自体が自然ではなく一部人工的に掘削されている可能性も完全に否定できないと考える。

なお、この谷からは標高170cmぐらいのところでは13世紀頃の「山茶碗」が出土しており、その高さでは周辺より1m以上深い窪地であったと考えられる。植物質を多く含む粘土層の堆積からみておそらく湿地となっていたのであろう。



第96図 03B区(東から)



第97图 63B区 SZ160北周清出土土器(1/1)



第98图 63D区 盛土下部出土土器(1/1)

23. 63D区 図版14~16

上面遺構群

A. 溝

SD01・02はV期とVI期の溝である。SD01-1は幅約4m、深さ約1.75m、同-2はそれよりやや縮小する。SD02は幅約4m、深さ約1.8m、同-2はそれよりやや縮小する。

溝内への土器廃棄はそれほどないが、かわりにSD01の西部では貝層の堆積が顕著であった。その範囲はIV期以前の貝層範囲に一致しておりほとんど破砕貝層なので、おそらく溝掘削に際して盛り上げた貝層が流れ込んだのであろう。

SD01-2埋土は最下層のベース土に攪乱状堆積があるが、以上は褐色砂質シルトを基調として植物遺体の含有量に変化を見せながら堆積している。特に上半部では植物遺体の量が多くなる。SD02-2も基本的には同様の堆積状況である。水流を示すような砂層の堆積は観察されなかった。

SD03はV期の溝で、灰色砂が植物をまじえながら水面の油模様のような互層を形成している。上部には植物遺体層（Ⅷ期）が堆積している。

SD04はSD03下部で検出された溝で、おそらくIV期と推測する。これも、灰色砂が入り組んだ模様を見せている。SD03・04間には南の谷A河道からの氾濫による砂層の流入がある。

上面では遺構として検出できなかったが、SD09はIV期貝層を切り込むV期の溝で、SD01に流れ込む部分では溝の壁をけずってSK10とした土坑をうがっている。

この他、溝ではないが、SD02とSD03の間に灰色シルトの堆積した窪地が存在した。両溝からの排土を盛り上げた結果できたものであろう。SD01以北にも同様の窪地が存在した。

B. 土 壘 ?

SD01・02間には盛土があり西に至ると急激に下降し斜面を形成する。この盛土の斜面寄りの部分でV期の大彩器台が出土した。旧地表に浅い土坑を設けて盛土内に封入している。この盛土は検出時では約30cmとそれほど厚いものでなかったが、上部の削平を考慮するなら「土壘」とそれに関わる遺物である可能性が生じる。

朝日遺跡では、これまでのところV期以降の環濠と想定される平行する大溝間でベース土を主にした盛土が顕著に認められるという傾向があり、63D区例もそうした事実を追加するものであるだけでなく、他に知られていない大彩器台が埋設されていたという新しい事例も提供したといえる。

下面遺構群

A. 溝

SD05はⅣ期の溝であるが、土層セクションの擾乱状を呈する下部はⅢb期である可能性が高い。上部でⅣ期の土器とともに木製品が出土した。

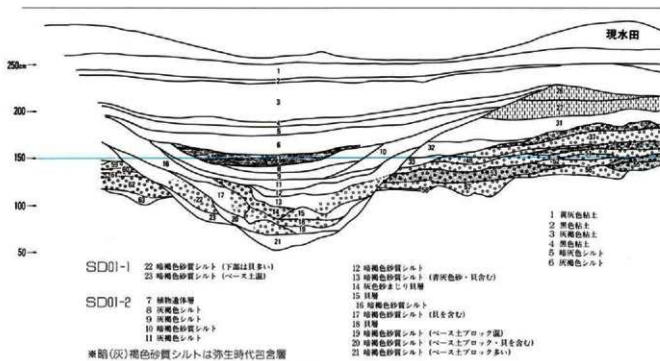
SD06はⅡ期の溝で、幅5m以上、深さ2mを測る。埋土にはベース土が大量に流れ込んでいる。特に北からの流れ込みが著しいのは掘削時の排土が居住域側(内側)に盛られていたことによるのであろう。そして上部にはⅢa期の貝層が堆積している。

SD07はSD06に重複して掘削されており、その掘削はⅢb期である。しかし、埋土のほとんどはⅣ期で貝層もⅣ期単純である。上部にはベース土の流入があり、おそらくSD02掘削による排土が盛られたのであろう。このことはSD02掘削に至るまでSD07が窪地状をなしていたことを示している。この地区では61E区での事例と異なり重複して再掘削することはなかった。

B. 貝層

貝層は貝混じりの黄色砂層以下がⅢa期、上部の暗褐色砂質シルトの上部がⅣ期である。Ⅴ期の貝層は再堆積以外検出していない。

Ⅳ期貝層は層中に炭化物や灰を含むが焼土は観察できなかった。60A区で検出したⅡ期やⅢ期の貝層に共通する堆積状況で、貝の煮沸処理が集中して行われたことを示すのであろう。



第99図 63D区 西壁上層セクション(1:400)

それでも、範囲としてはかなり狭く、やはり南畿高地北縁とは規模が異なる。

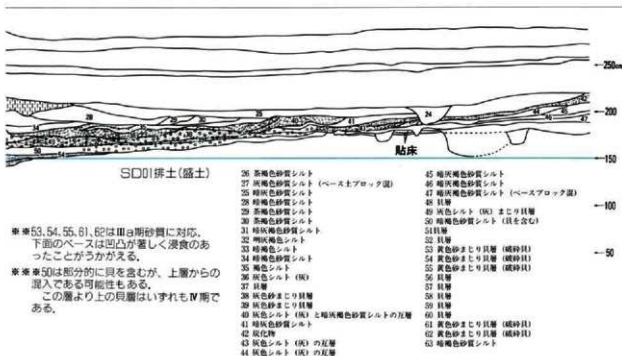
C. 侵食面

谷Aに面する区域のベース面の侵食についてはすでに61A区で顕著であったことを紹介したが、こ
こでもベース面の凹凸は著しく、類似の経過があったことが窺える。侵食面直上にはところによって
黄色砂が薄く堆積し、その上にさらに貝層が堆積し、そして黄色砂混じり破砕貝層が堆積するという
ように、侵食に関わると考えられる堆積は1回だけのものではないが、大きくはIIIa期に進行したもの
であるとして誤りないであろう。

ところがそうすると、この区域は谷Aと分離されていないことになり、したがって谷A寄りにある
SD06の盛土はすでに削平されていたか、あるいはこの区域周辺は谷Aに対して開放していたということ
になる。しかしSD06には黄色砂の流入は認められないのでIIIa期にはすでに埋没して平坦化していた可
能性が高い。

D. 土壇墓

SD02・SD03の間から土壇墓SX01を検出した。確認した段階ではすでに上部を削平してしまっており、
深さ約10cmほどが残存していただけであった。そのため、人骨の遺存は認められたものの、詳しい状況は
確認できなかった。この部分の盛土はSD06に由来し、土壇墓はその中から検出されたのでそれ以降であ
る。V期である可能性が高い。



24. 63G区 図版41～43

A. 竪穴住居・掘立柱建物

II期は明確でなく、多くはIIIa期以降である。SX02の西には遺構の希薄な区域があり、ここでは旧表土(黒褐色シルト)が検出された。他はベース面がほとんど灰白色砂であり、遺構の検出はともかく、遺構掘削後は特に検出面の維持に苦勞した。

調査区北西部端では炭化物の濃密な分布と焼土面が存在し、焼失家屋があると思われたけれども、遺構としては検出できなかった。下部で検出したSD01は周溝のようでもあるが確定できない。土層セクションでは何層もの炭化物層を確認した。

SB07はIIIa期で木整円形プランを呈する。床面は灰色砂であり、中央部から地床炉を検出した。SB03はプランが台形気味なのでIII期であろう。

SB12・14はIV期。両者は軸線が一致している。同じ軸線を有するSB10もIV期かもしれない。

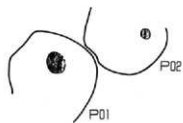
SB08・09はV期。接近しているので時間差はあるだろう。軸線は一致している。この軸線は南の89A区住居群とも共有されている。しかし、同じV期のSB02は軸線が異なる。軸線を共有する単位が異なるのであろう。

SA01は炭化物層下部で検出された柱穴群からなる。柱根の遺存したもの(P01・02・03)と、礎板の遺存したもの(P04・05・06)とがある。掘形は径1～2m、深さも残存部で1mと大きく、柱根もP03は径40cmを測る。柱根の遺存した坑は60I区でも検出されており(P1・2)、この区域に集中することが窺えるが、柱の通りを見た場合はSA01としての組み合わせ以外ははっきりしない。だからこれらが実際建物として建つのかどうか確定はない。

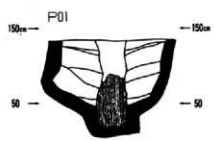
B. 区画遺構

SX01は隅円台形プランの区画である。溝幅は約0.7～1m、深さ40cm以上である。遺物の出土はなく直接の時期決定は難しいが、土層セクションではIV期のSB12より新しく、V期のSK98には切られている。その期間に置くことができる。

この区画の性格は、重複しないSB11との位置関係では竪穴住居外縁周境に伴う溝のようであるが、SB11はSB12に切られており時期は異なり無関係である。独立した遺構として考えるならば、境界設定に関わる特殊な遺構ということになる。



第100图 63G区 SA01(1:80)



第101图 SX01(南←北)

25. 63 J 区 図版45

A. 竪穴住居と土坑

Ⅳ期まで 土坑はⅡ期 (SK20・21) からあるが、住居はⅢ期以降しかない。SB05はⅢb期、SB06はⅢ期、SB04は拡張があるⅣ期。

Ⅴ期から SB01からSB03は周溝の集中が激しい。SB01→SB02という順序で、後者の床面には土器がまともまで遺存していた。

SB11は正方形に近いプランで、Ⅵ期の住居である。これに切られるSD01は周溝と思われるが、とすれば確認長で約10mあるから大形住居となる。溝埋土からはⅤ期の土器片が出土しているのでⅤ期以降である。

同じくSB11に切られるSB10はⅤ期の住居である。拡張している。

同時期の住居と土坑には軸線の共有が観察できる。すなわち、Ⅴ期にはSB10bとSK27、Ⅵ期にはSB11に一致するSK19・22、そして対応する住居はないがSK18・23の組み合わせである。このうち、SK18・19・22・23については埋土が炭化物と焼土粒からなり、しかもそれらが互層をなすことから継続的な廃棄のために設けられたものであることが窺える。

このような軸線の存在はⅡ期・Ⅲ期にもあり、Ⅴ期以降に関してもとりたてて注意する必要のないものかもしれないが、63 J区では住居との対応が明確である点で、住居を中心とする一定空間の構成が行われている可能性を指摘しておきたい。

26. 63 L 区 図版48

A. 溝

Ⅴ期はS DXV・XⅥ、Ⅵ期はS DXⅥ。

S DXⅥはⅥ期にはすでに埋没して再掘削もされていない。この溝の東延長は県教育委員会調査では検出されていないので、終息していると考えられる。対応するであろうS DXⅡは、我々の調査対象となっていないので直接検討することはできないが、「報告書」によればⅤ期とⅥ期なので次に述べるS DXⅤに対応する溝の掘削があったと考えられる。

S DXⅥは63L区でそれほど明確に掘めたわけではないが、となりの89B区では上下に重複しているのが確認でき、明確に区別できたのでそれに合わせた。実際はS DXⅤがそれ自体どれだけの長さがあるかは問題である。

おそらくS DXⅣに対応するものと思われるが、調査区東端の溝北肩部分で底面標高が190cm～200cmを測る2m四方の平坦部を検出した。この部分の堆積は特殊で、下部には黒色砂質シルトと灰色砂の互層、上部には炭化物と灰色シルト・灰褐色砂質シルトの互層が主に堆積しており、溝斜面における通

常の堆積状況とは異なっている。

S DXV・XVIとS DXVIIの間は、黒色砂質シルトの上にベース土（黄灰色シルト）ブロックを含む層位があり、盛土と考えられる。

B. 竪穴住居

SB09はII期の住居。それ以外の区域にもII期の遺物は多かったが、住居は検出できなかった。

SB05は円形プランでIII期。重複するSB06はIV期。SB03・07・08もIV期である。

C. 土 坑

SK26は包含層上面に窪地ができており、当初新しい時期の遺構と考えていたが、掘り下げた結果、II期でも古い様相を示す土器群を含む貝層が出土した。貝層以上の埋土はIV期の包含層であった。上部が窪んでいたのは貝層が腐食によって圧縮され沈下したためであろう。第103図の東西土層セクションベルト上面が沈下面である。



第102図 63L区 SK26(北から)

* S DXVIIは〈南居住区〉最外縁の溝であり、本調査によってV期にはS DXVとともに2条並走していることが確実となった。

ところで、『昭和60年度 年報』執筆時には、内側の溝をIV期単純と考え、そして他の地区におけるS DXVI相当部分(S DV・VIbなど)でIV期土器が出土していたために、V期からVI期初めにかけての2度の環濠掘削を1条→2条という図式で理解した。〈南居住区〉北縁では、S DV西部の経具部分寄りの溝底からVI期土器が出土しており、VI期における2条の時間的並行が確実視されたからである。

さて今回の調査によって、〈南居住区〉南縁においては溝が2条→1条という変化をしていることが明らかとなっただけでなく、S DXVIIが東接する県教育委員会調査区において検出されていないことから、それが途切れて出入口用の通路を形成することがほぼ確実となった。ここに訂正するとともに、V期以降における一度目の環濠掘削（おそらくV期中頃）時における設計が二度目に比べて嚴重である点を改めて注目したい。

27. 63M区 図版41・44

A. 竪穴住居

II期はSB09が円形プランを呈する。SB05もII期のような。他はIV期以降を確認している。III期は不明。IV期のSB06はSB07を切る。後者はIII期かもしれない。

V期はSB01・02・03・10の4棟ある。SB03は周溝とは別に掘形周囲に幅広の溝がめぐる。埋土は貼床と同じベース土ブロックで、床面構造に関わる下部施設であろうか。

SB02は県教育委員会調査区と対応する。県資料 (SB55) はV期だが、ここでの出土土器はVI期である。

SB10は県教育委員会調査区との対応があるけれども、県資料 (SB56) はV期であるがここではVI期の土器が出土しているし、周溝の幅が極端に狭い。ただ、県資料では周溝は貼床下にあるので構造的にSB03と同様であり、周溝として考えれば問題はない。問題はその規模である。短軸は不明だが長軸で約10mを測り、規模が大きいのである。問題を残す。

以上はベース面で検出した遺構であるが、包含層中でも炭化物や焼土を伴う面を確認している。おそらく焼失住居であったろうけれども、プランを明確にすることはできなかった。

B. 土坑

土坑は北部で時期の異なるものが重複している。重複が激しく特定できないものが多い*。



▲炭化物と焼土(焼失家屋?)



SB03(南西から)

第103図 63M区 近景

*本調査区も63G区と同様遺構面が砂層であるために遺構の強削と遺構面の維持に苦労するとともに、地下水位の高いことと度重なる降雨に悩まされた。そうした悪条件もあって激しく重複し合う遺構の識別は不十分に終わった。

28. 63N区 図版23・24

上面遺構群 IIIa期

A. 方形周溝墓

SZ150・152は墳丘を確認した。SZ150はおそらくA4形プランである。IIIa期。SZ152は南北の溝はSD01・02と重複してはつきりしなかったが、東西溝は検出した。IIIa期。どちらも、主体部の検出はできなかった。

ほかの方形周溝墓は墳丘の検出ができなかった。SZ152はプランがA2形またはA3形で、周溝からの遺物の出土はなかった。IIIb期に下るかもしれない。

B. 土坑

SK01・06・12・13・14はいずれもの細長い土坑で、ほとんど遺物の出土がなかった。埋土は下部に攪乱状の部分があること、方形周溝墓とは離れていることから土壇墓の可能性がある。SK02～06は切り合いが激しく連結したようになっている。

下面遺構群 II期

A. 竪穴住居と土坑

SB01は上面の段階で中央部がスリパチ状に窪んでおり、竪穴の存在が予想できた。注目されるのは竪穴の周辺にベース土を含む土が認められしかも高いことで、それが周堤であったとは確定できないが、ベース土からなる土が周囲に盛り上げてあった可能性は高い。竪穴埋土もベース土の流入が顕著で、それらが崩壊して流れ込んだものであろう。

竪穴掘形は検出段階で壁の高さが約60cmあり、遺存状態は良かった。床面中央に炉穴があり、炉穴や床面直上には土器・貝が散布していた。また、竪穴を埋めている土には炭化物・焼土・貝が含まれており、しかも薄い層をなしている。おそらく、住居廃絶後に廃棄場所となったのであろう。

SB02は隅円方形プランと推測される。

SB04は北に周溝があるけれども柱穴は6本ある。長軸方向への拡張の可能性もあるが、それでは幅が縮小する。並びも良いので1棟分と考える。隅円方形プランで6本柱という珍しい例である。あるいは地床がもつ土間構造の掘立柱建物であった可能性も高い。周溝は壁下端の痕跡かも知れない。

そのほか、SZ150下面では小穴が多数存在したが建物になる並びは認められなかった。

土坑のうちSK09・10・11には炭化物・焼土が含まれており、SB01・02に付属する廃棄物処理土坑であろう。

B. 溝 II期からIIIa期初頭

SD02は明らかに上下に分かれる。下層は上部に黒色砂質シルトが堆積し、木材断片や貝が含まれている。下部は黒色砂質シルトとベース土(青灰色シルト)の攪乱した層で、ベース面そのものが不安定になっていることから堆積層としての特徴だけではない印象を受けた*。上層は灰色砂質シルトで遺物もあまり出土していない。時期は特定できないが上部には砂層の堆積が見られた。

SD03は土層セクションでは重複している可能性が窺えたが、SD02ほど明確ではない。

この2条の溝は時期・位置とも並行しており、同時に掘削されたものと考えられる。その性格は、溝自体より溝間に焦点があると考える。すなわち、居住域と谷Aとの間にあることから、谷Aの水位上昇に対応した防水的性格と、「道」的な性格である。



第104図 63N区(南西から)

*ベース面の不安定さは、特に西側から溝西斜面にかけて面的に認められ、東側が安定しているのとは対照的であった。この不安定さについて、少なくとも遺構埋没過程に生じたものではなく、後世の何らかの物理的圧力かによって生じたものではないかという印象を持った。

29. 89A区 図版43~45

A. 竪穴住居と土坑

重複が激しく、検出できたのはⅣ期以降がほとんどである。正方形プランが目だつのは、これらの住居がⅤ期、Ⅵ期だからである。ほとんど貼床をもち、柱穴も4ヵ所確実に存在する。

SB08はⅤ期で、63M区SB03と同様に掘形に幅の広い溝がある。SB09も幅が広い。

SB19はⅥ期の住居で、Ⅴ期の住居群とは軸線が異なる。

SB41はⅣ期で、同時期の溝であるS DXIと軸線があう。規制されているのであろう。

SK68はⅣ期の土坑で、炭化物・灰・焼土が互層をなし、また土器も大量廃棄されていた。土器には被熱して変色したものがある。

Ⅴ期・Ⅵ期の住居には貯蔵穴を有する例がほとんど無い。

B. 溝

S DXはⅡ期からⅢa期にかけての溝である。この区域では貝殻廃棄は目だたない。砂とシルトの互層が顕著である。

S DXⅡはⅣ期で、炭化物を含み有機分も多いが、61H区で見られたような大量の貝殻廃棄はない。しかし、獸骨などを多く含み、貝殻も腐食して遺存していないのかもしれない。

30. 89B区 図版46~48

上面遺構群

A. 溝

S DXVとS DXⅦはⅤ期、S DXⅥはⅥ期である。調査区のはほぼ中央で方形周溝墓S Z 1 6 2と関係があるように屈折する^a。

S DXVは幅不明、深さ約1.4m、S DXⅥは幅約4.5m、深さ約1mである。溝の北側には排土を盛り上げたと推測されるベース土を含む土層がある。厚さ約20cmで、土塁というには程遠い。しかし、これだけの溝を掘削した排土にしては少ない。上部の削平はあきらかである。

S DXⅦは幅約3m、深さ約1.2mを測る。埋土は下部には黒褐色砂質シルトが堆積し、東部ではベース土の流入が見られた。上部にはS DXⅥ上層と同様の層位があり、Ⅵ期には溝状の窪地となっていたようである。

両溝間には上部に厚さ約10cmの盛土があるが、上述したように量は少なすぎる。最終的に溝に流入したにしても、当初掘削時には高いものであったろう。

S DXWはS DXVを改修した溝である。底面下部にはS DXV埋土が遺存し、大量の土器群が出土した。埋没は、人為的にはⅥ期の土器廃棄に始まり、Ⅶ期まで土器廃棄が継続する。そのあとは無遺物層である灰褐色シルトの堆積となる。

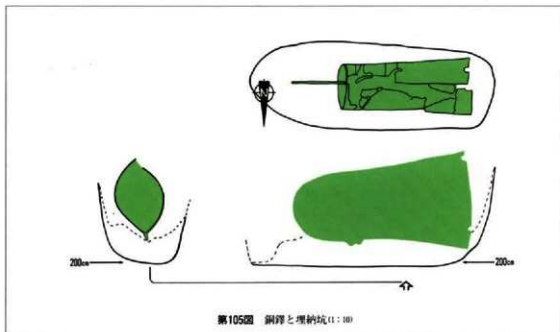
B. 方形周溝墓

S Z 1 6 2は正方形プランで、ほぼ独立して築造されており、群は形成しない。南東に陸橋部があり、東周溝南端にはテラスが存在した。

主体部は明らかにならなかったが、墳丘にはベース土ブロックが顕著に認められた。周溝からは底面より浮いて各種土器が出土した。埋土は上下2層に分かれ、下層には黒褐色砂質シルト、上層には暗灰褐色シルトが堆積していた。土層セクションの観察では周溝を再掘削した印象をうけた。特にⅥ期の土器が含まれていることが注意された。

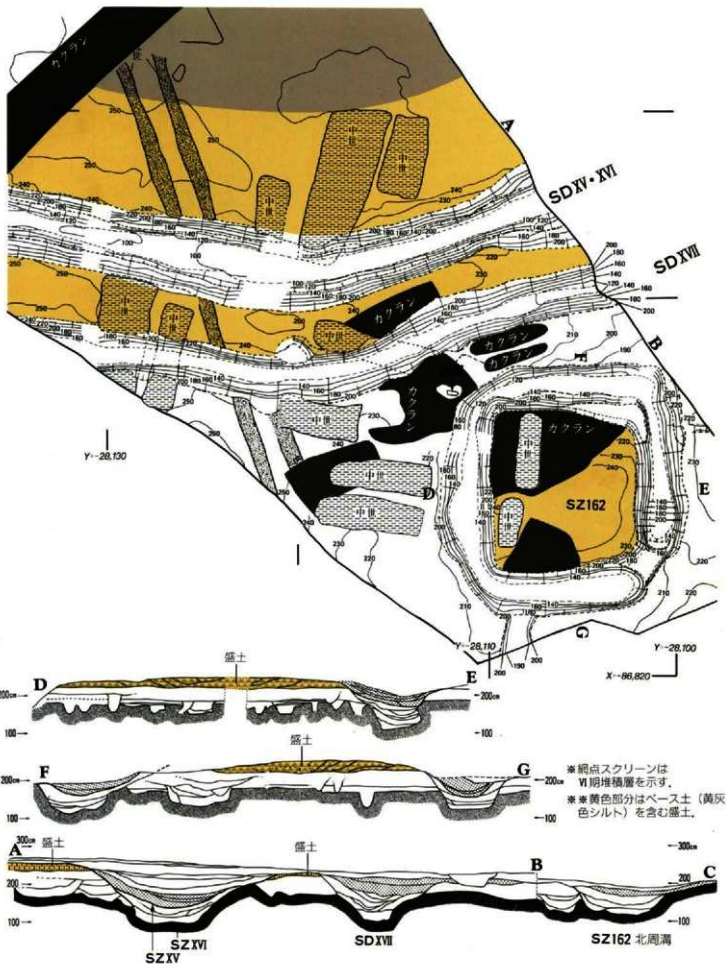
C. 銅鐸埋納坑

長軸がほぼ東西になる64×22cmの長楕円形のプランで、断面はU字形を呈し、深さは25cmを測るが、銅鐸本体は坑底から5cmほど浮いて出土した。埋土はまわりの包含層(Ⅳ期)と同じ土で、埋納坑下部5cmは、銅鐸をうまくねかせるために土を詰めたものと考えられる。銅鐸の内部にも同様の土が詰められ、Ⅳ期の土器片が入っていた。



D. 土坑

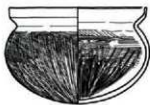
SK77・78はⅥ期の土坑である。



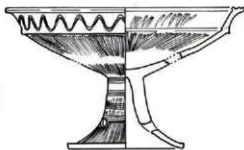
第106図 89B区 上面遺構群(1:300)と土層セクション(1:100)



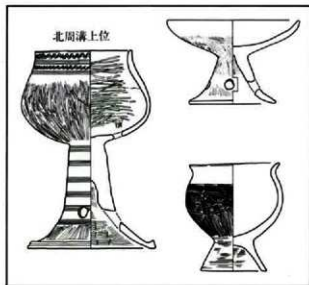
西周溝上位



北周溝上位

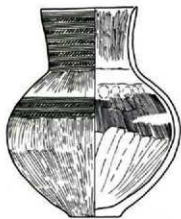


東周溝上位



北周溝上位

東周溝下位



南周溝上位



南周溝下位



下面遺構群

A. 竪穴住居

II期 SB20は隅四方形プランでS DXVIIに大きく切られている。長軸方向への拡張がある。SB19も出土土器はないがII期の可能性が高い。SB04はSB03に切れられ、IIIa期でも古相を示し、II期に遡るかも知れない。

SB01は、埋土がベース土の攪乱土であり、III期までの特徴を示している。II期に遡る可能性もある。SB10はSB01のような整地状況を見せていないが、すぐ西には旧地表が残存しており、これまでの事例で判断すればII期に遡る可能性がある。ちょうど中央にあるSK40はII期であり、これが中央土坑である可能性は高い。

SB12はII期、SB13もII期と推定される。下ってもIII期である。

III a期 SB21はSB20に重複し、一部の検出にとどまった。SB22は台形気味のプランを呈する。SB23も同様である。SB25は小規模で、北辺では層位の乱れがあり、周溝は明確ではなかった。軸線はSB22に一致している。

III b期 調査区北半部に集中している。

SB14は台形気味のプランで上層にはIV期土器の廃棄がみられた。SB08はベース土ブロックで整地され上部にSB09床面が形成されている。SB07はSB09よりは古い。

IV期 SB05は焼失住居で礫・焼土・炭化した編物が出土した。SB06はこれに切られている。南西部から延びる溝はSB06の周溝と接続しており、まるで排水溝のようであるが、性格は不明である。

SB15は下部にもう一面床があり拡張したものかもしれない。下部にある土坑SK25・32はIII b期である。

SB16・17・18は辺の張り出しがあり、IV期の可能性が高い。

B. 土坑

a：炭化物や焼土を含む例には、土器を含まないために時期のわかる例が少ない。SK72はIII a期で、焼土が多量に含まれていた。SK08はIV期で炭化物・焼土・灰が層を形成して含まれていた。SK05は上下二つの土坑の重複のようであるが、上部はIV期で灰を多量に含み、下部はベース土の攪乱土を埋土としている。これらから出土した灰のうち、粒子が明瞭なものはほぼ植物ケイ酸体からなり、木材などを燃やしたものとは異なる。

b：土器廃棄の例には、SK06・17・68がある。SK06はIII a期の土器とIII b期の土器が密に出土し、異なる時期の土器の一括出土の典型となっている。SK17は埋土上部からIV期古相が大量に出土した。SK68は上層はIV期だが、下層にII期の土器群が含まれていた。

c：上記とは別に、III b期のSK11ではベース土の攪乱を埋土としている。ベース面が高ければ土坑の深さに対応してベース土ブロックが形成されることになるが、それでも包含層を埋土とするものもあるから、埋め方（整地方法）の違いとして注意する必要があると考える。

この、ベース土の攪乱を埋土にするということは、土坑の用途にも関わることである。土坑が「穴」

として開放されている期間の短いことを示しているのであろう。

これら以外は多くが包含層(黒褐色シルト)を埋土としており、遺物に特徴もない。有機物は廃棄されれば分解して残らないことも考えられ、竪穴住居との位置関係を検討する必要がある。

●埋納坑の時期について石黒は、これまでいくつかの紹介文で弥生時代後期末としてきたが、ここで2、3の問題点を提示しておく。

埋納坑の時期についてわれわれは、当初極力層位関係を重視して決定した。すなわち、「近接する方形周溝墓や環濠は山中期(本書のⅤ期に相当する:筆者注)に属すること、それらを埋める包含層の二次堆積のさらに上部を埋める明灰色シルト層との漸移層に続くと思われる層を埋納坑が切っていることなどから、山中期を避けることはないとする。そして、より近接する方形周溝墓の溝上半を埋める明灰色シルト層下部から欠山期(本書のⅥ期に相当する:筆者注)の土器が出土しているので、埋納坑の年代はそのあたりにあるものと推測する。」と解釈した。しかし、そのなかで発見当時から気がかりだったのは、銅鐸埋納坑、2象の環濠、方形周溝墓3者の位置関係であった。

問題となる点は

- ①SDXⅦを屈曲させないとそのままSZ162北溝に連して重複する。
 - ②環濠は銅鐸埋納坑付近で屈曲するが、溝はそのまま直線的に伸びないで方形周溝墓の北でまた南にもどる。
 - ③SZ162は出土土器が環濠出土土器よりはやや先行する印象をうける。同時としてもそれは土器編年上の同時であって遺構の実時間では逆転する余地を含む。
 - ④環濠と方形周溝墓の関係では、朝日遺跡では環濠が新しい場合には方形周溝墓の溝に重複させて通すことは何ら珍しいことではない。かえて、方形周溝墓の溝を避けることの方が珍しい。つまり、SDXⅦは方形周溝墓を避けたのではなく、銅鐸を避けたのではないかと思うのである。そして結果的にはたまたまその延長線上に方形周溝墓があったにすぎないのではないか。もちろん、だからと言って銅鐸と方形周溝墓の時間的関係が確定できたわけではない。銅鐸の製作年代はⅤ期末からⅤ期初頭である可能性もあるから、銅鐸埋納が先になるかも知れない。しかし少なくとも、銅鐸の埋められていることが確実に伝承される期間内であれば疑い得るであろう。
- このように言うと、これまでの紹介文での立場との相違が問題となるけれども、それもまた可能性としてあると考えている。

31. 89D区

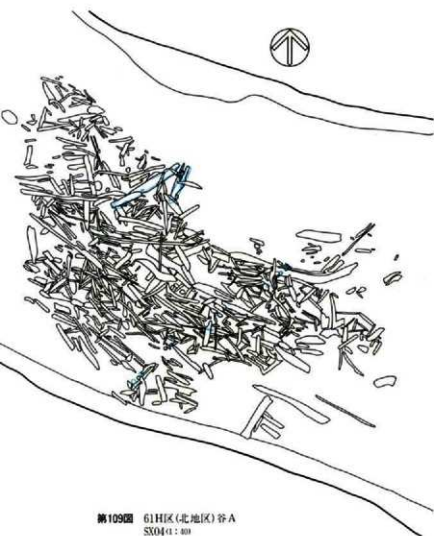
25平方メートルという狭い調査区である。ベース土が覚乱状をなす整地土を埋土とするⅢ期以前の竪穴住居2棟を検出した。注目される遺物には住居外の包含層下部で出土した銅鋼片がある。

第4章 古墳時代

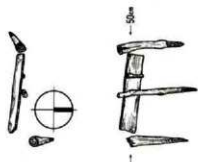
ここでは、調査区ごと個別に説明するほどの遺構数があるわけではないので、微高地単位で西・北・南・東まとめて説明する。

1. 谷A内の遺構

61H区SX03 杭と横板の構築物である。本来は東西にさらに続く護岸施設の一部であろう。出土位置・標高からみておそらく河道Ⅳに対応すると考える。南側に対応す



第109図 61H区(北地区)谷A
SX04(1:40)



第108図 61H区(北地区)谷A
SX03(1:40)

る遺構はなかった。

61H区SX04 河道を横断する杭列と、杭によって打ちつけられた丸太である。多量に集積した流木群(若干の木製品を含む)下から検出された。流木は杭列の両側にあり、杭列のために集積したものではない。杭列は流木を集めるほどのものではなく、水量の低下によって取り残されたなど別の原因で集まったのであろう。杭列の役割

は不明である。

谷Aの河道は、おそらくⅥ期末にはかなり埋没が進行し、また水量も低下したことが関連する遺構の状態から推測できる。その場合、60E区では他の地区には対応しない河道が観察されているので、弥生時代から続く流路の衰退と新しい流路の形成があった可能性が高い。県教育委員会調査区のうち最北端では新しい時期の河道が検出されており、朝日遺跡付近全体の自然流路の走向に変更が生じているかもしれない。

谷Aは古墳時代後半期以降は遺物の出土もなく、また粘土やシルトの堆積が進行するけれども、61A区では上部で厚さ約10cmの砂層が検出され、また面的に続くことから一時期流路の形成があった可能性が高い。遺物を伴わないので時期決定は難しい。土層セクションでは中世土壇（13世紀～14世紀）の切込み面より35cmほど標高が低い。

2. 西部地区

北東から南西に向かう溝が検出されている。包含層最上部からⅥ期の土器（甕を含む）が出土しているので、この時期には墓域ではなくなっていた（水田か？）かもしれない。

3. 北部地区

61E区SD21・22・23は完全に埋没しきらないでⅥ期まで窪地状をなしている。水流があったとしてもそれは水路と言うほどではなく、地表の水を集めて流す程度の間欠的なものであろう。ヤナはすでに崩壊している。

4. 南部地区

61A区・C区 SDⅥ上部の砂層は自然流路の堆積層と考えられるもので、61C区南部でSDⅥと走向がずれてSZ115南溝を貫通し、県教育委員会調査区においても方形周溝墓周溝に重複して調査区外へと続いている。谷A河道の氾濫による現象であろう。

61H区 包含層上部を約10cm掘り下げた段階で土器廃棄の集積とそれを伴う落ち込みをいくつか検出した。平坦部での土器集積はⅥ期土器を中心とし、黄灰色粘土を埋土とする落ち込みへの土器廃棄はⅥ期末を中心とし、時期と状態の差は明確である。両者とも住居と認定した。

SB109からは、床面と考えられる炭化物薄層面直上より完全なS字状口縁甕が出土した。他の竪穴住居も認定根拠は炭化物薄層面の有無であるが、遺物の多くは推定床面から遊離している。

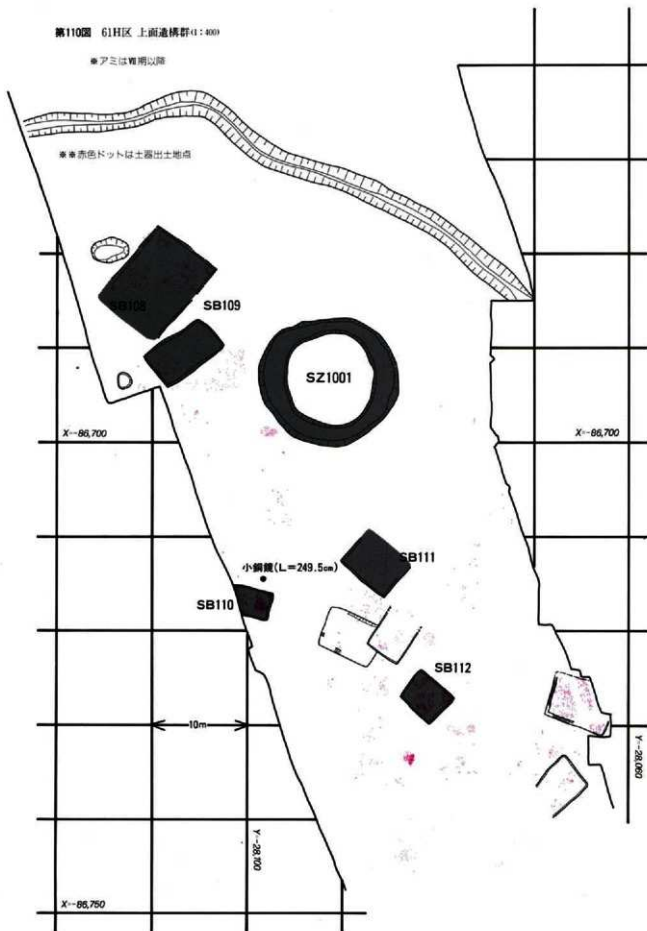
SZ1001は5世紀末の円形周溝である。周溝は深さ20cmほどを検出したに過ぎない。溝南部から須恵器甕が潰れて細片となって出土した。本来正立に置かれていたものと考えられる。西にある検見塚との関係が問題となる。

63B区 住居を1棟検出した。SB05は1辺6.8mの正方形で、深さ約50cm。埋土は自然埋没で、黄灰色

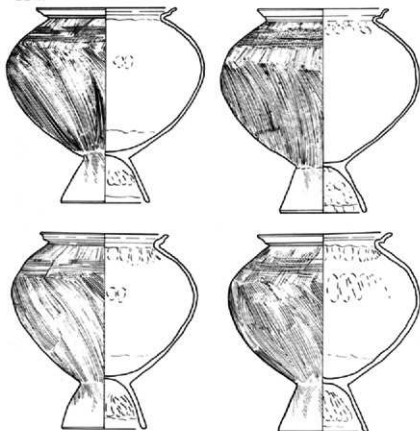
第110図 61街区 上面透視群(1:400)

●アミは葺明以降

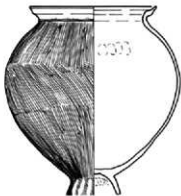
●赤色ドットは土器出土地点



61H区
SB109



89A区
SB30



第111図 竪穴住居出土土器の一部(1/4)

粘土が上部に堆積していた。床面には貼床があり、その上に土器群と砥石が遺棄されていた。糞は出土していない。土層セクションでは周堤の存在が窺えた。南西にある弥生時代後期(V期)の方形周溝墓SZ160北周溝埋土上部からはS字状口縁甕が出土している。先の竪穴内出土土器では小型丸底壺が目だつことは対照的である。

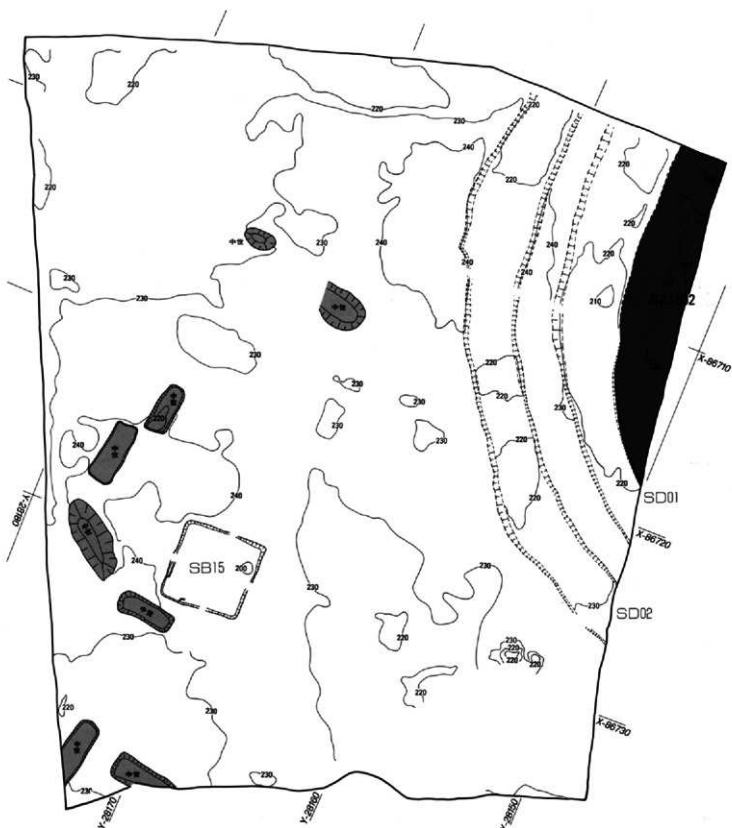
63G区 弥生時代包含層上面で検見塚を中心として弧を描く2条の溝(SZ1002)、1辺4.6mの正方形プランの竪穴住居SB15を検出した。

2条の溝は、外側の溝(SD02)幅約3m、内側の溝(SD01)幅約4m、溝間約4mを測る。両溝とも浅くて、その平均は25cmである。これら弧状溝の円周を正円として復元すると、内側の溝内周で径36m、外溝外周では53mという規模となる。溝からの出土遺物はほとんど無いが、付近で出土した埴輪片や61H区の円形周溝SZ1001の時期から考えて、5世紀後半から6世紀初頭の間におくことができる。そしてSZ1001と同じ性格の遺構、つまり墳丘の削平された古墳の痕跡と考えられる。

63J区 埋土上部に黄灰色粘土が堆積する住居を1棟検出した。SB12は1辺約4m×3.8m、深さ約40cmと小規模である。床面の北東柱穴脇の小穴から甕期末の高杯杯部と完全な小形器台が重なって出土した。

63M区 埋土が黄灰色粘土の深さが約40cmの落ち込みを検出したが、竪穴住居とは認定できなかった。

89A区 埋土上部に黄灰色粘土が堆積する竪穴住居を1棟検出した。SB30は隅円長方形プランで5.2m×3.9m、深さ約50cmを測る。床面はベース面に達していない。検出面で比高約10cmの周堤を検出した。本来はさらに高かったであろう。



第112図 63G区 上面遺構群 (1:200)

5. 東地区

61N区・P区 調査区東部で弥生時代中期(Ⅲa期)のSZ229・SZ244両方形周溝墓東周溝に重複する溝状の遺構(SDXIX)を検出した。県教育委員会調査区でも連続部が調査されており、砂層と流木の堆積が観察されている。谷A河道氾濫による出水によって方形周溝墓周溝のような低い部分に水流が集中して流路が形成されたか、周溝間を掘削して人工的に流路を設けたか判断は難しいが、溝は直線的ではなく方形周溝墓の周溝に沿う形で蛇行しているので、あまり計画的なものでは無かろう。

61T区 弥生時代中期(Ⅲb期末)の大形方形周溝墓SZ301北周溝埋土上部から多量の土器が出土した。釜・甕など器種がそろい炭化物なども出土している。他の周溝の調査が十分でないので確定できないが、このようなあり方から当初、この「溝」は「居館の溝」ではないかとも考えたぐらいである。方台部は1辺約35mで居住区画として狭いものではない。

これら土器群はいずれも生活痕跡と考えられるのであり、県教育委員会調査の「SA001」がすぐ北に位置するのでおそらくそれとの関連であろう。なお「SA001」はⅦ期の大形方形竪穴住居である。

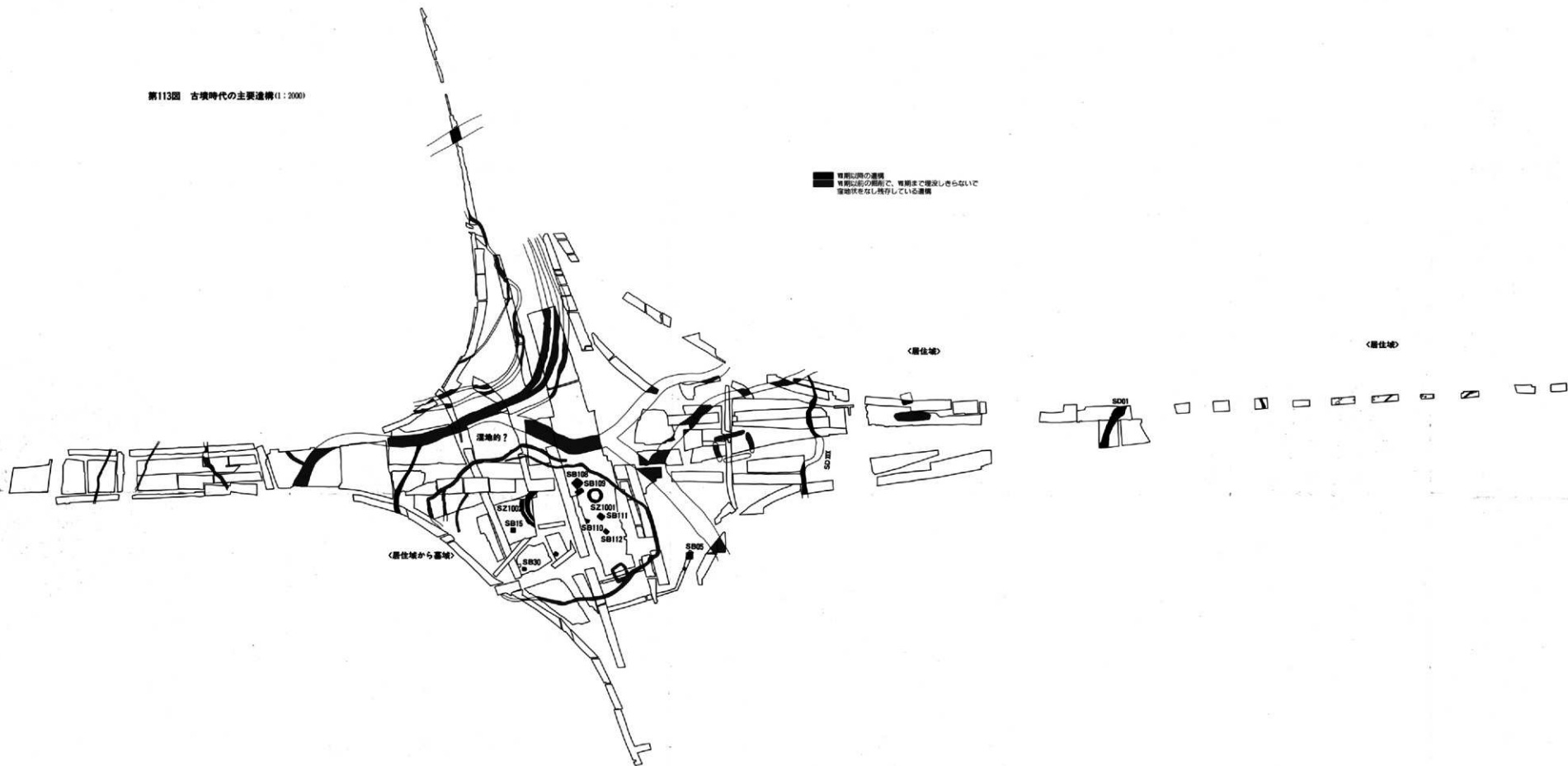
62B区 調査区東部で近世以降の溝に切られる古墳時代の溝(SD01)を検出した。検出時での幅約10m、深さ約1.8mを計測する。埋土には新旧の切り合い関係を示す部分があり、弥生時代後期まで遡る可能性がある。すなわちこの溝以東にひろがるⅦ期以降の居住域との対応が考えられる。

新であるSD01-2では底面から20cmは砂層が堆積し、それ以上はシルトまたは粘土の堆積となっている。この溝の続きを検出した県教育委員会調査区では下部からⅦ期末の土器が出土している。

幅が10m、深さが2m以上と推定されるこの大溝は、Ⅶ期以降は水流の低下によるシルト・粘土の堆積となっていき、こうした変化は60E区を除く谷A河道ⅣがⅦ期には植物遺体やシルト層の堆積によって活動の低下・終息することと対応すると考えられる。61E区SD21・22・23、SDXⅢなどが埋没するのもⅦ期末であり、谷Aの動向と関係している。このような関係は水域としての連続性を示すものとして、それら溝が谷A河道から分流した水路である可能性が考えられる。そして、規模の大きなことは導水だけではなく交通運送手段としての運河の役割をも考える必要があるだろう。

62C区～J区 Ⅶ期単純の遺構は62G区に集中している他はⅦ期からの継続である。調査面積は狭いが居住域であることはまちがいない。

第113図 古墳時代の主要遺構(1:2000)



第5章 中世

1. 土 壇

谷Aを除く西・北・南の各地区と、東地区の一部で検出した。しかし、遺物を伴う例がきわめて少ないことから時期決定できた例は少ない。

土壇は長方形プランと正方形プランを基本としてその変形したものもある。軸線の存在は明かで、東西南北の方角線が抽出できる。この点に関わって、分布上の全体的な粗密は特に認識できないのに対し、61H区・89B区では方角による単位の形成が窺える。

方角単位aは北東に開くコ字形で幅約18m、方角単位bは南西に開くコ字形でこれも幅約18mを測る。両者とも閉じるかどうかは確定できない。

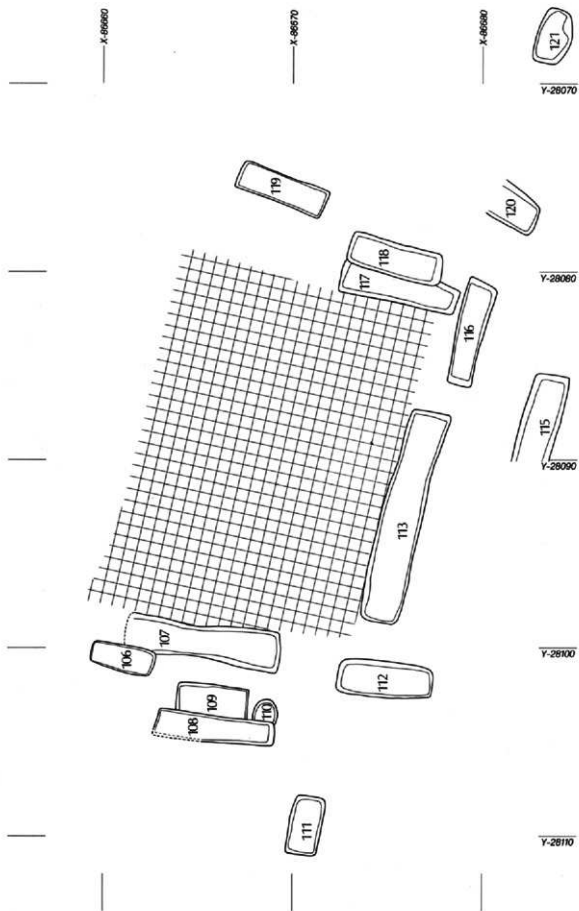
通常は、埋土は黄灰色あるいは灰褐色のシルト・粘土と弥生時代包含層（黒褐色砂質シルト）のブロックがまざりあう攪乱土であるが、89A区の方角単位bでは大形の89・91が珍らしく自然埋没であった。89では埋土の灰色粘土からヒシの実が出土した。おそらく周辺は湿地的であり、漂着したのであろう。

遺物を伴う例は非常に少ないが、方角単位bでは内部にある97・99から山茶碗と小皿が出土した。97では土壇の東部から壇底より5cmほど浮いて山茶碗と小皿が正立で、99も土壇東部から山茶碗が5cmほど浮いて正立で出土した。

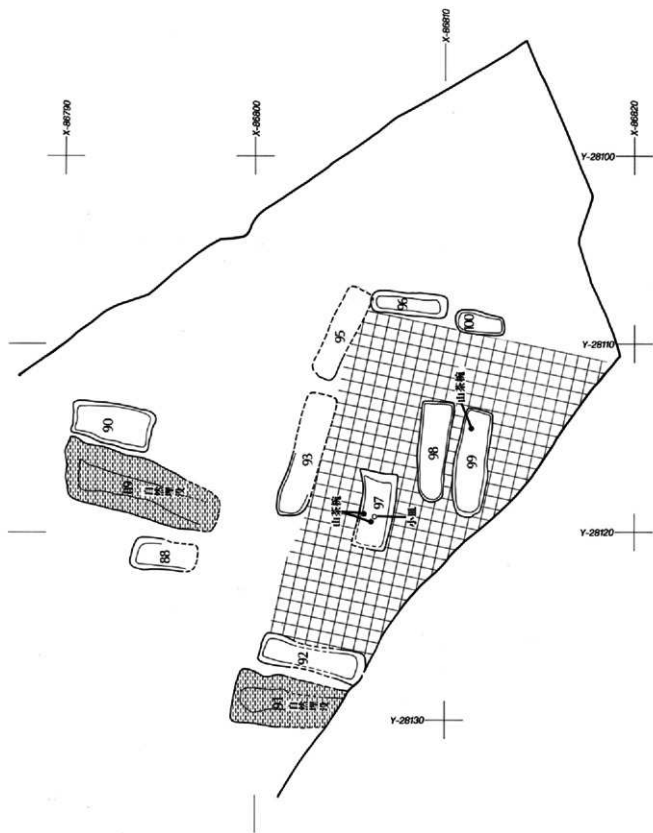
これら多数の土壇が掘削された時期にこの地域が湛水する環境であったことはヒシの実が自然堆積層から出土していることから窺える。これまでの名古屋環状2号線関係諸遺跡の調査において同様の遺構の検出があり、「墓」である可能性も説かれている。おそらく、これらの土壇は墓であり、無住の荒地であったこの区域が墓地として利用された可能性は高い。その場合には、西方600mに位置している朝日西遺跡との関係が問題となる。

2. 谷

この時期谷Aは、面的には検出できなかったけれども土層セクションに土壇の存在が確認できるので、ほとんど埋没していたと考える。それに対し、谷Bは地表面より2m内外低い窪地であったことが山茶碗の出土レベルから推定でき、このことを示すかのように61H区土壇群は東西の軸線がやや南東に振れている。おそらく地表の水を集める水域として沼沢状の区域であったのであろう。



第114图 61H区 中世土坑群 方向单位 a 1:200



第115图 89B区 中世土坑群 方角单位b1:200

第6章 その他

近世以降の遺構は西・北・南各地区では明確ではない。89A区では水田に関わるものと考えられる南北方向に平行する2条の溝が検出されたにとどまる。

それに対し東部地区ではやや密度が高い。61N区では南北に直進する溝が検出されたほか、62B区調査区東部で枕列を伴う幹線水路と推測される溝とそこから分流する溝、西北西から東南東に走る幅1.6mの溝とそれに平行する壱状の溝が検出されている。また62C区以东では水田（造成）によると考えられるベース面の削平が確認されている。

全体的に東部での近世以降の遺構が密である傾向を示すが、これは近世集落の「小田井」に近づくからであり、それに対し西部は集落の無い水田の広がる区域であったことによるのであろう。

第7章 分析と若干の考察、そして展開

—弥生時代を中心に—

朝日遺跡の整理・研究はまだ始まったばかりである。遺構に関する説明は行ったが、遺物などを含めた全体像の提示はこれからである。遺構は遺物と共にあることに重要な意味があるとするなら、本書に十全の意味は与えられていないことになる。

第6章までは記載の都合上、断片的な説明に終始した。いわゆる事実の説明である。そこで、以下では断片的資料を少しでも全体に関連づけるべく、鍵となる項目ごとに要約的に整理する。ただし、細部にわたる検討は今後に予定される遺物の検討を経なければならぬので、以下では全体的様相について概観しておくにとどめ、詳細な検討および比較研究は「第IX部 総論」（1994年刊行予定「朝日遺跡Ⅴ」収録）において新たに行うことにしたい。

1. 遺跡の地表面

朝日遺跡の最終地表面において標高260cm以上は、中世から近世・近代にかけて削平されている。そのため、存在が想定される土塁など地表面に突出していた遺構は検出できないことになる。

地表面は時間的変化に対応したその時々凹凸のある遺構面とそれ以外の平坦面とからなる。その自然地形としての性格は人間活動の最初期こそ保持されたものの、時間経過とともにすべて人工的地表面となる。

我々が「ベース土」と呼ぶ黄灰色シルト面は、初めて朝日遺跡周辺に人間が接近した時点では地表に露呈することなく、おそらく黒褐色シルトに覆われていたものである。それが地表の攪乱(生活軌跡の累重)によって、ある部分は黒褐色シルトが失われてゆきその下の黄灰色シルトが遺構構築面として、つまりベース面として我々の前に姿を現すことになった。黒褐色シルトの遺存区域は決して広くないが、多くは偶然遺構が構築されないことによって保護された。だいたい上部に盛土が観察されることからみて、景観的には隆起部を形成していたようである。

我々が包含層と呼ぶ地層は砂質シルトで、黒色から黒褐色・茶褐色というように鉄分の酸化度ともからんで色調は変化している。包含層は基本的に攪乱土であるため、深く掘られて黄灰色シルト下の砂層まで達している場合には、含まれる砂の量が多くなり、砂質シルトではなく砂となる。

これら包含層は遺構掘削という垂直方向の攪乱を主な原因として形成される。そして、地点によっては61D区のように黒褐色シルトが面的に遺存しているところもあり、そこでは包含層が水平移動によってもたらされたと考えられる。この点は、遺存している黒褐色シルトの上面標高の比較から、当初起伏のあった地表面が人工的改変によって平坦に均されていったことが窺える。

地表面に関わって重要なのは、谷A周辺や61H区SDX南岸の侵食面の存在とは対照的な現象の存

在である。例えば、61E区南端ではⅢb期の居住域が検出されたけれども、標高が低いにも関わらず侵食は受けていなかった。包含層の堆積がベース面の露呈を防止したと言うこともできようが、谷Aに平行して掘削されている溝の存在も無視できない。この点で61H区SDX北岸の状態が目される。このSDXでは、南岸が平坦面を形成するほど侵食されているのに対し、北岸にはそうした痕跡は皆無であり、黒褐色シルトの遺存および遺構分布の散漫さにも関わって、北岸に盛土が行われていた可能性を強く思わせる。

すでに述べたように地表面が人工的であることは、それが平坦であれ起伏が存在するのであれ、いずれも人工環境であることに変わりはない。

2. 住居

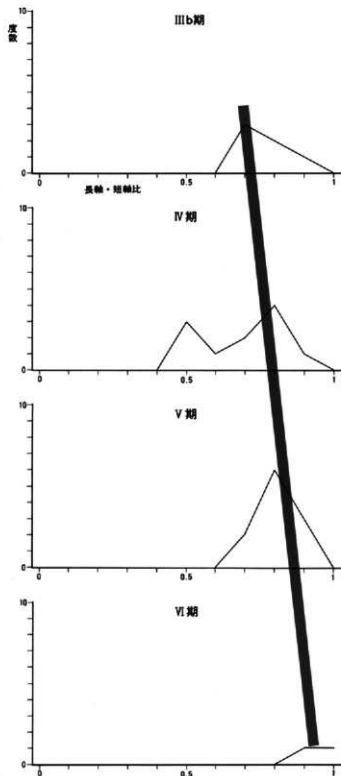
住居には竪穴住居と掘立柱建物がある。前者を竪穴建物、あるいは半地下式建物と呼ぶきもあるが、ここでは用途(機能)を含めて用語上の問題は問わない。

A. プラン・規模

竪穴住居 円形と方形の2項を基本とする。後者には変異がある。Ⅲ期までは、長方形プランとともに、短辺の一方がもう一方よりも短い台形気味の方角が存在する。Ⅳ期は小円形ほど剛は張らないものの、各頂点(隅)の円みが強くなり、極めて定形的である。Ⅴ期以降は長軸と短軸の比が小さくなり、正方形も出現するようになる。住居の拡張を示す周壁溝の多重する例は円形に顕著である。

規模は、Ⅱ期・Ⅲ期では円・方形問わず径2m前後という小規模例が存在する。大形はⅣ期にある。Ⅴ期以降は全体的に規模の縮小と平均化が特徴的となる。

柱穴は、Ⅲ期までは本数も定まらず特定するのに困難である場合があるのに対し、Ⅳ期以降は4本



第3表 方形住居長短比度数分布

柱が主となって検出も容易である。上屋構造の差異に関わるのであろうか。

掘立柱建物 遺構の密集する区域では検出が困難であるため、いきおい例数は少ない。

II期は東微高地の掘立柱建物群が典型的である。我々の調査では61N₂区で大形方形周溝墓下から1棟検出したが、周辺ではすでに県教育委員会調査においていくつか検出されている。梁間2間、桁行3間以上と梁間1間、桁行2間の2棟を1単位として、少なくとも3単位の存在が明かとなっている。他、各調査区に散在する。III期まではプランに竪穴住居と同様の台形傾向が認められる。

III期は特定できない。61E区南端の谷A北岸部でII期からIII期の掘立柱建物群が存在している。

IV期は上述のII期と同様に東微高地に群が存在する。『報告書』によれば、南北に廊をもつ主棟と梁間1間の副棟が展開する。61G区で検出した大形掘立柱建物はIV期である可能性が高い。

V期は61H区南地区1で大形掘立柱建物1棟を検出した。

B. 群と配置

住居は単独で存在することはなく、基本的に群在する。時期ごとの分布は別図に示してある。県教育委員会資料も含めて概観するなら、IV期を境にして大きな変化がある。

II期 II期は南微高地・東微高地ともに住居跡群を検出しており、後者に特長がある。61M区・61P区では竪穴住居が中心で、しかも方形プランが卓越している。円形プランは61N₁区北部で確認されているが(おそらく県教育委員会調査区を含めてもそれほど多くはないであろう)、どうも方形プランとは混在しないようである。そして、さらにそれら竪穴住居と区域を異にして掘立柱建物群が展開する。住居構造の差異が分布差に関連している観がある。

南微高地では錯綜する遺構のために掘立柱建物の分布を明らかにすることができなかった。竪穴住居は、東微高地のような床面プランの差異に基づく分布差はそれほど明確ではない。円形プラン群、方形プラン群は境界をもたず漸移的に移行する。従って、両形プランを含めた混在群を認めることもできる。

東微高地では明確でなかった分布の持続に関しては、円形プランには周壁溝が4条めぐるのがあり、方形プランの2条に対してより固定的である。しかし、それでも60B区S B03・04の関係のように、拡張住居と非拡張住居とのセットがあり、〈定点としての住居〉と〈移動点としての住居〉を区別する必要を示している。

分布の持続は上述のような定点としての住居が中心を形成することによって安定するものであり、これまでのところ方形プランは定点とはなりえていないようである。方形プラン群は絶えず移動する点として遊動している。ただし、61P区に特長的に見るように、竪穴住居群が群として軸線を共有(相互規定)していることは重視してよいであろう。

III期 東微高地の居住域が移動した以外、基本的にはII期との差異はない。前半と後半では集落としての様相に変化があると予想されるけれども、個別的に変化があるかどうかは資料的制約もあり明かではない。

IV期 プランは円形が消え、隅の円さが目立つ方形(側張隅円方形)プランに限定される。南微高地ではほぼ竪穴住居群が主となり、東微高地では上述したような掘立柱建物群が竪穴住居を僅かに伴いな

がら一角を占める。

南微高地では、61D区・61H区北地区などにおいて周壁溝の著しい重複例が検出されている。個別に時期決定することは困難であるけれども、それらが方位性を有する周壁溝群であることから時間的に近接していることが窺われる。だとすれば、激しい建て替えがあったということになる。

方形プランでは、通常建て替えの連続性は把握できない。拡張は連続として認められるものの、主軸が変化すれば連続性の根拠は低下する。したがって、61D区・61H区北地区例のように主軸が一致したまま周溝が錯綜する例は逆に特異でさえある。このようなあり方は、通常の住居構築例から大きく逸脱するのである。ある意味では、こうした区域も定点であることを示していることになる。すなわち、Ⅲ期までは拡張する円形プラン住居に中心点が設定されていたのに対し、円形プランの無くなったⅣ期では、住居ではなく区域に中心点が固定され、そこで連続して竪穴住居が構築されたのである。おそらくその反復は短期に繰り返されたものと考えられ、通常の集落での生活（日常的性情）ではなく、別の意味（非日常的性情）が与えられていた可能性がある。

Ⅴ期 Ⅳ期までの住居群のような広範な分布は窺うことができなくなる。床面高度の上昇によって検出できる住居数が減少するということもあるけれども、遺物の分布そのものがⅣ期までの範囲から縮小して、後に環濠が形成される範囲内に限定される。そして、環濠構築後にはその範囲はさらに縮小するようで、例えば63J区や89A区ではⅤ期住居が検出されているのに対し、その南の63L区・89B区ではⅤ期の住居はほとんど検出されていない。おそらく、環濠構築とともに内部構造が形成され、環濠集落では環濠→環状空白地→住居群という年輪状の空間構成が採られた可能性がある。

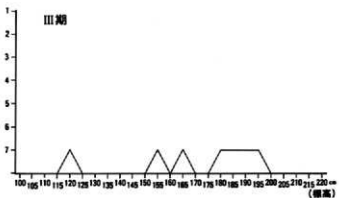
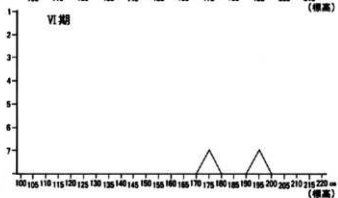
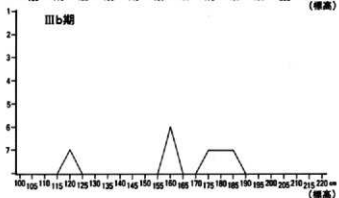
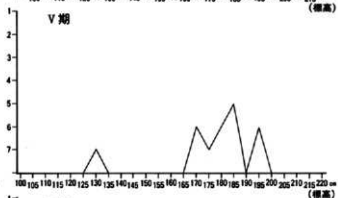
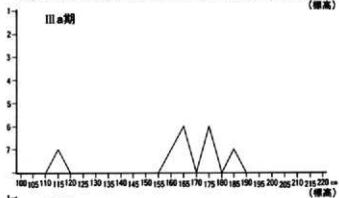
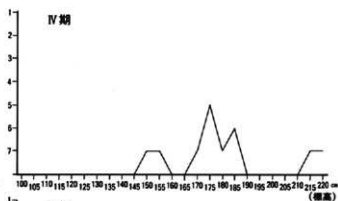
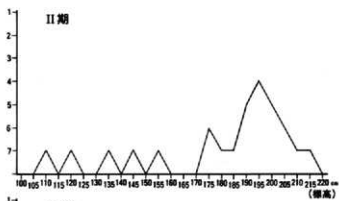
Ⅵ期 Ⅴ期以上に住居跡の検出数が少なく検討することは難しいけれども、南北微高地の居住域としての継続性とは別に、かつての墓域Bの一部が居住域化するという大きな変化がある。そして東微高地では東部への居住域の展開もみられ、散漫な中に広域化する傾向が窺える。

どうもそれまでの配列に密度の濃淡が窺えるような集村的景観から、散村的な景観へ移行したようだ。

3. 集落の形式

朝日遺跡は、Ⅱ期に環濠を造成する以前は散村的で、特にどこが中心と言うわけでもなく、住居形式差によるグループがいくつか分散的に並存する状態であった。それが、環濠造成と集住の開始によって居住域の外縁が確定しただけでなく、居住域の展開に密度の差ができた。つまり、環濠（大溝）で囲まれた範囲は密度が上昇することになったのである。

Ⅱ期になって初めて外縁に結界を設けることになる北微高地の居住域であるが、その囲み（囲郭）の全周は明かでない。それでも南部と東部の状況を見て決して単純な外郭線ではないことは明らかだ。南部（60A区・60B区・61A区）では谷Aに並行して南微高地北縁を東西に横切る溝がいくつかの小区画を形成して、溝間の隙間や陸橋部を通路的部分としながら配置している。東部（61E区）では、現状で（Ⅲ期に下る可能性も高く）未確認であるけれども方形区画を形成する部分が内側の大溝に取り付く様子を見せており、また別に平行する溝が東方へ延びるという、外郭が多少あいまいともいえる部分を



第4表 住居底面レベル度数分布

含みながら空間として形成されている観がある。

現状の知見では南微高地に環濠が存在する可能性は低いが、SDXのような大溝の存在は気にかかるところである。SDXは南微高地を東北東から西南西方向に走る溝で、居住域を分割する条濠的な存在である。ところが、溝掘削に際して生じる排土は、状況的に見て北側に盛られている可能性がきわめて高く、谷地形との関係などからこれを囲まれた部分とすることも可能なのである。つまり、朝日遺跡のII期居住域はそれぞれの単位がなんらかの形で区画（居住区）を形成しているのである。SDX以南についても63B区SD01のように断面逆台形の大溝が存在し、これについて特に盛土の状態を確認できたわけではないが、SD02のような並行する細い溝の存在から「築垣」的な構築物が並行して存在する可能性がある。

このように、南微高地には分割単位（居住区）の境界となる溝がいくつか造成されており、空白地ではなく溝という明示的・固定的な構造物による区画が行われていることは各単位の性格が比較的自立的であった可能性を示唆している。そして、機能的には専ら居住域としての地区と、南微高地北縁（谷A南斜面）での貝殻および炭化物・灰の多量廃棄から窺われる二枚貝の集中処理を行った地区という、北居住域には見られない様相が南微高地には観察できる。

北微高地の内容が決して十分ではないというマイナス面はあるが、こうした空間的配置を典型的に捉えるならば、最大の低地帯であり絶えず河道化する可能性を内在させた谷A（北居住域に取り込まれるという事実は重要）を挟んで二つの機能空間が並存するということが、朝日遺跡の特質として浮かび上がってくるように思う。つまり北は中心部分を含みつつもおそらく比較的均質であり、それに対して南は混成的（モザイク的）ではないかということである。しかし、果たしてこれがII期からIII期にかけての朝日遺跡の基本構造であり、かつ朝日遺跡としての固有性であるのかどうかは今後の検討課題である。

II期後半には上述のように朝日遺跡の基本構造が確立されたとして、その大幅な変形がIII b期後半から末にかけて行われた。すなわち、外郭の多重化・重装化である。

III b期後半から末にかけての時期には、谷A以外で大溝3条を造成し、谷A内では外郭最外縁となるSXIとした乱杭以下の非常に特異な構造を形作っている。

谷A内では、乱杭の北側（北居住域に対しては内側）に60B区SX01、61A区SX01・SX02（これは61EBSX02と連続するかもしれない）という特殊な遺構がある。これらは、溝内に遺存していた枝をもつ樹木a・b・c、断片化した小枝、61A区SX02東部に見られた溝底面に打ち込まれた杭およびそれ以外の部分にあった遊離した杭などから、本来の形状は次のように推定される。構築工程をたどりながら説明する。

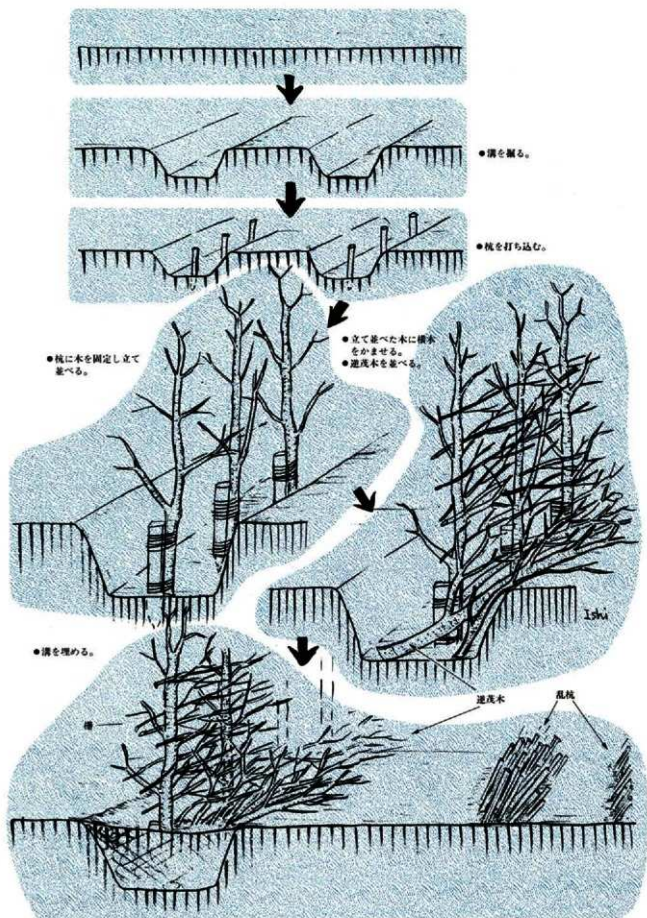
①溝を掘削し、底面に杭を打ち込む（調査では3本検出した）。

②杭に枝の張った樹木を固定し立て並べる。

③溝に直交して、枝の張った樹木を南（北居住域にとっては外側）に斜めにむかせて多数並べる。小さなものは溝内南寄りに立て並べる。基本的には上部を南に傾斜させる。

④溝を埋めてそれらを固定する。

以上が検出された遺構・遺物から推定される部分であるが、それらは基礎部分に過ぎない。上部の様子を推定すると次のようになる。



第116図 葎、葎茂木、乱杭想像復元図

②で立て並べた枝の張った樹木に、横木（貫）を渡す。どの程度の密度であったか知るすべはないが、構造的には密に立て並べた木柱列からなる壁面のように完全に塞ぐまでには至らず、比較的粗密があったと思われる。

このように、Ⅲb期には下部に逆茂木を配した地上部分の高さ2mほどの、全周せず部分的ではあるが〈垣〉というよりは〈欄〉を構築したのである。そして最も内側にはおそらく東部から連続する可能性の非常に高い大溝（61E区SD02、63D区SD08）があり、さらに内側に土塁が構築されていたかもしれない。

61E区で検出した台状遺構の基礎部分と考えられるSX01は、残念ながら上部構造は不明だが、基礎部分に関して定型的な土木工法の存在を窺わせるに足る遺構であり、これもⅢb期後半から末なのである。おそらく高さをもった一定の平坦地を造成するために採られた工法であろうが、その技術は岡山県津寺遺跡で検出された「塙」との共通性を示している。

このような変形はまさに、城郭の改修に匹敵するような大幅な集落構造の変更といった観がある。朝日遺跡のエネルギーが最大に集約された時期である。

Ⅳ期はⅢb期の多重化・重装化した集落形式とは異なって、Ⅱ期前半のような居住域の散漫で広範な分布が東微高地にまで及ぶ。南微高地の中央をほぼ東西に、かつてのSDXに重複してSDXIIが掘削されるが、各ブロックの確定という側面はそれほど窺えない。基本的には散村の復活という観が強い。

Ⅴ期は2度の環濠造成が行われる。状況的には北居住域の環濠が南のそれより重装的である。

南居住域の環濠は、一回目の造成は北部1条・南部2条として、北部に突出部と切れ目（出入口）、西部には区画状の部分（これも出入口に関係か？）、南部には互い違いになる切れ目（出入口）、そしておそらく東部にも切れ目（出入口）が存在する。南部2条・北部1条という差異は、北部が谷Aの河道によって補完されていることによるので、もともと2条巡らすことを基本としていたのかもしれない。

二回目は溝の改修を基本として一回目のプランを踏襲するが、北部と西部に新たに濠を付加して二重環濠としたのに対し、南部は改修を行わず一条のみとなっている。

Ⅵ期以降は東微高地への居住域の拡散があり、南微高地に関してはかつての環濠内部も密度は低下するようである。散村的様相への移行が窺える。

このように、朝日遺跡はⅡ期からⅥ期にかけて南微高地の居住域が集村的様相と散村的様相を繰り返している。そのうちⅡ期からⅢ期にかけては持続的な集村であったことが恒常的な区画の存在に示されており、そこに安定した秩序形成が窺える。この秩序は南微高地の居住域を占拠した集団が独自に形成したというよりは、北微高地の居住域を占拠した集団の主導のもとに全体的に行われたと考える方が、大形方形周溝墓の存在等からみて実態に即していると思う。つまり、この期間に限っては中心としての〈北〉と、それに付随する〈南〉という構造の維持が図られていたのであり、それはあくまで朝日遺跡に限定された内的秩序であったと考えられるのである。

しかし、こうした関係もⅣ期には停止し、以後は各居住域が自立的傾向を強めたであろうことが、それぞれの〈内郭集落化〉に表れている。

4. 墓制について

朝日遺跡で確認された墓制では方形周溝墓が特筆される。方形周溝墓は総数338基（県教育委員会調査分を含む）検出されており、時期別の検出数は一覧表のとおりである。他には土器棺墓、土壇墓がある。しかし、木棺墓は方形周溝墓の主体部としての木棺以外には未確認であり、土壇墓もまたその認定は難しい。

朝日遺跡の墓域は最終的には広大な範囲にわたるようになるが、当初は貝殻山貝塚北方のⅠ期には居住域であった微高地に方形周溝墓の築造が開始されたことを端緒とする。これが墓域Aである。

その後、方形周溝墓は暫時増加していき、墓域も分化するなどして複数形成されるようになる。そしてⅣ期にはそれ以前の築造方式とは異なる大きな変化が現れ、連続した墓域形成が一旦途絶える。Ⅲ期までとⅣ期では大きな落差が生じているのである。このことを重視して、ここではⅢ期までを第Ⅰ期、Ⅳ期からを第Ⅱ期として説明する。

●——第Ⅰ期

墓域A

方形周溝墓の築造開始によって墓域Aの始まりとなるが、その時期はⅠ期末からⅡ期初頭である。

墓域Aの方形周溝墓は全体的に遺物の出土量が少なく、時期決定に困難を伴う例が多いのも事実である。そのため、時期決定の方法は方形周溝墓の全体的な配置状況を踏まえた上で、時期の確定している例を定点とした相互関係の読み取りに頼らざるをえないものとなっている。

方形周溝墓の規模はほぼCランク^{*}に限定される。

第Ⅰ段階（Ⅰ期末からⅡ期） 上述の観点から墓域Aを分析すると、この時期（第Ⅰ期）の方形周溝墓プランの特徴である長軸方向への軸線の存在から、この点ではかつてⅠ期とされた方形周溝墓付近を中心とする一見放射状をなす配置が観察できる。そして、あたかも性格不明の溝の走向に一致するように築造されて列構成を見せる西側の一群（A1w）、それよりやや列構成の不明瞭な東部の一群（A1e）という、大きくは2群に区分できる（なおA1wの南には主軸を異にする一群A1sがある）。直接の前後関係を確認するわけではないが、基本となる方形周溝墓群とその間隙を埋めて築造される方形周溝墓群という区分も可能である。詳細な築造経過に即して群構成の変化を見る方法とは別に、結果としての方形周溝墓群をその内部構成の状態から空間的に区分してみたのが別図である。

第Ⅱ段階（Ⅲ期） 第Ⅰ段階の展開は大きくA1w・（A1s）・A1eという東西の二つのグループに分化して範囲を拡大する方向で形成された。第Ⅱ段階も基本的には2群の関係を踏襲するようではあるが拡大傾向はそれほど顕著ではなく、西のグループ（A2w）、両グループ間の隙間を埋める中央のグループ（A2c）、そして東方の谷Aに面する地区に形成されるグループ（A2e）に区分できる。

方形周溝墓群全体の範囲が不明であるため第Ⅰ段階との関係は完全に了解できないけれども、墓域Aにおける方形周溝墓築造数の極端な減少という観は免れない。土器編年上の時期幅では第Ⅱ段階の

方が長い可能性が高いので、やはり減少と考えるのが妥当であろう。この点に関わって、墓域Aの東半部には土壇墓と考えられるものが比較的多く分布していることを重視する必要があるのかもしれない。また、この段階に墓域数が増加する（墓域Cの形成）ことは自然増分の補完であったかもしれない。

墓域B

朝日遺跡の基幹的墓域で大形方形周溝墓（超Aランク）を含む。墓域の展開はこの大形方形周溝墓を軸にして進行する。

第1段階（Ⅱ期からⅢa期初頭） 墓域の形成は墓域Aより若干遅れる。すなわち、墓域Aはその前段階がⅠ期の居住域であったのに対し、墓域BはⅡ期まで居住域であった。しかし、墓域AではCランク相当の方形周溝墓ばかりであり、プランもA4形以外を含み特定プランへの集中度が墓域B（ははA4形で統一されている）に比べて低いという差が生じていることは注意しなければならない。

この段階の大形方形周溝墓は超AランクとしてS Z 208、AランクとしてS Z 244、S Z 254が存在する。このうち超AランクのS Z 208とAランクのS Z 254が隣接している。直接の切り合い関係が無いので前後関係を把握することは難しいが、墓域の展開方式からみて、同時期の方形周溝墓に囲まれるS Z 254が先行しⅢ期以降の方形周溝墓群に隣接するS Z 208が後続すると考える。そのほか、Bランクも付近に集中する傾向にあり、墓域Bの〈核域〉を形成している。

墓域Bでは、〈核域〉以北の周辺域も大形方形周溝墓と主軸を一致させた展開を示すだけでなく、B・Cランクまで含み規模格差が強く表面に出ているのに対し、以南のグループは主軸を異にしてははCランクから構成されているという違いを見せている。北部の谷A寄りの一群や北東でA・Bランク方形周溝墓間を埋めるように築造されている——恐らく時期的には後出である——Cランクでも下位にくる一群は、そうした主軸を異にする一群と対応する部分であると考えられる。つまり、墓域Bにおいては展開の軸線を異にする二つのグループがあり、北群が中心的で南群は従属的であるということが言えるのである。前者をB1n、後者をB1sと呼ぶ。そして、B1nとB1sは大形方形周溝墓を軸として対称的な位置関係にあり、そのため規模格差が際立つことになる。

B1nは大形方形周溝墓から北へ遠ざかるにつれて漸移的に規模が縮小していくような展開を示し、いくつかのブロックに一見列構造的な展開を窺わせる部分があるものの基本的には平面分割的に展開している。この点で大形方形周溝墓に隣接する空白——Cランクに一部埋められている——が2ヶ所あることは、Bランクの展開には分散ではなく集中が企図されていた可能性を示すものと考えられる。このことは墓域構成が単なる累積の結果ではなく、あらかじめ一定の方針によってプランが描かれていたことを示すのであろう。それは対照的な大別2分割を含めて全体設計としての墓域の存在を暗示する。

第2段階（Ⅲa期） 第1段階のB1nに接続して谷A縁辺に位置するB2w、谷Aを越えて北西に展開するB2n、南に展開するB2s、さらに東に新しく飛び地的に形成されるB2eの4グループが並存する。B2eを除き主軸線は〈核域〉のB1nとは異なる。

4グループのうちB2wとB2eにはAランクの大形方形周溝墓がそれぞれ1基ずつ検出されている。しかし、規模は超Aランクには及ばないので、この段階にも〈核域〉が存続している可能性を考えてS Z 208を時間的に並行させるか、同じ主軸線の超Aランク相当の大形方形周溝墓が未検出で

どこかに存在するのかもしれないと考えるか、選択の余地がある。

上述のように第2段階にはAランクの展開を契機とする小群の析出が窺え、第1段階の超Aランクを中心とする一群とそれ以外という単純な二極構造からやや複雑化するといえる。そして、超Aランクの存在が不確かとはいえ、それでも第1段階の超Aランクであった大形方形周溝墓SZ208に隣接してAランク——同時期のグループでは相対的に大形——の方形周溝墓が築造されていることは、それが第1段階B1nからの連続性を示している可能性を考慮する余地があると考える。

第3段階(Ⅲb期) 中心となるのは超AランクのSZ301を核として規模格差の内在する墓域B3cで、それとともに規模格差が小さく全体としてもCランク相当であるB3sが細々と存続する。墓域B3eはCランクが散在しBランク以上の展開はよくわからない。

それぞれの群を規制する軸線は、B3cではSZ301の東西で線対称になる傾きでBランク以下の2群が並存し、B3eではB2eに連続した軸線とそれとは異なる軸線の二者が存在する。このようにSZ301を核とするB3cで東西の小群に区分できるのであり、第2段階における墓域分割主体の表面化とは異なる極めて整った成層化として把握する必要があると考える。

さて、第1段階の軸線を異にするグループは規模格差の顕著なB1nと格差の小さいB1sというまさに対照的な関係であった。それが第2、第3と段階を経るにしたがい、超Aランク大形方形周溝墓とそれ以外という規模構成上の規準棒のような区分がまず成立し、次に後者内部でAランクあるいはBランクがそれ以外のランクを伴いそれぞれ分散して各単位を形成するようになったと考えられるのである。このような墓域B内部の動向は、まさに重層化に突き進む観がある。それは第1段階の三角形を斜行分割して相似形の入れ子をつくるような関係から、いくつかの三角形を積み上げてさらに大きな三角形を作るというような重層的な関係への移行を示すものと考えられる。

●——第2期

第2期の特徴は、①それまで基幹的であった墓域Bの衰退、②墓域Aでは古い方形周溝墓を破壊して新しい方形周溝墓が築かれる、③南微高地北西縁に新しく方形周溝墓が築かれる、というような全く新しい様相で墓域が形成されることにある。

墓域Bの衰退 墓域BはⅢb期には累積で東西600mという広大な範囲に及んだが、それでも微高地南部には空白地もあり築造の余地はまだ残っていた。しかし、Ⅳ期にはⅢ期以前の方形周溝墓のうち一部の周溝を再掘削して整え新たに墓として利用している例が観察されるようになる。多くはプランを変形することも無かったようだが、谷Aに面するCランクのSZ172は周溝の再掘削によってプランの変形が行われSZ173となっていた。おそらくBランク上位規模までは再掘削に際してプランが変形されることは無さそうだが、そして、こうした再利用墓とは別に墓域周辺ではⅢ期以前の方形周溝墓を破壊して築造される例SZ240(SZ241を破壊)とともに独立して築造される例も存在する。

いずれにしても墓域Bでの新しい方形周溝墓築造は低調となるのである。そしてⅤ期には墓域ではなくなり、Ⅵ期以降は居住域となる。

方形周溝墓の破壊 第1期の方形周溝墓については周溝の重複・切り合いはあったが、墳丘に関しては墓域Aの一部に不明確な例があるものの、基本的にはそうした事例は生じていないと考えられる。

もちろん拡張などの墳丘全体の重複例はある（例えばSZ61・62）。けれども、それは破壊ではないし、極めて偶発的な事例に過ぎない。

旧墓城AにおけるⅣ期の方形周溝墓重複（破壊）は、墓城Bのように再利用というかたちを全く採らない。無視するかのようにならされているけれども、実際Ⅳ期には以前の方形周溝墓はどのようであったのだろうか。周溝が埋没して地表からはその存在が観察できなかったのであろうか。しかし、仮に判別不可能な程度埋没していたとしても、そこが墓城であるということが伝承されており尊重されているならば、同じ場所の方形周溝墓を築造するとは考えられない。内的な連続性が安定的に維持されているならば第Ⅰ期のようになるはずである。だが、事実是这样ではない。これは、墓城AがⅣ期にはその意味を変えたことを示すものとする。

つまり、墓城Bも墓城Aも共に意味を変えたのであり、ただ現象が異なっただけなのである。その意味変換は朝日遺跡固有の定住集団が独自に行ったのではなく、遺跡そのものの集落としての内的連続性が不安定化する途絶えるかした状況に深く関与した集団によって行われた可能性が高い。このように考えるならば、A・B両墓城は新しい墓城として把握する必要が生じる。そうして新しく意味づけられた「墓城A」はⅣ期以降安定した内的連続性を見せる。

新しい墓城 Ⅳ期には、かつてのA・B両墓城が断絶を介して新しく形成される（それぞれE・Gと呼ぶ：A→E、B→G）に並行して、南側高地北縁部や北居住城北縁にも新しく方形周溝墓が築造される。前者を墓城D、後者を墓城Fと呼ぶ。

墓城Dの方形周溝墓は、最初は長方形プランで後に正方形プランとなる。最初が長方形プランというのは墓城B（B3w）の再利用墓も再利用であるために長方形を呈するのと相関する可能性を示唆するが、墓城Eはいずれも正方形であること、Ⅴ期の方形周溝墓にも最初期の例に長方形プランが存在することなどから承継差である可能性もある。墓城E・Fでは方形周溝墓は周溝の重複・切り合いもほとんどなく比較的散在傾向を示すのに対し、墓城Dではかなり近接し周溝の重複・切り合いも行われる。

Ⅴ期には、墓城D・Eのように平面的に展開する地区とは別にブロック的に分散していくつかの墓城が新しく形成される。または方形周溝墓が他とはなれて一見単独であるかのように築造される例もまま見られるようになり、全体に離散的傾向が表面化するような状況を呈する。

第Ⅰ段階では規模格差があることによって全体が成層的に構成され緊密にまとまっていたのに対し、Ⅴ期以降は全体的な平準化において全体の統合度が低下しそれぞれの単独動きを許容する体制に移行したと言えようである。つまり、朝日遺跡に限定して言えば、**差異化／統合から平準化／分散（自立）**への移行**とも表現できようか。

* 超Aランク：一辺30m以上、Aランク：一辺18m以上、Bランク：一辺12m～16m、Cランク：一辺12m以下

** 朝日遺跡における分散傾向が社会全体の分散傾向を意味するのではない。朝日遺跡がⅤ期になって二つの環濠集落を形成することに分散傾向が示されているのであり、それを規制する全体は朝日遺跡にはなく、それを含めたより大きな領域的包括体であったと考える。

*** 付図を参照されたい。

遺構一覧表

※底レベルは標高を示す。

西部地区							調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
壁穴位置							61E	SB10	イ-0S000	472	412	117	Ⅱ	Ⅱb(後半)
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	61E	SB11	イ-0S001	290	112	117	Ⅱb	
60E	SB01	SD76,77				Ⅱ	61E	SB12	イ-0S004	250	130		Ⅱ	
60E	SB02	SB02	336	302	154	Ⅱ末	61E	SB13	イ-0S007	286	123			
60E	SB03	SD66				Ⅱ	61E	SB14	イ-0S008				Ⅱb	
60E	SB04	SD33				Ⅱ	63N	SB01	SB02	608		167	Ⅱ	
土坑							63N	SB02	SB05			156	Ⅱ	
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	63N	SB03	SB03			156	Ⅱ	
56A	SK01	SK008	260	180	113	V	63N	SB04	SB01			159	Ⅱ	
竪立柱建物							調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
60E	SK01	SK13	102	76	89	Ⅱ	61E	SA01	P09,66,41	320	225			
60E	SK02	SK06	326	126	81	Ⅱa	61E	SA02	イ-0S024	379	155			
60E	SK03	SK09	70	64	113	Ⅱ	61E	SA03	イ-0S023	360	185			
60E	SK04	SK07		78	119	Ⅱ	61E	SA04	イ-0S014		130			
60E	SK05	SK20	43	34	120	Ⅱ	土坑							
60E	SK06	SK19	90		110	Ⅱ	61E	SA04	イ-0S014		130			
60E	SK07	SK24	100	72	109	Ⅱ	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
60E	SK08	SK36			113	Ⅱ	61E	SK01	SK38		170	126	Ⅱ	
60E	SK09	SD27	295		106	Ⅱ	61E	SK02	SD23	276	124	Ⅱb末		
60E	SK10	SK26	206	152	94	Ⅱb	61E	SK03	SK56		178	Ⅱb		
60E	SK11	SK27	352		85	Ⅱ	61E	SK04	SK38		106	V	b	
60E	SK12	SK40	61	44	109	Ⅱ	61E	SK05	SK22		64	170	Ⅱ	
60E	SK13	SK29	372	136	111	Ⅱ	61E	SK06	SK24	200	64	127	Ⅱ	
60E	SK14	SK41	152	42	138	Ⅱa	61E	SK07	SD26		212		Ⅱb末～Ⅱ	
60E	SK15	SK42	208	68	118	Ⅱ	61E	SK08	SD21	206	78	Ⅱb末		
60E	SK16	SK33	170	129	140	Ⅱ	61E	SK09	SK44			177	Ⅱa最古	
60E	SK17	SK32	170	92	147	Ⅱ	61E	SK10	SD11		84	171	Ⅱa最古	
60E	SK18	SK35	149	110	123	Ⅱa	61E	SK11	SK57	282	228	-16	Ⅱ～Ⅱa最古	
60E	SK19	SK49	158	74	115	Ⅱ	61E	SK12	SK05	146	62	126	Ⅱ	
60E	SK20	SK38	107	60	128	Ⅱ	61E	SK13	SK04	116	42	132	Ⅱ	
60E	SK21	SD54	278		94	Ⅱ	61E	SK14	GSD16	534	138	102	Ⅱb	
60E	SK22	SK39	240	108	93	Ⅱ	61E	SK15	SK03		146	130	V	
60E	SK23	SK74		72	138	Ⅱ	61E	SK16	SK06	152	72	105	Ⅱa最古	
60E	SK24	SD63	280		99	Ⅱ	61E	SK17	SK13	168	82	108	Ⅱ	
60E	SK26	SK61	270	160	104	Ⅱa	61E	SK18	SK08	146	70	103	Ⅱa最古	
60E	SK27	SK71	242	98	132	Ⅱ	61E	SK19	SD13	166	91	Ⅱa		
60E	SK28	SK77	131	98	147	Ⅱ	61E	SK20	SK10		84	110	Ⅱa	
60E	SK29	SK07	164	86	135		61E	SK21	SK09	86	108	Ⅱa		
60E	SK30	SK72	208	132	137		Ⅱa最古	61E	SK22	SD21	206	78	Ⅱb	
60E	SK31	SK08	260	74	116	Ⅱa最古	61E	SK23	SD22		84	Ⅱb		
60E	SK32	重G5a重	290	88	131		61E	SK24	SK15			93	Ⅱa	
60E	SK33	SK62	188	122	128		61E	SK25	SK21	130	118	97	Ⅱ	
60E	SK34	SD69	340	65	129		61E	SK26	SD14	570	125	143		
60E	SK35	SD60	324	64	146		61E	SK27	SK62			-97		
60E	SK36	SK70			151	Ⅱa	63D	SK01	SK19	39	33	161	Ⅱ	
60E	SK37	SK63	49	40	145	Ⅱa	63D	SK02	SK20			153	Ⅱa	
60E	SK38	SD73	298	70	144		63D	SK03	SK21	29	20	167	V	
SX							63D	SK04	SK23	46	24	155	Ⅱb	
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	63D	SK05	SK07	170	128	140	Ⅱa	
60E	SX01		76	66	139	Ⅱa	63D	SK06	SK06	176		108	Ⅱa	
60E	SX02		34	30	118	Ⅱ	63D	SK07	SK14	107	(50)	123	Ⅱa	
60E	SX03a					V～	63D	SK08	SK08	192	166	65	Ⅱa	
	SX03b						63D	SK09	SK15	70	22	134	Ⅱb	
56A	SX01	SK006				V	63D	SK10	SK17			92	Ⅱa	
壁穴位置							63D	SK11	SK04 (320)	210	80	Ⅱ		
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	63D	SK12	SK12	86	42	140	Ⅱ	
61E	SB01	(G)SB03	250		130		63D	SK13	SK10	58	19	132	Ⅱ	
61E	SB02	(G)SB01	382		123		63D	SK14	SK28	53	38	136	Ⅱ	
61E	SB03	(G)SB02	346	258	126		63D	SK15	SK55	29	25	111	Ⅱ	
61E	SB04	(G)SB16	262	218	109		63D	SK16	SK40	70	70	161	Ⅱ	
61E	SB05	(G)SB18			113		63D	SK17	SK45	47	26	138	Ⅱ	
61E	SB06	(G)SB10	306	101	Ⅱb		63D	SK18	SK54	35 (26)	149	Ⅱa		
61E	SB07	(G)SB06	446	111	Ⅱc(遺構ハ)		63D	SK19	SK50	34	30	152	Ⅱ	
61E	SB08	(G)SB12			112	Ⅱ?	63D	SK20	SK35	44	38	157	Ⅱ	
61E	SB09	(G)SB06	290	114	Ⅱb		63D	SK21	SK33	59	34	134	Ⅱ	

調査区番号	遺構番号	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	直径レール	時期	調査区番号	遺構番号	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	直径レール	時期
63D	SK22	SK44	34	23	146	Ⅲ	61A	SB04	SB06			141	IIorⅢ
63D	SK23	SK32	54		130	Ⅲ	61A	SB05	SB01*07			123	IIorⅢ
63D	SK24	SK36	(130)	(100)	141	Ⅳ	61C	SB01	SB23			127	IIorⅢ
63D	SK25	SK30	120	82	133	Ⅲ	61C	SB02 (SD15)				135	
63D	SK26	SK29	50	40	115	Ⅲb	61C	SB03 (SD6-10)		480		157	
63D	SK27	SK31	34	30	158	Ⅲ	61C	SB04				153	
63D	SK28	SK56		56	154	II	61D	SB01	SD51				
63N	SK01	SK04 (470)	161	96			61D	SB02	SB08(SD6)	346		170	II
63N	SK02	SK05(注)遺跡		86	108		61D	SB03	SB15			161	Ⅲa
63N	SK03	SK09(注)遺跡	161	105	91		61D	SB04	SB18			162	Ⅳ
63N	SK04	SK06(注)遺跡		89	115		61D	SB05	SB08(SD6)			165	Ⅳ
63N	SK05	SK12			124		61D	SB06	SB08	467	370	177	II
63N	SK06	SK08			106	144	61D	SB07	SB32			181	II
63N	SK07	SK06	427	128	94		61D	SB08	SB07	565	540	183	II
63N	SK08	SK03	180		158		61D	SB09	SB31			179	Ⅳ
63N	SK09	SK02	162	110	138		61D	SB10	SB17			185	II
63N	SK10	SD05			134	152	61D	SB11	SB13	489	346	182	Ⅳ
63N	SK11	SD16	272	70	140		61D	SB12	SB11			175	Y
63N	SK12	SK01	373	190	102		61D	SB13	SB16			194	Ⅲ
63N	SK13	SD07	367	115	96		61D	SB14	SB05		464	191	II
63N	SK14	SD14			178	100	61D	SB15	SB12			183	Ⅲa
63N	SK14	SD14					61D	SB16 (SD22)				183	
61E	SX01	SK579(注)遺跡				Ⅲb未?	61D	SB17 (SD23)	460	232	212	Ⅳ?	
61E	SX02					Ⅲb未	61D	SB18				210	
61E	SX03					Ⅲb未	61D	SB19a (SD62)				168	
61E	SX03					Ⅲb未	61D	SB19b	SB02	718	578	183	Y
61E	SX01	SK05	232	122	130	Ⅲa	61D	SB21	SB02(SD6)			185	Ⅳ
南郷地区													
61D	SB22	SB09	268		218	191	II						
61D	SB23	SB32											II
61H	SB01	Ⅱ(SD08)			362	184	Ⅳ?						
61H	SB02	Ⅱ(SD08)			506	169	Ⅳ?						
61H	SB03	Ⅱ(SD03)			718	171	Ⅳ?						
61H	SB04	Ⅱ(SD02)			430	177	Ⅳ?						
61H	SB05	Ⅱ(SD07)			306	172	Ⅳ?						
61H	SB06	Ⅱ(SD08)				175	Ⅳ?						
61H	SB07	Ⅱ(SD03)				180	Ⅳ?						
61H	SB08	Ⅱ(SD03)	712		608	172	Ⅳ?						
61H	SB09	Ⅱ(SD02)	614		604	171	Ⅳ?						
61H	SB10	Ⅱ(SD03)				169	Ⅳ?						
61H	SB11	Ⅱ(SD04)	758			176	Ⅳ?						
61H	SB12	Ⅱ(SD03)				173	Ⅳ?						
61H	SB13	Ⅱ(SD02)			374	177	Ⅳ?						
61H	SB14	Ⅱ(SD08)			488	180	Ⅳ?						
61H	SB15	Ⅱ(SD11)			592	193	Ⅳ?						
61H	SB16a	Ⅱ(SD03)	484		392	200							
61H	SB16b	Ⅱ(SD06)	484		476	200							
61H	SB17a	Ⅱ(SD08)	586			188							
61H	SB17b	Ⅱ(SD08)	628		514	173	Ⅳ						
61H	SB18a	Ⅱ(SD02)			458	183	Ⅳ						
61H	SB18b	Ⅱ(SD08)			520	179	Ⅲ						
61H	SB19	Ⅱ(SD08)			378	196							
61H	SB20	Ⅱ(SD07)			(414)	165							
61H	SB21	Ⅱ(SD08)				174	Ⅳ						
61H	SB22	Ⅱ(SD04)				179	Ⅲ						
61H	SB23	Ⅱ(SD08)				175	Ⅲb						
61H	SB24	Ⅱ(SD08)				179							
61H	SB25	Ⅱ(SD06)				177							
61H	SB26	Ⅱ(SD08)				178							
61H	SB27	Ⅱ(SD08)				178	Ⅲb-Ⅳ						
61H	SB28	Ⅱ(SD08)	508		412	179							
61H	SB29a	Ⅱ(SD08)				181							
61H	SB29b	Ⅱ(SD08)				179	Ⅲ						
61H	SB30	Ⅱ(SD08)				189							
61H	SB31a	Ⅱ(SD03)	380		320	163	Ⅲa						
61H	SB31b	Ⅱ(SD03)	520		396	170							

調査区番号	遺構番号	遺構田舎	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構番号	遺構田舎	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
61H	SB32a	(J)SD00	392	173			61H	SB92	(X)SD07			183		
61H	SB32b	(J)SD00	(570)	171			61H	SB93	(X)SD00			180		
61H	SB33	(J)SD05		80	166		61H	SB94	(X)SB07		395	159		
61H	SB34	(J)SD05	790	162			61H	SB95	(X)SD00	655	595	155	III	
61H	SB35a	(J)SD00		468	161	IV	61H	SB96	(X)SD00	335	300	156	IIIa	
61H	SB35b	(J)SD00		502	168		61H	SB97				153		
61H	SB36a	(J)SD00		184			61H	SB98	(X)SD00			181	IIorIII	
61H	SB36b	(J)SD05		185			61H	SB99	(X)SD00	620	510	168	IV	
61H	SB37	(J)SD00	760	172			61H	SB100	(X)SB03	490	395	150	II-IIIa	
61H	SB38a	(J)SD00	694	476	154	IV	61H	SB101	(X)SB04			168	II-IIIa	
61H	SB38b	(J)SD00	746	470	161		61H	SB102	(X)SB00			385	180	III
61H	SB39	(J)SD00		159			61H	SB103	(X)SB07	375	330	155		
61H	SB40	(J)SD00	750	161			61H	SB104	(X)SD00			174	III	
61H	SB41	(J)SD00	558	396	150	IV?	61H	SB105	(X)南	250	230	154	IIorIII	
61H	SB42	(J)SD07	564	167		IV	61H	SB106	(X)SB05			157	IIIa	
61H	SB43	(J)SD00	656	175		IV	61H	SB107	(X)南		290	170		
61H	SB44	(J)SD00		183			61H	SB108	(J)SB02		780	218	古墳時代	
61H	SB45	(J)SD00	730	710	190	II	61H	SB109	(J)SB01	740	430	210	古墳時代	
61H	SB46	(X)SD00		197			61H	SB110	(X)SB07		292	206	古墳時代	
61H	SB47	(X)SD00	432	192			61H	SB111	(X)SB02	599		220	古墳時代	
61H	SB48	(X)SD00		183		IV	61H	SB120	(X)SD00	465	386	216	古墳時代	
61H	SB49	(X)SD00	370	316	192	II	61M	SB01	SB03	590	404	189	II	
61H	SB50	(X)SD00	500	350	199	II	61M	SB02	SB02		280	196	II	
61H	SB51	(X)SD00		201			61M	SB03ab	SB01	282	254	195	II	
61H	SB52	(X)SD00		190			61M	SB04	SB08			187	II	
61H	SB53	(X)SD00		380	169	IIIb	61M	SB05	SB09		240	191	II	
61H	SB54	(X)SD00		193			61M	SB06	SB04	370	256	194	II	
61H	SB55			182			61M	SB07	SB05			203	II	
61H	SB56	(X)SD00	508	490	183	IIIa	61M	SB08	SX04	212	220	II		
61H	SB57	(X)SD00		310	192	III	61M	SB09	SX06		362	213	II	
61H	SB58	(X)SD00		396	203	IIIb	61M	SB10	SX01		284	204	II	
61H	SB59	(X)SD00		480	188	III	61M	SB11	SX07	404	270	204	II	
61H	SB60	(X)SD00	424	308	190	III	61M	SB12	SX08	510	196	205	II	
61H	SB61	(X)SD00	530	330	185	III	61M	SB13	SX06	410	376	213	II	
61H	SB62	(X)SD00	542	474	185	Va	61M	SB14	SB06		290	225	II	
61H	SB63	(X)SD00		478	189	IV	61M	SB15	SB07		460	223	II	
61H	SB64			(256)	186		63B	SB01			340	164	III	
61H	SB65a	(X)SD00	694	165		IIorIII	63B	SB02	(SD09)		475	163	II?	
61H	SB65b			196		IIorIII	63B	SB03	SB01	500	470	157	IIIb	
61H	SB66	(X)SD00		524	160		63B	SB04	(SD07)		700	160	III	
61H	SB67	(X)SD00		414	160		63B	SB05	SB02	655	645	178	古墳時代	
61H	SB68	(X)SD00		187		V	63G	SB01	(B)SD00		392	170		
61H	SB69	(X)SD00		178		V	63G	SB02	(B)SD00	346	258	126	V	
61H	SB70			686	176		63G	SB03	(C)SD00		446	111	IIIa	
61H	SB71	(X)SD00		175			63G	SB04	(B)		476	171		
61H	SB72	(X)SD00		168			63G	SB05	(E)SB12	716	654	164	III	
61H	SB73	(X)SD00		166		IV	63G	SB06	(F)SD00			168	III	
61H	SB74			169		IV?	63G	SB07	(E)SD00	806		142	IIIa	
61H	SB75	(X)SD00	(500)	440	176	IV	63G	SB08	(E)SD02			157	V	
61H	SB76	(X)SD00		494	184	IIIb-IV	63G	SB09	(E)SD01			197	V	
61H	SB77	(X)SD00	698	482	182	IIIb	63G	SB10	(E)SD00			162	IV?	
61H	SB78	(X)SD00	624	570	181	V	63G	SB11	(E)SD00			177	III?	
61H	SB79	(X)SD00	576	358	180	III	63G	SB12	(E)SD00	514	302	176	IV	
61H	SB80	(X)SD00		167		IIorIII	63G	SB13	(E)SD00		380	176		
61H	SB81	(X)SD00		161		IIorIII	63G	SB14	(E)SD00			168	IV	
61H	SB82	(X)SD00		189		IIIa	63G	SB15	(G)SD00	443	428	204	古墳時代	
61H	SB83			185		IIorIII	63J	SB01a	SB16		334	181	V	
61H	SB84			182		IIorIII	63J	SB01b	SB18		504	181	V	
61H	SB85	(X)SD00		462	171	II	63J	SB01c	SB05	652		184	Vb	
61H	SB86	(X)SD00		174		IV	63J	SB02	SB04	710	187	187	V	
61H	SB87	(X)SD00		191			63J	SB03	SB15	486		198	V	
61H	SB88	(X)SD00		173		IIIa	63J	SB04a	SD04		250	193	IV	
61H	SB89	(X)SD00		185			63J	SB04b	SB02		466	187	IV	
61H	SB90			195		IIorIII	63J	SB05	SB03		486	190	IIIb	
61H	SB91	(X)SD00		530	175		63J	SB06	SD06	400	250	194	III	

調査区番号	遺構番号	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構番号	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
63J	SB07	SB10			189	Ⅳ	89B	SB07	(7)SB07		462	192	Ⅲb
63J	SB08	SB17			180	Ⅲb	89B	SB08	(7)SB08			170	Ⅲb
63J	SB09	SB07			199	Ⅳ	89B	SB09	(7)SB09			170	Ⅲb
63J	SB10a	SB11			187	Ⅴ	89B	SB10	(7)SB10		910	193	Ⅱ?
63J	SB10b	SB06	570		191	Ⅴ	89B	SB11	(7)SB06		416	193	Ⅲb
63J	SB11	SB01	526	526	195	Ⅳ	89B	SB12	(1)SB01			192	Ⅱ
63J	SB12		358	352	197	古墳時代	89B	SB13	(1)SB02			168	Ⅱ?
63L	SB01	7.1(SB01)			415	184	89B	SB14	(1)SB06	564	434	173	Ⅲb
63L	SB02	7.2(SB02)			420	184	89B	SB15	(1)SB03			186	Ⅳ
63L	SB03	7.3(SB03)			180	Ⅳ	89B	SB16	(1)SB27		460	169	Ⅳ?
63L	SB04a	7.4(SB04)			184	Ⅳ	89B	SB17			480	169	Ⅳ?
63L	SB04b	7.4(SB04)	576		186	Ⅳ	89B	SB18		560		183	Ⅳ?
63L	SB04c	7.4(SB04)	510		187	Ⅳ	89B	SB19	(7)SB02		416	206	Ⅱ
63L	SB05	(8.4)SB05		470	176	Ⅳ	89B	SB20	(7)SB06	518	312	175	Ⅱ
63L	SB06a	(9)SB06		400	174	Ⅲb	89B	SB21	(*)SB03			184	Ⅲa
63L	SB06b	(8.4)SB06			185	Ⅳ	89B	SB22	(*)SB07	542	462	173	Ⅲa
63L	SB07	(7)SB02	432	356	184	Ⅳ	89B	SB23	(*)SB06		320	168	Ⅲa
63L	SB08	(7)SB01		484	183	Ⅳ	89B	SB24	(*)SB01			176	Ⅱ
63L	SB09	(7)SB01		290	188	Ⅱ	89B	SB25	(*)SB06	348	324	161	Ⅲa
63M	SB01	SB07	564	416	195	Ⅴ	89D	SB01	SB01		240	182	Ⅲ
63M	SB02	SB09			183	Ⅴ-Ⅳ	89D	SB02	SB02			169	Ⅲ
63M	SB03	SB04	470	379	195	Ⅴ	60B	SA01		236	140	Ⅲ	
63M	SB04	SB13		392	194	Ⅳ	60B	SA02		240	152	Ⅲ	
63M	SB05	SB01, SB06		434	192	Ⅱ?	60B	SA03		240	112	Ⅲ	
63M	SB06	SB06			198	Ⅳ	60B	SA04		298	135	Ⅲ	
63M	SB07	SB10		423	198	Ⅲ?	61A	SA01		266	152	Ⅲ	
63M	SB08	SB12		448	183	Ⅳ?	61C	SA01	F38, 46, 37	320	190	Ⅲ	
63M	SB09	SB08			175	Ⅱ	61D	SA01	F66, 82	380	140	Ⅲ	
63M	SB10	SB05	1000		195	Ⅴ-Ⅳ	61K	SA01	F78, 17, 11	704	410	Ⅳ-	Ⅳ-
89A	SB01	SB30			172	ⅡorⅢ	63G	SA01	F10, 12, 1A, 1B, 1C, 1D	1050	550	Ⅲ	Ⅲ
89A	SB02	SB41	868		183	Ⅳ							
89A	SB03	SB16			176								
89A	SB04	SB14	586	484	176	Ⅴ	60A	SK01	SK64 (108)	70	144	Ⅲb	
89A	SB05	SB33		130	178	Ⅲa	60A	SK02	SK62			138	Ⅱ
89A	SB06	SB38		98	180	Ⅲb	60A	SK03	SK85	206	90	110	Ⅲ
89A	SB07	SB31		178	180	Ⅲa・Ⅳ	60B	SK01	SK48	86	64	109	Ⅱ
89A	SB08	SB13	636	580	175	Ⅴ	60B	SK02	SK50	98	82	107	Ⅱ
89A	SB09	SB20	624	520	188	ⅣorⅤ	60B	SK03	SK56	138	90	98	Ⅱ
89A	SB10	SB22			185	Ⅴ	60B	SK04	SK36		60		Ⅱ-Ⅲb
89A	SB11	SB40			188	Ⅱ・Ⅳ	60B	SK05	SK13	176	66	100	Ⅲ
89A	SB12	SB21			189	Ⅳ	60B	SK06	SK14	514	188	45	Ⅲa最古
89A	SB13	SB23			188	Ⅳ	60B	SK07	SK29	174	105	102	Ⅲ
89A	SB14	SB24		204	179	Ⅳ	60B	SK08		218	110	101	Ⅲ
89A	SB15	SB17		480	180	Ⅲb	60B	SK09	SK27	184	150	86	Ⅲ
89A	SB16	SB18	464	340	180	Ⅲb	60B	SK10	SK24	70	54	106	Ⅲ
89A	SB17	SB15	614	612	173	Ⅲa	60B	SK11	SK09	153	102	103	Ⅲa最古
89A	SB18	SB11	440	386	170	Ⅴ	60B	SK12	SK10	280	116	80	Ⅲa最古
89A	SB19	SB12	572	554	172	Ⅳ	60B	SK13	SK16	184	103	87	Ⅲ
89A	SB20	SB47			182	Ⅲ?	60B	SK14	SK26	40	40	90	Ⅲb
89A	SB21	SB34			346	174	60B	SK15		390	126	75	Ⅲ
89A	SB22	SB19	472	388	177	Ⅴ	60B	SK16	SK42	128	79	79	Ⅲ
89A	SB23	SB25	446	410	166	Ⅴ	60B	SK17	SK45	304	206	80	Ⅱ-Ⅲb
89A	SB24	SB46			176	Ⅲb末-Ⅳ	60B	SK18	SK37	165	106	101	Ⅲa最古
89A	SB25	SB36			182	Ⅲb	60B	SK19		102	86	119	Ⅲ
89A	SB26	SB35			175	Ⅳ	60B	SK20		86	76	127	Ⅲ
89A	SB27	SB45			182	Ⅲb末-Ⅳ	60B	SK21	SK25				Ⅱ
89A	SB28	SB26			175	Ⅳ	60I	SK01	SK04		44	147	Ⅳ
89A	SB29	SB37			182	Ⅲb	60I	SK02	SK05	96	58	157	ⅢorⅤ
89A	SB30	(A)SB01	533	380	190	古墳時代	60I	SK03	SK09			137	Ⅴ(古)
89B	SB01	(7)SB02			157	Ⅱ?	60I	SK04	SK07	182	118	143	Ⅳ
89B	SB02				200		60I	SK06	SK34	282	114	120	Ⅳ
89B	SB03	(7)SB06			182	Ⅲa	60I	SK06	SK33	72	70	127	Ⅳ
89B	SB04	(7)SB06			192	Ⅲa(最古)	60I	SK07	SK16	282	122	92	Ⅲb
89B	SB05	(7)SB03			186	Ⅳ	60I	SK08	SK12	184	90	149	Ⅲ
89B	SB06	(7)SB04		428	198	Ⅳ	60I	SK09	SK15	106	62	106	Ⅲb

測点区番号	道標新番	道標旧番	現設長軸	現設短軸	底レベル	時期	測点区番号	道標新番	道標旧番	現設長軸	現設短軸	底レベル	時期	
60I	SK10	SK17	99	82	137	Ⅲ	61D	SK19	SK117	154	88	131	Ⅲ	
60I	SK11	SK18	122	82	175	Ⅳ	61D	SK20	SK118		108	116	Ⅱ-Ⅲb末	
60I	SK12	SK45	150	114	152	Ⅱ	61D	SK21	SK38	190	164	159	Ⅲ	
60I	SK13	SK38				Ⅱ-Ⅲa結	61D	SK22	SK150	111	82	151	Ⅱ-Ⅲa	
60I	SK14	SK19	60	50	162	Ⅳ	61D	SK23	SK151				155	Ⅲ
60I	SK15	SK67				Ⅴ	61D	SK24	SK153		120	175	Ⅲ	
60I	SK16	SK66 (284)	80	142	Ⅳ	61D	SK25	SK152	144				156	Ⅲ
60I	SK17	SK58	332	132	114	Ⅱ	61D	SK26	SK154		66	141	Ⅲ	
60I	SK18	SK54	196	160	162	Ⅲa	61D	SK27	SK129				118	Ⅲb末
60I	SK19	SK49	236	86	112	Ⅲa	61D	SK28	SK130	198			136	Ⅲb末
60I	SK20	SK53	63	44	166	Ⅲb	61D	SK29	SK132	100	84	147	Ⅲ	
60I	SK21	SK47	96	70.1	172	Ⅲb	61D	SK30	SK126	184	87	138	Ⅲb-Ⅳ	
60I	SK22	SK52	94	74	158	Ⅲb	61D	SK31	SK127	268	116	135	Ⅲb	
60I	SK23	SK50	196	80	163	Ⅲb末-Ⅳ	61D	SK32	SK136		128	147	Ⅲ	
60I	SK24	SK51	154	112	154	Ⅳ	61D	SK33	SK135	111	90	148	Ⅲ	
60I	SK25	SK29 (284)	128	159	Ⅲa	61D	SK34	SK137	145	88	139	Ⅱ-Ⅲa		
60I	SK26	SK28	450	116	152	Ⅳ	61D	SK35	SK36	266	126	133	Ⅲ	
60I	SK27	SK27 (232)	105	152	Ⅴ	61D	SK36	SK33	284	92	149	Ⅲ		
60I	SK28	SK30	160	106	187	Ⅲa	61D	SK37	SK35	114	112	163	Ⅲ	
60I	SK29	SK23		38	168	Ⅳ	61D	SK38	SK114	136	122	163	Ⅱ-Ⅳ	
60I	SK30	SK24	62	54	158	Ⅴ	61D	SK39	SK37	342			161	Ⅳ
60I	SK31	SK25	110	86	122	Ⅳ	61D	SK40	SK147	98	72	174	Ⅲa	
60I	SK32	SK21 (144)	60	134	Ⅳ	61D	SK41	SK79	104	96	161	Ⅲa		
61A	SK01	SK22	390	304	-175	Ⅱ	61D	SK42	SK113	148	98	159	Ⅲb末	
61A	SK02	SK09	320	280	-51	Ⅲb末	61D	SK43	SK73	103			123	Ⅲ-Ⅴ(結)
61A	SK03	SK21	280	202	-29	Ⅳ	61D	SK44	SK78	162	96	145	Ⅱ-Ⅲa	
61A	SK04	SK27			134	Ⅱ	61D	SK45	SK112	76	72	168	Ⅲ	
61A	SK05	SK12	120	104	89	Ⅲb	61D	SK46	SK111	70	62	162	Ⅳ	
61A	SK06	SK20	166	150	74	Ⅳ	61D	SK47	SK60	130	126	161	Ⅲ	
61A	SK07	SK17			92	Ⅲb	61D	SK48	SK75	90	150	Ⅲ-?		
61A	SK08	SK25		90	129	Ⅲb	61D	SK49	SK146		190	110	Ⅱ-Ⅲa	
61A	SK09	SK16		156	129	Ⅲb末	61D	SK50	SK165		108	183	Ⅲa	
61A	SK10	SK30		40	122	Ⅲa	61D	SK51	SK55	110	84	175	Ⅱ-Ⅲ?	
61A	SK11	SK15	222	124	131	Ⅲa	61D	SK52	SK11				145	Ⅲ
61A	SK12	SK31	110	48	119	Ⅲb	61D	SK53	SK140	290	156	172	Ⅲ-Ⅴ	
61A	SK13	SK37	148	80	108	Ⅲb	61D	SK54	SK143	98	96	156	Ⅲ-Ⅴ	
61A	SK14	SK35		86	148	Ⅲb	61D	SK55	SK66	128	110	140	Ⅲb-Ⅳ	
61C	SK01	SK42		110	135	Ⅱ	61D	SK56	SK144	186			177	Ⅲ-Ⅴ
61C	SK02	SK41		132	141	Ⅲ	61D	SK57	SK60		198	145	Ⅱ-Ⅲ	
61C	SK03	SK40	442		73	Ⅲ・Ⅴ	61D	SK58	SK61	126	90	161	Ⅲ	
61C	SK04	SK48		88	146	Ⅲb	61D	SK59	SK62	170	70	94	Ⅳ	
61C	SK05	SK47	162	82	143	Ⅲ	61D	SK60	SK62	290	110	133		
61C	SK06	SK106	166	134	126	Ⅲ-Ⅴ	61H	SK001	(H)SK60		80		Ⅲa	
61C	SK07	SK44	146	88	140	Ⅱ	61H	SK002	(H)SK68	80	76	113	Ⅲa	
61C	SK08	SK92			129	Ⅱ	61H	SK003	(H)SK58		110	94	Ⅲ	
61C	SK09	SK97		60	118	Ⅲ-Ⅳ	61H	SK004	(H)SK45	178	68	142	Ⅳ	
61C	SK10	SK94	164	88	134	Ⅲ	61H	SK005	(H)SK02	138	25	81	Ⅴ-Ⅵ	
61D	SK01	SK51	285	84	118	Ⅱ-Ⅲ	61H	SK006	(H)SK37	160	114	104	Ⅲ	
61D	SK02	SK52		76	160	Ⅱ-Ⅲ	61H	SK007	(H)SK35	164	112	118	Ⅲ	
61D	SK03	SK119	74	62	123	Ⅲb-Ⅳ	61H	SK008	(H)SK27	48	36	171	Ⅲb	
61D	SK04	SK161		112	121	Ⅲa	61H	SK009	(H)SK68				158	Ⅳ
61D	SK05	SK160		140	112	Ⅲ	61H	SK010	(H)SK14		80	162	Ⅲa	
61D	SK06	SK155	99	95	169	Ⅱ	61H	SK011	(H)SK13	170	135	136	Ⅲb	
61D	SK07	SK59		118	147	Ⅲ	61H	SK012	(H)SK04	(1170) (740)	-29	Ⅳ		
61D	SK08	SK123	146	94	119	Ⅲ	61H	SK013		344	202	66		
61D	SK09	SK122	214		130	Ⅲa	61H	SK014	(J)a)SK00		54	145	Ⅳ	
61D	SK10	SK63	290	88	112	Ⅱ-Ⅳ	61H	SK015	(J)a)SK06	120	110	174	Ⅲb末	
61D	SK11	SK120	150	118	123	Ⅲa	61H	SK016	(J)a)SK09	42	38	179	Ⅳ	
61D	SK12	SK121	196	102	137	Ⅲa	61H	SK017	(J)b)SK06		126	193	Ⅲ	
61D	SK13	SK125			126	Ⅲ	61H	SK018	(J)b)SK04	181	56	161	Ⅲ	
61D	SK14	SK159	68	60	138	Ⅲa	61H	SK019	(J)b)SK00		172	188	Ⅲb	
61D	SK15	SK124			141	Ⅲ-Ⅲb	61H	SK020	(J)b)SK07	100	42	171	Ⅳ	
61D	SK16	SK56	222	112	128	Ⅱ	61H	SK021	(J)b)SK10			166	Ⅳ	
61D	SK17	SK54	310	126	134	Ⅱ	61H	SK022	(J)c)SK14	84	64	67	Ⅲ	
61D	SK18	SK116	188	60	131	Ⅱ-Ⅲ	61H	SK023	(J)c)SK16		144	47	Ⅲa	

調査区番号	遺構番号	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構番号	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
61H	SK024	01SK07	84	64	73	Ⅱ	61H	SK089	01SK00	74	66	135	Ⅱ
61H	SK025	01SK01	340	334	155	Ⅱ	61H	SK090	01SK10				Ⅱ
61H	SK026	01SK05	194	94	121	Ⅲb	61H	SK091	01SK06	274	114	108	Ⅱa
61H	SK027	01SK01	60	58	146	Ⅲ	61H	SK092	01SK01	143	100	164	Ⅱ ¹¹ Ⅲ ¹¹
61H	SK028	01SK02	70	70	140	Ⅲa	61H	SK093	01SK06	152	76	156	Ⅱ
61H	SK029	01SK09	78	76	125	Ⅲb	61H	SK094	01SK06	350	122	143	Ⅱ
61H	SK030	01SK00	104	56	132	Ⅲ	61H	SK095	01SK07	180	76	155	Ⅲb末
61H	SK031	01SK07	72	46	118	Ⅱ	61H	SK096	01SK02		64	154	Ⅱ
61H	SK032	01SK03	58	48	175	Ⅲa最古	61H	SK097	01SK01		62	153	Ⅱ
61H	SK033	01SK11			156	Ⅲ	61H	SK098	01SK09	116	64	177	Ⅲb末-Ⅲ新
61H	SK034	01SK09			147	Ⅱ	61H	SK099	01SK04	76	70	145	Ⅱ
61H	SK035	01SK02			117	Ⅲb	61H	SK100	01SK00	66	56	155	Ⅲb
61H	SK036	01SK01	52	44	167	Ⅲa	61H	SK101	01SK06		42	150	Ⅲa
61H	SK037	01SK04	134	76	134	Ⅲa	61H	SK102	01SK07	150	130	143	Ⅲb末-Ⅲ新
61H	SK038	01SK04	122	66	140	Ⅲb~Ⅱ	61H	SK103	01SK09		42	178	Ⅱ
61H	SK039	01SK05	164	74	135	Ⅲb	61H	SK104	01SK10			153	Ⅱ
61H	SK040	01SK04	154	102	142	Ⅱ	61H	SK105	01SK13			160	Ⅱ
61H	SK041	01SK06	126		145	Ⅱ	61H	SK106	01SK12	110	84	140	Ⅱ
61H	SK042	01SK02	252	170	144	Ⅱ	61H	SK107	01SK12		80	150	Ⅱ
61H	SK043	01SK01	134	114	131	Ⅱ	61H	SK108	01SK15			161	Ⅱ
61H	SK044	01SK03			124	Ⅱ	61H	SK109	01SK11	86	60	149	Ⅲ
61H	SK045	01SK05		56	155	Ⅱ	61H	SK110	01SK10	184	82	134	Ⅱ
61H	SK046	01SK00	116	54	145	Ⅱ	61H	SK111	01SK15			97	Ⅱ・Ⅲ
61H	SK047	01SK02			195	Ⅲ	61H	SK112	01SK23	89	77	116	Ⅲa
61H	SK048	01SK00			149	Ⅲa	61H	SK113	01SK27	40	32	160	Ⅲ
61H	SK049	01SK09	92	80	134	Ⅲa	61H	SK114	01SK09	116	90	148	Ⅲb
61H	SK050	01SK05	76	70	134	Ⅲa	61H	SK115	01SK00	110	86	140	Ⅱ
61H	SK051	01SK04	96	74	130	Ⅲb	61H	SK116	01SK13	110	64	163	Ⅱ
61H	SK052	01SK03	78	72	152	Ⅲb	61H	SK117	01SK14	56	42	140	Ⅲ
61H	SK053	01SK02	66	58	146	Ⅱ	61H	SK118	01SK06		52	161	Ⅱ
61H	SK054	01SK03	98	98	152	Ⅲb末	61H	SK119	01SK05	58	52	159	Ⅱ
61H	SK055	01SK06	92	80	172	Ⅲ	61H	SK120	01SK12	58	56	175	Ⅲ
61H	SK056	01SK06	78	66	143	Ⅱ	61H	SK121	01SK13	68	62	168	Ⅲ
61H	SK057	01SK06	46	46	175	Ⅲ	61H	SK122	01SK29		42	164	Ⅱ
61H	SK058	01SK02			145	Ⅱ	61H	SK123	01SK08	86		176	Ⅱ
61H	SK059	01SK01		156	141	Ⅱ	61H	SK124	01SK25		72	142	Ⅱ
61H	SK060	01SK03	395	110	139	Ⅲa	61H	SK125	01SK04			172	Ⅱ
61H	SK061	01SK04	56	44	183	Ⅱ	61H	SK126	01SK13		70	165	Ⅲa最古-Ⅱ
61H	SK062	01SK04	94	82	190	Ⅲ	61H	SK127	01SK18		100	145	Ⅱ
61H	SK063	01SK02	80	66	181	Ⅱ	61H	SK128	01SK16	140	122	129	Ⅲb末-Ⅱ
61H	SK064	01SK02	48	44	175	Ⅱa	61H	SK129	01SK13	70		135	Ⅱ
61H	SK065	01SK07	120	102	167	Ⅱ	61H	SK130	01SK12	84	54	139	Ⅲb
61H	SK066	01SK01		80	172	Ⅱ	61H	SK131	01SK10	68	54	151	Ⅱ
61H	SK067	01SK02	56	50	134	Ⅱ	61H	SK132	01SK17	88	52	138	Ⅲb
61H	SK068	01SK00		77	159	Ⅱ	61H	SK133	01SK14	122	104	122	Ⅱ
61H	SK069	01SK00		62	164	Ⅱ	61H	SK134	01SK02		88	131	Ⅱ
61H	SK070	01SK07	82	70	154	Ⅲ	61H	SK135	01SK01		98	170	Ⅱ
61H	SK071	01SK09	68	38	166	Ⅱ	61H	SK136	01SK06		94	127	Ⅱ・Ⅲ
61H	SK072	01SK06	126	64	147	Ⅱ	61H	SK137	01SK11		68	151	Ⅲ
61H	SK073	01SK05		170	145	Ⅱ	61H	SK138	01SK18	52	36	125	Ⅲb
61H	SK074	01SK02	94	122	154	Ⅱ	61H	SK139	01SK16		62	136	Ⅲ
61H	SK075	01SK00	328	212	136	Ⅱ	61H	SK140	01SK07	96	65	109	Ⅲ
61H	SK076	01SK03	52	48	129	Ⅱ	61H	SK141	01SK01		120	184	Ⅱ
61H	SK077	01SK00			153	Ⅲb末	61H	SK142	01SK02	182	102	149	Ⅲa
61H	SK078	01SK07	70	48	134	Ⅲa	61H	SK143	01SK03			145	Ⅱ-Ⅲ
61H	SK079	01SK07			170	Ⅱ	61H	SK144	01SK03	76	60	141	Ⅱ
61H	SK080	01SK01	60	56	146	Ⅱ	61H	SK145	01SK04	94	68	139	Ⅱ
61H	SK081	01SK05	50	36	141	Ⅲa	61H	SK146	01SK15	80	62	169	Ⅲ
61H	SK082	01SK04	310	92	152	Ⅱ-Ⅲa最古	61H	SK147	01SK17	88	36	173	Ⅱ
61H	SK083	01SK08	112	56	150	Ⅲa	61H	SK148	01SK09		42	158	Ⅲa
61H	SK084	01SK07	158	124	125	Ⅱ	61H	SK149	01SK12		88	142	Ⅱ
61H	SK085	01SK06	124	108	163	Ⅲa	61H	SK150	01SK13		46	170	Ⅱ
61H	SK086	01SK01		90	134	Ⅱ	61H	SK151	01SK14		84	184	Ⅲ
61H	SK087	01SK04			175	Ⅲa	61H	SK152	01SK02	44	42	163	Ⅲ
61H	SK088	01SK02		194	153	Ⅲa	61H	SK153	01SK04	216	86	179	Ⅱ

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	広レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	広レベル	時期	
61H	SK154	(イ)SK09	84	46	160	Ⅳ	61H	SK219	KL03SK06			177	Ⅳ	
61H	SK155	(イ)SK07	96	163	V	61H	SK220	KL03SK11	124	52	177	Ⅳ		
61H	SK156	(イ)SK06			162	Ⅳ	61H	SK221	KL03SK06		87	147	V	
61H	SK157	(イ)SK18			162	Ⅲa	61H	SK222	KL03SK10		96	180	V	
61H	SK158	(イ)SK16		64	137	Ⅲa	61H	SK223	KL03SK09			190	Ⅳ	
61H	SK159	(イ)SK21	80	68	140	Ⅲ	61H	SK224	KL03SK07			157	V	
61H	SK160	(イ)SK19	108	101	168	Ⅳ・Ⅴ	61H	SK225	KL03SK06	174	132	158	Ⅲ	
61H	SK161	(イ)SK10	138	94	122	Ⅲa	61H	SK226	KL03SK01	207	89	123	Ⅳ	
61H	SK162	(イ)SK22		66	106	V	61H	SK227	KL03SK01			124	Ⅳ	
61H	SK163	(イ)SK09	38	133	Ⅱ	61H	SK228	KL03SK06		114	158	Ⅱ・Ⅲa		
61H	SK164	(イ)SK08	22	125	Ⅲb	61H	SK229	KL03SK09		118	150	Ⅲb		
61H	SK165	(イ)SK00	34	30	116	Ⅲ	61H	SK230	KL03SK05			153	Ⅳ	
61H	SK166	(イ)SK08			109	Ⅲb	61H	SK231	KL03SK12	90	74	153	V	
61H	SK167	(イ)SK01	36	32	109	Ⅲa	61H	SK232	KL03SK12	130	94	156	Ⅲa	
61H	SK168	(イ)SK02	48	48	113	Ⅲa	61H	SK233	KL03SK16	120	56	182	Ⅲb	
61H	SK169	(イ)SK23			154	Ⅲa	61H	SK234	KL03SK11	82		180	V	
61H	SK170	(イ)SK22		44	114	Ⅲa・Ⅲb・Ⅳ	61H	SK235	KL03SK16	164	118	170	Ⅳ	
61H	SK171	(イ)SK05	120	64	117	Ⅳ	61H	SK236	KL03SK07			154	Ⅲb-Ⅳ	
61H	SK172	(イ)SK03	134	88	133	Ⅲa	61H	SK237	KL03SK12	178	88	141	Ⅲ	
61H	SK173	(イ)SK06	50	28	142	Ⅲ	61H	SK238	KL03SK12	164	79	136	Ⅲa	
61H	SK174	(イ)SK07			159	Ⅳ	61H	SK239	KL03SK16			194	Ⅴ	
61H	SK175	(イ)SK01	36	34	115	Ⅲb	61H	SK240	KL03SK09	154	146	163	Ⅲa	
61H	SK176	(イ)SK03			128	Ⅲ	61H	SK241	KL03SK06	120	100	176	Ⅲb	
61H	SK177	(イ)SK08	56	44	126	Ⅲb	61H	SK242	KL03SK15	230	98	95	Ⅳ	
61H	SK178	(イ)SK03	66	62	132	Ⅱ	61H	SK243	KL03SK07			172	V	
61H	SK179	(イ)SK04	168	88	156	Ⅲa	61H	SK244	KL03SK16	146	102	152	Ⅲa	
61H	SK180	(イ)SK00	54	42	178	Ⅲ	61H	SK245	KL03SK12	194	154	137	Ⅲ	
61H	SK181	(イ)SK07	54	36	176	Ⅲ	61H	SK246	KL03SK16			76	138	Ⅳ
61H	SK182	(イ)SK05	148	94	163	Ⅳ	61H	SK247	KL03SK12	48	24	155	Ⅲa	
61H	SK183	(イ)SK09	88	62	180	Ⅲa	61H	SK248	KL03SK16	50	38	143	Ⅲa・Ⅲc古	
61H	SK184	(イ)SK08	198	73	143	Ⅲ	61H	SK249	KL03SK19	120	108	157	Ⅲb末	
61H	SK185	(イ)SK03			139	Ⅲ	61H	SK250	KL03SK12	60	28	160	Ⅲa	
61H	SK186	(イ)SK02		108	173	Ⅳ・Ⅴ	61H	SK251	KL03SK04	115	86	176	Ⅲa・Ⅲc古	
61H	SK187	(イ)SK17	64	56	150	Ⅳ	61H	SK252	KL03SK06	152	76	156	Ⅲa	
61H	SK188	(イ)SK19	150	134	153	Ⅳ	61H	SK253	KL03SK09			143	150	Ⅲ
61H	SK189	(イ)SK18	88	56	160	Ⅴ	61H	SK254	KL03SK06	350	122	143	Ⅱ	
61H	SK190	(イ)SK22	156	136	146	Ⅳ Ⅴ Ⅵ	61H	SK255	KL03SK07			108	168	Ⅲ
61H	SK191	(イ)SK12			139	Ⅳ	61H	SK256	KL03SK09	116	64	177	Ⅲa・Ⅲc古	
61H	SK192	(イ)SK11	106	55	183	Ⅳ・Ⅴ	61H	SK257	KL03SK12	406	82	157	Ⅲb末	
61H	SK193	(イ)SK10	66	42	184	Ⅴ	61H	SK258	KL03SK11	92	52			
61H	SK194	(イ)SK15			189	Ⅳ	61H	SK259	KL03SK16	170	84	185	Ⅲb	
61H	SK195	(イ)SK14			181	Ⅲb	61H	SK260	KL03SK02	112	122	163	Ⅲa	
61H	SK196	(イ)SK16	86	80	183	Ⅴ	61H	SK261	KL03SK01	212	186	121	Ⅴ-Ⅵ	
61H	SK197	(イ)SK05	128	114	135	Ⅱ	61H	SK262	KL03SK09	247	180	138	Ⅳ	
61H	SK198	(イ)SK23		44	172	Ⅱ	61H	SK263	KL03SK11	102	78	127	Ⅲb	
61H	SK199	(イ)SK20	166	64	160	Ⅴ	61H	SK264	KL03SK12	240	101	161	Ⅱ	
61H	SK200	KL03SK02			108	Ⅲ	61H	SK265	KL03SK14	110	78	158	Ⅲa	
61H	SK201	KL03SK01	162	142	102	Ⅲb	61H	SK266	KL03SK09	250	202	135	Ⅴ-Ⅵ	
61H	SK202	KL03SK03	144	76	172	Ⅲ	61H	SK267	KL03SK06	136	66	153	Ⅲa	
61H	SK203	KL03SK02		96	105	Ⅲb	61H	SK268	KL03SK09			123	Ⅲ	
61H	SK204	KL03SK03	128		170	Ⅳ	61H	SK269	KL03SK09			123	Ⅳ	
61H	SK205	KL03SK16	244	116	156	V	61H	SK270	KL03SK11		136	132	Ⅴ	
61H	SK206	KL03SK11	146	142	157	Ⅱ	61H	SK271	KL03SK06	118	78	90	Ⅳ	
61H	SK207	KL03SK14			156	Ⅲa・Ⅲc古	61H	SK272	KL03SK05	268	82	129	Ⅳ	
61H	SK208	KL03SK09			151	Ⅴ ¹⁾ Ⅵ ²⁾ Ⅶ ³⁾ Ⅷ ⁴⁾	61H	SK273	KL03SK14	154	76	121	Ⅲb	
61H	SK209	KL03SK18			177	V	61H	SK274	KL03SK12	212	104	147	Ⅲa・Ⅲc古	
61H	SK210	KL03SK19	124	108	181	V	61H	SK275	KL03SK15	168	124	135	Ⅲa-Ⅳ	
61H	SK211	KL03SK07			179	Ⅲa	61H	SK276	KL03SK19	118	94	124	Ⅲb末	
61H	SK212	KL03SK04	90	38	190	Ⅲb	61H	SK277	KL03SK06		100	145	Ⅳ	
61H	SK213	KL03SK03			189	Ⅲ	61H	SK278	KL03SK12	246	108	162	Ⅳ	
61H	SK214	(イ)SK08		154	159	V	61H	SK279	KL03SK18			135	V	
61H	SK215	KL03SK03	126	146	111	Ⅱ	61H	SK280	KL03SK07			147	V	
61H	SK216	KL03SK01	172	157	157	Ⅳ・Ⅴ	61H	SK281	KL03SK06	210	109.1	137	Ⅲb-Ⅳ	
61H	SK217	KL03SK12	82		158	V	61H	SK282	KL03SK17	100	96	136	Ⅳ	
61H	SK218	KL03SK04		146	130	Ⅴ	61H	SK282	KL03SK08			146	Ⅲb	

調査区番号	遺構番号	遺構田番号	規模長	規模短	底レベル	時期	調査区番号	遺構番号	遺構田番号	規模長	規模短	底レベル	時期	
61H	SK283	0LPSK0		74	148	II	61H	SK347	0LPSK0	55	45	148	III	
61H	SK284	0LPSK0		86	141	IIIb末	61H	SK348	0LPSK0			151	II	
61H	SK285	0LPSK0			172	IV	61H	SK349	0LPSK0			147	IV	
61H	SK286	0LPSK0	72	64	145	IV	61H	SK349	0LPSK0	60	60	160	III	
61H	SK287	0LPSK0	104	96	132	IV	61H	SK350	0LPSK0	95	75	171	III	
61H	SK288	0LPSK0	200	74	135	IV	61H	SK351	0LPSK0	50	47	177	III	
61H	SK289	0LPSK0	76		146	III	61H	SK352	0LPSK0			133	III	
61H	SK290	0LPSK0	118		162	IV	61H	SK353	0LPSK0	75	75	144	II	
61H	SK291	0LPSK0	126	96	141	IIIa最古	61H	SK354	0LPSK0	65		164	II	
61H	SK292	0LPSK0	88	72	174	II	61H	SK355	0LPSK0	60	30	126	IV	
61H	SK293	0LPSK0	72	50	125	IV ¹	61H	SK356	0LPSK0			117	IV	
61H	SK294	0LPSK0	132	112	113	IIIa~IV	61H	SK357	0LPSK0		65	110	III	
61H	SK294	0LPSK0	114	92	136	IV	61H	SK358	0LPSK0	120	105	117	IIIa最古	
61H	SK295	0LPSK0			154	III	61H	SK359	0LPSK0	45	40	143	III	
61H	SK296	0LPSK0	260	138	146	IIIb	61H	SK360	0LPSK0			148	IIIa	
61H	SK296	0LPSK0	118	98	148	IIIb	61H	SK361	0LPSK0			153	II	
61H	SK297	0LPSK0			124	IIIb	61H	SK362	0LPSK0			133	IIIa	
61H	SK298	0LPSK0	162	158	138	IV ¹	61H	SK363	0LPSK0		45	133	II	
61H	SK299	0LPSK0	74	68	153	IV	61H	SK364	0LPSK0		40	162	III	
61H	SK300	0LPSK0		98	106	IIIb~V	61H	SK365	0LPSK0	155	60	151	II	
61H	SK301	0LPSK0			123	IV	61H	SK366	0LPSK0	175		117	IIIa	
61H	SK302	0LPSK0			106	IIIb末~IV	61H	SK367	0LPSK0			114	IIIa最古	
61H	SK303	0LPSK0	252	170	144	IIIb~IV	61H	SK368	0LPSK0			118	II	
61H	SK304	0LPSK0	198	73	143	Va	61H	SK369	0LPSK0	135	85	147	IV	
61H	SK305	0LPSK0	163	142	152	IIIb	61H	SK370	0LPSK0	60	50	150	IV	
61H	SK306	0LPSK0	130	93	140	Vb	61H	SK371	0LPSK0	70	65	100	IV	
61H	SK307	0LPSK0		191	132	VI	61H	SK372	0LPSK0	140	90	134	II	
61H	SK308	0LPSK0	228	108	180	V	61H	SK373	0LPSK0	85	55	145	IV	
61H	SK309	0LPSK0			165	IIIb	61H	SK374	0LPSK0	75	60	135	II	
61H	SK310	0LPSK0	72	46	141	IV	61H	SK375	0LPSK0	165	105	130	IIIb	
61H	SK312	0LPSK0			147	IIIa	61H	SK376	0LPSK0	125	142	112	II	
61H	SK313	0LPSK0	96	58	144	IIIb	61H	SK377	0LPSK0			170	IIIa	
61H	SK314	0LPSK0	198	154	151	IIIb	61H	SK378	0LPSK0		35	163	IIIa	
61H	SK314	0LPSK0	110	76	160	Va	61H	SK379	0LPSK0			123	IIIa	
61H	SK315	0LPSK0	158	96	170	V	63B	SK01	SK219	360	190	135	IIIa~IIIb ¹	
61H	SK316	0LPSK0			180	IV	63B	SK02	SK217			165	IIIa	
61H	SK317	0LPSK0		90	134	II	63B	SK03	SK216	240	120	149	IIIa	
61H	SK318	0LPSK0	224	156	149	IV	63B	SK04	SK214			166	III	
61H	SK319	0LPSK0	136		136	IIIa	63B	SK05	SK212	40	40	136	IIIa	
61H	SK320	0LPSK0	123	91	173	IIIb	63B	SK06	SK213			110	171	IV
61H	SK321	0LPSK0	114	78	174	V	63B	SK07	SK210	160	80	128	IIIa	
61H	SK322	0LPSK0			181	V	63B	SK08	SK209			148	IIIa	
61H	SK323	0LPSK0	140	134	166	IIIa最古	63B	SK09	SK208		340	135	IIIa	
61H	SK324	0LPSK0			172	IV	63B	SK10	SK206	205	101	130	IIIa	
61H	SK325	0LPSK0			171	IIIb	63B	SK11	SK207	145	105	142	II	
61H	SK326	0LPSK0		84	164	IIIb	63B	SK12	SK203			139	IV	
61H	SK327	0LPSK0	260	60	165	IIIb	63B	SK13	SK202		320	139	IV	
61H	SK328	0LPSK0			174	VI	63B	SK14	SK201			112	II	
61H	SK329	0LPSK0		56	176	IIIb	63B	SK15	SK204	100	100	144	IIIa	
61H	SK330	0LPSK0	114	76	185	IV	63B	SK16	SK63		64	117	IIIa	
61H	SK331	0LPSK0			188	III	63B	SK17	SK62	96	72	122	IIIa	
61H	SK332	0LPSK0			180	IIIa	63B	SK18	SK04	42	42	165	IIIa	
61H	SK333	0LPSK0			157	IV	63B	SK19	SK01		122	133	IIIa	
61H	SK334	0LPSK0	128	110	173	Va	63B	SK20	SK02		136	125	IIIb	
61H	SK335	0LPSK0	146	48	179	IV	63B	SK21	SK03	100	86	146	IIIa	
61H	SK336	0LPSK0		80	174	IIIb~IV	63B	SK22	SK08	76	66	137	IIIa	
61H	SK337	0LPSK0		99	144	IIIb	63B	SK23	SK06			126	IIIb	
61H	SK338	0LPSK0	228	146	160	V	63B	SK24	SK05		124	152	IIIa	
61H	SK339	0LPSK0			192	IIIa最古	63B	SK25	SK09	222	62	132	IV	
61H	SK340	0LPSK0			194	IV	63B	SK26	SK11		90	157	IV	
61H	SK341	0LPSK0		120	184	II	63B	SK27	SK15	80	76	130	IV	
61H	SK342	0LPSK0			180	II	63B	SK28	SK17	56	52	144	IIIa	
61H	SK343	0LPSK0			124	IV	63B	SK29	SK10	36	36	150	IIIb	
61H	SK344	0LPSK0		72	104	II	63B	SK30	SK18	90	52	158	IIIa	
61H	SK345	0LPSK0			164	IV	63B	SK31	SK14	160	66	158	IIIb	

異型区番号	遺構新番	遺構旧番	取戻長軸	取戻短軸	並レベル	時期	異型区番号	遺構新番	遺構旧番	取戻長軸	取戻短軸	並レベル	時期
63B	SK32	SK19	74	38	173	Ⅲa	63G	SK038	(C)SK111			125	Ⅳ
63B	SK33	SK34	60	50	122	Ⅲa	63G	SK039	(C)SK112	60	56	135	Ⅲb
63B	SK34	SK59		46	147	Ⅲa	63G	SK040	(C)SK102	38	36	151	Ⅲ
63B	SK35	SK35	38	30	148	Ⅲa	63G	SK041	(C)SK009	122	72	166	
63B	SK36	SK41	66	66	120	Ⅲa	63G	SK042	(C)SK105	30	26	173	Ⅳ
63B	SK37	SK39	149	98	114	Ⅲa	63G	SK043	(C)SK24	188	180.1	181	Ⅲa, Ⅲb
63B	SK38	SK38	68	42	110	Ⅲa	63G	SK044	(C)SK110	58	58	138	Ⅲ
63B	SK39	SK37	26	26	142	Ⅲa	63G	SK045	(C)SK119	136	79	155	Ⅲa
63B	SK40	SK57	62	60	139	Ⅲa	63G	SK046	(C)SK118	156	97	157	Ⅳ
63B	SK41	SK36	50	40	113	Ⅲa	63G	SK047	(C)SK117	85	49	160	Ⅳ
63B	SK42	SK58	80	60	135	Ⅲa	63G	SK048	(C)SK108	38	34	166	Ⅲa
63B	SK43	SK56		150	126	Ⅲa	63G	SK049	(F)SK123		54	163	V
63B	SK44	SK32	44	36	141	Ⅲa	63G	SK050	(C)FSK101		278	140	Ⅲb, Ⅳ
63B	SK45	SK20	30	28	151	Ⅲ	63G	SK051	(F)SK103	180	118	164	Ⅲa最古
63B	SK46	SK21		44	147	Ⅲa	63G	SK052	(F)SK102	122	110	133	Ⅲa
63B	SK47	SK16	158	110	133	Ⅲb	63G	SK053	(F)SK009		314	137	Ⅲ
63B	SK48	SK22	124	52	136	Ⅲa	63G	SK054	(F)SK115	126	100	156	Ⅲa
63B	SK49	SK23	26	18	153	Ⅲa	63G	SK055	(F)SK114	64	(58)	158	Ⅳ
63B	SK50	SK24	50	40	144	Ⅲa	63G	SK056	(F)SK116			160	Ⅲ
63B	SK51	SK31	62	60	157	Ⅳ	63G	SK057	(F)SK105		234	123	Ⅱ
63B	SK52	SK51	70	46		Ⅲa	63G	SK058	(F)SK116	46	(44)	145	V
63B	SK53	SK40	40	40	142	Ⅲa	63G	SK059	(F)SK124	92	58	165	Ⅳ
63B	SK54	SK29	108	64	126	Ⅲa	63G	SK060	(F)SK106	84	68	157	Ⅳ
63B	SK55	SK30	26	22	154	Ⅲa	63G	SK061	(F)SK107	230	162	131	Ⅲa
63B	SK56	SK25	74	54	139	Ⅲa	63G	SK062	(F)SK106	212	94	141	Ⅳ
63B	SK57	SK26	124	110	129	Ⅲa	63G	SK063	(F)SK117	72	46	162	Ⅳ
63B	SK58	SK60	188	116	133	Ⅲa	63G	SK064	(F)SK109		88	128	Ⅲb
63B	SK59	SK64			137	Ⅲa	63G	SK065	(F)SK119	86	48	173	Ⅳ
63G	SK001	(A)SK118	126	103	95	Ⅳ	63G	SK066	(F)SK110	170	100	170	Ⅳ
63G	SK002	(A)SK116	102	76	120	Ⅳ	63G	SK067	(F)SK121	41	32	160	Ⅲb
63G	SK003	(A)SK121	192	162	99	Ⅲ	63G	SK068	(F)SK125		94	171	Ⅳ
63G	SK004	(A)SK115		86	116	Ⅲb	63G	SK069	(F)SK113			166	Ⅲb
63G	SK005	(A)SK119	72	66	105	Ⅲ	63G	SK070	(F)SK122	40	38	168	Ⅳ
63G	SK006	(A)SK122			143	Ⅲb	63G	SK071	(F)SK112	(114)	84	153	Ⅳ
63G	SK007	(A)SK125		64	121	Ⅳ	63G	SK072	(F)SK111	172	181	162	Ⅳ
63G	SK008	(A)SK114	99	79	132	Ⅳ	63G	SK073	(I)SK105		150	108	Ⅳ
63G	SK009	(A)SK101	162	158	102	Ⅳ, Ⅲb	63G	SK074	(I)SK104	160	68	158	Ⅳ
63G	SK010	(A)SK113	-	-	-	Ⅳ	63G	SK075	(I)SK106	124	44	150	Ⅲ
63G	SK011	(A)SK109		196	100	Ⅲb	63G	SK076	(I)SK101		146	139	Ⅳ
63G	SK012	(A)SK105			134	Ⅲ	63G	SK077	(I)SK103	102	68	149	Ⅳ
63G	SK013	(A)SK106	370	194	77	Ⅳ	63G	SK078	(I)SK108	91	78	171	V
63G	SK014	(A)SK110		360	91	Ⅳ	63G	SK079	(I)SK110			114	Ⅳ
63G	SK015	(A)SK111			114	Ⅲb	63G	SK080	(I)SK102		96	135	V
63G	SK016	(A)SK123	116	100	109	Ⅲb末	63G	SK081	(I)SK107			155	Ⅳ
63G	SK017	(A)SK102	238	180	92	Ⅳ	63G	SK082	(I)SK111	64	52	136	V
63G	SK018	(A)SK103	174	124	111	Ⅲb	63G	SK083	(I)SK111			202	127 Ⅲb末-Ⅳ
63G	SK019	(A)SK126	74	54	131	Ⅲa	63G	SK084	(I)SK118	(188)	87	139	Ⅳ
63G	SK020	(A)SK112			94	Ⅲb・Ⅳ	63G	SK085	(I)HSK110	212	180	156	Ⅳ
63G	SK021	(B)SK141	94	72	127	Ⅲa	63G	SK086	(I)SK105	200	90	149	V
63G	SK022	(B)SK105		168	98	Ⅱ・Ⅳ	63G	SK087	(I)SK112		74	?	Ⅲb
63G	SK023	(B)SK103			157	Ⅲ	63G	SK088	(I)SK113	113	66	?	Ⅲa
63G	SK024	(B)SK142	124	70	138	Ⅲa	63G	SK089	(I)SK107		80	132	Ⅳ
63G	SK025	(B)SK148	118	102	147	Ⅱ	63G	SK090	(I)SK120	(70)	70	133	Ⅲ
63G	SK026	(B)SK149	180	62	145	Ⅲa	63G	SK091	(I)SK111			145	Ⅳ
63G	SK027	(B)SK101	68	62	145	Ⅲa	63G	SK092	(I)SK106	82	72	133	Ⅲb
63G	SK028	(B)SK102	60	52	153	Ⅲ	63G	SK093	(I)SK101		248	110	Ⅳ
63G	SK029	(B)SK106			156	Ⅲa	63G	SK094	(I)SK104	184	106	171	Ⅳ
63G	SK030	(B)SK107	40	36	158	Ⅳ	63G	SK095	(I)SK121	100	171	171	V
63G	SK031	(B)SK109	70	60	169	Ⅳ	63G	SK096	(I)SK108		130	128	Ⅳ
63G	SK032	(B)SK112			156	Ⅲa	63G	SK097	(I)SK112	70	46	180	Ⅳ
63G	SK033	(C)SK110	138		186	Ⅳ	63G	SK098	(I)SK100	262	132	145	Ⅳ
63G	SK034	(C)SK115	20	20		Ⅳ	63G	SK099	(I)SK107	130	124	169	Ⅲb
63G	SK035	(C)SK116	22	18	173	Ⅳ	63G	SK100	(I)SK115	174	130	100	Ⅳ
63G	SK036	(C)SK113	144	62	150	Ⅲb末-Ⅳ	63G	SK101	(I)SK102	182	102	125	Ⅲb末
63G	SK037	(C)SK125	202	140	175	Ⅲa, Ⅲb	63G	SK102	(I)SK103	122	90	156	Ⅲ

調査区番号	遺構番号	遺構田番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構番号	遺構田番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
63G	SK103	田SK111		124	120	Ⅲ	63G	SK168	(J)SK124	84	80	123	Ⅲ
63G	SK104	田SK111	(100)	82	134	Ⅲb,Ⅳ	63G	SK169	(J)SK125		98	148	Ⅳ
63G	SK105	田SK116		94	154	Ⅳ	63G	SK170	(J)SK111	414	124	171	Ⅳ
63G	SK106	田SK106		142	134	Ⅳ	63G	SK171	(J)SK111	70	64	135	Ⅳ
63G	SK107	(E)SK127	114	96	111	Ⅲa	63G	SK172	(J)SK117	95	80	145	Ⅳ
63G	SK108	(E)SK108	96	80	165	Ⅲb	63G	SK173	(J)SK116	102	80	141	Ⅳ
63G	SK109	(E)SK107		296	151	Ⅳ	63G	SK174	(J)SK119	(197)	103	138	Ⅲb
63G	SK110	(E)SK109	204	144	123	Ⅲa	63G	SK175	(J)SK103	130	106	135	Ⅳ
63G	SK111	(E)SK106	168		130	Ⅲb	63G	SK176	(J)SK108		104	111	Ⅳ
63G	SK112	(E)SK111			101	Ⅳ	63G	SK177	(J)SK114	66	43	143	Ⅲ
63G	SK113	(E)SK132	66	46	126	Ⅲa	63G	SK178	(J)SK115		60	128	Ⅲ
63G	SK114	(E)SK110		134	138	Ⅲ	63J	SK01	SK37		70	144	Ⅲa
63G	SK115	(E)SK113		168	109	Ⅲb	63J	SK02	SK36	96	80	150	Ⅲa
63G	SK116	(E)SK112	264	146	111	Ⅲa・Ⅲb	63J	SK03	SK34	160	116	140	Ⅲa
63G	SK117	(E)SK134		54	142	Ⅲ	63J	SK04	SK33	86	84	140	Ⅲa
63G	SK118	(E)SK118			118	Ⅲ	63J	SK05	SK15	208	128	124	Ⅳ
63G	SK119	(E)SK128	94		121	Ⅲb	63J	SK06	SK22	88	80	158	Ⅳ
63G	SK120	(E)SK115	74	44	125	Ⅱ	63J	SK07	SK21	60	44	142	Ⅳ
63G	SK121	(E)SK114	84	68	102	Ⅳ	63J	SK08	SK16		80	130	Ⅳ
63G	SK122	(E)SK129	62	58	116	Ⅲa	63J	SK09	SK20	244	210	135	Ⅲa・Ⅳ
63G	SK123	(E)SK131		102	149	Ⅲa	63J	SK10	SK40		70	182	Ⅳ
63G	SK124	(E)SK105		248	119	Ⅲb	63J	SK11	SK06	186	112	194	Ⅳ
63G	SK125	(E)SK117		108	139	Ⅳ	63J	SK12	SK10		138	180	Ⅳ
63G	SK126	(E)SK119	254	206	131	Ⅲb末~Ⅳ	63J	SK13	SK09	170	146	194	Ⅳ
63G	SK127	(E)SK130			138	Ⅲa	63J	SK14	SK11		114	179	Ⅱ
63G	SK128	(E)SK116	258		131	Ⅲa	63J	SK15	SK08	282	108	132	Ⅲa
63G	SK129	(E)SK134	134	102	136	Ⅲa	63J	SK16	SK07	110	74	186	Ⅳ
63G	SK130	(E)SK122	132	102	121	Ⅳ	63J	SK17	SK26	140	96	148	Ⅲb
63G	SK131	(E)SK135	106	96	122	Ⅲa	63J	SK18	SK04	298	112	144	Ⅳ~Ⅴ
63G	SK132	(E)SK103		188	132	Ⅲb末~Ⅳ	63J	SK19	SK03	376	86	114	Ⅳ~Ⅴ
63G	SK133	(E)SK102			171	Ⅲb	63J	SK20	SK12	260	90	136	Ⅳ
63G	SK134	(E)SK101		116	131	Ⅳ	63J	SK21	SK29			100	Ⅱ
63G	SK135	(E)SK125	110	60	141	Ⅲb	63J	SK22	SK02	326	174	154	ⅣorⅤ
63G	SK136	(E)SK121	62	(55)	148	Ⅱ	63J	SK23	SK01		119	192	ⅣorⅤ
63G	SK137	(E)SK130			132	Ⅲa	63J	SK24	SK31		134	183	Ⅳ
63G	SK138	(D)SK160	250	168	126	Ⅳ	63J	SK25	SK14	176	104	182	Ⅳ
63G	SK139	(D)SK209		94	146	Ⅱ	63J	SK26	SK24		100	140	Ⅳ
63G	SK140	(D)SK223	164	128	128	Ⅱ	63J	SK27	SK13	254	137	162	Ⅳ
63G	SK141	(D)SK102		98	141	Ⅲb	63J	SK28	SK23		144	182	Ⅳ
63G	SK142	(D)SK228		172	120	Ⅲa最古	63J	SK29	SK19	224			Ⅳa
63G	SK143	(D)SK221	192	168	93	Ⅲb,Ⅳ	63J	SK30	SK39	150	42	143	Ⅳ
63G	SK144	(D)SK229	242		122	Ⅲb,Ⅳ	63J	SK31	SK18	168	78	170	Ⅳ
63G	SK145	(D)SK119	180	160	135	Ⅲb	63J	SK32	SK28	112	74	160	Ⅲ
63G	SK146	(D)SK220	86	54	143	Ⅳ	63J	SK33	SK27		210	152	Ⅲb
63G	SK147	(D)SK166	198	114	127	Ⅱ	63J	SK34	SK25			171	Ⅱ
63G	SK148	(D)SK222	124	78	99	Ⅳ	63J	SK35	SK42		184	146	Ⅳ
63G	SK149	(D)SK118	420	100	135	Ⅳ	63J	SK36	SK30	170	66	148	Ⅳ
63G	SK150	(D)SK114	290	168	75	Ⅱ・Ⅲb	63J	SK37	SK38	80	62	160	Ⅲa
63G	SK151	(D)SK228	168	100	155	Ⅲa	63J	SK38	SK17	100	74	152	Ⅳ
63G	SK152	(D)SK103			157	Ⅲa	63L	SK01	(?)SK02		114	157	Ⅳ
63G	SK153	(D)SK116	90	84	166	Ⅲ	63L	SK02	(?)SK02		98	140	Ⅳ
63G	SK154	(D)SK227	224	120	160	Ⅲa	63L	SK03	(?)SK02		86	150	Ⅳ
63G	SK155	(D)SK113	74	70	104	Ⅳ	63L	SK04	(?)SK03	174	80	153	Ⅳ
63G	SK156	(D)SK110		102	107	Ⅳ	63L	SK05	(?)SK04	302		136	Ⅲa
63G	SK157	(D)SK105			129	Ⅳ	63L	SK06	(?)SK02			172	Ⅱ
63G	SK158	(D)SK107	82	64	108	Ⅳ	63L	SK07	(?)SK03	88	82	177	Ⅱ
63G	SK159	(D)SK104	480		140	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	63L	SK08	(?)SK06		(110)	156	Ⅱ
63G	SK160	(D)SK104	180	120	175	Ⅳ	63L	SK09	(?)SK01	122		175	Ⅲa
63G	SK161	(D)SK102	122	72	189	Ⅲb	63L	SK10	(?)SK06	133	88	156	Ⅰ・Ⅲb・Ⅳ
63G	SK162	(D)SK207		228		Ⅳ	63L	SK11	(?)SK02	90	83	159	Ⅳ
63G	SK163	(D)SK102			129	Ⅳ	63L	SK12	(?)SK06		104	146	Ⅲa
63G	SK164	(D)SK103			114	Ⅳ	63L	SK13	(?)SK01		100	131	Ⅳ
63G	SK165	(D)SK104			134	Ⅳ	63L	SK14	(?)SK03	130	48	144	Ⅲb末
63G	SK166	(D)SK107	52	50	157	Ⅳ	63L	SK15	(?)SK02		118	167	Ⅳ
63G	SK167	(D)SK108		74	167	Ⅳ	63L	SK16	(?)SK06			145	Ⅳ

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
63L	SK17	(エ)SK03			163	Ⅱ	63M	SK33	SK08	156	124	152	Ⅱ
63L	SK18	(エ)SK07	92	68	159	Ⅲb	63M	SK34	SK09	154	96	170	Ⅲb
63L	SK19	(カ)SK01		136		Ⅲa	63M	SK35	SK42	218	172	135	Ⅲa
63L	SK20	(キ)SK01	170	150	143	V	63M	SK36	SK102	116	110	169	Ⅱ
63L	SK21	(ク)SK06			171	Ⅱ	89A	SK01	SK90	20	20	150	Ⅲ
63L	SK22	(ク)SK08			150	Ⅲ	89A	SK02	SK09	146	120	160	Ⅲ
63L	SK23	(キ)SK02			118	Ⅱ・Ⅳ	89A	SK03	SK05	130	114	149	Ⅲb
63L	SK24	(ク)SK07	76		155	Ⅲ	89A	SK04	SK06	92	88	159	Ⅲb
63L	SK25	(ク)SK05	198	112	165	Ⅱ	89A	SK05	SK46	192	168	165	V
63L	SK26	(ク)SK01		192	105	Ⅱ・Ⅲa	89A	SK06	SK91			149	V
63L	SK27	(ク)SK02		61	178	Ⅱ	89A	SK07	SK47	98	76	122	Ⅲb・Ⅳ
63L	SK28	(ク)SK01	140	89	172	Ⅲa	89A	SK08	SK48	198	94	169	Ⅱ
63L	SK29	(ク)SK03			147	Ⅲa	89A	SK09	SK58	136	110	152	Ⅱ
63L	SK30	(ク)SK02	210		143	Ⅲa	89A	SK10	SK61	104	68	133	Ⅱ
63L	SK31	(ク)SK01	67	38	143	Ⅲb	89A	SK11	SK04		86	153	Ⅱ
63L	SK32	(ク)SK03			150	Ⅱ	89A	SK12	SK05	112	84	151	Ⅱ
63L	SK33	(ク)SK03	(80)	-40	165	Ⅲa	89A	SK13	SK64	142	112	132	Ⅱ
63L	SK34	(ク)SK04	82	66	163	Ⅱ	89A	SK14	SK83	106	100	150	Ⅱ
63L	SK35	(ク)SK09	120		170	Ⅱ	89A	SK15	SK43	144	120	129	Ⅱ・Ⅳ
63L	SK36	(ク)SK02			155	Ⅱ・Ⅲa・Ⅳ	89A	SK16	SK35	152	114	111	Ⅱ
63L	SK37	(ク)SK01			102	Ⅱ・Ⅲa	89A	SK17	SK03	114	94	96	Ⅱ
63L	SK38	(ク)SK04	53	38	167	Ⅲ	89A	SK18	SK82	110	80	162	Ⅱ
63L	SK39	(ク)SK05		84	133	Ⅱ	89A	SK19	SK29			157	Ⅲa
63L	SK40	(ク)SK07			153	Ⅱ	89A	SK20	SK95			180	Ⅱ
63L	SK41	(ク)SK06			171	Ⅱ	89A	SK21	SK72			121	Ⅲa
63L	SK42	(シ)SK01			161	Ⅲa	89A	SK22	SK49	60	58	170	Ⅱ
63L	SK43	(ス)SK04		100	100	Ⅱ	89A	SK23	SK50	168	66	165	Ⅱ
63L	SK44	(ス)SK03		170	88	Ⅱ・Ⅳ	89A	SK24	SK33	198	122	153	V
63L	SK45	(ス)SK01			128	Ⅱ	89A	SK25	SK78	106	62	162	Ⅱ
63L	SK46	(ス)SK06	176	105	107	Ⅲb・Ⅳ	89A	SK26	SK98	168	104	137	Ⅲb
63L	SK47	(ス・セ)SK02		92	143	Ⅱ・Ⅳ	89A	SK27	SK70	122	108	152	Ⅲb
63L	SK48	(セ)SK09		148	142	Ⅲ	89A	SK28	SK74	134	76	159	V
63L	SK49	(セ)SK03	158		171	Ⅱ	89A	SK29	SK32		118	108	Ⅱ
63M	SK01	SK96			160	Ⅱ	89A	SK30	SK92		72	144	Ⅲa
63M	SK02	SK12			157	Ⅱ	89A	SK31	SK93		92	137	Ⅱ・Ⅳ
63M	SK03	SK10	100	74	161	Ⅲb	89A	SK32	SK19	38	38	141	Ⅲa
63M	SK04	SK11	72	68	162	Ⅲa・Ⅳ	89A	SK33	SK20	184	130	139	V
63M	SK05	SK93	116	80	166	Ⅲa	89A	SK34	SK56		70	149	Ⅲa
63M	SK06	SK86	374	328	133	Ⅱ・Ⅴ	89A	SK35	SK97		62	152	Ⅲa
63M	SK07	SK85		110	181	Ⅲa・Ⅴ	89A	SK36	SK57	66	62	154	V
63M	SK08	SK84	110	80	167	Ⅲb	89A	SK37	SK17	248	166	142	Ⅲb・Ⅳ
63M	SK09	SK82	262	216	131	Ⅱ・Ⅲa・Ⅴ	89A	SK38	SK78	(126)	74	116	Ⅱ
63M	SK10	SK81	100	68	149	V	89A	SK39	SK94			152	Ⅱ
63M	SK11	SK79	112	98	158	Ⅱ	89A	SK40	SK77			168	V
63M	SK12	SK48	(140)	126	152	Ⅲb・Ⅳ	89A	SK41	SK44			126	V
63M	SK13	SK04	222		148	Ⅲb・Ⅳ	89A	SK42	SK67			176	Ⅲb
63M	SK14	SK89	116	88	150	Ⅱ・Ⅳ	89A	SK43	SK96		118	139	Ⅱ
63M	SK15	SK33			189	Ⅱ	89A	SK44	SK51		76	132	Ⅲa・Ⅲc・Ⅳ
63M	SK16	SK05	70	60	150	Ⅱ	89A	SK45	SK45	142		108	Ⅲa・Ⅲc・Ⅳ
63M	SK17	SK25		64	144	V	89A	SK46	SK16	156	156	114	Ⅲb
63M	SK18	SK18	62	26	158	Ⅲb	89A	SK47	SK31	120	102	118	Ⅲb
63M	SK19	SK19	90	74	168	Ⅲ	89A	SK48	SK37	118	116	117	Ⅲb
63M	SK20	SK24	100	98	166	Ⅱ	89A	SK49	SK39	140	82	128	Ⅲa
63M	SK21	SK07	172	138	150	Ⅱ	89A	SK50	SK22	134	94	148	Ⅲb
63M	SK22	SK06		143	132	Ⅲb	89A	SK51	SK30			169	Ⅱ
63M	SK23	SK13	86	56	181	Ⅱ	89A	SK52	SK25			106	Ⅲa・Ⅲc・Ⅳ
63M	SK24	SK16	92	78	186	Ⅱ	89A	SK53	SK36		180	143	Ⅲb
63M	SK25	SK23	205	154	146	V	89A	SK54	SK55			154	Ⅲb
63M	SK26	SK22	68	62	152	Ⅲb	89A	SK55	SK41			148	Ⅲa
63M	SK27	SK44	110	60	159	V	89A	SK56	SK54	374		171	Ⅲa
63M	SK28	SK43			148	Ⅱ・Ⅴ	89A	SK57	SK34	178	106	169	Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc・Ⅳ
63M	SK29	SK45	130	68	150	V	89A	SK58	SK23	122	86	136	Ⅲ
63M	SK30	SK46	146	68	148	Ⅱ	89A	SK59	SK38	140	126	169	Ⅲb
63M	SK31	SK76	310		134	Ⅲb	89A	SK60	SK21	174	126	149	Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc・Ⅳ
63M	SK32	SK101	124	54	160	Ⅲb・Ⅳ	89A	SK61	SK40	72	58	174	Ⅲb

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
89A	SK62	SK73	306	88	89	II	89B	SK59	(エ)SK25			134	Ⅲa
89A	SK63	SK88			156	Ⅲa最古	89B	SK60	(エ)SK02			158	Ⅲa
89A	SK64	SK24	106	88	174	Ⅳ	89B	SK61	(ウ)SK03			186	V
89A	SK65	SK67	98	88	147	Ⅲb	89B	SK62	(ウ)SK04	240	120	102	Ⅱ・Ⅳ
89A	SK66	SK18	172	166	169	Ⅲa最古	89B	SK63	(ウ)SK08			114	Ⅳ
89A	SK67	SK80	104	100	151	Ⅳ	89B	SK64	(ウ)SK07	228	186	142	Ⅲb末
89A	SK68	SK15	94	67	Ⅳ	89B	SK65	(エ)SK03	206	184	146	Ⅳ	
89B	SK01	(フ)SK47	80	46	137	Ⅲa最古	89B	SK66	(エ)SK01			160	Ⅳ
89B	SK02	(フ)SK18		144	124	Ⅲb末	89B	SK67	(エ)SK10			70	136
89B	SK03	(フ)SK23		116	158	V a	89B	SK68	(エ)SK37	356	114	114	Ⅲ上層
89B	SK04	(フ)SK48	138	94	157	Ⅲa最古	89B	SK69	(エ)SK39			72	128
89B	SK05	(フ)SK24	246	210	121	Ⅳ	89B	SK70	(エ)SK38 (136)			98	150
89B	SK06	(フ)SK17	212	108	133	Ⅲa末	89B	SK71	(エ)SK26				175
89B	SK07	(フ)SK07	250	240	118	Ⅳ	89B	SK72	(エ)SK06	222	128	122	Ⅲa
89B	SK08	(フ)SK21	300	186	118	Ⅳ	89B	SK73	(エ)SK13	76	42	142	Ⅳ
89B	SK09	(フ)SK10		118	165	V	89B	SK74	(エ)SK14	235	80	144	Ⅲ
89B	SK10	(フ)SK03	194	156	144	Ⅲb	89B	SK75	(エ)SK15			100	143
89B	SK11	(フ)SK02	440	142	146	Ⅲa	89B	SK76	(エ)SK28	106	76	141	Ⅲ
89B	SK12	(フ)SK04	162	167	Ⅲa	89B	SK77	(フ)SK04	176 (150)			148	Ⅳ
89B	SK13	(フ)SK15	110	64	166	V	89B	SK78	(ウ)SK01			160	Ⅳ
89B	SK14	(フ)SK05		174	166	Ⅳ	※ X						
89B	SK15	(フ)SK14		162	183	Ⅲb	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
89B	SK16	(フ)SK08	252	188	156	Ⅳ	60A	SX01	SD11				
89B	SK17	(フ)SK19	156	116	130	Ⅳ	60A	SX02					
89B	SK18	(フ)SK06			149	Ⅳ	60B	SX01	SK125				
89B	SK19	(フ)SK16	330		133	Ⅲa	60B	SX02					
89B	SK20	(フ)SK07	144	94	146	Ⅳ	60B	SX03					
89B	SK21	(フ)SK26	192	144	142	Ⅲ	61H	SX01					
89B	SK22	(フ)SK17		184	134	Ⅳ	61H	SX02					
89B	SK23	(フ)SK16			195	Ⅳ	61M2	SX01					
89B	SK24	(フ)SK23		120	156	Ⅳ	63B	SX01					
89B	SK25	(フ)SK09	178	156	125	Ⅲb	63G	SX01					
89B	SK26	(フ)SK18		108	140	Ⅲb末	63G	SX02					
89B	SK27	(フ)SK21	105		118	Ⅲb	東部地区						
89B	SK28	(フ)SK11			123	Ⅲa	掘穴住居						
89B	SK29	(フ)SK08		122	111	Ⅱ	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
89B	SK30	(フ)SK13		138	163	Ⅳ	61N	SB0ab	SB02			116	Ⅱ
89B	SK31	(フ)SK29		200	102	Ⅳ	61N	SB02	SB01			167	
89B	SK32	(フ)SK12	264	165	111	Ⅲb	61P	SB01	SB01	790	610	208	Ⅱ
89B	SK33	(フ)SK25	152		164	Ⅳ a	61P	SB02	SB02	920	610	187	Ⅱ
89B	SK34	(フ)SK15			157	Ⅳ	61P	SB03	SB03		590	200	Ⅱ
89B	SK35	(フ)SK22		124	149	Ⅲ	61P	SB04	SB12		460	191	Ⅱ
89B	SK36	(フ)SK28	86	62	186	Ⅲ	61P	SB05	SB13		270	186	Ⅱ
89B	SK37	(フ)SK20	232	138	146	Ⅳ	61P	SB06a	SB14		510	168	Ⅱ
89B	SK38	(フ)SK24	141		135	Ⅲb	61P	SB06b	SB15			177	Ⅱ
89B	SK39	(フ)SK02	136		147	Ⅳ	61P	SB07a	SB08	1160	590	173	Ⅱ
89B	SK40	(フ)SK05	209	143	136	Ⅱ	61P	SB07b	SB09			185	Ⅱ
89B	SK41	(フ)SK06		56	158	Ⅱ	61P	SB08	SB10	970		183	Ⅱ
89B	SK42	(フ)SK03	119	86	164	Ⅲb	61P	SB09	SB05		600	186	Ⅱ
89B	SK43	(フ)SK10			154	Ⅱ	61P	SB10	SB07	900	710	197	Ⅱ
89B	SK44	(ウ)SK21		164	145	Ⅲb	61P	SB11	SB06	920	530	200	Ⅱ
89B	SK45	(ウ)SK09	182	178	146	Ⅲa	61P	SB12	SB04		1050	214	Ⅱ
89B	SK46	(ウ)SK25		148	141	Ⅲa	61T	SB01 (TSB01)			420	236	Ⅳ
89B	SK47	(ウ)SK20	132		154	Ⅲa最古	62A	SB0ab	(AU)SB01	604	302	217	Ⅳ(a, b, c)
89B	SK48	(ウ)SK22	190	160	142	Ⅲa	竪立柱建物						
89B	SK49	(ウ)SK23		80	160	Ⅲb末	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
89B	SK50	(ウ)SK24		(80)	147	Ⅱ	61N	SA01	(R・S)	680	390		Ⅱ
89B	SK51	(エ)SK34	144	46	165	Ⅲa	62A	SA01	Post. 6.2	482	393		Ⅳ?
89B	SK52	(エ)SK22	158	88	136	Ⅱ	62C	SA01	P. 6, 7, 8	420	380		Ⅳ~?
89B	SK53	(エ)SK23	60	48	152	Ⅱ	63A	SA01	Post. 4.3	288	234		Ⅱ
89B	SK54	(ウ)SK06	104	109	152	Ⅱ	土城						
89B	SK55	(ウ)SK05			142	Ⅲa最古	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
89B	SK56	(エ)SK21	172	128	141	Ⅲa	61M1	SK01	SK04	166	118	160	Ⅳ
89B	SK57	(エ)SK27	136	70	169	Ⅲ	61M1	SK02	SK05	230	118	154	Ⅳ
89B	SK58	(エ)SK07	192	114	144	Ⅲ	61M1	SK03	SK02	294	106	144	Ⅳ

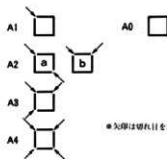
調査区番号	連続新番	連続旧番	現役長軸	現役短軸	近レベル	時期	南部地区					
61M1	SK04	SK03	390	76	152	IV	中曽方本土塩					
61M1	SK05	SD36		70	153		調査区番号	連続新番	連続旧番	現役長軸	現役短軸	近レベル
61N	SK01	(N)SK02		103		III	60A	SK59	(A)SK13	276	136	166
61N	SK02	(N)SK03		163		III	60A	SK60	(A)SK12	258	55	
61P	SK01	(P)SK02	186	228		II → III → IIIA	60A	SK61	(A)SK08	210		194
61P	SK02	(P)SK03	126	174		II	60B	SK23	(B)SK05	210	122	204
61P	SK03	(P)SK05	416	182	210	II → III	60B	SK24	(B)SK04	94	91	221
61P	SK04	(P)SK14	72	214			60B	SK25	(B)SK02		174	179
61T	SK01	(T)SK04		74	200	III	60B	SK26	(B)SK01			163
61T	SK02	(T)SK06	116	104	193	VI	60I	SK62	(I)SK01	356	120	221
61T	SK03	(T)SK74	36	32	202	IV	60I	SK63	(I)SK02	344	128	194
62C	SK01	SK04		90	232	VI	61A	SK30	(A)SK06	234	188	108
62D	SK01	SK01	175	150	228	VI	61A	SK31	(A)SK05	298	174	204
62D	SK02	SD02		265	171		61A	SK32	(A)SK04		180	176
62E	SK01	SD05		93	187		61C	SK27	(C)SK29	194		228
62E	SK02	SD02	320	65	185		61C	SK28	(C)SK30	252	160	223
62E	SK03	SD06	660	150	167		61C	SK29	(C)SK23	482	142	194
62E	SK04	SK01	233	100	189		61D	SK33	(D)SK01	298	168	227
62E	SK05	SK06	282	110	192		61D	SK34	(D)SK02	190	214	
62E	SK06	SK07	262	108	187		61D	SK35	(D)SK03	186	202	
62F	SK01	SK01		120	152	VI	61D	SK36	(D)SK28	292	128	204
62F	SK02	SK02		140	193	VI	61D	SK37	(D)SK19		114	202
62F	SK03	SK04	90	85	160	VI →	61D	SK38	(D)SK04	244		230
62F	SK04	SK05	145	185	185	VI	61D	SK39	(D)SK05	160		225
62G	SK01	SK01		185		III	61D	SK40	(D)SK12	298		217
62G	SK02	SK02	365	195	192	III	61D	SK41	(D)SK16			221
62G	SK03	SK04		55	193	III	61D	SK42	(D)SK13			241
62G	SK04	SK05		105	190	III	61D	SK43	(D)SK18	125		194
62H	SK01	SK01	250	130	211	III	61D	SK44	(D)SK15	296	94	224
62H	SK02	SK03	150	100	207	VI	61D	SK45	(D)SK14	296	100	238
63A1	SK01	SK07	120	98	106	III → IIIA → IIIA	61D	SK46	(D)SK20	200	136	241
63A1	SK02	SK05	154	100	100	II	61D	SK47	(D)SK26	412	158	207
63A2	SK03	SK03		120	147	II	61D	SK48	(D)SK25	163	90	237
63A2	SK04	SK04	190	96	151	II	61D	SK49	(D)SK17		212	203
SX							61D	SK50	(D)SK07	454	204	196
調査区番号	連続新番	連続旧番	現役長軸	現役短軸	近レベル	時期	61D	SK51	(D)SK31	270	116	211
61M2	SX01	広場式倉		172			61D	SK52	(D)SK08	358	210	187
62A	SX01		460	195			61D	SK53	(D)SK10	268	79	229
62A	SX02		506	194			61D	SK54	(D)SK09	462	272	157
62A	SX03	(A)SB01		195			61D	SK55	(D)SK06	172	172	238
北部地区							61H	SK106	(J)SK11	340	140	191
中曽方本土塩							61H	SK107	(J)SK10	820	210	203
調査区番号	連続新番	連続旧番	現役長軸	現役短軸	近レベル	時期	61H	SK108	(J)SK16	630	140	210
61E	SK01	(EF)SK16	280	200	211		61H	SK109	(J)SK17	375		197
61E	SK02	(EF)SK17	360	230	206		61H	SK110	(J)SK18			227
61E	SK03	(EF)SK14	240	200			61H	SK111	(J)SK01	310	170	185
61E	SK04	(EF)SK15	160				61H	SK112	(J)SK05	500	190	207
61E	SK05	(EF)SK01	200	180			61H	SK113	(J)SK12		220	184
61E	SK06	(EF)SK02	460	180	206		61H	SK114	(J)SK02	335	130	200
61E	SK07	(EF)SK03	230	200	203		61H	SK115	(J)SK03		200	192
61E	SK08	(EF)SK18	200	105	192		61H	SK116	(J)SK04	570	150	202
61E	SK09	(EF)SK19	220	200	208		61H	SK117	(J)SK09	630	160	189
61E	SK10	(EF)SK13	680	310	186		61H	SK118	(J)SK08	500	175	185
61E	SK11	(EF)SK04	330	150			61H	SK119	(J)SK06	480	150	186
61E	SK12	(EF)SK05		120			61H	SK120	(J)SK19		195	191
61E	SK13	(EF)SK06		140			61H	SK121	(J)SK07	290	180	171
61E	SK14	(EF)SK09		130			61H	SK122	(J)SK13	1020	170	185
61E	SK15	(EF)SK07	170	130			61H	SK123	(KL)SK42	580	200	170
61E	SK16	(EF)SK08	160	100			61H	SK124	(KL)SK43			219
61E	SK17	(EF)SK12	200	150	212		61H	SK125	(KL)SK39	760	200	184
61E	SK18	(EF)SK10		130			61H	SK126	(KL)SK37	300	140	205
61E	SK19	(EF)SK11		190			61H	SK127	(KL)SK41	250	160	230
63D	SK20	(DE)SK03	260	102	203		61H	SK128	(KL)SK01	280	145	183
63D	SK21	(DE)SK01	230		177		61H	SK129	(KL)SK02	320	170	186
63D	SK22	(DE)SK02	214	115	169		61H	SK130	(KL)SK34	280	130	187

調査区番号	遺構番号	遺構田番	規模長軸	規模短軸	底レベル	調査区番号	遺構番号	遺構田番	規模長軸	規模短軸	底レベル
61H	SK131	(KL)SK35	250	135	205	63J	SK84	SK07	230	170	232
61H	SK132	(KL)SK36	230		208	63J	SK85	SK08	300	155	232
61H	SK133	(KL)SK40	380	180	202	63L	SK102	SK01			223
61H	SK134	(KL)SK38	370	150	189	63L	SK103	SK02			222
61H	SK135	(KL)SK03	380	130	180	63L	SK104	SK03		135	
61H	SK136	(KL)SK04			204	63L	SK105	SK04			
61H	SK137	(KL)SK05	560	275	173	63M	SK56	SK01	300	140	225
61H	SK138	(KL)SK06	295	160	209	63M	SK57	SK02			199
61H	SK139	(KL)SK07	460	140	190	63M	SK58	SK03	280	135	228
61H	SK140	(KL)SK32	290	190	196	89A	SK72	SK01	215	60	152
61H	SK141	(KL)SK09			179	89A	SK73	SK03	90	50	212
61H	SK142	(KL)SK10	370	100	180	89A	SK74	SK02	125	55	172
61H	SK143	(KL)SK12			203	89A	SK75	SK04	85	80	179
61H	SK144	(KL)SK11			176	89A	SK76	SK05		80	221
61H	SK145	(KL)SK13	460	200	227	89A	SK77	SK08	160	65	214
61H	SK146	(KL)SK08	460	180	190	89B	SK86	SK04	400	114	206
61H	SK147	(KL)SK15		180	172	89B	SK87	SK05			182
61H	SK148	(KL)SK14	280	130	158	89B	SK88	SK06	334	156	208
61H	SK149	(KL)SK16		165	168	89B	SK89	SK01	930	300	173
61H	SK150	(KL)SK17			192	89B	SK90	SK07	416	208	213
61H	SK151	(KL)SK44	200	100	197	89B	SK91	SK08		254	181
61H	SK152	(KL)SK45	260	160	176	89B	SK92	SK09	554	154	195
61H	SK153	(KL)SK18	440	180	194	89B	SK93	SK10	662	156	205
61H	SK154	(KL)SK22	420	170	155	89B	SK94	SK11			196
61H	SK155	(KL)SK19	360	195	199	89B	SK95	SK12	505	135	116
61H	SK156	(KL)SK20		150	211	89B	SK96	SK13	410	126	176
61H	SK157	(KL)SK21		150	211	89B	SK97	SK02	416	176	200
61H	SK158	(KL)SK24	460		204	89B	SK98	SK14	528	154	194
61H	SK159	(KL)SK23	900	230	198	89B	SK99	SK03	562	178	168
61H	SK160	(KL)SK33		155	201	89B	SK100	SK15	258	122	215
61H	SK161	(KL)SK31	165	60	256	89B	SK101	SK16	140	191	
61H	SK162	(X)SK26	340	130	188						
61H	SK163	(X)SK25	270	165	215						
61H	SK164	(X)SK28	270	150	192						
61H	SK165	(X)SK27	440	180	205						
61H	SK166	(X)SK29	310	150	185						
61H	SK167	(X)SK30		230	190						
63B	SK168	SK01		80	217						
63B	SK169	SK02			226						
63B	SK170	SK03		80	223						
63B	SK171	SK04			221						
63B	SK172	SK05	270	105	220						
63B	SK173	SK06		120	210						
63B	SK174	SK07			201						
63B	SK175	SK08	420	140	205						
63B	SK176	SK09		85	205						
63B	SK177	SK10		180	190						
63B	SK178	SK11		230	196						
63B	SK179	SK12		520	100	190					
63B	SK180	SK13	240	195	184						
63B	SK181	SK14		160	157						
63G	SK64	SK04	166	102	175						
63G	SK65	SK05		166	200						
63G	SK66	SK03	270	116	217						
63G	SK67	SK02	334	126	199						
63G	SK68	SK01	430	168	193						
63G	SK69	SK06	306	108	208						
63G	SK70	SK07		128	208						
63G	SK71	SK08		136	181						
63J	SK78	SK01		320	170	221					
63J	SK79	SK03	260	110	204						
63J	SK80	SK02	470	120	209						
63J	SK81	SK04	400	220	152						
63J	SK82	SK05	150	120	233						
63J	SK83	SK06	235	215	229						

方形扇歯															
新番号	旧番号(旧規格) 旧規格記号	16年改番号	長軸 最大歯数	短軸 最大歯数	時期	備考	新番号	旧番号(旧規格) 旧規格記号	16年改番号	最大歯数	長軸	短軸	時期	備考	
			(60)04	820	630	Ⅲ	(A0)	065	62K159		1250	1150	Ⅳ	A1	
001			(60)04	820	630	Ⅲ	(A0)	066	61-62K151		780	-	Ⅳ		
002			(60)03	-	-	Ⅲ		067	62K152		680	-	Ⅳ		
003			(60)01	-	780	Ⅲ	(A1)	068	62K153		880	-	Ⅳ		
004			(60)02	-	-	Ⅲ		069		030	460	-	Ⅲ		
005	59K123		-	-	Ⅱ			070			620	-			
006		001	-	-	Ⅱ			071	62K154		870	850		A1	
007		002	700	-	Ⅱ	A4		072		033	580	530	Ⅲ	A4	
008	59K124		-	600	Ⅱ			073		034	620	470	Ⅱ	A3	
009		005	830	620	Ⅱ	A4		074	62K160		1100	760	Ⅱ	A4	
010		004	680	550	Ⅱ	A4		075		040	520	420	Ⅱ	A4	
011		006	920	600	Ⅱ	A4		076		042	340	-		A4	
012	59-60K125		-	5.2	Ⅱ			077		039	430	380	Ⅱ	A4	
013	60K126		-	5.2	Ⅱ			078		041	420	290	Ⅱ	A4	
014	60K127		-	-	Ⅱ			079	49K110-02	SK030	470	350			
015		008	720	580	Ⅱ	A4		080	62K161	038	1130	1120	Ⅳ	A1	
016		010	450	430	Ⅱ	A2		081		043	780		Ⅲ		
017		011	770	600	Ⅱ	A4		082	62-63K164		800	680	Ⅱ		
018		007	1080	630	Ⅱ	A4		083	62K165		530	470	Ⅱ	A4	
019		009	620	570	Ⅱ	A4		084	62K163		680	520	Ⅱ	A4	
020		003	360	340	Ⅱ	A2		085	62-63K163		750	750	Ⅳ	A2	
021	60K134	012	600	-	Ⅱ	A4		086	62-63K163		760	6800	Ⅳ	A2	
022	59K121		700	560	Ⅱ			087	63K182		870	570	Ⅱ		
023	59K122		-	-	Ⅱ			088	63K184		750	-	Ⅳ	A2	
024	60K128		-	-	Ⅱ			089	63K169		1150	-	Ⅳ		
025	60K129		400	-	Ⅱ			090	63K172		880	530	Ⅱ	A4	
026		013	530	-	Ⅱ			091	63K173		-	-	Ⅱ		
027		014	920	680	Ⅱ	A4		092	63K174		530	-	Ⅱ		
028	60K130		-	660	Ⅱ			093	63K176		470	460		A4	
029	60K131		-	420	Ⅱ			094	63K178		750	710	Ⅳ	A2	
030		015	430	350	Ⅱ	A2		095	63K177		480	450			
031		017	350	330	Ⅱ	A4		096	63K179		800	780	Ⅳ		
032	60K132		630	430	Ⅱ	A2		097	63K180		720	630	Ⅳ	A2	
033	60K133		290	-	Ⅱ			098	64K187		370	360		A4	
034	60K133		-	400	Ⅱ			099	64K186		800	780	Ⅳ		
035	61K135		320	420	Ⅱ	A4		100	64K188		420	-			
036	61K136		-	-	Ⅱ			101	62-64K186		870	810	Ⅳ		
037	61K137		-	-				102	62-64K189		1000	630	Ⅱ		
038	61-62K138		-	-	Ⅱ			103	64K192		860	720	Ⅳ	A0	
039		018	620	490	Ⅱ	A4		104	64K190		810	-	Ⅳ		
040		019	620	480	Ⅱ	A2		105	64K191		780	-	Ⅳ		
041	61K139	020	980	700	Ⅱ	A1		106	64K193		-	-	Ⅲ		
042	61K140		480	480	Ⅱ	A4		107		06-F-G02	588	564	Ⅲb		
043	61K141		730	680	Ⅲb-Ⅳ	A0		108		06-F-G03	-	568	Ⅲb	A4	
044	61K142		710	460	Ⅱ	(A0)		109	58K118		1150	-	Ⅳ?		
045	61K148		710		Ⅳ			110	57-58K117		-	-	ⅣerV		
046	61K149		650		Ⅳ			111		06-C-D02	1270	930	Ⅳ	A3	
047		021	650	620	Ⅱ	A4		112		06-B-C-D03	1080	830	Ⅳ	A1	
048		024	410	300	Ⅲ	A4		113	57K116		-	-	Ⅳ		
049	61K143	022	930	680	Ⅲ	A4		114		01A-010	1188	950	Ⅳ		
050	61K144		510	470	Ⅲ			115		(61C)01	1570	-	Ⅳ		
051	61-62K145		850	820	Ⅳ	A1		116	57K115		1050	-	Ⅳ		
052	61-62K146		410	370				117		01A-012	850	800	Ⅳ		
053	61-62K156		630	620		A4		118		(61C)02	1516	1340	Ⅳ		
054	61-62K157		680	680	Ⅳ			119	51K109		-	-	Ⅳ		
055	62K166		-	-	Ⅳ			120	52K110		830	640	Ⅳ-Ⅴ		
056		028	350	300		A4		121	52K110		930	820	Ⅳ	A0	
057		025	820	750	Ⅲ	A4		122		(61D)04	792	740	Ⅲb-Ⅳ		
058		027	430	420	Ⅲ			123	56-57K111		(61D)01	1500	850	Ⅳ	A1
059	61-62K146	026	720	580	Ⅲb-Ⅳ	A2		124	50K106	029	830	740	Ⅳ	A2	
060		029	450	420	Ⅲ	A4		125	51K108		530		Ⅳ		
061		031	460	420	Ⅲ	A2		126	50-51K107		(61D)03	730	690	Ⅳ	A1
062	62K155		1020	780	Ⅱ			127			(61D)02	800	800	Ⅳ	
063	62K157		550	520				128	55K113		850	580	Ⅳ		
064	62K158		480	480		A4		129	54-55K112		-	-	Ⅳ		

新番号	旧内装番号 (旧区別記号)	56年度番号	最高出力 (馬力)	長軸	短軸	時期	備考	新番号	旧内装番号 (旧区別記号)	56年度番号	最高出力 (馬力)	長軸	短軸	時期	備考
130	54K111		800	750	V			195	20K098		820	690	IIIa	A4	
131	45-54K005		790	-	V			196	20K097		820	660	IIIa	A4	
132		60A)01	870	650	IV			197	12K072		830	-	II		
133	78K194	60A)01	870	650	IV			198	12K073		660	500	II		
134	89K197		-	1090	V			199	12K071		440	360	II	A4	
135	88K196		700	-	IV			200	12K070		580	-	IIaIIIa		
136	87K195		700	-	IV			201	18K068		620	530	II	A4	
137		6E-F02H	970	-	V			202	13K077		790	-	IIIa		
138		6E-F02E	730	730	III	A2		203	13K078		800	-	IIIa		
139		6E-F02B	682	556	V	A2		204		(63B)02	420	-	IIIa		
140		6E-F02H	-	-	III	A2		205		(63B)04	550	-	IIIa		
141	16K085		780	-	III			206	9-18K048	(61N)06	1980	1520	IIIa	A4	
142	180F084		1080	450	IIIb ?	(A0)		207	9-18K048	(61N)06	1980	1520	IV		
143	180F083		580	580	IIIb	(A0)		208		(61O)10	3350	2220	IIIa	A4	
144	180F082		1250	480	IIIb	(A0)		209		(61P-Q01)	472	410	IIIa	A4	
145	180F081		550	-	IIIb	(A1)		210		(61P-Q02)	378	235	IIIa	A4	
146	17K086		800	-	IIIb	A1		211		(61P-Q03)	212	292	IIIa	A4	
147		6E-F02G	520	-	IIIb	A4		212	9-9K047	(61P-Q04)	858	755	IIIa	A4	
148		63N02	500	-	III			213	9K046		430	410	II	A4	
149		63N03	1100	-	IIIa			214	9K045		450	-	II		
150		63N06	608	624	IIIa	A4		215	16-17K044		450	-			
151		63N07	382	3100	III			216	8K043		430	-			
152		63N08	630	-	IIIa			217		(61R-S02)	486	-	II	A4	
153	14K084		1150	-	IV			218		(61R-S03)	1392	-	II		
154	14K198		580	-				219	8K038		780	-	II		
155		6E-L002	850	780	V	A1		220	8K037		800	-	II		
156		6E-L001	1250	1050	VI	B1		221	6K028		400	-		A4	
157	22KSD078		-	-	V			222	6K027		610	520		A4	
158	22K		-	-	V			223	6K025		400	305		A4	
159	22KSD066		-	-				224	6K024		400	360		A4	
160			-	-				225	6K023		530	-			
161	24KSD093	63B)01	850	-	III			226	8K041	(61P-Q05)	1120	1080	IIIa	A4	
162		6E-C01	1084	908	V	A1		227		(61P-Q06)	1052	870	IIIa	A4	
163	28K104	6E-C01	1500	1250	III			228		(61P-Q07)	1036	850	IIIa	A4	
164	27KSD010		-	-				229		(61P-Q08)	1000	-	IIIa	A4	
165	26KSD006		880	-				230	8K040		900	810	II	A4	
166	26KSD003-01000		-	-				231	8K039		1050	930	II	A4	
167	25K103		730	-	III			232	7K032		740	560	II	A4	
168	25K102		-	-	VI			233	7K031		430	410	II	A4	
169	25K101		460	420				234	7K030		800	690	II	A4	
170	25K100		670	-	III			235		(61R-S04)	440	-	IIIa		
171	25K99		650	650	III			236	7K029		460	350	IIIa	A4	
172		(61M)01a	1160	815	IIIb			237	8K042	(61R-S02)	1430	980	II	A4	
173		(61M)01b	1310	895	IV	A2		238		(61R-S03)	392	328	II	A4	
174	18-18K096	(61M)02a	906	608	III	A4		239		6E-S02B	230		II ?		
175	18-18K096	(61M)02b	1110	668	IV	A4		240		(61R-S04)	890		IV		
176	18K091	(61M)03	992	830	IV	A1		241		(61R-S05)	660		II		
177		(61M)04	1256	1030	III			242		(61R-S06)	335		IIaIIIa		
178		(61M)05	578	-	III	A4		243	7K036	(61R-S05)	1600	1040	II	A4	
179		(61M)06	508	-	IIIa	A4		244		(61R-S08)	1800		II		
180	18K090		550	530	IIIa	A4		245	7K033		700	580	II	A4	
181		(61N-080)	-	-	IIIa			246	7K035		570		II		
182		(61N-082)	590	450	IIIa	A4		247	7K034		920		IV		
183		(61N-084)	516	392	IIIa	A4		248		(61R-S06)	570		II		
184		(61M)08	706	612	IIIa	A4		249		(61R-S07)	920		II		
185		(61M)07	1280	-	IIIa			250	9-11K06		1330	1070	II	A4	
186		(61M)09	255	-	IIIa			251	11K058		620	580		A4	
187		(61M)09	675	-	IIIa			252	12K069		610	490		A2	
188	18K094		570	550	IIIa	A4		253	11-12K06		410	240		A4	
189	18K092		640	580	IIIa	A4		254	11K067		2350	2070	II	A4	
190		(61R-S06)	1500	1340	IIIa	A4		255	11-11K06		620				
191	18K087		550	-	IIIa			256	11K		1400		II	A4	
192	18K095	(61O)07	1035	990	IIIa	A4		257	13K083		410	320		A4	
193	18K093		620	-	IIIa			258	13K082		680	630	IV	A2	
194		(61O)08	1220	-	IIIa			259	13K081		360		III		

新番号	旧番号(旧規格) [旧規格番号]	旧年度番号	ニール 規格番号	長軸	短軸	時期	備考	新番号	旧番号(旧規格) [旧規格番号]	旧年度番号	ニール 規格番号	長軸	短軸	時期	備考
260	13区079			640				325	(62B)07	1870				IIIa	
261	13区080			580	520	II	A4	326	(62B)10					III	
262	11区065			495			A2	327	82B20049	1210					
263	11区066			800	540	IV	A1	328	(62B)08	674				III	
264	11区064			590	340		A4	329	(62B)09						
265	11区							330	(62B)11					III	
266	11区063			420	385		A4	331	1区003			450			
267	11区063			450	365		A1	332	1区004			1070			
268	11区062			580	490			333	1区001			850	820		
269	11区061			1190	890	II		334	82C-L01	580				IIIb	
270	11区060			550				335	82C-L04					IIIb	
271	18区0303			800				336	82C-L01	680				IIIb	
272	18区065			350	340	III		337	82C-L03	320					
273	18区063			340	330	III	A1	338	1区001						
274	18区064			290		III		1001	(61J)	1050	1000				5世紀末
275	18区061			470		III		1002	82C-L01						5世紀末
276	18区062			450	420	III									
277	18区049			320	290		A4								
278	18区089			1200		IV									
279	6区022			675	560	III	A4								
280			(61P・Q)	1720			IIIa								
281	7区SK01														
282			(61T)04				IIIb								
283	3区018			340			IIIb?								
284	3区SK09				350		IIIb?								
285			(61T)01	860			IIIb								
286	3区017			340			IIIb?								
287			(61T)02	870	750		IIIb	A4							
288			(61T)05	820	668		IIIb	A3							
289			(61T)03	778	718		IIIb	A4							
290	3区016			270			IIIb?								
291	3区015			660	480		IIIb?	A4							
292	1区SK01						IIIb?								
293	3区014		(61T)06	960	760	IV	A2								
294	3区012			450			IIIb								
295	3区			520			IIIb?								
296	3区010			520			IIIb								
297	2区008			490			IIIb								
298	3区011			690	620		IIIb	A4							
299	3区009			590			IIIb	A4							
300	2区007			970	770		IIIb								
301			(61T)07	3300			IIIb末								
302	2区006			1340	750		IIIb								
303			(61T)08	1520	1150		IIIb	A4							
304	1区SK05			340			IIIb	A4							
305	1区SK06			360			IIIb								
306	2区005		(61T)09	1560	1050		IIIb								
307			(62A)01				IIIb								
308			(62A)02	430	350		IIIb	A4							
309			(62A)04	800			IIIb								
310			(62A)07	362			IIIb?								
311			(62A)03	822	808	IV	A1								
312			(62A)05	400			IIIb								
313			(62A)06	260	250		IIIb?	A4							
314			(62A)08	500			IIIb?								
315			(62A)09	318	314		IIIb	A4							
316			(62A)10	744			IIIb								
317	4区020			790			IV								
318	4区019			260	250			A4							
319			(62B)01				IIIa?								
320			(62B)02	728			IIIa?	A4							
321			(62B)05				IIIa?								
322			(62B)03	750			IIIa?								
323			(62B)06	420			IIIa	A4							
324			(62B)04	1074			IIIa								

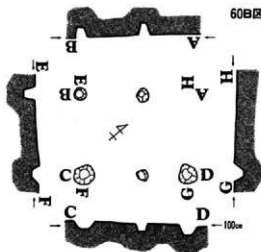


方形周溝墓プラン分類

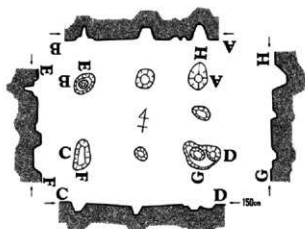


方形周溝墓の規模計測方法

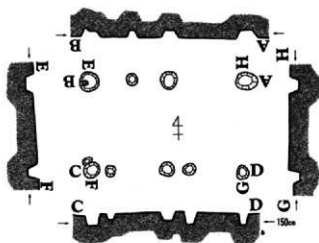
60B区 SA02



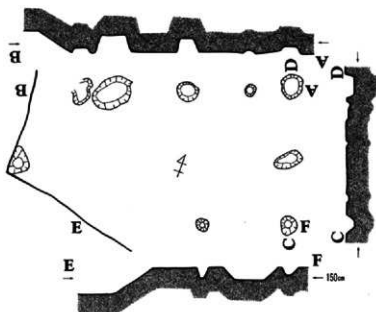
61A区 SA01



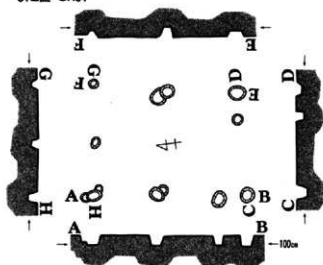
61C区 SA01



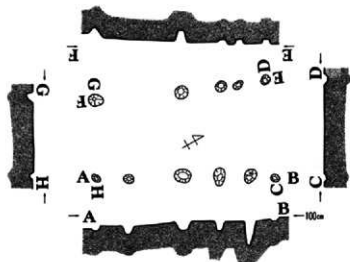
61D区 SA01



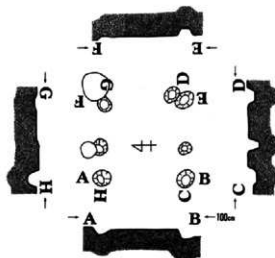
61E區 SA04



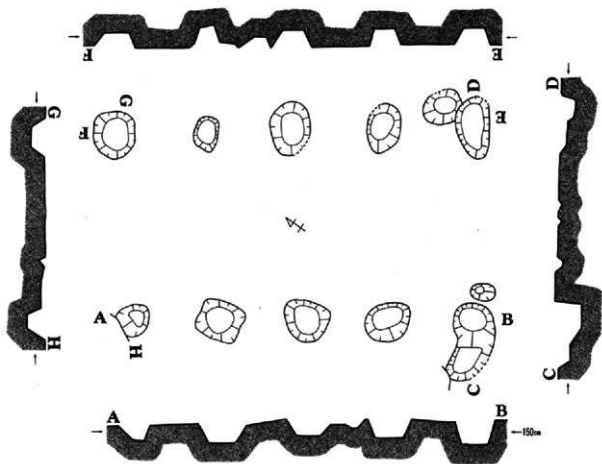
61E區 SA03



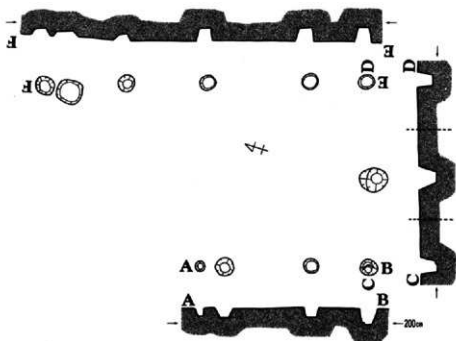
61E區 SA04



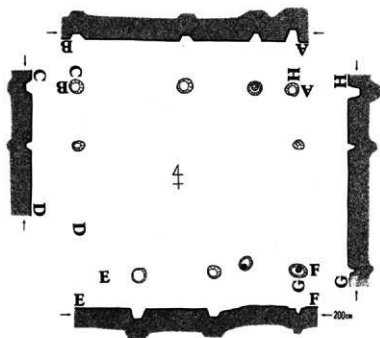
61H区 SA01



61N区 SA01



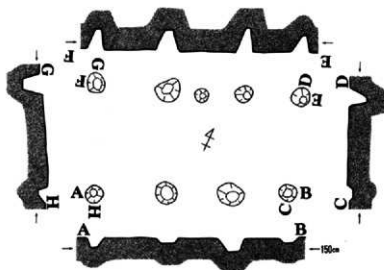
62A区 SA01



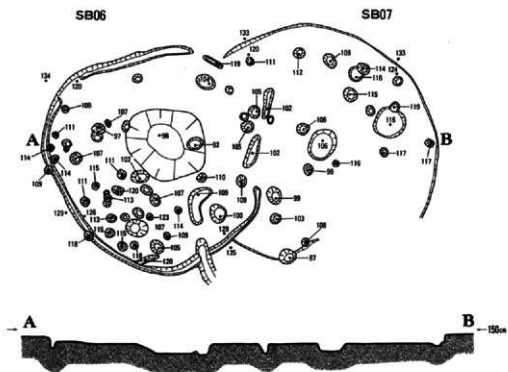
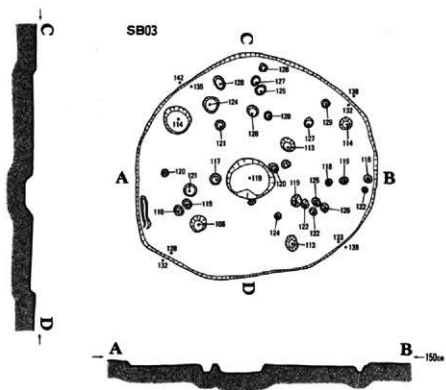
62E区 SA01



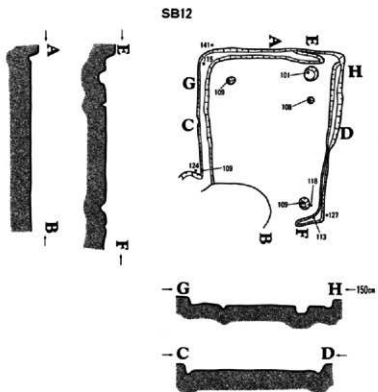
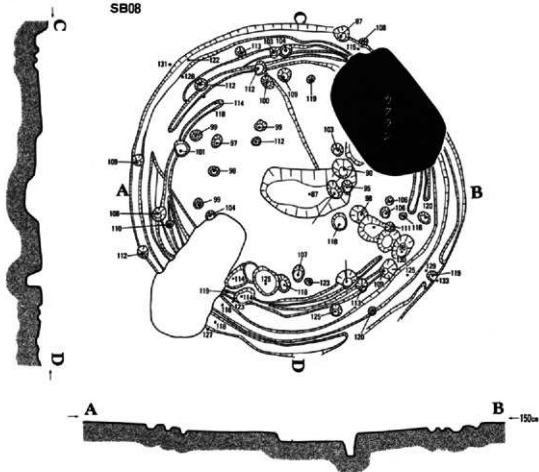
63A区 SA01

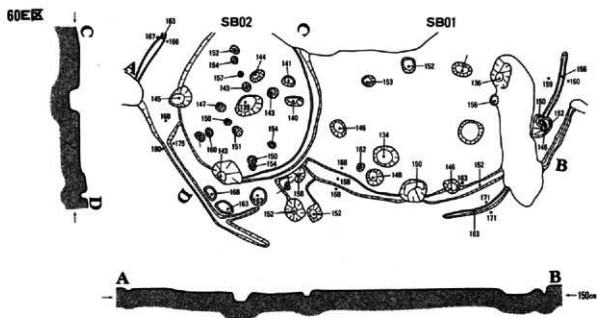


60B区

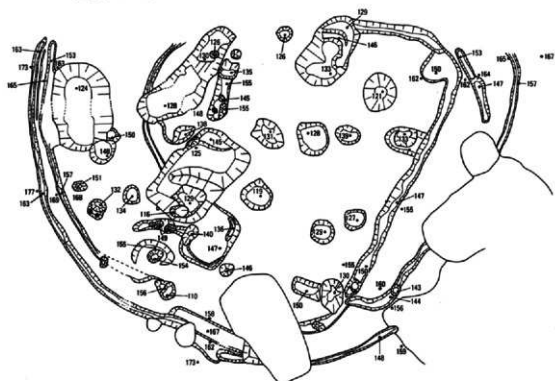


60B区

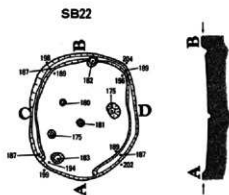
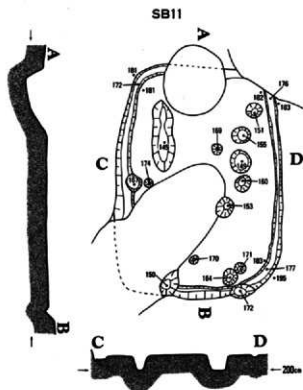
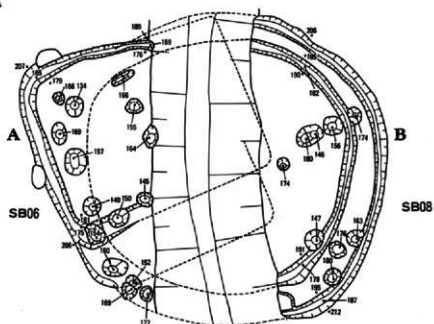




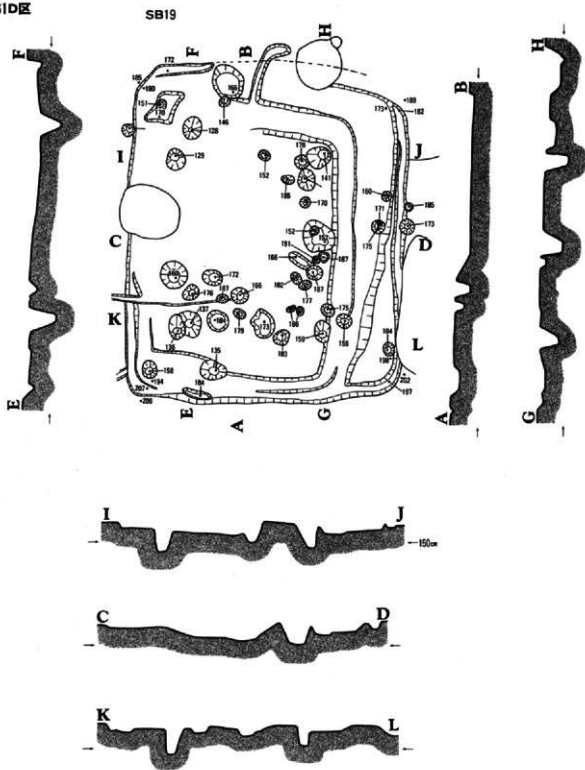
SB03(玉作工房)



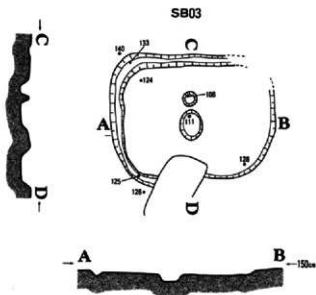
61D区



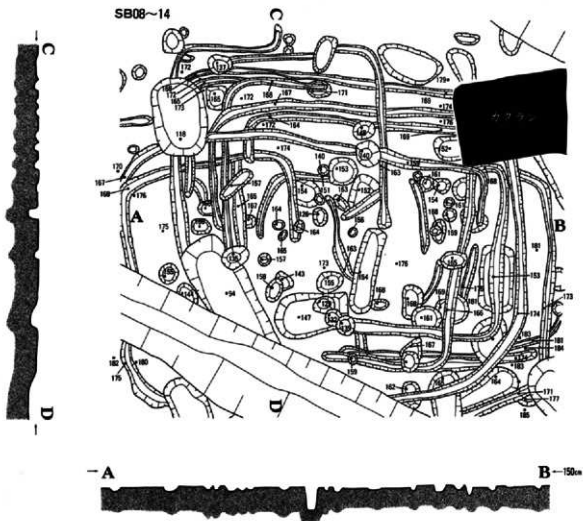
61D区



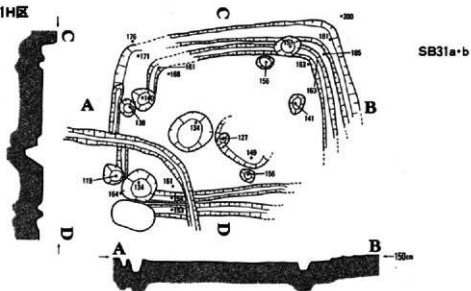
61E区



61H区 (北地区)

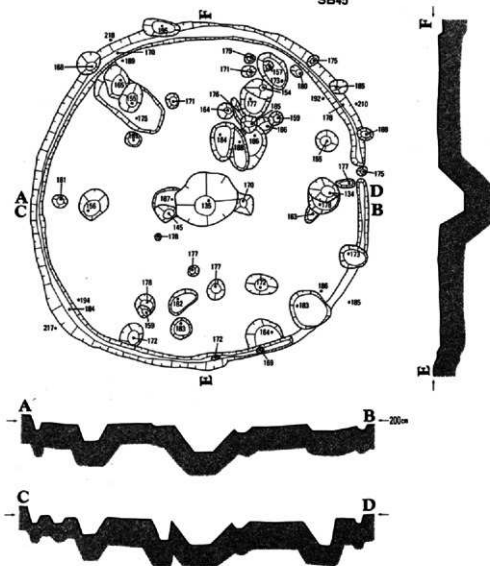


61H区

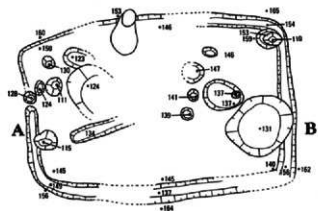


SB31a·b

SB45



豎穴住居集成 8 (1:80)

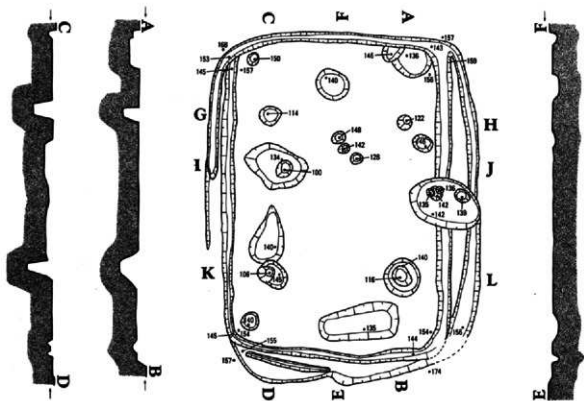


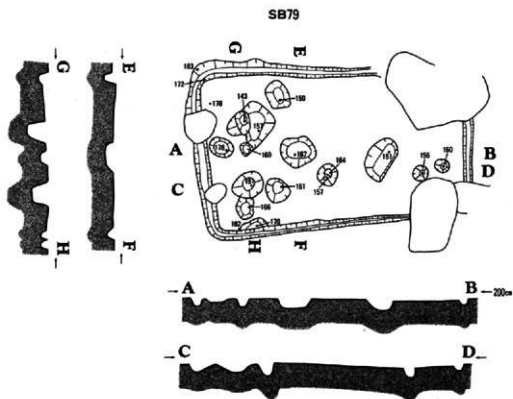
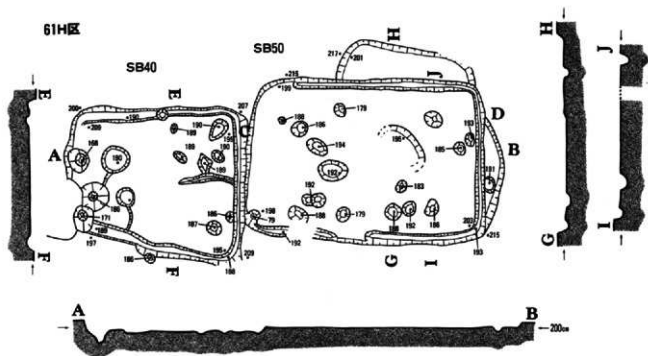
61H区



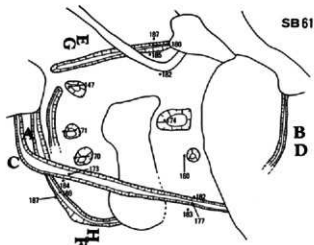
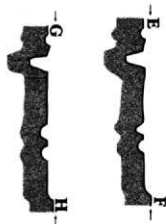
SB41

SB38a-b





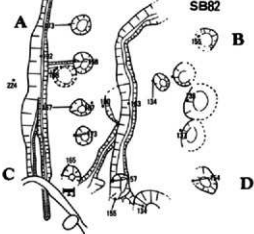
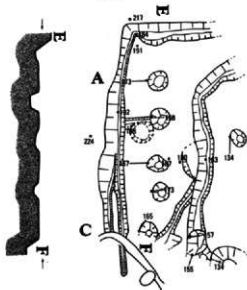
61H区



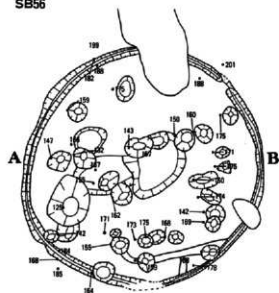
SB61



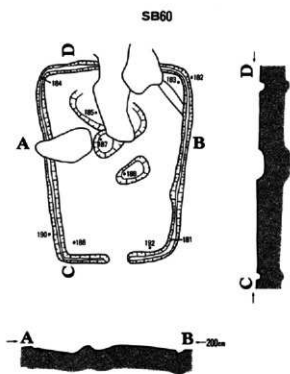
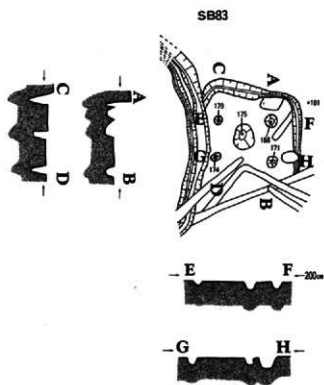
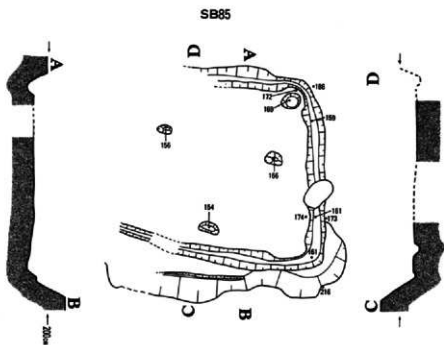
SB81



SB56

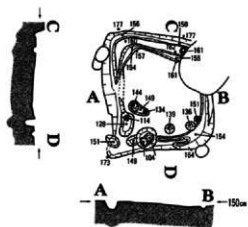


61H区

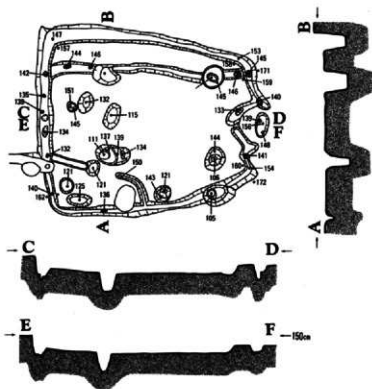


61H區

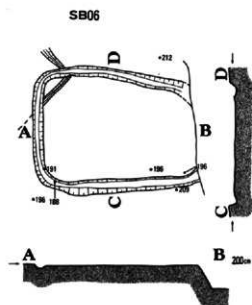
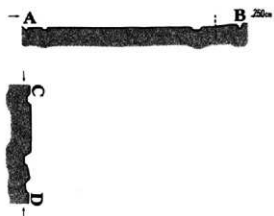
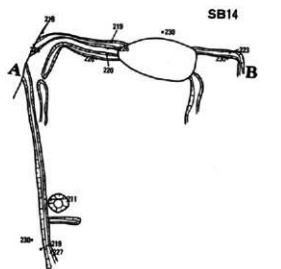
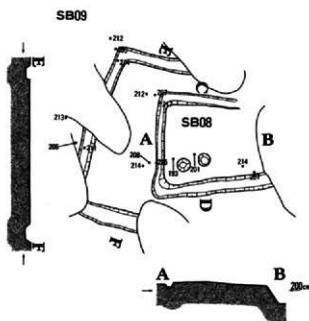
SB105



SB100

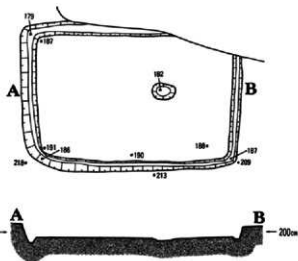


61M区



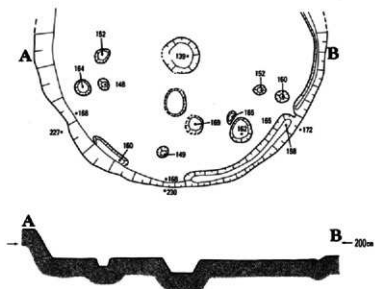
61P区

SB02

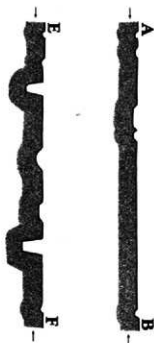


63N区

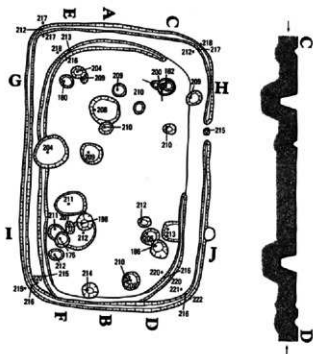
SB01



62A区

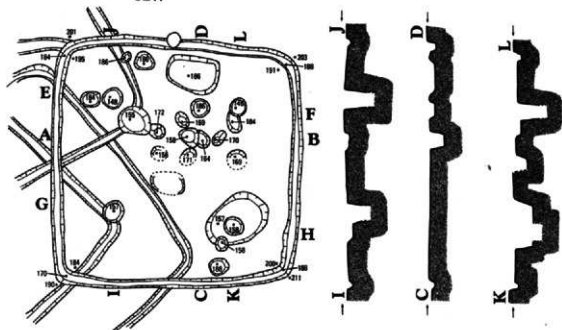


SB01



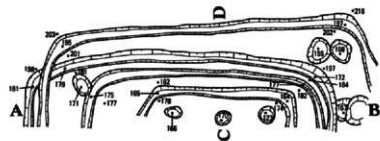
63J区

SB11



SB01a.b.c

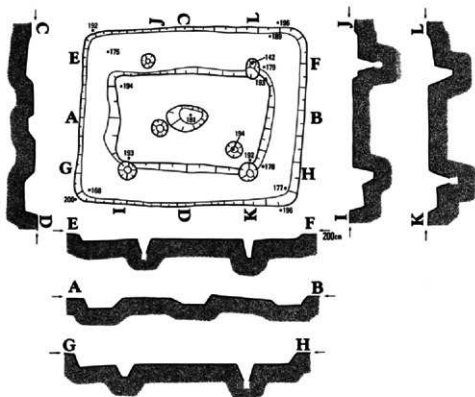
SB02



整穴住居集成 17 (1:80)

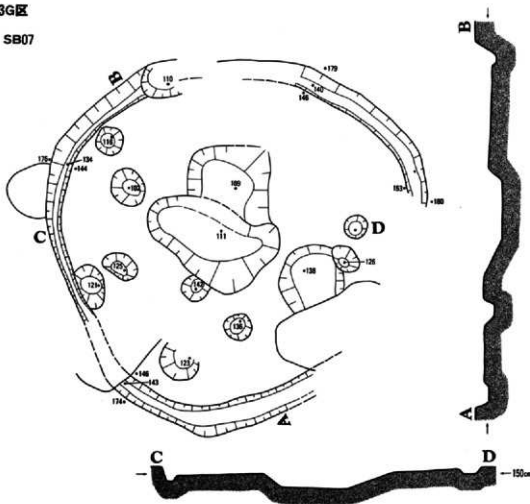
63M区

SB03

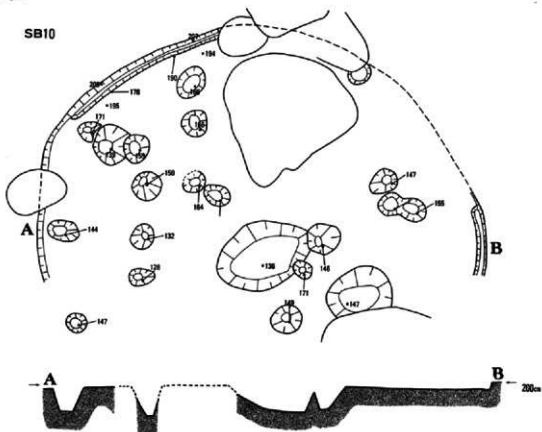


63G区

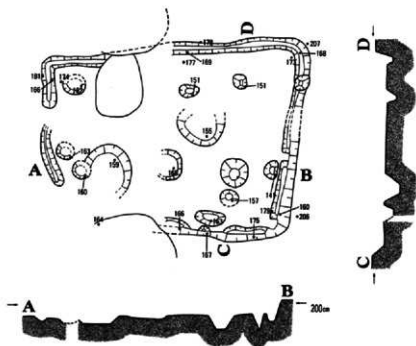
SB07



89B区

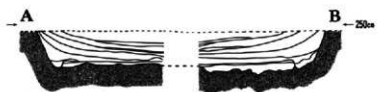
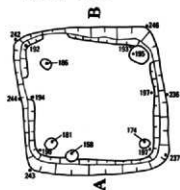


SB14



竖穴住居集成 19 (1:80)

63J区 SB12



89A区 SB30

